ISSN 2185-8659

むなかた電子博物館 紀要

第 7 号

巻 頭 言 ･･･ 平井 正則

特集：いせきんぐ宗像シンポジウム 2014 講演録
序文 海の道むなかた館長 西谷 正 ･････････････････････････ 西谷 正
参考資料：パンフレット・追加配布資料
講演録：特別講演「邪馬台国を再考する」･････････････････ 石川 日出志
講演録：基調講演「青銅器を帯びたムナカタの弥生人」･････････ 吉田 広
講演録：基調講演「邪馬台国九州説とムナカタ国」･････････････ 高島 忠平
パネルディスカッション ･････ 板橋 旺爾・高島 忠平・吉田 広・西谷 正
編集：むなかた電子博物館紀要委員会　監修：海の道むなかた館

論文：温故知新と回想－むなかた二題－ ･････････････････････ 花田 勝広
・宗像郷友会（宗像会）と出光佐三翁
・宗像地域における黎明期の遺跡発掘調査
論文：宗像神を祭る神社の全国分布とその解析
－宗像神信仰の研究（１）－ ･････････････････････････ 矢田 浩

むなかた日和：2015 年度むなかた電子博物館新着情報に掲載された主な記事から

編集後記 ･･･ 宮川 幹平

2016 年 3 月 31 日
「むなかた電子博物館」紀要委員会

ISSN 2185-8659

A BULLETIN OF THE MUNAKATA DIGITAL MUSEUM

-THE 7TH ISSUE-

□Preface

□Isekingumunakata Symposium2014 Yamatai-Koku Kingdom and Munakata-Koku Kingdom
- Whether the "Munakata-Koku Kingdom" was present -

Reconsideration of Yamatai-Koku Kingdom

Yayoi-jin People of Munakata carrying bronze weapons

The theory "Yamatai-Koku Kingdom was located in Kyushu" and Munakata-Koku Kingdom

□Sazo Idemitsu Weng and the Munakata Hometowners Association (Munakata Association)

□Early History Archaeological Survey of the Munakata Region in Fukuoka Prefecture

□Nationwide distribution and its analysis of the shrine to worship the God Munakata

□Editor's note

March 31 , 2016
「Munakata Digital Museum」Bulletin Board

巻頭言

むなかた電子博物館紀要委員会
委員長　平井　正則

平成 29 年度世界遺産登録を目指す「神の島」宗像・沖ノ島と関連古墳群「景観と調和した世界遺産のまちづくり」シンポジウムが、3 月 18 日メイトム宗像にて開催されました。市民の皆様による議論は多種多様で大変にぎやかなものでした。主催者である宗像市世界遺産登録推進室によると「世界遺産の目的は、資産の保護と資産周辺の景観や環境を保全し、将来世代に残していくことです。その一方で、住民の生活や観光の両立など様々な課題も」とあります。この世界遺産登録は、宗像市域に限らず、津屋崎古墳群、宮地岳神社を含めてのものと聞いています。沖ノ島の壮大な歴史が展開された時代には、宗像市や福岡県という境界があったわけではありませんから、どこの主導かといった瑣末な点に拘泥することのない、市民とともにある運動こそが、世界遺産登録に向けた重要な役割を果たすことでしょう。

我々協働団体むなかた電子博物館もこの運動の一端を担っていると自負しています。そのひとつとして、「北斗の水くみ」という現代の新しい“神話”（ロマン）をテーマに、観望会や写真展の取組みを行い、宗像市による「北斗の水くみ海浜公園」の設置などの環境整備を後押ししながら、世界的にも珍しい夜空の景観を注目してきました。これらの活動もあって「北斗の水くみ」の存在は広く知られつつあります。一方、近年の宗像市の目覚しい発展は、周辺でのヒートアイランド現象を招き、主に交通量の増加に伴う上空塵の停滞と燈火の増大に起因する、すなわち「光害」により、夜空が明るくなりつつあります。実は「北斗の水くみ」観察は宗像光害の検証にも寄与するのです。いつまでもクリーンな空と自然の夜空に壮大な「北斗の水くみ」の景観を残したいものです。ただ、世界遺産登録を目掛けたささやかな我々の取り組みに対して、若干評価が低いのは残念至極です。今後、我々の活動とその価値を広くお伝えしていくとともに、一層の評価のある活動となるよう努力したいと考えています。

むなかた電子博物館の電子的紀要掲載は今年 7 号となりました。印刷の場合、原稿量が増えると費用もかなり嵩むのですが、電子文なら、編集は大変ですが、投稿の著者にとって重要と思われるものを、その原稿量を気にせずに書いて頂くことができました。

一読後、読者の皆さん方の自由なご意見を紀要にお寄せ下さい。

次年度はむなかた電子博物館全体の見直しも検討するという議論が進んでいます。関心ある市民の皆様が是非この活動に参加頂き、益々活動の発展をお願いする次第です。

特集：いせきんぐ宗像シンポジウム 2014

邪馬台国とムナカタ国

―「ムナカタ国」はあったか―

本特集は、2014 年 9 月 7 日、宗像ユリックスハーモニーホールにおいて開催された「いせきんぐ宗像シンポジウム」での講演並びにパネルディスカッション、配布資料等の記録をまとめたものである（監修：海の道むなかた館）。なお、パンフレットには、講演者として明治大学名誉教授の大塚初重先生のお名前が掲載されている。しかし、大塚先生が体調を崩されたことから、大塚先生のご紹介により、急遽、明治大学教授の石川日出志先生に特別講演をご担当頂いた。上記経緯について予めご承知おき頂きたい。そのほか、同シンポジウムで発表された「田熊石畑遺跡の調査報告（白木英敏氏）」の記録については、むなかた電子博物館紀要 6 号にて公開しているので、合わせて参照されたい。

むなかた電子博物館紀要委員会

序文　海の道むなかた館長　西谷 正 …… 3

参考資料：パンフレット・追加配布資料 …… 4

講演録：特別講演「邪馬台国を再考する」　明治大学文学部 教授　石川 日出志 …… 16

講演録：基調講演「青銅器を帯びたムナカタの弥生人」
愛媛大学ミュージアム 准教授　吉田 広 …… 24

講演録：基調講演「邪馬台国九州説とムナカタ国」　旭学園 理事長　高島 忠平 …… 67

パネルディスカッション …… 74

序文

海の道むなかた館長　西谷 正

宗像市が誇る文化財の一つ、田熊石畑遺跡は、釣川中流域左岸の標高 12m付近の微高地に営まれた弥生時代中期前半（B.C.2 世紀ごろ）の集落の遺跡です。

宗像市教育委員会では、開発工事の対象となった田熊石畑遺跡に対して、平成 20 年（2008）に、事前に発掘調査を行ったところ、後述しますようにきわめて重要な遺跡であることが分かりました。その際、遺跡の保存を要望する市民運動も起こり、また、関係者の尽力もあって、幸いにも遺跡は保存されることになりました。その後、平成 22 年 2 月 22 日付の官報告示をもって、国の史跡に指定されました。その理由として、発掘した 6 基すべての木棺墓から青銅製武器が検出され、北部九州における弥生時代の集落や墓制のあり方を知る上できわめて重要であるというものでした。さらに、それらの青銅器のほか装身具類は、平成 26 年に国の重要文化財の指定を受けました。

一方、保存された、田熊石畑遺跡に対して、その整備と活用が課題となりましたが、整備事業は順調に進み、平成 27 年 4 月に、宗像市田熊石畑遺跡歴史公園、愛称「いせきんぐ宗像」としてオープンしました。

それに先がけて平成 26 年 9 月 7 日には、「いせきんぐ宗像シンポジウム 2014」が開催されました。そこでは、15 点もの青銅器を出土した方形の区画墓が、弥生時代中期前半における北部九州でも有数の有力者集団の首長墓であることから、同じく中期後半の伊都国やその王墓に照らして、宗像地域における国と王の問題が浮かび上がって来ました。

そこで「魏志倭人伝」には登場しませんが、宗像地域における国や王の存在の可能性を探るとともに、田熊石畑遺跡の重要性を改めて認識し、また、「いせきんぐ宗像」を市内外に情報発進するために、「邪馬台国とムナカタ国―「ムナカタ国」はあったか―」というテーマでシンポジウムが開催されたのでした。本特集は、そのときの講演ならびにパネルディスカッションと、配布資料等の全記録を集録しています。

この機会にまた改めて、弥生時代に続く古墳時代のこととして、『古事記』・『日本書紀』にそれぞれ登場する胸形君・胸肩君との関係など、宗像人のルーツや宗像地域の古代史ロマンに夢を馳せていただけましたら幸いです。

追加配布資料

いせきんぐ宗像シンポジウム 2014

資料集

邪馬台国とムナカタ国

―「ムナカタ国」はあったか―

プログラム

13:00~13:05 ● 開催挨拶

13:05~13:20 ● 調査報告

「田熊石畑遺跡の調査報告」

白木 英敏（宗像市郷土文化交流課）

13:20~14:00 ● 特別講演

「邪馬台国を再考する」

大塚 初重（明治大学名誉教授）

14:00~14:40 ● 基調講演

「青銅器を帯びたムナカタの弥生人」

吉田 広（愛媛大学ミュージアム准教授）

休憩（10分）（質問票回収）

14:50~15:30 ● 基調講演

「邪馬台国九州説とムナカタ国」

高島 忠平（旭学園理事長）

小休憩（5分）（質問票回収）

15:35~16:25 ● パネルディスカッション 質疑応答

コーディネーター：板橋 旺爾（西南学院大学非常勤講師）

パネリスト：高島 忠平／吉田 広／西谷 正（海の道むなかた館長）

16:25~16:30 ● 閉会挨拶

日時 9/7(日) 13:00~16:30

会場 宗像ユリックス ハーモニーホール

主催：宗像市教育委員会　　協力：田熊石畑遺跡村づくりの会

シンポジウムの目的

田熊石畑遺跡の発見により、これまで、あまり注目されることのなかった宗像の弥生時代像がいま、大きく変わりつつあります。平成 20 年、この遺跡のわずか 6 基の木棺墓から 15 点におよぶ武器形青銅器が出土し、北部九州屈指の有力者集団の存在が確認されました。そのことにより、弥生時代中期前半（紀元前 2 世紀頃）に成立したムナカタの有力者集団は、およそ 400 年後の弥生時代後期には国と呼べる勢力にまで発展することができたのではないか、と考えることが可能になってきました。ならば、そろそろ宗像市も邪馬台国論争に参入し、存在感を示しても良いのではないでしょうか。

そこで、文化庁の補助金を受け、田熊石畑遺跡歴史公園（愛称：いせきんぐ宗像）のオープンに先駆けた PR 事業の一環として本シンポジウムを開催する運びとなりました。

多彩な弥生文化が花開いた列島各地域から研究の最先端を走る考古学者をお招きし、講演やパネルディスカッションを通じて最新の邪馬台国像を描きだすとともに、「魏志倭人伝」には直接に名の見えないムナカタ国の存在した可能性を探っていきます。

特別講演

「邪馬台国を再考する」

大塚 初重（明治大学名誉教授）

日本の考古学・古代史研究上、古くから話題に登場するのが邪馬台国論である。中国の歴史書『三国志』の中の「魏書東夷伝倭人条」に、邪馬台国の名が登場し、倭の女王卑弥呼が都としている場所が邪馬台国だと記している。この卑弥呼が魏の景初 3 年（239）に遣使し、皇帝から「親魏倭王」の金印や錦、銅鏡百枚、真珠、鉛丹などを賜わり、翌年の正始元年（240）には魏の使節が来朝したことを記している。記録はすべて中国側の記述なのであるが、日中外交の具体的な年号は信頼すべきものに思う。しかし、魏志倭人伝記述の倭国の世情や風俗などすべてが正確な記述なのかどうかは検討すべき点があると思われる。

さらに難しい問題は邪馬台国の所在地についてである。魏志倭人伝に記載されている「郡（帯方郡）より倭に至る」旅程の解釈の仕方によって、邪馬台国の位置論に大きな変化が生じることは一般的によく知られていることである。邪馬台国論といえば九州説と畿内説とがあり、ほかに岡山・島根・四国・愛知・千葉・甲信越・岩手など全国各地が候補地となっている。

しかし、考古学上の調査・研究は進行しており、とくにその年代観の進展は弥生時代と古墳時代の捉え方に変化を及ぼしており、列島内の考古学状況の理解に新しい視点が生まれつつある。大阪府池上曽根遺跡における年輪年代学上の弥生時代中期後半代の年代が、従前よりも約 50 年から 100 年ほど古くなることが認められた。従って、弥生時代後期の所属年代は紀元1−2世紀代となり、前方後円墳が出現する年代は 3 世紀中頃と考えるようになってきた。

「魏志倭人伝」の記述の中には正始 8 年（247）の魏側の動静と倭国への使者到来のことがあり、卑弥呼の死と造墓のことなどが記してある。一般的にはこの正始 8 年（247）には卑弥呼がなくなったと理解されている。年代論から考えれば3世紀の後半頃の大型古墳となれば、奈良県桜井市の箸墓古墳（280m）が例証となる可能性があろう。

青銅器の列島内の分布状態も邪馬台国研究では重要な視点となる。青銅器や鉄器の存在形態から北部九州の優位性が古くから論じられてきたが、卑弥呼登場の 2 世紀後半代の列島内の青銅器分布状態も注目されてよい。

2007 年（平成 19）10 月、東日本の長野県中野市柳沢遺跡で千曲川の堤防整備工事中に、銅戈 7 本と銅鐸片 5 個分が発見された。弥生時代中期後半での青銅祭器発見の東限例であった。近畿地方と北九州で執行されていた青銅器祭祀と同様の祭祀が、遠く離れた信濃国においても執行されていたことを推測させ、列島内の各地で共通したムラの祀りが実行されていたのであり、同じ社会体制、思想体系が維持されていたと思う。弥生時代中期段階の北部九州・瀬戸内・山陰・北陸・近畿地方で同パターンの祭祀が行なわれていたということになる。180 年代から 240 年代頃の卑弥呼の時代には、日本列島では広汎な地域で青銅器を用いた祀りが行なわれていた。卑弥呼共立以前において、紀元前 2 世紀か1世紀に、九州や近畿の祭祀形態は東日本の長野にまで及んでいた可能性が高いと思われる。

福岡県宗像市の田熊石畑遺跡は北九州における武器形青銅器を所有する弥生時代中期前半期の墓域を伴う環濠集落である。弥生時代中期初頭から中頃にかけての有力者の集団墓として、佐賀県宇木汲田、吉野ヶ里北墳丘墓、福岡県吉武高木・吉武樋渡・吉武大石・柚比本村などの諸遺跡を知っていたが、それらの多くは甕棺墓制であった。しかし、田熊石畑遺跡は甕棺墓ではなく、土坑・木棺・石棺墓などであり、北九州にあっても宗像地方の特性が墓制にあらわれているように思われる。

私がとくに注目したいのは調査関係者である白木英敏氏が指摘している事実である。

北部九州型の青銅器副葬を採用しつつ、墓制としての甕棺を受け入れず、土坑・木棺・石棺墓制を採用している独自性を有することである。また、弥生時代前期中頃から中期初頭に見られる土笛（陶塤）の分布を問題として、福岡・山口・島根・兵庫・京都府など日本海沿岸の諸地域が対馬暖流で結ばれた特別な歴史的関係にあると示唆されている点は、きわめて重要な指摘であると思う。

近年、山口県以東の日本海沿岸の弥生時代の遺跡が示す考古学上の問題は多岐にわたる。島根県の青銅器の中でも九州産の青銅器が運ばれており、日本海沿岸の弥生文化の東漸に無関係だったとは思えない。とくに出雲地方との関係が濃いことが注目される。

「邪馬台国とムナカタ国」のテーマに対し、九州説・畿内説との判断を下す前に、2 世紀後半から 3 世紀後半の倭国の現状は、さらに前段階の 1 世紀から 2 世紀の列島内の考古学状況を把握すると、北九州と瀬戸内地方から東方の広汎な地域との交流がさかんであったことを知る。そうした列島内で倭国の動乱をどのように受けとめるべきか。その地域が想起できるとすれば、何処の地方に求められるのか。

最近、東海地方から東京湾沿岸地域をも邪馬台国の領域だと理解する東日本の研究者は多い。列島内の弥生時代中期後半から後期段階における人とモノのダイナミックな移動・交流状況も、邪馬台国が何処にあったのかを推測する重要な手がかりになるのではないだろうか。列島内全域の弥生時代中期から後期段階の歴史的な状況を考えると、邪馬台国の歴史の歯車は瀬戸内東部・四国と大阪湾沿岸地域と、さらに山陰・北陸など日本海沿岸地域を含めた広汎な地方の動きの中から動き出した可能性が濃いのではないかと思っている。

大塚 初重（おおつか はつしげ）

1926 年東京都生まれ。明治大学名誉教授、文学博士。非営利活動法人「生涯学習応援団ちば」理事長。

1957 年明治大学大学院文学研究科博士課程修了。明治大学教授を務める傍ら日本考古学協会会長、山梨県立考古博物館長、山梨県埋蔵文化財センター所長などを歴任。

近著に『土の中に日本があった』（講談社現代新書）、『邪馬台国をとらえなおす』（講談社現代新書）、『考古学最新講義シリーズ－古墳と被葬者の謎に迫る』（祥伝社）、『考古学最新講義シリーズ－装飾古墳の世界をさぐる』（祥伝社）など。

基調講演

「青銅器を帯びたムナカタの弥生人」

吉田 広（愛媛大学ミュージアム准教授）

田熊石畑遺跡では、特定の墓域を形成した木棺墓群から多くの武器形青銅器が出土した。いずれも被葬者の脇に添えられた副葬品であり、これだけの青銅器を帯びた（佩いた）ムナカタの弥生人は、どのような役割を担っていたのだろうか。

甕棺と異なり時期の断定は難しいが、40 cm前後の中細形B類銅剣をもつことから、田熊石畑遺跡の木棺墓群は弥生時代中期前葉頃に位置づけられる。青銅器が登場し福岡市早良地域への集中が際立つ中期初頭の次段階にあたるが、中期前葉頃に降ると、西で唐津市宇木汲田遺跡、南は鳥栖市柚比本村遺跡あるいは吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡北墳丘墓と、まとまった青銅器を保有する墳墓群が現れる。田熊石畑遺跡もこれらと軌を一にし、東への武器形青銅器分布拡大を担った格好である。

ただし、その武器形青銅器の東方展開に際して、ムナカタとその周辺では、幾つか特徴的な状況がみられる。

まず、遠賀川流域から東では銅剣に関部双孔が現れ、銅剣の扱い方が変容する。銅剣を長柄の先に槍先のように装着して高く掲げ、関部双孔には吹き流しの飾りをなびかせたらしい。この用法は中四国地方以東へと広がるが、田熊石畑遺跡の木棺墓群はこれらと異なり、身に帯び副葬する銅剣がまとまった最東例ということになる。中でも瀬戸内地域で卓越し専ら埋納される中細形B類銅剣を含み、これもやはり身に帯び副葬しており、甕棺墓や武器形青銅器副葬が顕著なムナカタより西側の弥生社会との共通性を示す。なお、中細形B類銅剣の副葬は、柚比本村遺跡と吉野ヶ里遺跡北墳丘墓にもみられる。

そのような中にあって、ムナカタとその周辺の独自性の主張を、武器形青銅器副葬における銅戈の扱いに窺うことができる。田熊石畑遺跡では銅剣・銅矛が鋒を足下に向け両脇に添えられるのに対し、銅戈は頭部横向き（2・4号墓）あるいは頭部に最も近接（1号墓）して副葬されている。宗像市朝町竹重遺跡でも、破片銅矛とともに完形銅戈が頭部付近から出土し、遡って中期初頭の古賀市馬渡・束ヶ浦遺跡甕棺墓も銅戈を被葬者頭部に最も近接して副葬する。武器形3種の中でも副葬に際して銅戈を重視する傾向が、ムナカタとその周辺には読み取ることができ、田熊石畑遺跡にそのもっとも顕著な様相がみられるのである。量的に稀少な銅矛に価値を見いだしていくムナカタより西側の弥生社会と異なる銅戈の選択は、北部九州でも東に偏った銅戈の石製模倣卓越とも相関する。

ムナカタの弥生人は、甕棺墓こそ採用しなかったものの、北部九州圏の中に自らを位置づけ、青銅器文化の東方展開においてより東方の地域との関係・門戸として枢要なる役割を果たしながら、銅戈重視・模倣という地域的独自性を発揮させた青銅器文化の中核的存在でもあったのである。後に海上交通の担い手としてさらに重要な役割を果たすことになるムナカタ海人の原形を、弥生時代中期に遡った対東方関係の中に求めることができよう。

吉田 広（よしだ ひろし）

1967年生愛媛県まれ。愛媛大学ミュージアム准教授。
1994年京都大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学。京都大学文学部助手を経て1996年愛媛大学法文学部講師、2002年同助教授、2009年同ミュージアム准教授。著書に（共著）『出雲荒神谷遺跡　第一冊本文編』島根県教育委員会・島根県古代文化センター、『弥生時代の武器形青銅器　考古学資料集21』国立歴史民俗博物館、（共著）『中野市柳沢遺跡』長野県埋文センター、「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集、『3Dレプリカを用いた弥生時代武器形青銅器のライフサイクルに関する復元実験研究』など。

基調講演

「邪馬台国九州説とムナカタ国」

高島 忠平（旭学園理事長）

邪馬台国は、日本列島における古代国家生成の謎を解く歴史上の極めて重要な課題、また、邪馬台国の時代は、弥生時代史の結末であり、古代国家成立過程の序章でもある。

*当時の「国」の領域は、律令期および現在の郡にほぼ対応する。

*現在の北海道・東北・沖縄を除く地域に、弥生時代の環濠集落が分布、これらの地域に、倭人が生息、数百の「国」がある。北部九州には約四十国が存在する。

*これらの「国々」は、中国の各時代の歴史書、前漢書・後漢書・三国志・晋書などの記述から、その生成、発展、連合、地域国家形成といった政治的成長過程を窺うことができる。それと列島社会の弥生時代における考古学上の時代変化と対応することによって、より具体的に理解できる。

*弥生時代中期以降の北部九州は、環壕集落の拡充、首長墓の顕在化・列状埋葬など造墓規制の強化、武器の祭器化、戦死・戦傷者埋葬例の増加、銅鏡・鉄製武器など中国系文物の増加がある。これは、この時期に北部九州各地に、草分け一族（氏族）を頂点にした階層化が進み、氏族が政治的に結合、首長制による「国」を生成、東アジアの宗主国中国との政治的関係を取り結んでいったことを示している（前漢書地理志）。

*こうした中で北部九州沿海部の海人集団（ムナカタを含む）は、主導的役割を果たした。

*弥生時代後期には、「国」の都となる集落規模が機能を拡充すると共に、各海人集団（「国」）は、海外外交・交易にあたって政治的に連合し、「漢倭奴国王」を共立するまでに倭人集団として政治的成長を遂げた。―ムナカタの「国」もその一翼―

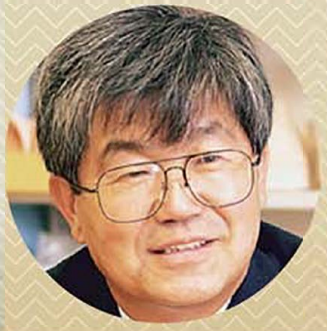
*弥生時代後期以降、後漢系文物（銅鏡・鉄製武器など）の北部九州各地への広がりからみて、「国」連合はより拡大した。生口百六十人を伴った「倭国王師升等」の朝貢がそれである。

*さらに、鉄製品は、列島各地に普及、弥生社会は鉄の時代となった。特に中・南九州そして山陰地域に普及が著しい。鉄を中心とした流通システムが九州を中心にして成立した。こうした中で、北部九州の邪馬台国を中心とした倭人集団とは別に、狗奴国男王卑弥弓呼による「国」連合勢力が倭人社会に台頭、外交・交易において倭人社会の主導権を争う情況となった。

*「素より和せず、相争う」二つの倭人集団の抗争は、弥生時代後期、政治・経済上の戦略的物資となった朝鮮半島『弁辰』からの鉄素材の流通をめぐる主導権争いと同時に、次なる広域的な倭人社会の覇権掌握―地域国家―に向けてのためでもあった。

*「魏志倭人伝」は、倭人はこの二つの勢力とは別に「東海を渡る千余里また国あり、皆倭種なり」とあり、倭人を三つのグループに分けて捉えている。列島各地、九州・近畿のほか中国・山陰・関東などには弥生時代後期の核となる遺跡が多く有り、このことを物語っている。女王卑弥呼の「倭王」権は地域的に限定的で、倭人社会全体に及んでいない。したがって、卑弥呼の都する「邪馬台国」は九州にあったとするのが合理的である。

*ムナカタの「国」は卑弥呼女王連合「国」のひとつと私は考える。



高島 忠平（たかしま ちゅうへい）

1939年福岡県生まれ。学校法人旭学園理事長。

1964年熊本大学法文学部文科東洋史専攻卒業。奈良国立文化財研究所を経て1974年より佐賀県教育委員会勤務、以後佐賀県教育委員会副教育長、佐賀県立名護屋城博物館長、佐賀女子短期大学教授、同短期大学学長を歴任。

著書に『吉野ヶ里と古代遺跡』（学習研究社）、『日本通史　古代1 吉野ヶ里』（岩波書店）、『環濠集落吉野ヶ里遺跡とクニの成立』（吉川弘文館）など。

「ムナカタ国の可能性」

西谷 正（海の道むなかた館長）

田熊石畑遺跡の主な出土遺物

弥生時代中期前半のころ、宗像地域では、細形の銅剣・銅矛・銅戈が墳墓の副葬品として出土する。数個所の出土地の中で、田熊石畑遺跡の墓地では、一個所で15本という多量の青銅器が出土した。そのように青銅器を集中的に保有した被葬者は、宗像地域に形成されていた農業共同体の首長層であったと推測する。

弥生時代も中期後半に入ると、たとえば糸島市の三雲南小路遺跡などで見るように、大形甕棺墓の副葬品に前漢鏡が多量に副葬される。このような状況は、唐津市の桜馬場遺跡の甕棺墓における後漢鏡の副葬で知られるとおり、後期へと続く。そのような墳墓における銅鏡のみならず、素環頭大刀・ガラス璧などの副葬や、遺跡からの金印・貨幣などの出土と、『漢書』地理志や『後漢書』倭伝の記事から推して、それらの中国・漢の文物は、朝鮮半島の北西部に設置されていた楽浪郡からもたらされたと考えられる。そして、その背景に、各地の農業共同体が楽浪郡を通じて漢帝国と外交関係を結んだことを契機に、農業共同体が国に、また、その首長が王に成長、発展したと考える。このような社会状況は後期へと続く。宗像地域では、今のところ国や王の登場を考古資料から想定することは困難である。

弥生時代後期後半という時期は、一方では『魏志』倭人伝に記されるように、日本列島各地に邪馬台国をはじめとする国々が存在していた。宗像地域では、徳重高田遺跡などで、後漢鏡の破鏡が出土しているので、後漢鏡を保有する有力者がいたといえる。

古墳時代に入ると、『魏志』倭人伝に登場する国は、ヤマト王権によって縣（あがた）という地域単位として編入される。旧宗像郡域の東隣りは遠賀郡であるが、そこには、岡（おかの）縣（あがた）が存在したようである。このことは、『日本書紀』仲哀天皇八年春正月の条に見える筑紫行幸に際し、岡縣主の祖・熊鰐が登場することから推測できる。岡縣の設置を契機として、縣主墓と推定される島津丸山古墳が築かれたと考えられる。

一方、宗像郡域では、島津丸山古墳とほぼ併行期に当たる出現期の築造と考えられる前方後円墳に、徳重本村2号墳がある。そこで、遠賀郡域における島津丸山古墳と岡縣（主）との関係から類推して、宗像郡域においても徳重本村2号墳に対応する胸形もしくはムナカタ縣（主）の想定が可能ではなかろうか。もっといえば、『魏志』倭人伝の時代の北部九州における国々の想定に照らして、宗像郡域にムナカタ国とも呼ぶべき、一つの国の存在の可能性を主張したいのである。そのためにも、田熊石畑遺跡で見る首長墓（区画墓）に続く、弥生時代後期後半における国邑すなわち拠点的中心集落と、王墓に当たる墳丘墓という遺跡の発見が期待されるのである。ちなみに、『魏志』倭人伝時代の国は、古墳時代あるいはヤマト王権時代の縣や、さらに時代は降って律令時代の評・郡（こおり）を経て、現代の郡へと継承されている。

西谷 正（にしたに ただし）

1938年大阪府生まれ。海の道むなかた館長、九州大学名誉教授、九州歴史資料館名誉館長、糸島市立伊都国歴史博物館名誉館長、名誉文学博士。
1966年京都大学大学院文学研究科（考古学専攻）修士課程修了。奈良国立文化財研究所研究員、福岡県教育委員会技師、九州大学助教授を経て、1987年～2002年九州大学教授。著書・編書に『東アジア考古学辞典』（東京堂出版）、『魏志倭人伝の考古学－邪馬台国への道』（学生社）、『古代北東アジアの中の日本』（梓書院）、『伊都国の研究』（学生社）、『邪馬台国をめぐる国々』（雄山閣）、『古代日本と朝鮮半島の交流史』（同成社）など。

「宗像の吉野ヶ里」ー田熊石畑遺跡

板橋 旺爾（西南学院大学非常勤講師）

近年、新聞紙上をにぎわす考古学ニュースは近畿地方からのものが多く、かつて佐賀県・吉野ヶ里遺跡が全国的ブームを呼んで邪馬台国九州説を力づけたあのエネルギーはどこへ行ったのかと思えた。そのような時、私が住む宗像から田熊石畑遺跡の発見が報じられた。「海の正倉院」と呼ばれる沖ノ島に対し、私はこの遺跡を「宗像の吉野ヶ里」と呼ぶことにした。

では、「海の正倉院」と「宗像の吉野ヶ里」をどうつなぐべきか。

これまで宗像では、奴国や伊都国のような多数の青銅器による厚葬墓群がみられなかった。つまり王（オウ）の不在である。よって弥生時代の宗像は周辺群小地域でしかなかったと思われていた。このため、古墳時代になって突然のようにヤマト王権と直結する「海の正倉院」や宗像海人族が中央舞台に躍り出るのが考古学上も文献史学上も謎だった。

だが、田熊石畑遺跡によって「王」ないし王族の存在が明らかになったのである。

JR東郷駅近くに東郷高塚古墳がある。古墳としては宗像で最初の盟主的首長墓だが、被葬者は沖ノ島祭祀開始の時期と合致する。次代にはこれが新原・奴山古墳群へと移り沖ノ島を祀った宗像海人族の隆盛を表すのだが、東郷高塚はいわば古墳時代の宗像政治圏の確立を示す古墳と言える。その東郷高塚のすぐ北西に接して田熊石畑遺跡が位置していることは重要だ。

「海の正倉院」につながる弥生ムナカタの王族たち。さてそこからは、邪馬台国がどの方角に見えていたのであろうか。

板橋 旺爾（いたはし おうじ）

1946年福岡県生まれ。比較文明学会会員、西南学院大学非常勤講師。
1970年明治大学文学部史学科考古学専攻卒業。福岡市教育委員会文化課を経て読売新聞西部本社入社、社会部次長・編集委員を勤める。著書に『奴国発掘』（学生社）、『列島考古学の再構築ー旧石器から弥生までの実像』（学生社）、『大王家の柩ー継体と推古をつなぐ謎』（海鳥社）など。

いせきんぐ宗像（田熊石畑遺跡歴史公園）
整備イメージ図

「いせきんぐ宗像」について

宗像市郷土文化交流課

「いせきんぐ宗像」とは、市民参加によって弥生ムラをつくり、そだて、活用する屋外の歴史拠点施設の愛称です。平成 24 年度から 26 年度にかけての 3 ヵ年で管理棟やトイレ、園路など基盤的な整備を終えますが、その後も花園運営や古代の遺構復元、多様な市民活動の場として、また緑の空閑を楽しむ憩いの場として 10 年、20 年と村づくりを進めていく、大変息の長い整備計画が特徴です。なお、平成 27 年 7 月頃に全面オープンする予定です。

追加配布資料

倭人は帯方東南の大海の中にあり。山島に依りて国邑をなす。旧百余国。漢の時に朝見する者あり。今使訳通ずる所三十国なり。

郡（帯方郡）より倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓国を歴て、乍は（たちまち・しばらく）南し、乍は東して、其の北岸、狗邪韓国に到る。七千余里なり。

始めて一海を度ること千余里、対馬国に至る。其の大官を卑狗といい、副を卑奴母離という。居する所絶島にして、方四百余里ばかり。土地山険しくして深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり、良田無く、海物を食して自活し船に乗りて南北に市糴す。

又、南一海を渡ること千余里。名づけて瀚海という。一大（支）国に至る。官をまた卑狗といい、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木叢林多く、三千ばかりの家あり。やや田地ありて、田を耕せども、なお食は足らず。また南北に市糴す。

又、一海を渡ること千余里。末盧国に至る。四千余戸あり。山海に浜いて居す。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鰒を捕らえ、水深浅となく、皆沈没してこれを取る。

東南へ陸行すること五百里。伊都国に到る。官を爾支といい、副を泄謨觚柄渠觚という。千余戸あり。世々王ありて、皆女王国に統属す。郡使の往来、常に駐る所なり。

東南、奴国に至るには百里。官を兜馬觚といい、副を卑奴母離という。住居は二万余戸あり。

東行、不弥国に至るには百里。官を多模といい、副を卑奴母離という。千余家あり。

南、投馬国に至るには水行二十日、官を弥弥といい、副を弥弥那利という。五万余戸ばかりあり。

南、邪馬台国に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月なり。官に伊支馬あり、次を弥馬升といい、次を弥馬獲支といい、次を奴佳鞮という。七万余戸ばかりあり。

女王国より以北はその戸数道里を略載し得べくも、その余の旁国は遠絶にして詳らかにすることを得べからず。

次に斯馬国あり、次に已百支国あり、次に伊邪国あり、次に郡支国あり、次に弥奴国あり、次に好古都国あり、次に不呼国あり、次に姐奴国あり、次に対蘇国あり、蘇奴国あり、次に呼邑国あり、次に華奴蘇奴国あり、次に鬼国あり、次に為吾国あり、次に鬼奴国あり、次に邪馬国あり、次に躬臣国あり、次に巴利国あり、次に支惟国あり、次に烏奴国あり、次に奴国あり。これ女王の境界の尽きる所なり。

其の南に狗奴国あり、男子を王となす。其の官に狗古智卑狗あり。女王に属さず。郡より女王国に至るには万二千里なり。

邪馬台国への道のり <「魏志倭人伝」（一部）読下し例>

平成26年度　文化庁国庫補助事業

いせきんぐ宗像シンポジウム2014資料集

邪馬台国とムナカタ国

平成26年9月7日

宗像ユリックス　ハーモニーホール

主催　宗像市教育委員会
協力　田熊石畑遺跡村づくりの会

特別講演

「邪馬台国を再考する」

石川 日出志（明治大学文学部教授）

私は弥生時代を専門とし、東日本に身を置きながら、西日本の調査・研究もつねに視界に入れてきました。そうした目で北部九州をみた時、最近 10 数年間で特に注目する点が２つあります。第一は、福岡市域よりも東側で弥生時代前半期に関する著しい成果が上がったこと。第二は、魏志倭人伝に記された北部九州の国々の様子がかなり明らかになってきたことです。

第一の点は、弥生時代早・前期初頭の宗像市田久松ケ浦遺跡で、朝鮮半島的な構造の石槨木棺墓に朝鮮半島製磨製石剣・石鏃を副葬する墓地、また宗像市田熊石畑遺跡と古賀市馬渡・東ケ浦遺跡で、青銅器多数を保有する木棺墓群・甕棺墓群が、それぞれ確認されたことです。従来、北部九州では、どうしても福岡平野と糸島地域（のちの奴国と伊都国）を優位とみる傾向がありました。しかし、弥生時代早・前期～中期前半はそうではなく、各地の社会や首長はまだ並列的で、特定の地域が突出する状況にはない。つまり、これらの遺跡は、宗像界隈も北部九州の最有力地域のひとつであることを証明するものです。のちの奴国・伊都国地域とその首長が突出して優位になるのは、そのあとの中期後半（前１世紀）になってからであることがはっきりしたと思います。その後、大陸系の威信財を好んで副葬する墓は確認できなくなりますが、当地域が、山口県域から日本海沿岸方面および関門海峡を経て瀬戸内方面の諸地域と北部九州諸地域とをつなぐ扇の要の位置にある重要性は、それまでと変わりないことは言うまでもありません。

第二の点は、本講演の主題と直結することです。もちろん、魏志倭人伝は、魏という国家が、倭人たちは敵対する呉の背後の位置に所在するという論理から、魏が倭国（女王国）を重んじた記述をし、特に政治的交渉を繰り返した点が主題となっています。景初３年（西暦 239 年）以後の記事がそれですが、しかし魏志倭人伝で、対馬国・一大（支）国・末盧国・伊都国の描写がじつに具体的なのもとても重要です。冒頭には、対馬国・一大（支）国・末盧国の特徴を巧みに表現した記述があります。魏の帯方郡の使いが実際に往来したことの反映でしょう。しかし伊都国には情景描写はなく、「世々王あるも皆女王国に統属す」とか、「一大率」設置記事とか、制度面の記事が具体的です。「（帯方）郡使の往来常に駐まる所」だからでしょう。次にでてくる奴国の記述が簡略なのと著しく対照的です。これら一大（支）国・末盧国・伊都国・奴国の考古学的調査がずいぶん進展しました。

一大（支）国の壱岐島では、その中心集落である壱岐市原の辻遺跡が継続的に調査され、船つき場施設が検出され、楽浪郡や三韓からの文物が多数見つかっています。末盧国については、唐津市桜馬場遺跡で、戦中の 1944 年に防空壕を掘った際に完形の後漢鏡面や鉄刀、巴形銅器・有鉤銅釧多数が副葬された甕棺が発見されましたが、近年の再調査で、その地点が確認できました。唐津市中原遺跡では大規模な墓地が調査され、後漢代の連弧文鏡など末盧国と大陸とのつながりを示す資料が蓄積されています。

伊都国域では、中期後半の糸島市三雲南小路遺跡で前漢鏡 30 面あまり、後期前半の同市井原鑓溝遺跡で前漢末～新代の銅鏡 17 面、後期中頃～後半の同市平原遺跡で銅鏡 40 面がそれぞれ副葬された墓が江戸時代と 1965 年に発見されています。三代にわたる伊都国域の最有力者の墓地です。それら被葬者の生前の拠点集落である三雲遺跡も、その全容と変遷を描く論文も発表されています。近年特に注目したいのは、同市の潤地頭給遺跡や浦志遺跡・上灌子遺跡、福岡市元岡・桑原遺跡、同市今宿五郎江遺跡など伊都国（から奴国西部？）の海域に近い地区に立地する遺跡の調査成果です。潤地頭給遺跡では、山陰系の技術と思われる玉作を集中的に行っていることや準構造船が確認され、浦志遺跡と今宿五郎江遺跡では朝鮮系小銅鐸、今宿五郎江遺跡では楽浪系などの朝鮮半島系土器や中国銭貨が発見されています。一大（支）国・末盧国・伊都国がそれぞれ明確な拠点をもち、大陸と密な交流を重ねている様子がわかります。さらに奴国域でも、西新町遺跡ではオンドル施設をもつ住居や朝鮮半島系土器が明瞭で、五銖銭や貨泉という中国銭貨も出土しており、大陸からの物資と情報が往来する姿が鮮やかです。ただし、奴国域では、弥生後期＝西暦紀元後の漢鏡集中副葬墓はなく、「漢委奴國王」金印以外に「奴国王」の姿は確認できません。

邪馬台国問題を考える時、伊都国域一帯の調査成果の蓄積は非常に重要です。魏志倭人伝冒頭の伊都国に「世々王あるも、皆女王国に統属す」の「世々王あるも」は、三雲南小路・井原鑓溝・平原遺跡の３時期にわたる銅鏡多副葬墓とよく対応しています。また、中ほどの記事に「一大率」が常に伊都国に置かれて、倭王が魏・帯方郡および馬韓・弁韓・辰韓に、あるいは帯方郡が倭国に、それぞれ使いを送る際に、港で積み荷の文書や賜物に錯誤がないことを点検しているという記事（「王遣使詣京都・帯方郡・諸韓国，及郡使倭国，皆臨津捜露，伝送文書賜遺之物詣女王，不得差錯」）も、潤地頭給遺跡や元岡・桑原遺跡群、今宿五郎江遺跡の立地や出土遺物をよく説明してくれるように思います。

では、邪馬台国はどこか。この問題については、私は、BC１世紀～AD２世紀に北部九州でもっとも有力なのは、考古学的には伊都国と奴国の領域です。その伊都国が「世々王あるも皆女王国に統属す」のですから九州以外と考えるのが自然です。最近、中国古代史の渡邉義浩氏が、「自女王国以北，特置一大率，検察諸国．諸国畏憚之．常治伊都国，於国中有如刺史．」の「刺史」は魏では地方に置くものであり、首都圏は「司隷校尉」なので、この２文字だけで邪馬台国は九州以外と断定できると指摘しています。

この問題で重要なのは、①古墳時代のような西日本各地の最有力首長が遠隔地間で連携する仕組みがどのようにしてでき上がったか、②2 世紀末から 3 世紀前半に大きな社会制度の再編がどこで起きているか、の 2 点だと考えます。①については、島根県出雲市の西谷３・4 号墓で、その埋葬後の儀礼の場で用いられた土器の中に、吉備や丹後・北陸方面からもたらされた土器群が確認されたのが重要でしょう。日常用いる土器や鉄器などが他地域で出土する事例は各地で確認できますが、最有力首長の葬祭儀礼の場に遠隔地の首長が参画する状況は、北部九州でも畿内でも見られません。西日本各地の最有力首長が遠隔地間で連携する仕組みは、中国地方で始まったと考えざるをえません。

②について注目したいのが拠点集落の編成替えです。北部九州では、弥生時代早期から古墳時代まで存続する大規模集落である福岡市比恵・那珂遺跡群が、後期後半に南北１㎞にも及ぶ大集落の中央に、南北を貫く道路が設けられ、それを軸として住居や墓地をマス目状に計画配置する方式に編成替えされます。奈良盆地では、弥生時代前期から後期まで長期にわたって中核集落であった田原本町唐古・鍵遺跡が後期末になると急速に縮小し、それと交替するように、それまでは本格的農耕集落が立地することはなかった扇状地に、桜井市纒向遺跡と天理市布留遺跡という古墳時代の中核となる大規模集落が形成されます。奈良盆地内の集落群が大きく再編されたと考えられます。2 世紀後半でしょう。こうした集落・地域再編が北部九州と畿内だけなのか知りたいところです。ただし注目したいのは、この纒向遺跡が形成されるとまもなくその周縁部に「纒向型」前方後円形の墳墓が形成され、次いで箸墓古墳という誰もが定形的古墳と認める全長約 280mが出現し、さらに 3 世紀末～4 世紀の大形前方後円墳が集中するオオヤマト古墳群が形成されます。これらの一連の動向は、初期ヤマト王権の形成過程としては誰も異論ないでしょう。

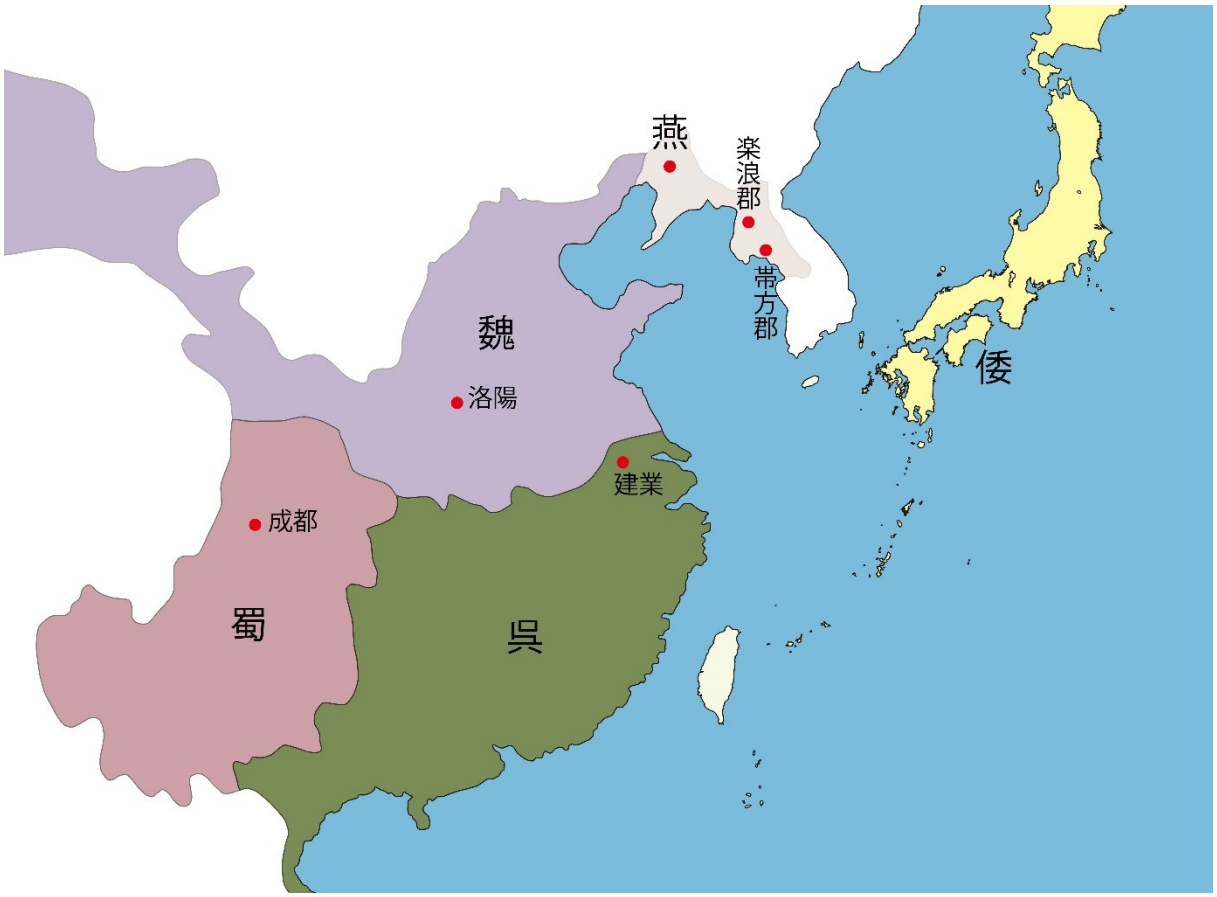
しかし、私は、邪馬台国所在地論の前に議論すべきは、倭国内の諸国域が 2～3 世紀までどのように発展し、かつ相互関係がどのように推移するかを描くことだと思います。倭国の中枢の所在地だけを追うのではなく、倭国社会を多角的に読み解くことです。

石川 日出志（いしかわ　ひでし）

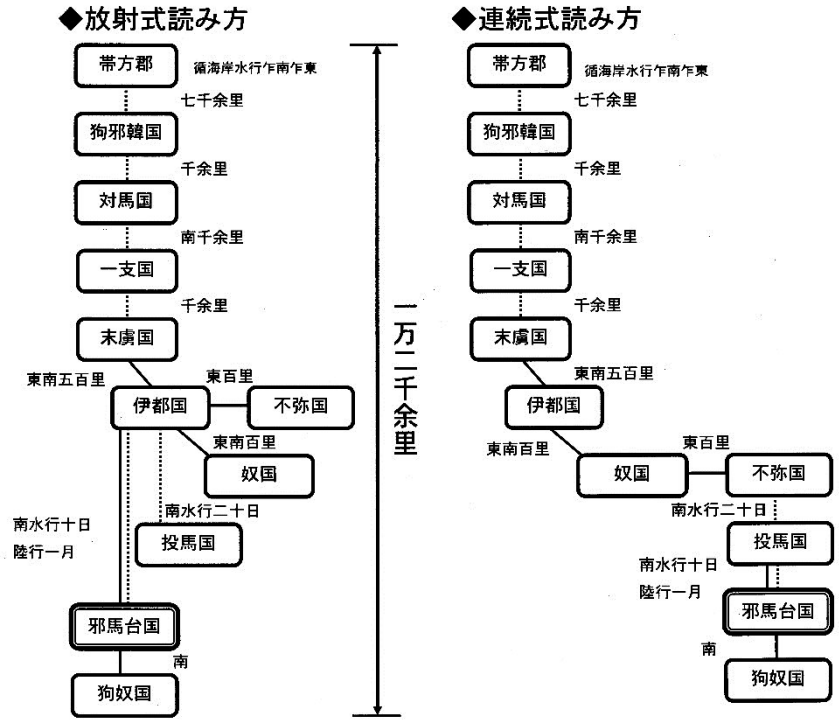
1954 年新潟県生まれ。明治大学文学部教授。

1978 年明治大学文学部考古学専攻卒業。1983 年同大学院文学研究科博士後期課程中退、同文学部助手、同専任講師を経て 1991 年同助教授、1997 年同教授。

著書に（共著）『考古資料大観 1 弥生・古墳時代　土器Ⅰ』（小学館）、『「弥生時代」の発見　弥生町遺跡』（新泉社）、（共著）『弥生人とまつり』（六興出版）、『農耕社会の成立』（岩波新書）など。



3 世紀ごろの東アジア



邪馬台国への道のり

追加配布資料

いせきんぐ宗像シンポジウム年表

平成26年9月7日

主な出来事	中国王朝	西暦	時期区分	宗像地域	北部九州	近畿
	秦	200	弥生時代前期	■田熊石畑遺跡（集落）	●吉武高木遺跡	
	前漢	150	中期前半	・光岡長尾遺跡（陶塤） ・香葉遺跡（陶塤） ■朝町竹重遺跡 ●田熊石畑遺跡（区画墓） 刳抜式木棺墓6基 ●朝町竹重遺跡SK28 ●久原遺跡Ⅳ-1号墓	●板付田端遺跡 ●馬渡・東ヶ浦遺跡 ●宇木汲田遺跡 ●吉野ヶ里遺跡北墳丘墓	
B.C.108 楽浪郡設置 ・分百余国の時代（漢書地理志）		100	中期後半		●吉武樋渡75号甕棺墓	
		50		●田熊仲尾遺跡（銅剣） ●上八中羅尾遺跡（石棺・銅剣）	●須玖岡本D地点甕棺墓 ●三雲南小路1.2号甕棺墓 ●立岩遺跡10号甕棺墓	B.C.52　池上曽根遺跡
A.D.8 王莽、皇帝と自称		0				
A.D.25 後漢王朝成立	新		後期			
A.D.57 倭奴国王後漢に遣使	後漢	50		■冨地原川原田遺跡（集落）	●井原鑓溝遺跡甕棺墓 ●桜馬場遺跡甕棺墓	
A.D.107 倭国王帥升、後漢に遣使		100		■冨地原森遺跡（集落）		
倭国大乱		150				
A.D.184 黄巾の乱		200		徳重高田遺跡 （石棺墓・土壙墓）		●纏向石塚古墳
A.D.208 赤壁の戦い			後期終末		●平原遺跡1号方形周溝墓	●ホケノ山古墳 ・纏向遺跡（大形建物）
A.D.238 公孫氏滅亡 A.D.239 卑弥呼魏に遣使 ・この頃、卑弥呼死す A.D265 西晋成立 A.D.266 壱与西晋に遣使	魏・呉・蜀	250		・光岡辻ノ園遺跡3号住居 ・久原瀧ヶ下遺跡3号住居 ・冨地原川原田遺跡24号住居 ・今川遺跡包含層	●那珂八幡古墳	●箸墓古墳
	西晋	300	古墳時代前期	●徳重本村遺跡2号墳（前方後円墳） ・徳重高田遺跡1号祭祀遺構 ●東郷高塚古墳	●久里双水古墳 ●津古生掛古墳	●黒塚古墳

※本年表は事務局試案です。

特別講演

邪馬台国を再考する

明治大学文学部教授　　石川 日出志

皆さん、こんにちは。明治大学の石川です。どうぞよろしくお願いいたします。

当初は、私ども明治大学の名誉教授、大塚初重先生のご講演という予定でしたが、体調を崩されまして、「石川、おまえが行け」ということでまいりました。しかしながら、なにぶん大塚先生は、日本の考古学界では一二を争う名調子の大塚節で考古学の魅力を語る方です。私はこの秋で 60 歳になりますが、この業界では若輩者の部類でして、大塚先生には及びもつきません。ご容赦ください。本日は「邪馬台国を再考する」というテーマでお話します。

私は東京で、主に東日本の弥生文化の研究を進めています。学生の時分、福岡に来た折に、夜、福岡の豪傑のような考古学者と飲んでいる際に、一言、言われました。「東京で弥生文化なんか勉強して何になる？！」という、非常に手厳しく批判され、あっけにとられました。でもよかったですね。弥生時代というのは、西高東低、西へ行くほど大陸からの先進的な文化が根付いている。それを勉強するのが、弥生時代研究の本流だという批判です。でも、そのおかげで、東京にいて西日本や九州のことも勉強する意味は何かを考えることができました。

弥生時代を専門とする考古学者の志向・姿勢ってのは非常に面白いんです。九州の考古学者は、足元の九州と大陸側を見る傾向が強い。ただし、東方の畿内との対抗意識もありますので、近畿と西日本一帯も見ています。近畿地方の考古学者は、打倒九州という気持ちがあるから西を見る。邪馬台国所在地論争での九州と畿内の対抗のようなものですね。さらに東方の関東ではどうかというと、東京周辺の南関東は西を向いています。ところが利根川を越えて、茨城・栃木両県方面になると北を向くのです。同じ弥生時代を研究していながら、関東地方で考古学者どうしが背中合わせになっているんです。

そんな遠い東日本から見た西日本、九州、ムナカタをお話しようと思います。皆様方には異論がある部分もあるかもしれませんが、その辺は大きな心で受け止めていただければと思います。

これからのお話は、東日本から見た九州考古学の最近の調査成果の魅力をお話しし、その上で、今日のメインテーマの邪馬台国の問題を考えるということで進めます。

田久松ヶ浦遺跡のインパクト

まずムナカタかいわいですが、最近の調査成果は、私たちの九州の弥生社会のイメージをかなり大きく変えたと思います。

だれもが大きく注目したのは、宗像市の田久松ヶ浦遺跡の調査成果です。今から 15 年ほど前に調査され、報告されました。弥生時代の開始期の遺跡で、丘陵の尾根筋に十数基の墓が並んでいました。本来は木棺だと思いますが、棺自体は朽ちてなくなっておりました。地面を掘って棺を納める部屋を設けていますが、その壁際に石を積み

上げて、石槨という構造をつくっています。石槨木棺墓です。その構造は、九州で今まで見たこともないような堅固な石積みの埋葬施設で、朝鮮半島の実例に近いものです。そして、その中の幾つかの墓に副葬品として石でできた握りのついた剣（磨製石剣）と長い石鏃（磨製石鏃）がありました。小さな壺は北部九州の弥生土器ですが、その添え方もよく似ています。埋葬施設・副葬品、それに小壺の添え方まで朝鮮半島南部とそっくりでした。これまでも九州で似た例は若干あるのですが、これほど見事ではありません。佐賀県や長崎県方面の西北九州ではなく、まさか福岡市のさらに東のこのムナカタで見つかったのは驚きでした。

今回のシンポジウムのきっかけとなりました田熊石畑遺跡の調査成果も素晴らしいですね。発掘調査の結果、丸太をくり抜いた木棺が調査範囲内に９つあり、そのうち６つを発掘したところ、その全てに青銅の剣や矛・戈という長い柄を付ける青銅の武器が副葬されていました。さらに、その中央及びその脇の埋葬施設では、４～５点の青銅武器がまとまって出土した。この地域に、優位な立場にある有力な一群がおり、さらにその中の２人がずば抜けた特定人物として、たくさんの青銅の武器を保有している。

木棺群はこの発掘範囲の外側にも広がっているようで、木棺群の配置からすると、一辺が 15m内外の平面が四角形の低いマウンドを持つお墓があって、そこに十数人の人々が埋葬された状況のようです。ムナカタの地でこうした青銅武器の保有状況が確認されたことは大変な驚きでした。

また、古賀市の馬渡東ヶ浦遺跡で、大きな土器を焼いて棺とした甕棺の中から４点の青銅の武器が集中的に副葬されていたのも大きな驚きでした。

田熊石畑と馬渡東ヶ浦の２遺跡で、ともに青銅武器がまとまって副葬され、その中の特定の人物が多くの青銅器を一手に保有する状況は、中期前半段階ではこれまで福岡平野にしか確認されていませんでした。
福岡平野から現在の糸島市にかけて、つまり魏志倭人伝でいう奴国と伊都国と考えられるこの地域こそが弥生時代の北部九州の中で優位な地位にある地域であり、中期前半からやはり突出しているとばかり思っていました。しかし、この田熊石畑、馬渡東ヶ浦の２遺跡は、その東側のこのムナカタ一帯もまた、福岡平野と肩を並べるほどに重要な地域であり、大陸に由来する文物を集中保有しているという非常に注目すべき地域だ、ということを明瞭に示しました。

ムナカタ以外にも佐賀県唐津市の宇木汲田遺跡、佐賀平野の吉野ヶ里遺跡、遠賀川上流域の鎌田原遺跡とか、北部九州各地で一つの遺跡で、複数の埋葬施設から 1 点ずつ青銅器が出土する事例があります。こうした事例も合わせ考えると、弥生時代の中期の前半、紀元前３世紀の後半から２世紀だと思いますが、この時代にはまだ、のちの奴国、伊都国と呼ばれる地域が、北部九州の中で突出した位置にあるのではない。まだ、各地がかなり横並び状態であり、このムナカタかいわいから福岡平野にかけてが、やや優位な立場にある状況だと思います。これまで持っていたイメージを変える必要を強く感じさせる遺跡調査例でした。

福岡平野＝奴国、それから糸島地域＝伊都国、このふたつが北部九州の中で突出した位置を占めるようになるのは、弥生時代中期の後半、紀元前１世紀代になってからです。北部九州の中の地域ごとの関係が、大きく変貌します。

糸島では、江戸時代に、三雲南小路という所から、１つの甕棺に鏡が 30 面ほど出てくるという事例が見つかりましたし、奴国の領域である春日市の須玖岡本遺跡（D 地点）でも同様の事例が明治年間に発見されました。一人の人物にこれほど多数の前漢鏡、しかも大形鏡だけが集中する事例はありませんので、この２つの地域が突出したレベルにあることが分かります。そして、伊都国の領域では、このあと弥生時代後期にかけて井原鑓溝遺跡・平原遺跡と３代にわたる人物が、中国の漢帝国から入手した青銅の鏡を一手に保有しています。

中期の後半、紀元前１世紀の段階になると、奴国、伊都国が北部九州の中で突出した地位を占めると申しましたけれども、それでは、ムナカタ地域の重要性が低下したのでしょうか。私は、そうではなかろうと思います。もちろん、これはのちほどのシンポジウムでご議論いただきたいと思いますけれども、ムナカタは、伊都国や奴国からみると東側の隣接地です。この時期は、中国の漢の時代の文物が、北部九州以東にも大量に日本列島にもたらされる段階であることが分かっています。例えば、山口県域ですと、下関市に稗田地蔵堂遺跡という石棺墓から、前漢鏡 1 面とともに、中国で馬車を用いる際に官人が乗る椅子の上に大きな傘状の覆いを架すのですが、その先端につける塗金製の飾り金具が副葬されていました。また、宇部市の沖ノ山というところからは前漢代のお金が 120 枚も小さな甕の中から出てきたという事例もあります。

さらに、文物そのものが見つかった訳ではありませんが、銅鐸などの青銅器をつくる地金がそれ以東の地域に中国からかなり大量にもたらされていたことを示す分析データがあります。近畿地方周辺では、弥生時代に「銅鐸」と呼ばれる、内側から打ち鳴らすカネが大量に鋳造され使われています。それを鋳造するための鋳型も見つかっていますので、確かに、近畿地方周辺で作られていることが分かります。その銅鐸の原料は、銅と錫の合金である青銅ですが５％内外の鉛が混ぜてあります。鉛同位体比分析という詳しい分析をすると、その原料がこの時期は、中国の黄河中流域からもたらされていることが分かっています。それは、実は九州の北部九州の奴国や伊都国でたくさん出土する前漢鏡と同じ地域からもたらされています。北部九州で製作されるタイプの武器形青銅器も同じ原料を用いています。

つまり、北部九州だけではなくて、山口県域、さらに近畿地方までの西日本一帯に大陸の漢帝国の文物が、黄河流域から、朝鮮半島の付け根の現在の平壌付近にありました楽浪郡という、東の地域への出先機関を経由して大量に持ち込まれている。これは、ムナカタというこの地域を経なければ、到底入手し得ないものです。ムナカタというのは、多くの先生方がお考えのように、やはり、海上交易の実権を握っている地であるというふうに考えられますので、中四国、近畿方面への中国系の文物の流入を考える場合には、このムナカタの地というのは脇に置いておくわけにはいきません。

遺跡からうかがえる当時の様子

次に、『魏志倭人伝』に鮮やかな記述がある国々の様子が、遺跡の発掘によって、かなり見えてきていることに進みましょう。

『魏志倭人伝』では、日本列島に住む倭人の国々が 30 ほど出てきます。最初に登場するのが対馬国。それから、「一大国」と書いてありますが、これは写本の写し間違いで、「一支国」つまり壱岐国ですね。それから末盧（まつら）国。これは古代の松浦郡域で、現在の唐津市かいわいです。そして伊都国、奴国、それ以外に幾つかありま

すけれども、それらの国の場所が、誰もが合意しているのがこれら５つの国であります。これらの地域についての調査研究が、ずいぶん進んできています。

『魏志倭人伝』はいろいろな読み方ができますが、非常に面白いと思うのは、対馬、壱岐、末盧の三国は、地形環境や生活習俗などの特徴が、国ごとにきちっと描き分けられているリアルな記述になっています。例えば末盧国ですと、「山海に沿うて居る」、つまり海と山が接した所に人々が住んでいる。草木がうっそうと繁っていて、「行くに前人を見ず」。「好んで魚鰒を捕うる」、好んで魚とかアワビなど魚介類を捕えて食べ、海に潜ってこれを採っている。そして、南北に交易をしている、といった具合です。ところが、伊都国ではそうした描写が一切なくなります。伊都国は、「官を爾支と日い、副を泄謨觚・柄渠觚と日う。千余戸有り。世王有るも皆女王國に統属す。郡使の往来して常に駐る所なり」とあります。行政面のことしか記述がありません。

対馬国から末盧国までのリアルな地形や生活の描写は、魏の帯方郡――これは現在の平壌周辺からちょっと南辺りの一帯です――からの使者が伊都国までやって来ます。そして、情報収集、あるいは物資を入手して帰って行く。正式な出張でありますので、帯方郡に帰ったら、出張報告書、復命書を提出します。そういった記録がちゃんと魏の側で残されていて、それが圧縮した形で『魏志倭人伝』の中に反映されているのでしょう。

また、逆に伊都国についてはこういう地形・生活の描写がない。「(一) 大率」が置かれるとかの制度的な面や、王がいるとか、帯方郡の使いが常にここまで来るとかは、行政的・外交的なことです。伊都国は、中継地点ではなくて、出張の目的地であるために、書き方が一変するわけです。

これらの各国の様子が発掘調査でずいぶん具体的にわかるようになりました。対馬については近年の調査は少ないので、壱岐国 (一大国) から見ていきますと、原の辻遺跡という非常に巨大な村が、継続的な発掘調査をされ、そして、中国の新という国の王莽がつくった貨泉という貨幣や鋳造鉄斧などの大陸系の文物、朝鮮半島の土器だとか多数見つかっており、南北に交易をしているという『魏志倭人伝』の記述をリアルに証明しています。

末盧国にあたる唐津市桜馬場遺跡では、戦争中の昭和 19 年に、防空壕を掘削した際に甕棺が見つかり、そこから中国・王莽代頃の銅鏡 2 面が出てまいりました。ところが、防空壕を掘った際に出てきたものですから、鏡だとか腕輪だとかという副葬品の青銅器類は取り上げたものの、それを入れていた甕棺は、打ち砕かれて埋めてしまわれました。この銅鏡は、紀元後 1 世紀の初めごろのものでしたので、北部九州の弥生時代の暦年代を知る基準とされたのですが、甕棺はスケッチが残されたものの、埋めてしまったために甕棺の特徴がよく分からない。弥生時代の甕棺がいつなのかは、その甕棺の形の特徴を見て決めるのですが、その詳細がそのスケッチではよく分からなくて、なかなか難渋していたのです。ようやく 7 ～ 8 年前でしょうか、もう一度その地点が発掘できることになり、昭和 19 年に埋められた甕棺が、再調査されて回収することができました。そして、末盧国の中国鏡を出した甕棺が後期前半で、初頭より少し下ることが分かりました。

確かに昭和 19 年の地点だと確定できたのは、5 ㎜くらいの小さな鏡の破片の発見でした。現在、佐賀県立博物館に展示されていますが、完全な形のように見えて、じつはごく一部を修復している。その抜けた部分にスポッと入るということが分かりましたので、同じ地点だと分かりました。

さらに、鉄刀の握りの部分があり、それには輪っか状の部分がついていました。これは素環頭大刀という漢王朝

特有の大刀で、長さが１mほどになります。こういった中国製の鉄刀や銅鏡を１人の人物が保有し、数千点ものガラス玉も持っています。一人の人物が集中保有しており、末盧国の王墓というにふさわしい墓だと確認されました。さらにその後継のグループも後漢鏡などを保有していることが、唐津平野の中央部に位置する中原遺跡でわかっています。

次に、伊都国に進みますが、伊都国は、邪馬台国問題にかなり密接に絡んできます。

先ほども触れましたが、この伊都国では江戸時代以来、たびたび弥生時代の中・後期の有力者の墓が見つかっておりまして、紀元前１世紀代から紀元後１世紀代、紀元後２世紀、考え方によったら３世紀に下るという方もいらっしゃるかと思いますけれども、３代にわたる伊都国の王クラスの墓が見つかっております。こういう調査成果は、実は『魏志倭人伝』に、伊都国に「世王有る」、代々王がいるという記述を発掘資料の中から裏付けることができる大変重要な資料です。

糸島平野の中央部に三雲遺跡群という、伊都国の中心となる村があり、その南部に前漢鏡を多数副葬した三雲南小路遺跡や、王莽代頃の銅鏡を多数副葬した井原鑓溝遺跡があります。王莽代から後漢代の銅鏡を多数出土した平原遺跡は、三雲遺跡群の西方の曽根丘陵の北寄りにあります。

糸島平野の北方には志摩半島があります。両者の間は、現在は広い平野になっていますが、当時は中央部の志登遺跡や潤地頭給遺跡がある一帯だけが陸地で、東西から海が迫っている状態でした。この周辺一帯には、この２遺跡の他にも、浦志遺跡や今宿五郎江遺跡、元岡・桑原遺跡群など、海にほど近い遺跡があり、最近、相次いで調査され、大陸系の文物がかなり出ています。また、潤地頭給遺跡ですと、山陰に由来する技術で玉つくりする工房跡も見つかっています。西・北方の大陸側、あるいは東方の山陰側とそれぞれ密接に連携する物流の拠点のような遺跡群だということが分かってきました。

これらの遺跡群の調査成果は、非常に重要でして、邪馬台国問題とも関係してきます。『魏志倭人伝』の中に、この伊都国には、一大率、もしくは大率という職がある。それは諸国を検察する、つまり諸国の動向をチェックする機能を持っている。それはつねに伊都国に置かれている。そして、ここでは倭国の王が魏の都や帯方郡や韓国に使いを出した際、あるいは、帯方郡が倭国に使いを出した場合、いずれも「皆津に臨みて」＝港において、「捜露し」＝積み荷をあらためて、リストと物品にずれがないかをチェックしているという記述があります。近年のこの一帯の調査成果というのは、この記述を彷彿とさせるものがあると、私は感じています。

こういった大陸とのつながりを示す遺物＝文物が、陸続とこれらの国々の遺跡から出てまいります。それは、何も伊都国や壱岐国、松浦国だけではなくて、奴国の地も同様です。例えば、奴国の西部に当たる早良区の西新町遺跡は、砂丘上の遺跡ですが、弥生時代の終わりごろの大集落です。そこでは朝鮮半島系のオンドルや竈をもつ竪穴住居があり、そこから朝鮮半島製の土器が出てくるとか、あるいは朝鮮半島と同じ作り方をするガラスの玉を作る鋳型が出てくるとか、大陸系のにおいがプンプンします。交易の拠点である港町のような遺跡かと思います。

福岡平野でも同様で、海沿いの砂丘地帯に港町のような博多遺跡群があり、その裏（南方）の内陸寄りに入った地区に、この奴国の本拠地である須玖遺跡群や、比恵・那珂遺跡群といった、巨大な村が営まれていることが分かってきています。この比恵・那珂遺跡、須玖遺跡ともにたくさんの調査の蓄積がありまして、鮮やかに、考古学的に奴国を描くということができつつある状態です。それぞれの調査区が狭いので、一見してその規模や内容の

すごさを体感するのは難しいものの、これまでの調査成果を合わせると、南北１～２km にも及ぶ大規模な集落遺跡で、各地で青銅器鋳造を行っています。須玖遺跡群の一画では、前漢鏡を多数副葬した須玖岡本遺跡 D 地点という王墓があります。

今日は詳しくは紹介しませんが、これまでの調査データを集約してみますと、やはり弥生時代の後期、紀元後１世紀から３世紀にかけては、奴国と伊都国が、北部九州で突出した地位にあると私には見えます。そして、その１つである伊都国の記事には、「世王有るも皆女王國に統属す」。伊都国に代々王がいるものの、みな女王卑弥呼のもとに統属しているのですから、邪馬台国は、伊都国と奴国より上位の国ということになります。そんな国は九州には考古学的に想定し得ませんので、九州にはないことになる。会場にお出での九州の皆さん、ごめんなさい。でも、考古学的なデータを素直に眺めれば、九州には邪馬台国はないと考えざるを得ないのです。

最近、中国古代史がご専門の、早稲田大学の渡邉義浩さんが、『魏志倭人伝』には伊都国に置かれた大率という職が、魏の刺史という職に似るという記述がある。この２文字を見るだけで、九州に邪馬台国はないと断言できる、と言っています。まさかと思われる方は、『魏志倭人伝の謎を解く』（中公新書）をお読みください。刺史という職は、中国では地方に配置されるものであって、首都圏にはない。首都圏に置かれるのは司隷校尉という職だから、というのです。強力なアンチ九州説です。まあ、東京の方ですけれどもね。

邪馬台国はどこにあったのか

邪馬台国は北部九州以外の地にあるということになると、どこなのかということになります。
この辺の問題を考えるには、幾つものアプローチがありますが、２つの点を見てみようと思います。第 1 は広域連携という点です。古墳時代というのは、西日本各地、一部東日本も含めてですが、各地の最有力者である首長が遠隔地どうし、相互に政治的・経済的な連携をする仕組みをつくっています。そういう状況が弥生時代の、いつ頃、どのように始まったかということ。次に第 2 点目は、この２世紀末から３世紀前半にかけて邪馬台国の時代に、何か大きな社会変動が起きていないかを考古学的に見てみることです。

広域連携については、ここ 20 数年来の調査でちょっと面白いことが分かってきています。島根県東部の出雲地方では、四角いマウンドを持ち、その四隅が突出する四隅突出形の墳墓が造られています。そのうち最も大規模なのが、出雲市の西谷墳墓群の西谷３号墓です。この地域の最有力首長が亡くなって、墓に埋葬される際に壮大な儀礼が執行されたと思われるのですが、その際に用いられた土器が多数、墓から出てきます。その葬礼用の土器群の中に、吉備（岡山県南部）や丹後、北陸南部の土器があるのです。吉備地域の最有力者層が、自分の葬儀のときに用いる儀礼用の器物が、なぜか出雲から出てくる。同じように丹後や北陸のものも入ってくる。遠隔地の有力首長どうしが葬礼の執行に参画する状況が確認できます。こうした土器類は、最近では出雲平野の集落からも出てきます。

つまり、出雲と岡山、出雲と北近畿・丹後、出雲と北陸という遠隔地どうしが、すでに連携を始めている。これは、２世紀の後半ないし２世紀末だろうと思います。こういう広域連携が、九州でもなく、近畿でもなく、その中間地帯から始まっているのです。

それから、村の組み替え、社会編成を村から見てみようと思います。北部九州の集落遺跡として最近注目されているのが、比恵・那珂遺跡群です。博多駅の南のほうに広がる非常に広大な集落遺跡です。弥生時代早期から連綿と続く集落遺跡ですが、弥生時代の後期後半、２世紀のある段階に、村の景観がつくり替えられています。東西400～500m、南北１㎞余りの大集落ですが、その真ん中を南北に貫く道路が造られ、それに軸を合わせるように、建物や区画溝、お墓が整然と配置される。計画的な村づくりですね。奴国の中心的集落のひとつが、大規模に再編されているのです。おそらくは須玖遺跡群も同様なんだろうと推測されますが、九州の他の遺跡でもこういうことがあるのかどうか。

畿内でも、似た動きがございます。比恵・那珂遺跡群のように、それまであった村が、その同じ場所で再編成されるのではなくて、別な場所に、新たにその地域の中心となる村が設計・設営されるという動きです。奈良盆地のど真ん中に、弥生時代の始めからずっと続いてきた唐古・鍵遺跡という村が、弥生時代の終わり、２世紀末～３世紀初めかと思いますが、このころ急速にしぼんでいます。ところが、ちょうどそれと歩調を合わせるかのように、奈良盆地の東の山へり２カ所に新たに計画的な村が出現します。桜井市の纒向遺跡と、天理市の布留遺跡です。ともに、扇状地という、水田をつくるのには不向きな地形の所に、突如大規模なムラが出現するのです。

その１つは纒向遺跡で、直径１㎞ほどの規模の村として造営されています。中央部の発掘調査で、大型の建物が東西に３棟、軸をそろえて配置され、それが塀で囲まれる状況が確認されました。３棟中、西側の一棟はその後の調査で抹消されましたが、この村の中心施設と思われる宗教センター的な機能を持つというふうに考える人もいれば、背伸びして卑弥呼の館だと言う方もいらっしゃいます。卑弥呼の館というのは言いすぎでしょうが、ともかく近畿地方ではそれまで見なかった施設があることは確かです。

そして、この纒向遺跡の一帯および周囲には、このあと陸続と前方後円形をした墳墓や前方後円墳がつくられ続けます。

その代表例が、纒向石塚やホケノ山「古墳」です。「古墳」とかぎ括弧付きで表記したのは、古墳と言うべきか否かまだ議論があって決着を見ていないからです。しかし、特定の人物が、全長100m近い、とてつもなく巨大な墳丘を持つお墓を造り、そして中国に由来する銅鏡を多数保有し、そして、前方後円墳という一定の形式を採るようになります。

つまり、２世紀末に纒向という巨大な村が新たに設計され、そして、その有力者たちが前方後円形の新しい墳墓形式を造り、そして、このあと箸墓という全長280mもの巨大な、誰もが古墳と呼ぶような巨大な前方後円墳ができ、そして、それに続く巨大な100mを優に超える古墳が陸続と造営される、大和古墳群が形成されます。この一連の過程が重要です。ここが、邪馬台国かどうかはさておき、畿内を中心とする古墳時代のような社会が、この一連の過程の中で出来上がっていることは、確かなことです。

このようにお話ししますと、石川は邪馬台国畿内説だと、理解されてしまいそうです。僕は畿内の可能性もある、でもまだそこまで絞り込めていない状況にあるという考えです。かつては、僕は、古墳出現期の畿内の土器型式である庄内式土器の形成過程を考えた時、兵庫県西部の播磨も、もう少し重視していいんじゃないか、とも考えました。でも、皆さん方から見れば、石川は畿内説だということになるかもしれません（笑）。

ただし、私は、邪馬台国がどこにあるかという議論はとても重要で、魅力的なんですが、それ以前にやることがあると強調したいと思います。倭国内、この時期は倭国なのです。九州を含めて、西日本一帯の各地域が２～３世紀まで、邪馬台国の時代まで、どのように推移してきたか、発展してきたか。そして、どの地域とどの地域が、いつ連携、手を組み、強化していったかということを描くことが大事だと。そこから自然に、倭国の中枢、邪馬台国というものが見えてくるはずです。

最後にもう一言。邪馬台国が、女王国が、たとえ万が一、畿内であったとしても、九州は大陸の門戸として重要な位置にあり、これは変わることがありません。それは、古代までの道筋を見れば、鮮やかなことであるかと思います。

以上で、私の講演を終わります。ありがとうございました。

基調講演

青銅器を帯びた ムナカタの弥生人

愛媛大学ミュージアム准教授　吉田 広

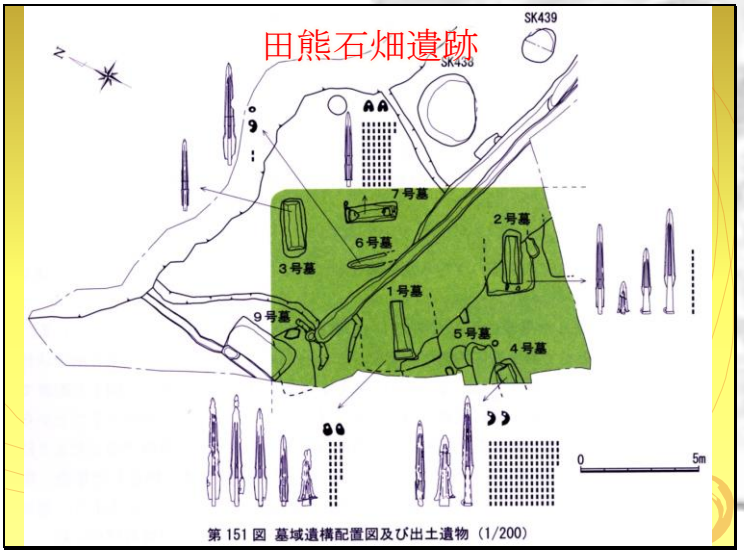
皆さん、こんにちは。吉田でございます。愛媛松山からまいりました。邪馬台国に統属されたという30国、恐らく、その女王に属していた国の一つから来たと思っております。

ということで、私の旗幟は、ある程度、最初に鮮明になったかと思いますが、私に与えられた課題は、その前段、このムナカタの地の田熊石畑遺跡で大量に見つかりました青銅器についてです。こういった青銅器を持った人たちがどういう役割を果たしていたのか。そういうことを今日はお話をさせていただきたいと思います。

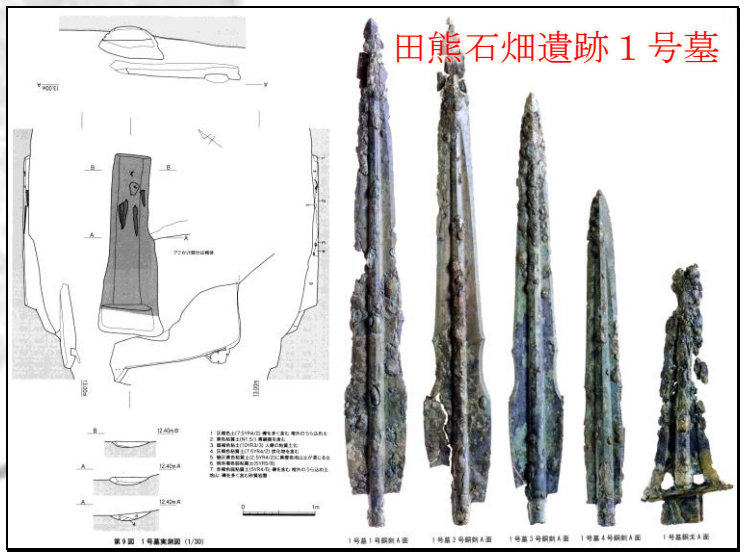
もう少し、前段の話をさせていただきますと、私は今愛媛に居ながらこういった青銅器の研究をしております。学生時代は京都におりまして、京都から九州にやってきて、いろいろ青銅器を見せてもらいながら、やはり、石川先生と同じようなことを言われていました。「なんで、そんな遠い所におって、こっちの青銅器をやるのか」と。でも、青銅器をやっていますと、愛媛の方でも青銅器はありまして、特に銅剣なんていうのは、実は東の方が多い。邪馬台国の前段、弥生時代の中期後半ぐらいには、九州では銅剣は、もうほとんどなくなっていくのですけれども、瀬戸内で増えてまいります。後で出てきますけれども、私が調査しています文京遺跡は、恐らく平形銅剣を作り出して、奉じて、一つの国のまとまりを作り上げたような地域社会の中心だったんだろうと思います。

最初に入ってきたところではないんだけれども、九州から、技術だけでなく恐らく工人も移動してきて、独自の青銅器を作り上げた周辺地域、そこから青銅器文化を見ていると、いろいろな形で見えてくることがある、そういう思いで、ずっと研究をしてまいりました。今日の大きな視点として、ムナカタを考えるとき、私がおります東の方の地域というのを、しっかり見ていかなければならないのではないかと思います。

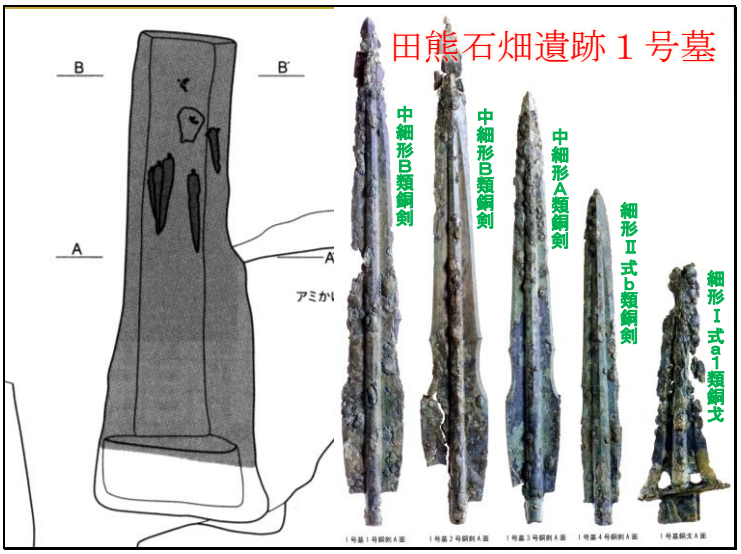
それでは、白木さんの報告にもあったのですけれども、あらためて田熊の武器形青銅器を見ていきたいと思います。



石川先生も使われていましたが、区画墓の中に青銅器をたくさん保有した墳墓が集まっている。これが田熊石畑の大きな特徴ですし、15本という数は、恐らく北部九州においても最大規模、吉武高木や吉武大石をまとめた、吉武遺跡群の武器形青銅器にも引けを取らない数です。お墓は、さらに西の方にも広がっていますから、20本を超えるような青銅器を保有した可能性も十分あろうかと思います。個々の出方というものを確認していきたいと思います。

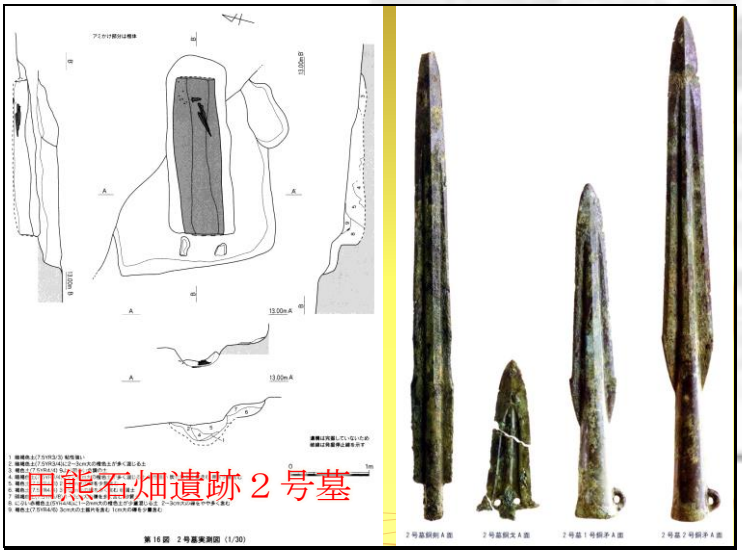


まず１号墓からですけれども、５本青銅器が出ております。



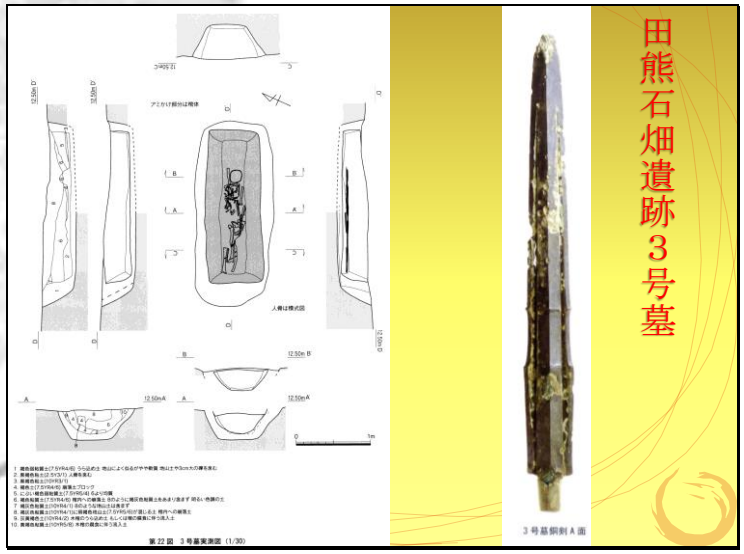
少しアップにして、どういう出方をしているか見ていきましょう。なお、私たちは、細かくどういう形態かということで時期を確定していきますので、型式名を書いています。

まず、細形銅剣という、古い段階の、こういう小型のもの。それが少し長くなり、中くらいに大きくなりだしたということで、中細形という言い方をしていて、その中でも、長さに差があるうち、Ａ類とＢ類がここにはあります、というのが大きな特徴になっています。そして、銅戈がありますよと。遺体に副えられたとき、どういう配置をしているか、後ほど詳しく比較していきますが、ここでは、恐らくこの辺りが頭部で、両脇に銅剣が下に切っ先を向け、銅戈も下に切っ先を向けて、副葬されています。

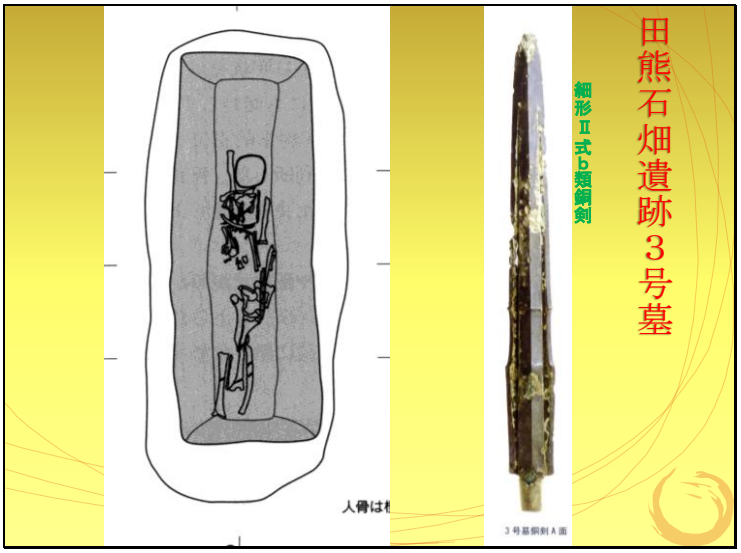


２号墓です。

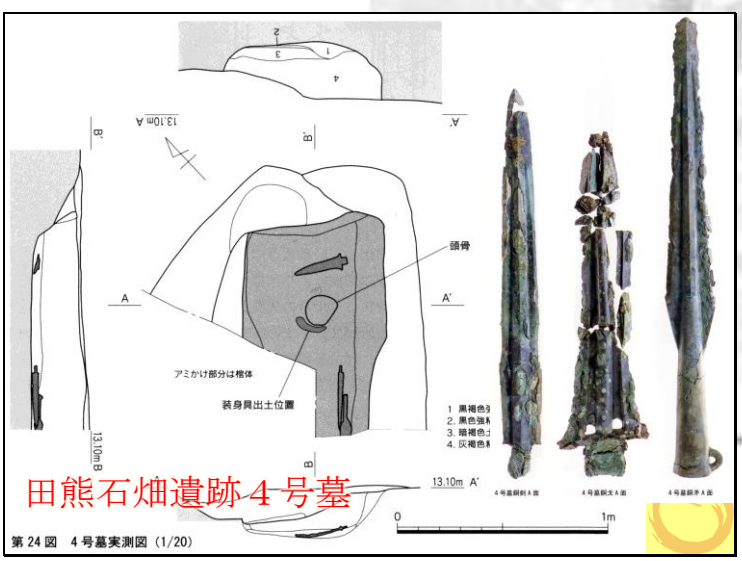
アップにすると、ここでも銅剣があり、それに、銅戈と銅矛です。細形銅剣１本、細形銅戈１本、細形銅矛の２本の組み合わせです。副葬状況はというと、銅剣と銅矛がこう、やはり脇に副えられて、足元に先端を恐らく向けている。対して、横方向に銅戈があります。この銅戈、非常に小型の珍しい銅戈で、型式は細形に収まるのですけれども、これだけ小型のものというのは、私も初めて見たようなものです。



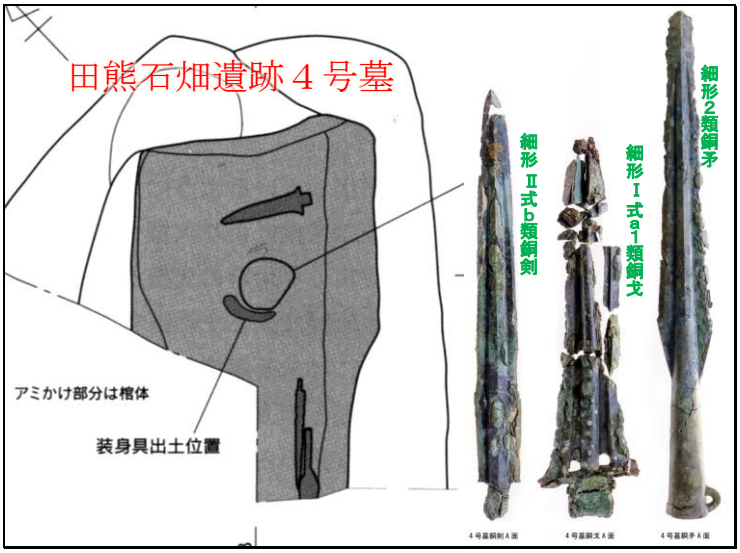
３号墓です。



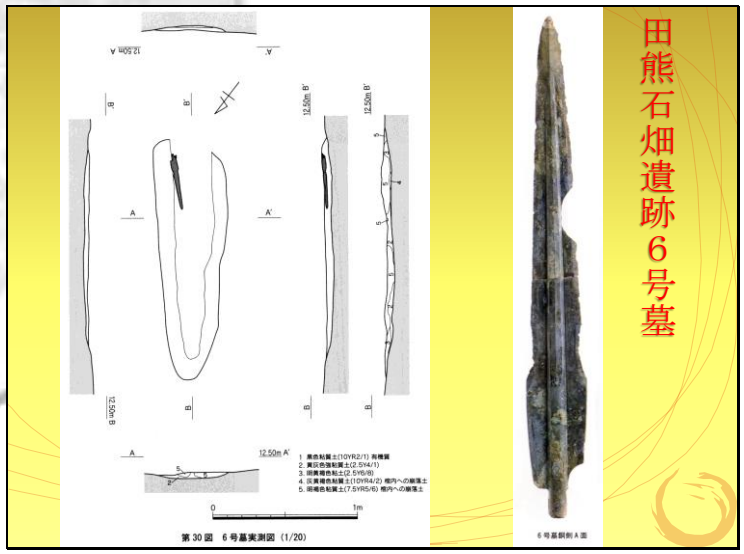
細形銅剣１本ですけれども、銅剣はこの位置になるのですかね。少し人骨の位置が動いているので、再葬ということでしたか。それでも、身の脇のほうに、やはり先端を下向きに置いているという副葬状況です。



４号墓になります。

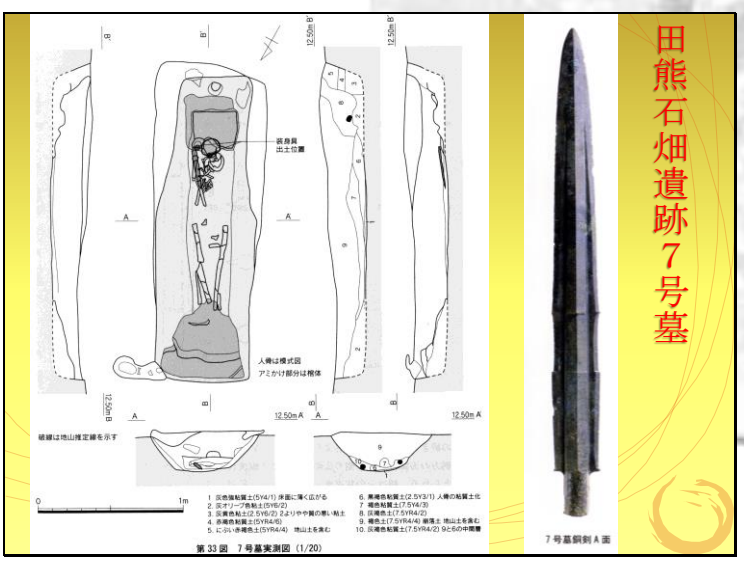


アップにしてみましたけれども、やはり銅剣、銅戈、銅矛と並んでいます。いずれも細形ですが、ここでもこの形が見えるように装身具がありますから、頭がこの位置になります。すると、頭の上に銅戈があって、切っ先を下に向けて銅剣と銅矛があるというような形になっています。



６号墓になりますけれども、これも銅剣です。

非常にシンプルですけれども、こっちの間口が広いので、頭がこちらになるのだろうと思います。そうすると、やはり下向き足元に切っ先を向けて、身の脇に剣を副えているという形になります。



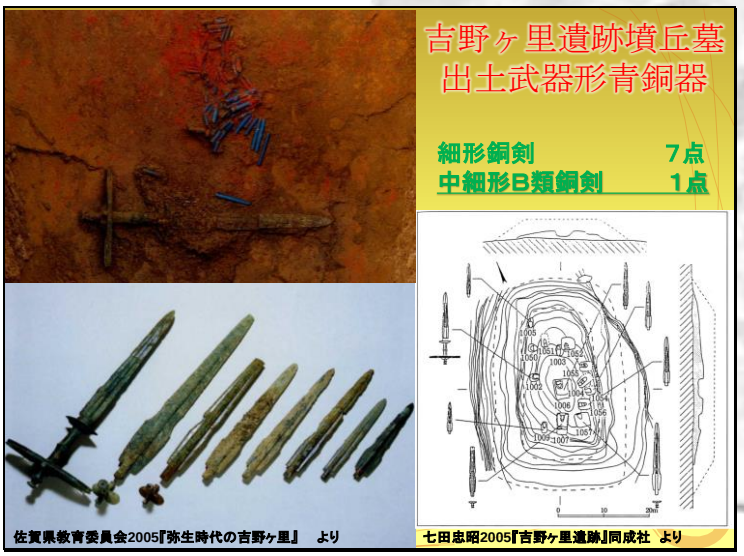
7号墓ですね。

これも少し人骨が動いていたかと思いますが、それでも装身具の位置から、少し頭に近い位置になっていますけれども、銅剣が身の脇で、切っ先を下に向けているという形になります。

一通りこう見てきてまとめてみると、こういう組み合わせになっています。細形銅剣と銅矛、銅戈、いずれも細形なのですけれども、中細形という、あまり朝鮮半島には見られない、大きくなった銅剣が、この墓群には含まれていますよ、ということが非常に特徴的です。中でも、中細形Ｂ類銅剣。これは、昔は瀬戸内地域にしかないと言われていたのですけれども、吉野ヶ里遺跡や柚比本村遺跡の調査で甕棺から出てきて、九州にもあったということが分かってきました。ここ20年くらいの成果ですが、そういうものが田熊石畑にも含まれてくるというわけです。甕棺ではないので、田熊石畑の時期をなかなか決めきれないですが、こういう組み合わせ、中細形Ｂ類銅剣を持っているお墓というのは、吉野ヶ里や柚比本村を参考にすると、やはり中期前半の武器形青銅器の組み合わせということで考えて良いだろうと思います。

そして、銅剣というのは基本的に、身の脇に、下向きに副葬されていた。でも銅戈だけは違ったなというのが、何となく分かっていただけたのではないかと思います。その辺りは少し後段でお話させていただこうかと思います。

さて、このような田熊石畑は、中期の前半くらいに、15本もの青銅器を持つに至ったお墓だということになるわけです。残念ながら、これが最古ではなく、それに続いて、そういったお墓が広がっていく段階のものということです。同様の時期の資料として、吉野ヶ里とか柚比本村について、見てみたいと思います。

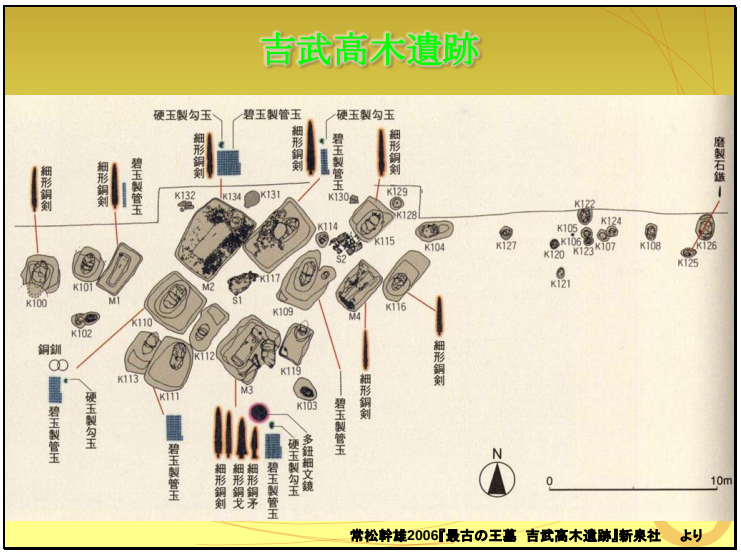


有名な吉野ヶ里ですね。後ほど、高島先生からいろいろお話があると思います。吉野ヶ里で出てきている、有名な有柄銅剣、柄も青銅で、一鋳で作った銅剣です。一見長いのですけれども、銅剣自体は大きくありません。銅剣自体が大きくなったものが、墳丘墓の中から１本出ております。汲田式を中心とした甕棺に伴って、細形銅剣７点と中細形Ｂ類銅剣１点が出ているわけです。

柚比本村遺跡でも同じように、ここでは中細形Ｂ類銅剣が４点も出ております。むしろ、こちらのほうが多いのです。細形銅剣は３点。銅矛も上半のみが１点出ております。特に有名なのは、玉の素材を漆で埋め込んで、それを研ぎ出して飾りにした鞘に納めた状態で甕棺に副葬されたもので、これは細形銅剣でした。

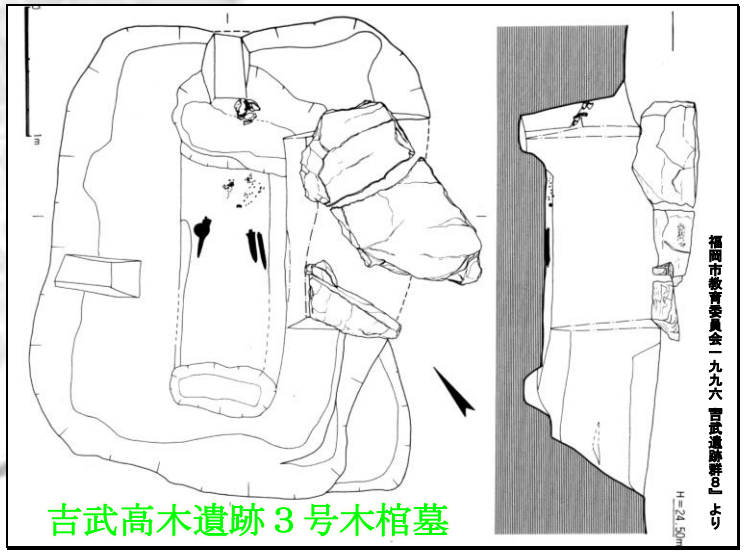
こういった中細形Ｂ類を含んだ吉野ヶ里や柚比本村は中期前半ですから、田熊の青銅器もほぼ同時期とみてよかろうと思います。

それで、中細形の銅剣は含まないのですけれども、唐津の宇木汲田遺跡になります。ここは、汲田式という甕棺のタイプサイトでもありますが、細形銅剣、銅矛、銅戈のセットからなります。唐津ではこういった遺跡に、青銅器を多数保有するものが集まってきています。唐津、鳥栖、吉野ヶ里と、先ほど石川先生のお話の、伊都とか奴にはなくて、その周辺に多くの青銅器を持つ墳墓が現れてくる。そういう中で、田熊は東の位置を占めるという形になります。

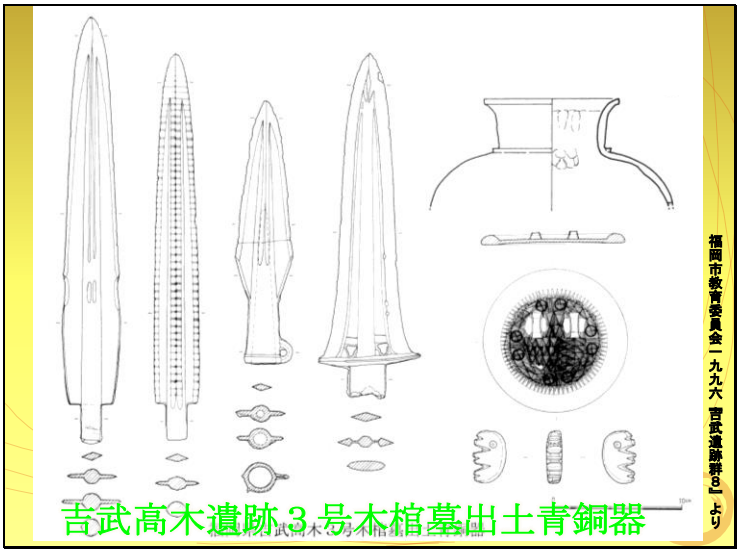


よく、前期末・中期初頭という言い方をするのですけれども、１度まとめる機会があり、九州で前期末にさかのぼるという金海式の甕棺は、中期初頭に位置付けたほうがいいだろうということで、こういった青銅器を副葬するお墓が現れてくるのは中期初頭。最近の年代観では、紀元前の３世紀あるいは４世紀に上がってもいいのかなと、思っております。そういう時期から、青銅器の副葬が始まっています。その最初にまとまって出てくるのが、有名な、福岡市早良区の吉武の墳墓群になります。

とりわけ著名な、私なんかもよく使わせてもらっているのが、「吉武高木３号木棺墓」というものになります。ここでもやはり、複数本が集中するということで、写真には１点しか出ていませんけれども、銅剣が２点あります。そして、銅戈、銅矛というセットが、木棺の中に副葬されている状況になります。

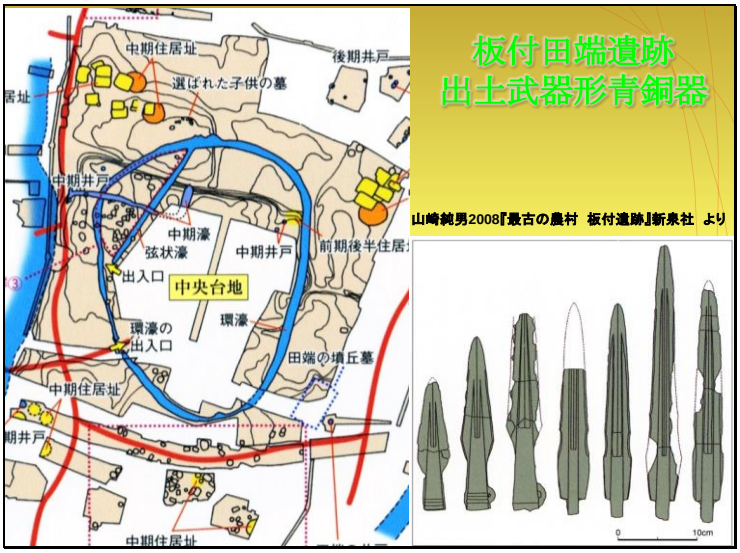


図面でこうありました。小口に板を打ち込んで、その中に木棺を組んでいます。ここに頭飾りがありますから、やはり被葬者の両脇に武器が副えられ、鏡も持っています。武器は、やはり全部、下に切っ先が向いています。その中に銅戈もあります。先ほどと少し違いが見えてきていますよね。



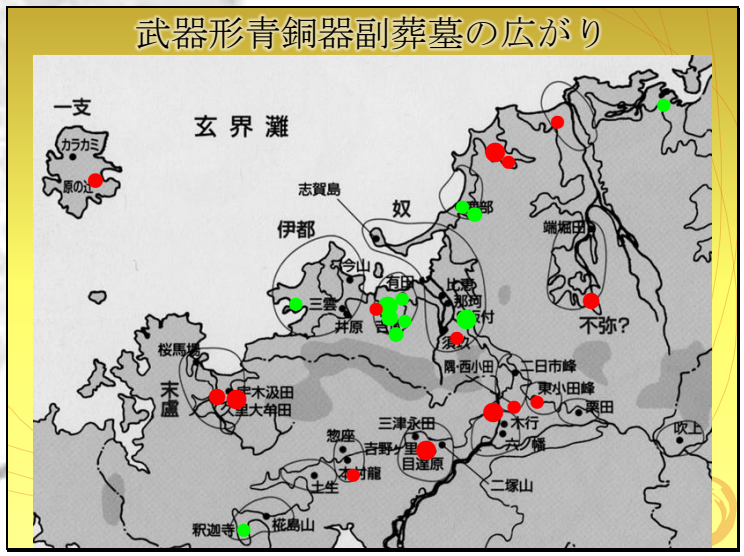
このセット。こういう銅剣の、銅矛、銅戈のセットであります。

ほかに吉武では大石遺跡でも、同じような、中期の初めにさかのぼるような青銅器、ちょっと田熊より古いものが集まっています。



そして、もう１つ古いものとして挙げられるのが、有名な板付遺跡の環濠がありますけれども、これが調査されるより昔に、中山平次郎先生によって、古い武器形青銅器のセット、そして甕棺の破片なんかが拾われて、武器形青銅器を副葬するお墓が存在したようです。後に復元され、この南東の隅一角に、どうも墳丘墓があったらしい。吉武なんかと変わらないセットを持っているのではないかなと言えるかと思います。

こういったものが、田熊より少しさかのぼって、古い青銅器の副葬を持っている墳墓という形になります。



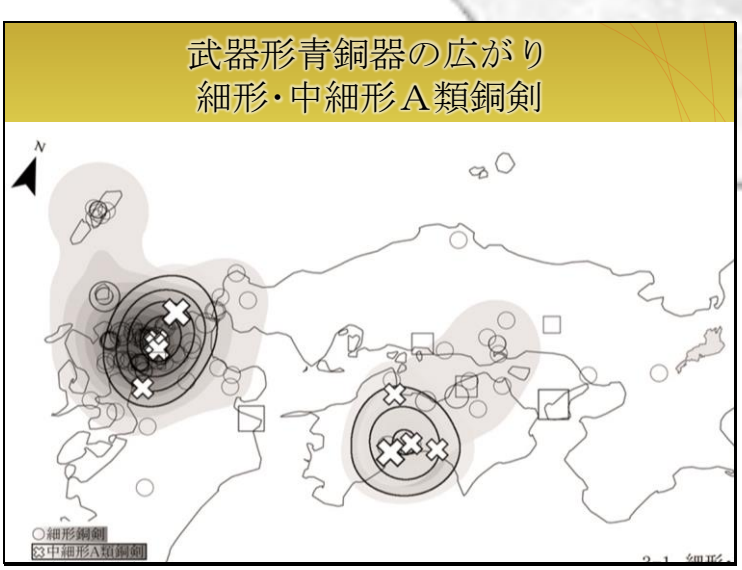
それをドットに落としてみたのが、次になります。

遺跡名のキャプションが細くなって分かりにくいのですけれども、この緑が中期の初め、前葉でも早い段階にさかのぼる、青銅器を副葬している墳墓群かなと言えるところになります。先ほどの板付田端、そして吉武高木、吉武大石、周りには他に有田とかがあります。で、最近、この早良の一番奥で岸田遺跡というような、やはり中期初めにさかのぼるものが出てきています。その他は、久米であるとか、釈迦寺、そして、あとで出てきます馬渡・東ヶ浦。そして、これも後で出てきます、小倉城下層のものも、この時期にさかのぼるだろうという形になります。

こう見てみると、中期の古いところの青銅器は、何でここ吉武の早良に集まるんだろうか。奴の中枢と伊都の中枢の間。かつては早良国が存在したのか。石川先生の中では奴国の領域に含めるんですかね。独立させることは少ないかと思うのですけれども、こういうのを見ていると、最初はここの早良で、中枢がこっち（奴国）に、あるいはこっち（伊都国）に、どうでしょうか、移動したのかなということを、私は考えてしまうのです。それほど早良に、古い段階は、集中するわけです。しかも、一番平野の奥の岸田という所まで、青銅器を持つ墳墓が見つかってきております。

次の赤は、中期の前半、前葉といったものをドットで落としております。ちょっと正確ではないところもあるかも分からないのですけれども、田熊、朝町竹重のようなものです。先ほどの宇木汲田、久里大牟田、吉野ヶ里、柚比本村。そのほか周辺にいろいろあるというような形です。この時期でも奴国では、汲田式甕棺の細形の青銅器の副葬って少ないですね。須玖でも２、３点くらい。早良では吉武樋渡くらいになります。こういった範囲に広がっていく中で、田熊というのは、東に向いて広がった一大拠点を形成しているというのが分かるかと思います。中期の前半になって、武器形青銅器の副葬が広がっていく。ここが、まず東の拠点だということになりますね。

では、ただ単に数だけで、この辺からこちらに広がったのか、独自性はないのかということなのですけれども、そうじゃないですよと。いやいや、こちらのほうはまだこちらの独自性がありますと。本当は、私はもっと向こうのほうの、東のほうの独自性を言いたいのですけれども、まずは、今日はここムナカタの独自性の強調をさせていただこうと思います。

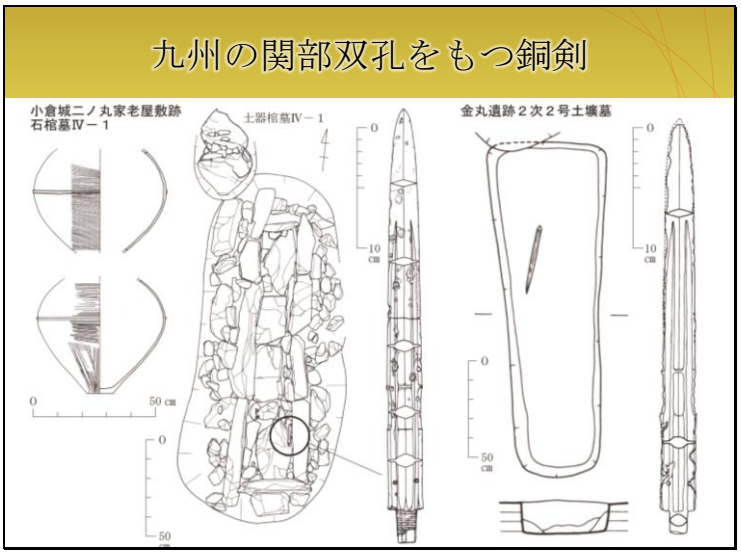


この段階、九州が圧倒的に多いのですけれども、私がいます瀬戸内のほうにも、実はぽつぽつと細形銅剣が出てきます。瀬戸内のほうで特徴的なことがあるのですけれども、最近、東への広がりを考える上で注目されるものが、北九州市の調査で出土しました。

報告書の中でも書かせてもらっているのですけれども、小倉城は浜堤上にあって、その家老屋敷のところを「二ノ丸家老屋敷跡遺跡」として調査しました。お城の時代ではなく、下層の砂丘に営まれた弥生時代の墳墓群の遺跡ですので、「小倉城下層」と言わせていただきます。その中に石棺墓があり、銅剣が出てきました。しかも、この石棺墓は、横の土器棺墓と切り合い関係があって、時期をかなり絞り込める、非常に貴重なものです。出てきた銅剣がこちらになります。

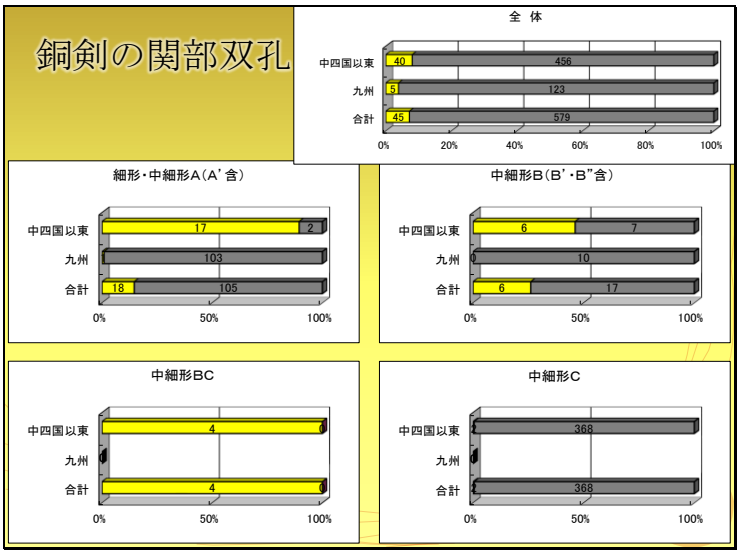
まず、こう２つに割れていますけれども、副葬のときにパキンと折って、それを２つ重ね合わせて副葬している。恐らく割りやすい、非常にスズ分の高い銅剣だったろうと思います。さらに注目したいのは末端の構造です。柄に付けるため、木の柄に付ける部分に、摩擦でしっかり付くように、紐をここでは巻いておりました。加えて、ここに孔が開いています。実はこの孔、東の瀬戸内地域に出てくる細形銅剣はたくさん開いているのです。むしろ、それが通例と言っていいほどです。

よくよく見返してみると、同じような銅剣が、遠賀川の西側、遠賀町の金丸遺跡でも１点出ておりました。報告書を見ると、こういう形で、恐らく木棺に副葬されているのです。ちょっと壊れてしまって見づらいですけれども、ここにやはり丸い孔が開いています。



図面にしてみると、こういう形です。小倉城下層では石棺墓の中に銅剣が入っている。そして、こういう土器棺に切られている。こういう土器より古いだろうということで、中期のかなり早い段階にさかのぼるということが分かるものです。そして、金丸ではこういう土坑になっていますけれども、四角く作られていますので、恐らく木棺に葬られたものです。こういった所に、こういう孔の開いた銅剣がありますよということになりました。

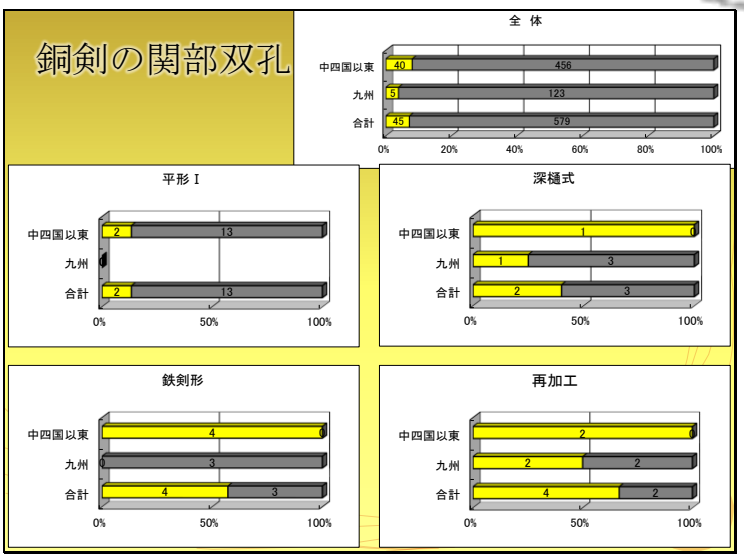
それで、孔の開いた銅剣ですが、この香川県の藤の谷の細形銅剣のように、瀬戸内に来ると、というか九州を抜けると、銅剣には孔を開けるようになります。あまねく孔を開ける。この孔がどういう機能を果たしていたのかというのが、長らく議論があったのですけれども、ひとつ回答を私なりに出してみました。



どのくらい銅剣が全体にあるかというと、500本以上、600本近くあるのかな。そのうち358本は荒神谷の銅剣です。そのうち、孔が開いているのは、せいぜい40本くらいです。１割に満たず、全体の中では非常に少ない。細形の古いところに限っていうと、中四国以東、要するに九州を出ると、20本あって18本には孔が開いていますよ。片や九州では、このデータを

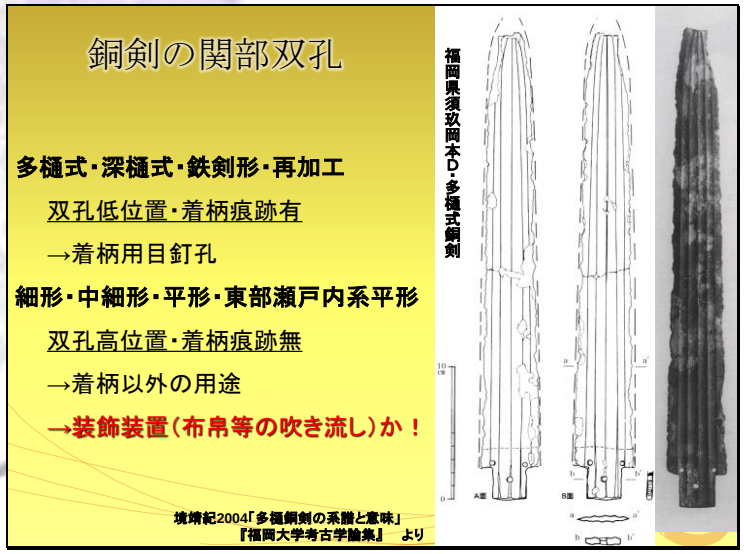
作った時114本、田熊はまだ入っていなく、２本しかない。先ほどの２本だけです。非常に例外的だと。そのあと、新しくなっても、常に、九州以外の所では、孔を開けるということが通例になってくるような状況があります。

中四国地方だけ黄色が目立っていますね。先ほど見た北部九州の２点はこの黄色の部分ですね。古いのと新しいのがありますけれど、型式によっては中四国以東では全て孔が開き、九州で全然ないというものが出てきます。九州を一歩出ると、銅剣にはあそこに孔を開けるとのが通例のようなことになっています。その一番西の端、西限というのが、遠賀町あるいは小倉城下層になっているという形です。



次の新しい段階ですけれども、やはり傾向は変わりません。

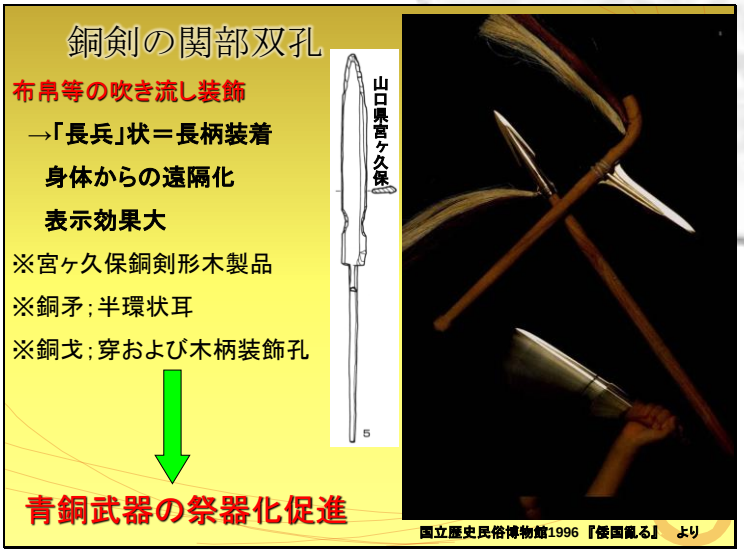
それでは、この孔は何に使ったのかということなのですけれども、グラフを作って、孔の高さの位置をいろいろ分析してみました。こちらが高くなればなるほど、一番末端、私たちは「関」と書いて「まち」と読む、刃の下端の部分になりますけれども、そこからどのくらい高い位置にあるかということを、ここの値との比率を折れ線で、絶対値を棒グラフで表しています。非常に高い位置に孔があるということが分かります。一方で、極端に低い位置にあるものがあります。どうも、２種類ある。で、短い細形でも、やはり高い位置にあって、細形より低い位置にあるものが特徴的です。



こんなふうに低い位置にあるんですね。これは、須玖岡本で中期後半の多樋式銅剣といわれるものですけれども、非常に低い位置にあります。そして、分析された詳細を見てみると、ここまで柄が、木で覆っていた痕跡があります。つまり、この孔というのは、ここまで木の柄が入って、目釘孔に使っていたということが明らかです。つまり、こういう低い位置のものというのは、目釘孔として使ったのだろうということになります。

つまり、こういう低い位置にあるもの。こういったものは、目釘孔として使ったものだろう。では、こちらはどうなのか。目釘孔として使うより、どんどん高い位置に上がってきています。ここまで覆うことはあるのですけれども、基本的に銅剣というのは、ここまでしか柄に入れません。古い細形の武器形の銅剣は、ここまでしか柄に入れません。吉野ヶ里の有

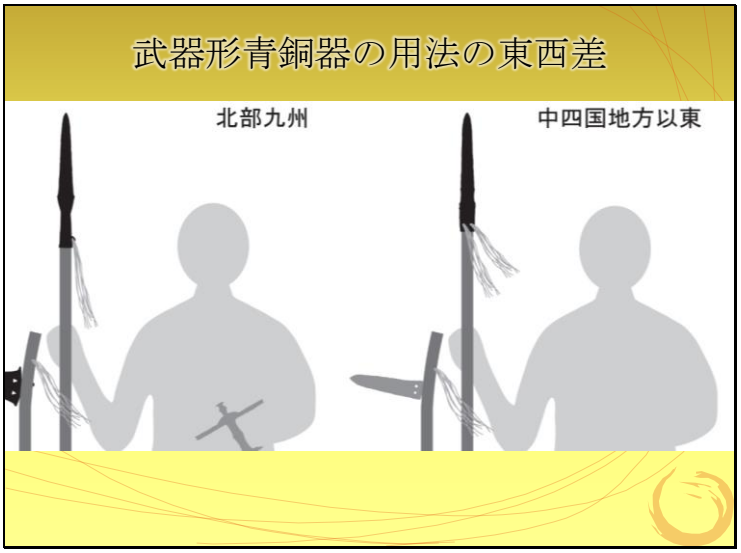
柄の銅剣を見てみても、ここから下が柄に納まっています。すると、柄に付けるためには関係ない孔だということが分かります。



それで、どう考えたかというと、低い位置のものは、柄に付けるための孔だと。高い位置というのは、どうもそうではない、柄に付ける以外の用途。装飾の装置ではないのか。布帛なんかのような吹き流しを、そこに付けたのではないかなというふうに、私は考えたところになります。

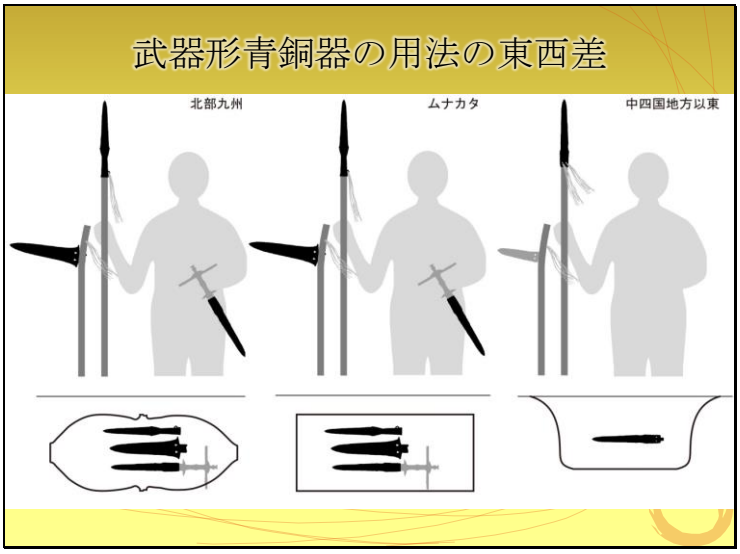
ちょうどそういうふうに、長い柄の先に付けた、木製で真似たものが、山口で出てきています。本来、銅剣というのはここにあるのです。柄に付けています。それを、もっと長い柄の先、ちょうど銅矛のような形で、代わりに銅剣を長い柄の先に付けて、なびかせていく。そういう使い方を、ムナカタより東にいけば、し始めている。九州を東に出てしまうと、もうそういう使い方ばかりになりますよということになります。そういったものが、その後、ずっと大型化してお祭りの道具になっていく、その契機になっているのではないかと考えています。

それを模式的に書いたのが、こんな図になります。ちょうど最近書いた論文の中で使っていたものですけれども、次の図のほうがいいかな。



九州では、銅矛を長柄の先に付けて、こう吹き流しを付けるのですが、銅戈も吹き流しを付けますよ。でも、一歩東に出ると、銅矛はもう数が少ないので、なかなか中四国の人は分けてもらえません。破片しか来ません。銅剣が、唯一数が多いので来るのですけれども、その銅剣を長柄に付けたのではないか。どうも、中四国へ行くと、銅戈もほとんど来ません。代わりに木製の戈を付けたのかなという形になります。

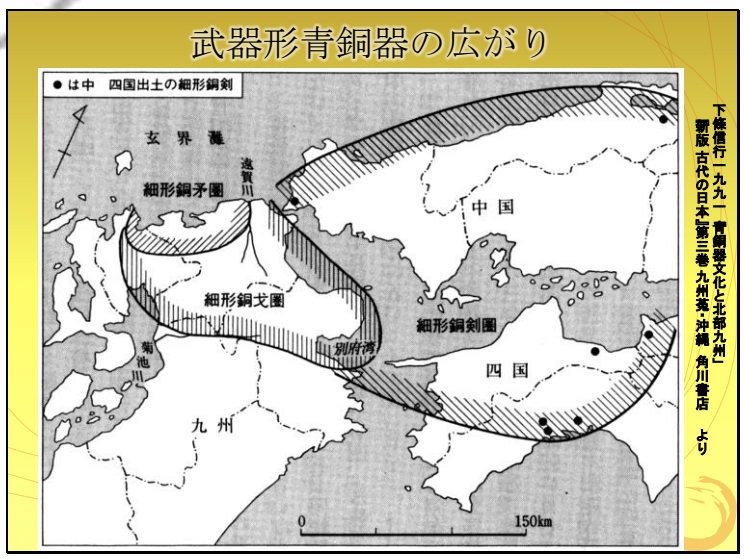
そして、同時に、九州では甕棺の中に副葬品として納めるんですよと。甕棺を示しています。ところが、中四国にいくと埋めてしまう。埋納ということを、この当時からやり始めています。こういうふうに、九州と中四国以東で、扱いに大きな違いがある。その線引きというのが、どうもムナカタと遠賀町、あるいは小倉城下層の辺りにある。少なくとも、ムナカタというのはこっちの範疇に入ってくるのだろうということが、一つ分かります。



ただ、ムナカタの場合は甕棺ではなくて、四角い木棺に入りますよ。使い方は同じなんだけれども、やはり埋葬のし方が違いますよ。甕棺ではなくて、木棺を採用していることが、やはり１つ大きな特徴だろうかと思います。論文を書いてから、今日発表するまでに、急き

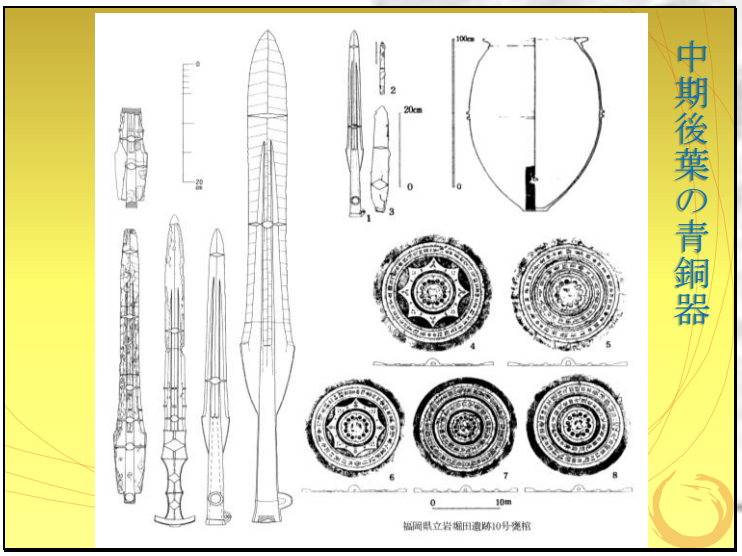
ょ、この間に１つ入れ直しました。こういう、より東との違いの間に、ムナカタのものが１つ入ってきます。これが、ここまでの一つの結論になります。

では、それだけなのかというと、実は、まだ本当の、私の結論ではありません。これからまた変わります。

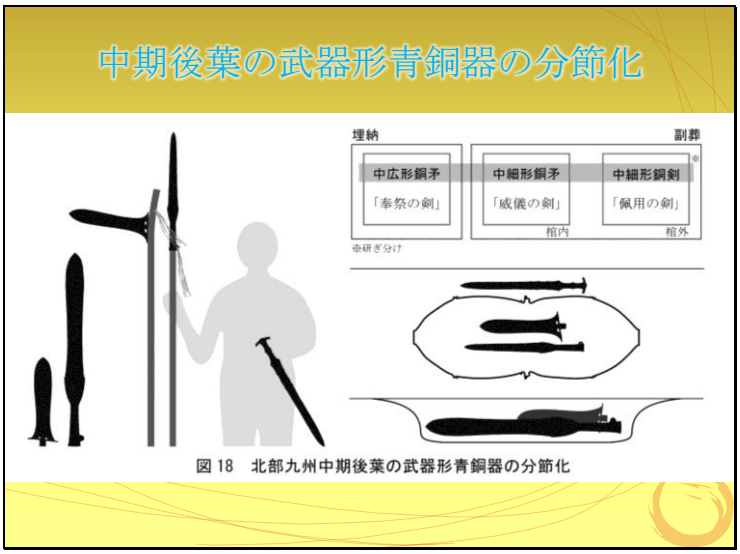


下條信行「九九」「青銅器文化と北部九州」
『新版 古代の日本』第三巻 九州・沖縄 角川書店 より

九州のここにしか細形銅矛はなくて、銅戈はもう少し広がる。で、銅剣がさらに広がる。やはりいいものは自分の所だけで取る。たくさんあって、外部へも供給できるものは、その分価値が低い。稀少なものは自分の所で抱え込んでいる。銅矛をトップに扱う世界というのは、この玄界灘沿岸、響灘沿岸も含めた、この北部九州の沿岸地域で形成されるのだと。そういうことを強くおっしゃっております。そういった中で、銅矛中心の世界というのがこのムナカタにもあったのかというと、どうもそうではないのではないかというのを、この田熊の調査を見ていると考えさせられます。



特に銅矛中心になってくる中期の後半くらいになると、これは立岩堀田の甕棺に伴ってくるものですけれども、やはり、王様のお墓の中に入ってくるのは、中細形の銅矛です。この前漢鏡とともに王様の墓といわれている中に副葬される、死者に副えるのは、この銅矛です。銅剣も一緒に副葬されることがあるのですけれども、例えば、こちらの真ん中の銅剣は、三雲南小路のものです。これは甕棺の外に副葬されています。代わって、銅矛、銅剣の中に研ぎ分けを施すようなものがあって、こういう中広形の銅矛は、中期の末にはさかのぼって登場してきているんだろうと思っています。銅矛を副葬あるいは埋納するような、特に美しく研ぎ分けられた銅矛を中心とした世界というのが、北部九州の中枢といわれる地域では、中期の後半にはできあがっている。対して、そういうものとは違う世界が、東側には展開したのではないかと思います。

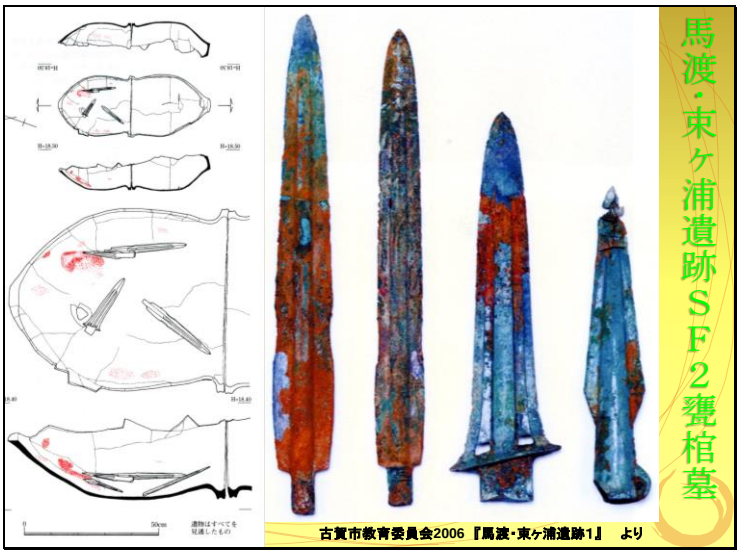


それを模式的に表したのが、こちらの図になります。九州の奴国や伊都国では、やはり銅矛を掲げる、銅戈を掲げる。そして、やはり長い剣を腰に帯びる。でも、副葬されるときには、戈も中に入ることはあるのですけれども、やはり矛で、剣なんかは外に置かれる。同時に、中広形の銅矛も持っているのでしょう、同じ研ぎ分けを共有していますので。副葬用のもの、埋納用のものというのが使い分けられるシステム、私は「分節化」というような言い方をしていますけれども、いろいろな青銅器を使い分けているわけです。うらやましいですね。瀬戸内から見ていると、九州はいろいろな青銅器があります。最後に石川先生もおっしゃっていましたように、大陸の門戸ですから、いろいろなものを入手できているのです。で、独自に作り変えている。中国・四国のほうへは、一品ぐらいしか来ません。九州では、いろいろなものを使い分けるシステムというのが非常に体系化されてくる。それが中期の終わりごろ、奴国、伊都国というものが大きくなってくるときに、そういうシステムを作っていくのだろうと思われます。

そういうシステムとはちょっと別の考え方が、そのシステムの前に、どうもこのムナカタの地域にあったのではないかと思うのが、これからのお話になります。

先ほど、細かく見てきました田熊の青銅器の副葬状況になります。銅剣と銅矛は、全て切っ先を下に向けています。その中で、銅戈だけがこういう位置にあります。銅戈というのは、柄に直角方向に付けるので、こういうふうに柄が本来付くんですね。柄を外したかどうか、いろいろ議論があるのですけれども、基本的に長柄が入っても、こちらの２点は納まるような形になります。で、やはり頭部に一番近い位置、これなどは頭の上にこの銅戈が置かれております。で、こちらは、銅矛と同じように下を向いていますけれども、一群を離れて、より頭の近い位置に、銅戈が下向きですけれども置かれています。恐らくこの場合は、柄が外されていたのではないかと思われますけれども、やはり被葬者の大事な所の一番近くに銅戈が置かれるというような選択が、田熊の中では見ることができます。

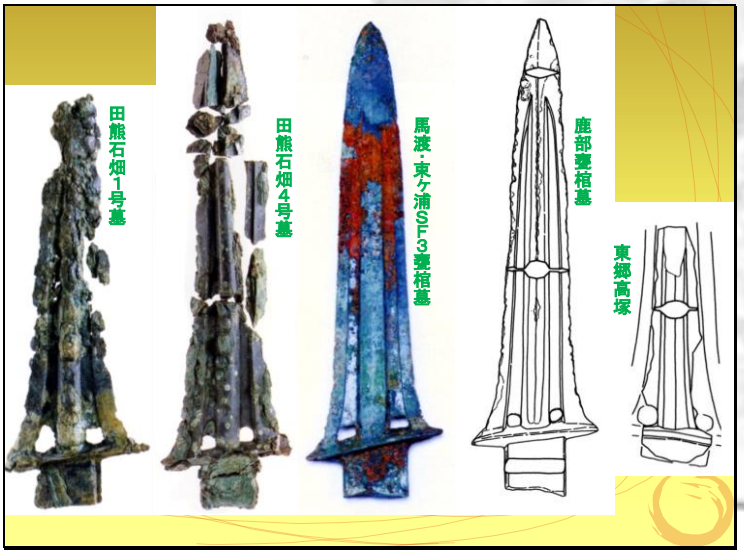
そういう形で少し見ていくと、これは朝町竹重です。やはり、銅矛の破片もあるのですけれども、頭部に近い位置に銅戈が置かれています。



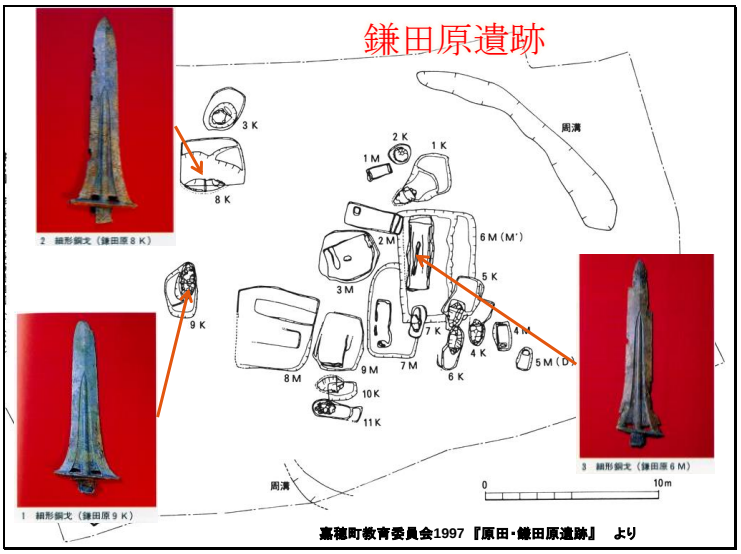
そして、馬渡・東ヶ浦、地元の名称をうまく言えませんけれども、これは甕棺の中でばらばらになっていて図面ではなかなか読み取りにくいのですけれども、報告書の記載を読みますと、赤色顔料もここにある程度まとまって、頭部に一番近接した位置にやはり銅戈があるということです。

写真ではこちらです。ばらばらと散ったようですけれども、頭部に一番近い真ん中に銅戈が置かれています。

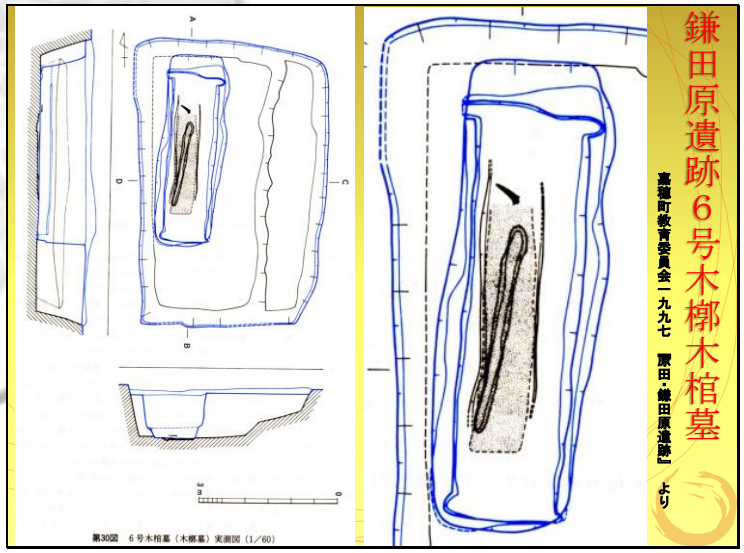
報告書では、こういうイラストが描かれていました。銅矛は上向きですね。銅剣が下向きになっていて、銅戈が頭に近くに位置しています。ムナカタのもう少し西、古賀地域で、銅戈が頭に近い位置に副えられるということがありそうです。



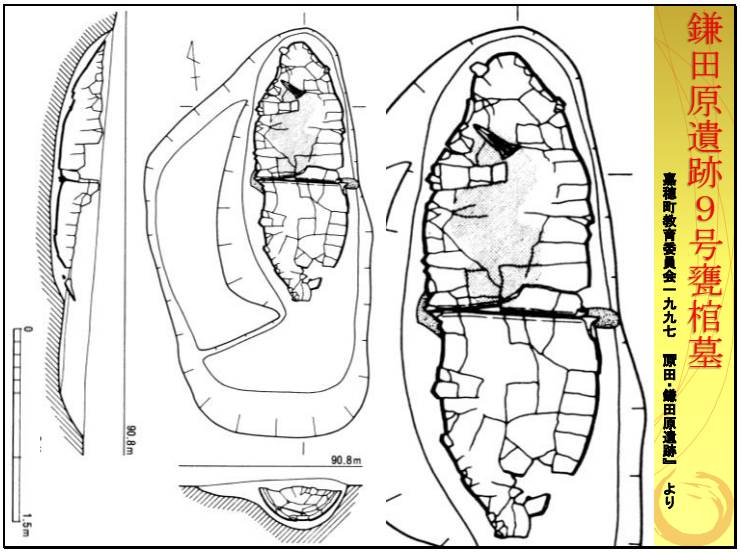
この馬渡・東ヶ浦の銅戈ですけれども、田熊の１号銅戈、４号銅戈と、実は非常に形態的に似ています。同一型式に分類できるでしょうか。同じものは、鹿部の皇后峰の甕棺から出たものも、そして、恐らく、東郷高塚のものも同じ型式になるかと思います。他の地域にもあるのですけれども、古賀からムナカタの地域にまとまり、ここではこの銅戈が卓越する、強い志向でこういった銅戈を選択しているということが窺えます。しかも、頭の近くにそれを副葬するのです。



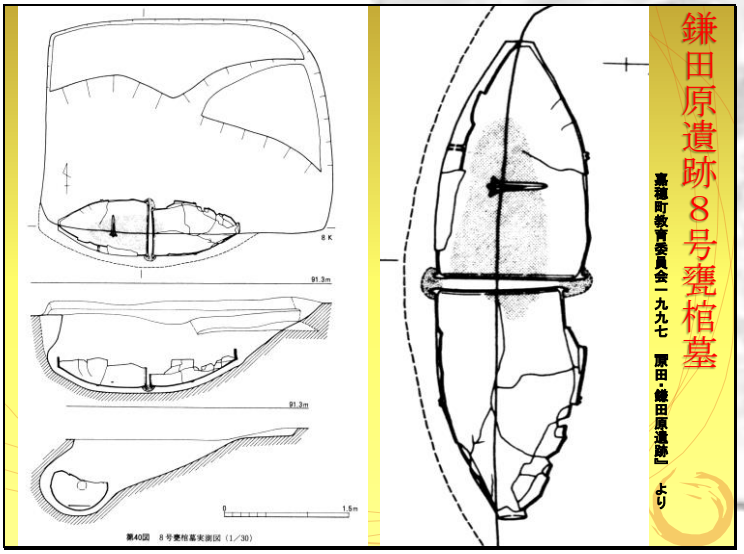
その伝統は、少し時期は下って、嘉穂の奥のほうで見ることができます。旧嘉穂町、今はどこになるのですかね、鎌田原遺跡です。ここも区画墓になるのですけれども、副葬されているものは、いずれも銅戈になります。



こちらは「６号木槨木棺墓」といわれる、二重の棺桶になるものです。やはり同じように、銅戈を頭部の位置に、横方向に向けて置いています。



甕棺に副葬されている場合も、同じように頭部の所に、銅戈が見てとれます。

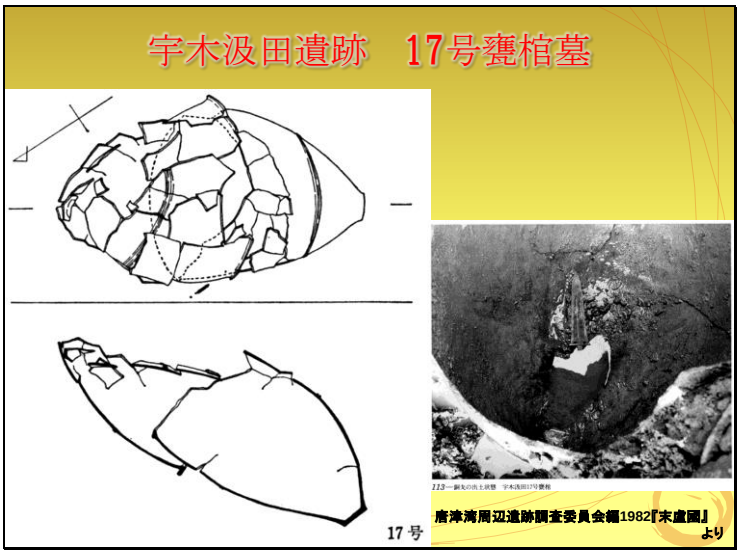


こちらの甕棺でも同じように、頭部に当たる朱の濃い部分の高い方に銅戈が位置しております。

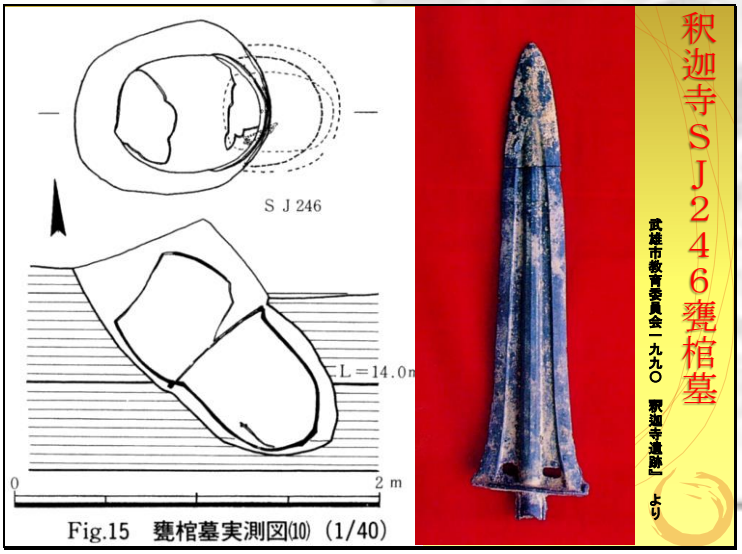
こういう、合う例ばかり挙げてきたので、では、西の地域はどうかということで、少しそちらの地域の銅戈の副葬状況を見てみます。

先ほどの吉武高木３号木棺墓ですけれども、銅戈は、銅剣、銅矛と一列になっていて、明らかに柄から外されています。

今回いろいろ集めていて面白かったのは、この写真です。『末盧国』という報告書の中でカラー写真があり、銅戈の扱いが非常によく分かる例です。甕棺の上甕と下甕を合わせた、その合わせ目の中に、銅戈が入っておりました。宇木汲田の58号甕棺です。厳密な意味での棺内副葬でなく、かといって棺の外でもない、中間のような位置に、銅戈が副葬されている事例になります。少なくとも、頭部付近、被葬者に近い位置ではないですね。

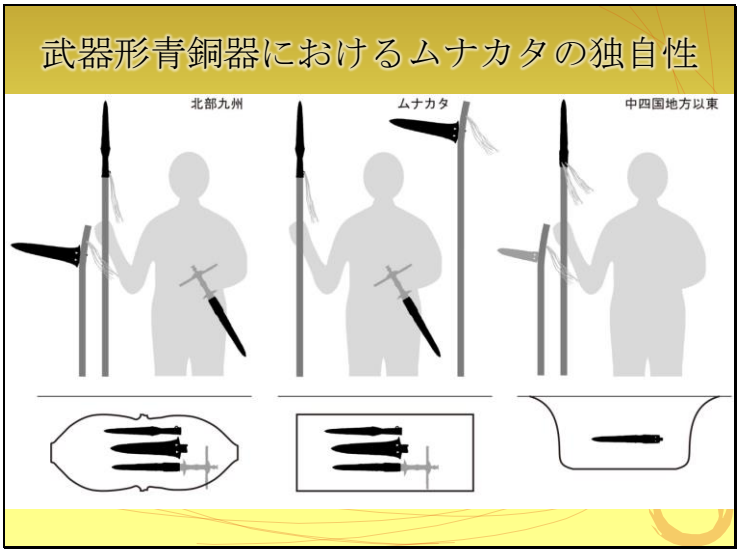


こちらは、宇木汲田の17号甕棺ですけれども、これは下の甕のほうに落ち込んでいる形で出土をしております。



こちらは、武雄の釈迦寺ですけれども、これもやはり下に落ち込んだ位置になります。中期の古い段階の甕棺形態で、細形銅戈を副葬しています。かなり斜めになっていますので、ずり落ちたとも言えなくもないのですけれども、明らかに珍重されて頭のすぐ横に置かれたということを、積極的に言える形ではありません。

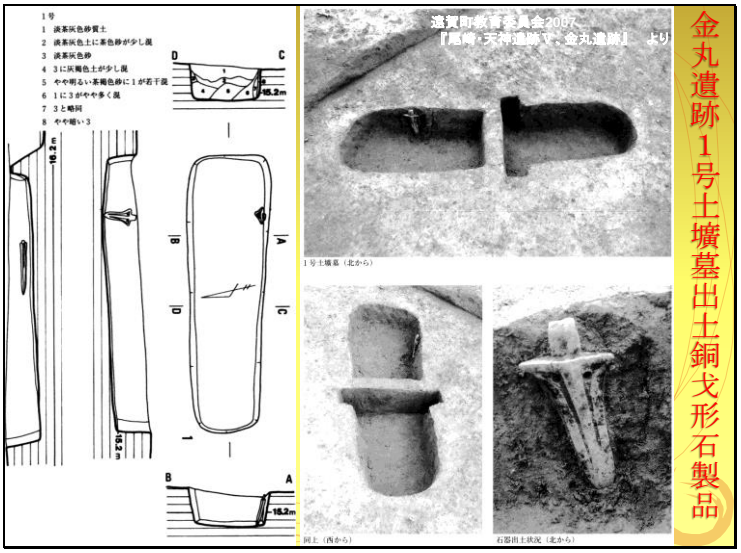
こういうことを見ていきますと、先ほどのムナカタの特徴的なあり方の図を、もう１度改変しなくてはなりません。



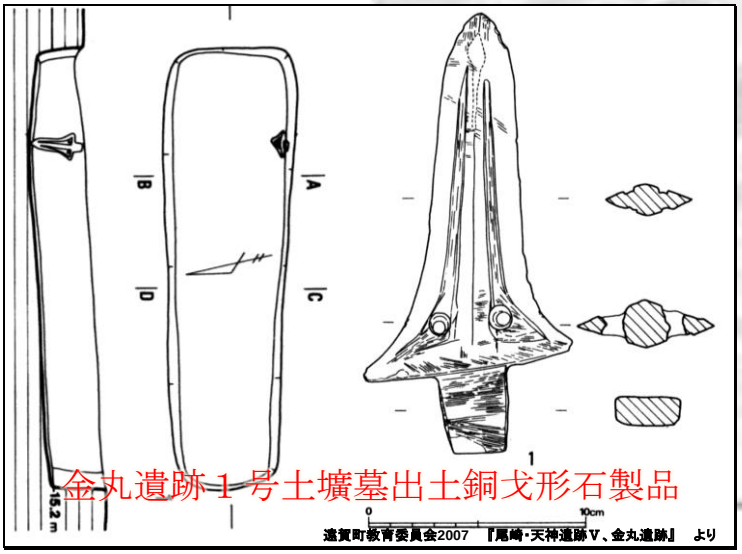
結論的には、まず木棺になりますよ。と同時に、銅矛はちょっと位置を下げようかとも思いましたがそのままで、銅戈をこちらに持ってきて、頭の横まで上げてみました。恐らく銅剣もこういうふうに帯びているのだろうと思いますが、銅戈というのをより高く位置づける、そういう青銅器の価値観というのを、この田熊石畑のムナカタを中心に、古賀、あるいは嘉穂なんかに広がっているのではないかと思います。

こういった銅戈を重視する世界というのが、中期の早い段階には、このムナカタを中心に、福岡でも東の地域には広がっている。甕棺を使わない地域とも重なって、こういう価値観が創出されていると言えるかと思います。さらに東へ行くと、もうこういうものもなくなって、また大きく変わる。この間のワンクッションとして、ムナカタの独自性というものを強く主張できるのだろうと思います。

こういった人たちは、中四国以東の人たちに青銅器を伝えていく、そういう役割を果たしていたのではないでしょうか。北部九州圏の地域社会が広がる、その延長にはあるのですけれども、独自性を持った青銅器の扱い方をして、かつ、より東の地域との交渉においては青銅器を渡していく。逆に、東から、先ほどありました土器であるとか、あるいは玉類、いろいろなものを東との交易で仲介していた。中枢域から見れば、東の地域への門戸にあたる役割を、このムナカタの人たちは果たしたのではないかと考えられます。

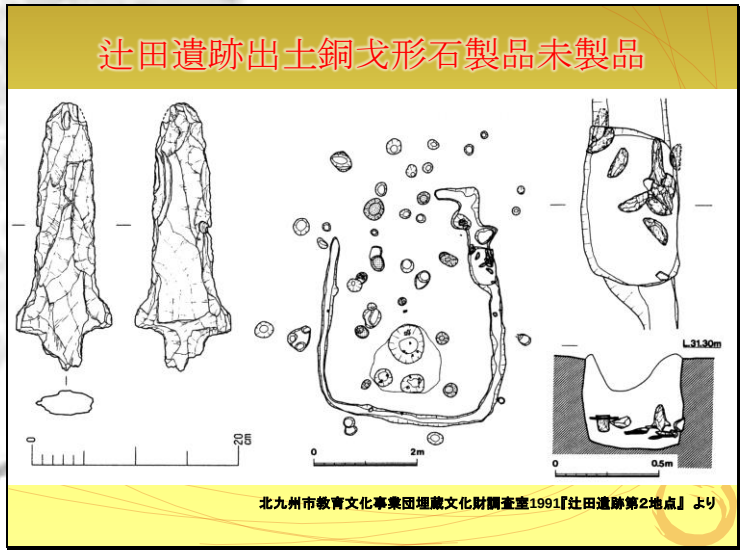


そうした中で、もう１つ触れておかなければならないのが、次になります。
金丸遺跡で出てきました、銅戈を模倣した、銅戈形の石製品です。



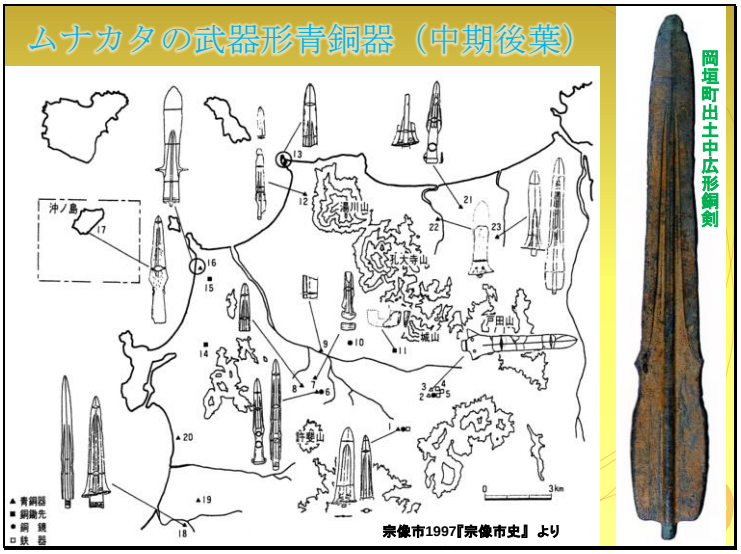
九州では、銅戈の樋をきれいに作り出すなど、銅戈を非常に忠実に模倣した製品というのは、今までほとんどなかったのですけれども、その完形品が、木棺墓と思われる所から出てきております。こういう銅戈をまねたものというのは、九州の中でも東に偏っているというのが、古くから指摘されています。それを裏付けるように、遠賀町金丸遺跡で、こういったものが出てきたわけです。こういう銅戈をまねるという価値観の創出というのは、このムナカタの地域まで共有したものだったろうかと思います。

こちらがその写真ですね。こういったものが九州で出るとは正直思っておりませんでした。非常にリアルな銅戈形の石製品です。

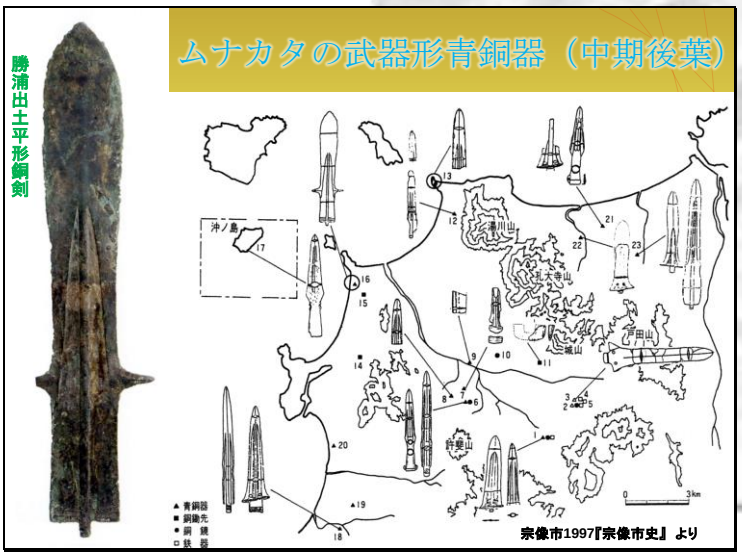


こういったリアルな樋を切ったものはないですけれども、銅戈形模倣品を専属に作っているような工房の跡なども見つかっております。こちらの辻田遺跡でしたかね。やはり、九州でも東に偏った地域で、こういう銅戈形石器製品を作る世界、銅戈そのものにより高い価値付けをする社会というのが、あったんだろうと思います。こういったものを母体に、中期の前半には、このムナカタの地域の青銅器文化が非常に独自性を持っている、そういう時代と言えるかと思います。

では、これがその後どうなっていくのか。取りあえず、次の段階。中期の後半段階になると、該当する青銅器は減ってきます。



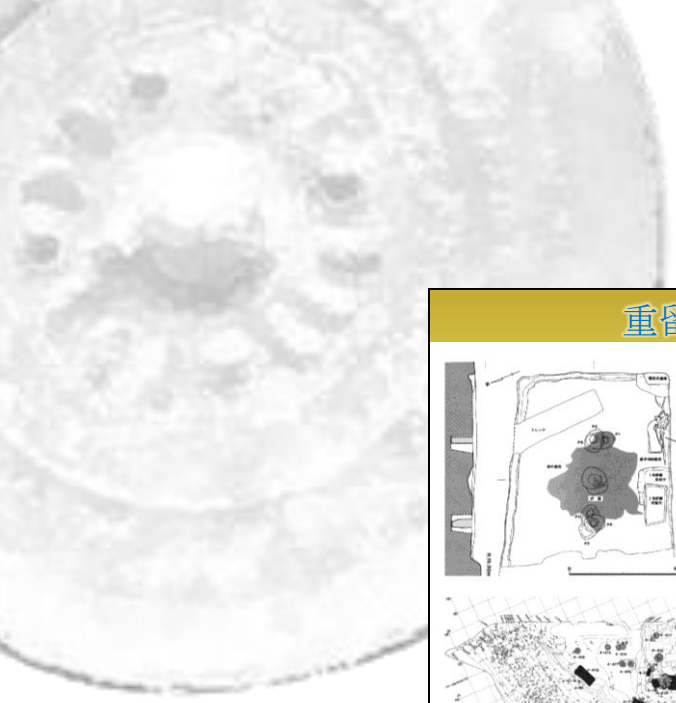
隣りの岡垣町で、中広形の銅剣が出てきております。

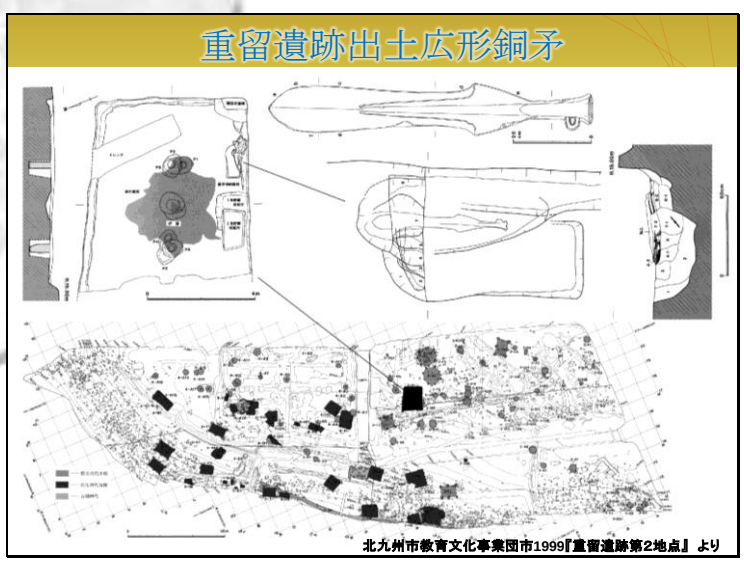


これは平形銅剣。私などは、松山で作られたものが、はるばるここまで持ち込まれているのではないかと考えています。先ほどの中広形銅剣にしましても、この平形銅剣にしても、より東の青銅器との関係を考えなければならないものです。中期の後半でも、やはり東との関係が、数少ない青銅器から見ることができるのですけれども、その数はこの２点程度で、田熊のような集中的な青銅器は、もう見られなくなっています。

少し言い忘れましたけれども、沖ノ島の銅矛というのも、恐らく、中期の前葉にさかのぼるものでしょう。この田熊なんかの人が行き来する中で、沖ノ島にも行っていたのかなと考えていますが、類例が少ないので、慎重に考えなければいけないところです。海人の動きということで、恐らく後のシンポジウムで、少し話題が出てくるかと思います。

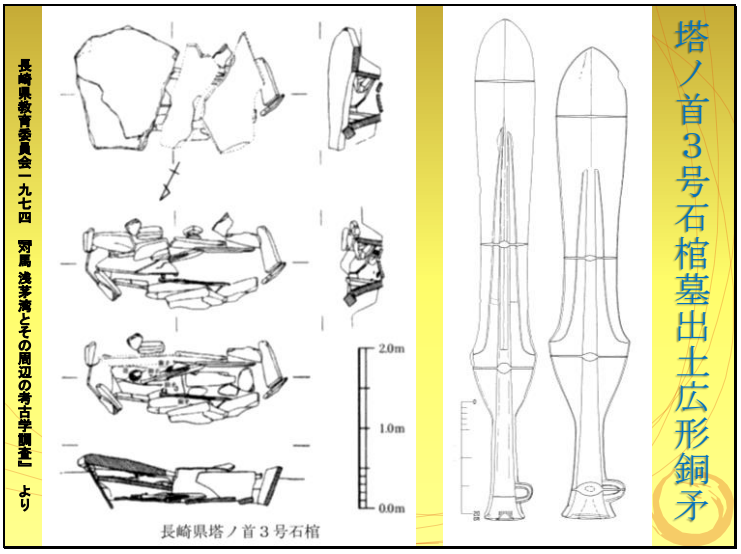
そして、唯一邪馬台国に近い、後期の青銅器として出ているのが、釣川の青銅器で、広形銅戈と言われていますけれども、実は広形の銅矛です。宗像高校で保管・展示されています。後期になると、この地域の武器形青銅器は、非常に希薄です。



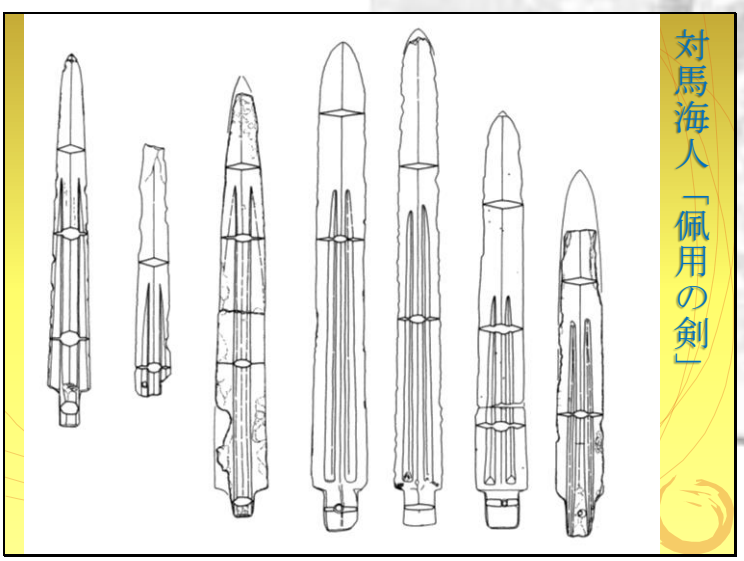


一方では、後期でも、ちゃんと埋納されている青銅器があります。広形銅矛を埋納した、小倉の重留遺跡です。こういったものが、より東の小倉にはあるのですけれども、このムナカタでは、見ることができません。

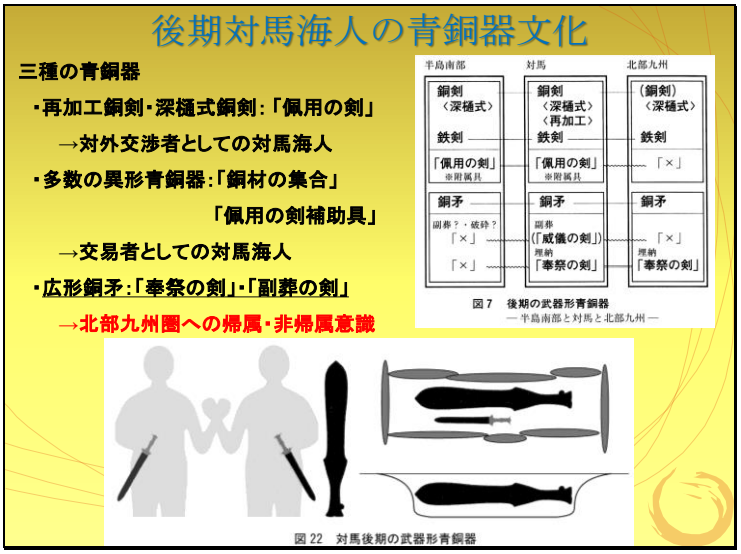
そして、むしろ後期の青銅器について、特に邪馬台国との問題で、ムナカタとの対比で注意しないといけないのが、対馬だろうと思います。



対馬では、後期になってもこういう青銅器を持っていますし、普通なら埋納するのですけれども、石棺の中に入れるようになります。



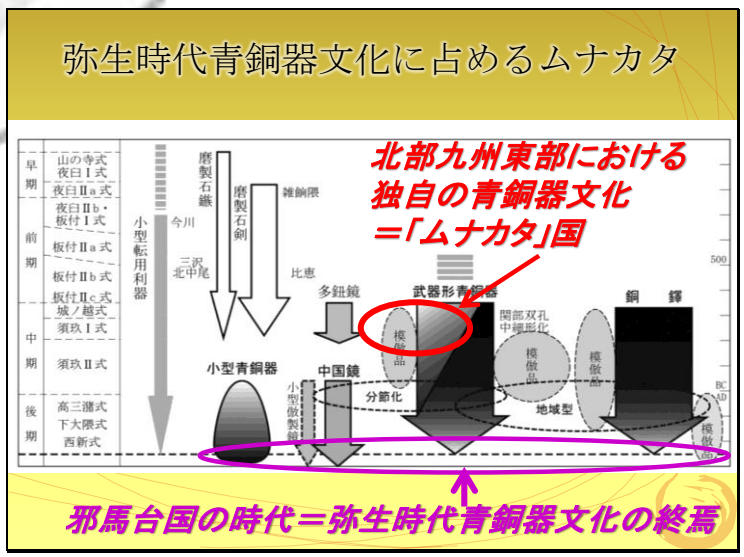
また、対馬では後期になって出てくるこういう深樋式銅剣と共に、特に左のような中期の旧式の銅剣を集めてきて、途中で折り取って、新たに柄を作り出して、身に帯びるようなことをしています。後期に至っても、銅剣を腰に帯びている姿というのを、対馬には見ることができます。



対馬では、こういう形で、後期になっても腰に銅剣を帯びています。恐らく、対外交渉、特に朝鮮半島、狗邪韓国といわれる、金海辺りとの交渉において、交渉者としての身分を表徴するために帯びているのではないか。一方で広形の銅矛も持つし、少し変わった青銅器も銅材として集めるという、非常に特殊な青銅器文化というのを、対馬は見せています。だから

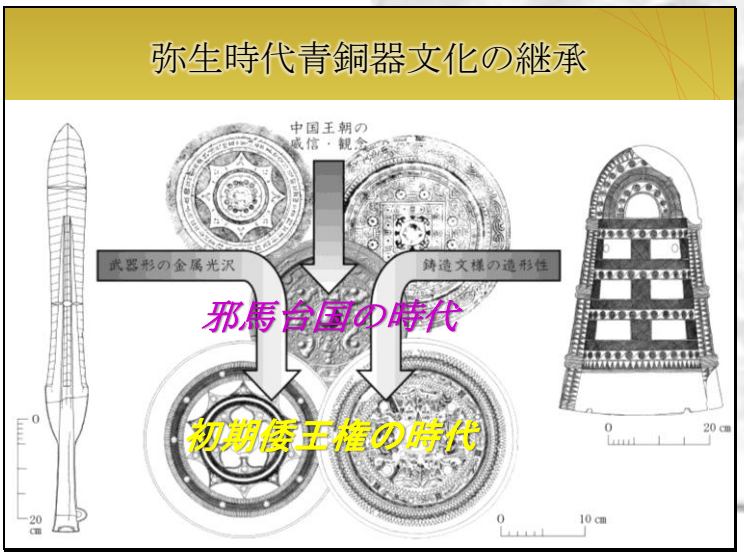
こそ、『魏志倭人伝』の中で、南北軸の主流ルートとして、対馬が記載された。そこには、こういう対馬の後期青銅器文化というのが大きく反映しているのではと思います。

対馬が元気な後期の段階というのは、残念ながらとなりますが、ムナカタの姿は、対馬ほど見えないなというのが正直なところです。ただ、邪馬台国の時代には、明確に国という形では記載されてないようですけれども、１つのまとまりを保持しながら、次の沖ノ島の祭祀の母体となった勢力というのは、ずっと温存されていたのではないかと思います。



青銅器の流れ全体を示したものですけれども、ムナカタはこの位置にあたります。中期の前半。この段階で、北部九州東部で独自の青銅器文化を花開かせたのが、ムナカタ国ではないか、国という名称を与えても、何ら遜色はないのではないかと思います。

ただ、邪馬台国の時代というのは、弥生時代青銅器武器文化が終焉を迎える時代です。弥生時代的な青銅器文化では、いろいろな青銅器というのを各地で作り、使い分けていた。私のところでは平形銅剣であったり、出雲の荒神谷では中細形銅剣であったり、そういったもので、地域の統合はまだ一歩超えられなかった。青銅器では超えられなかったものをもう１つ超えたのが、邪馬台国の時代のあり方だと思いますし、そのときには、青銅器文化は終焉していて、直接は語れない。この間に、ムナカタがどういう役割を果たしているのか、あとのシンポジウムで触れられればと思います。



最後になりますけれども、銅鐸や武器形青銅器の要素を鏡に統合していくのが邪馬台国の時代。そして、それが完成するのは、初期倭王権の時代だろうかと思います。弥生時代の武器形青銅器とか銅鐸というのが花開いていくのは、もう１つ前の、中期の後葉くらいの段階。こういうものから、邪馬台国の時代を挟んで変化しながら、初期国家の形成が進んでいったと、私自身は考えております。

邪馬台国の所在地論争など、後段のシンポジウムの際にさせていただければと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

基調講演

邪馬台国
九州説とムナカタ国

旭学園理事長　高島 忠平

みなさん、こんにちは。邪馬台国から出張を命ぜられてまいりました、高島でございます。その邪馬台国つまり吉野ヶ里遺跡には、皆さんも、既に行かれた方もいらっしゃると思います。ところが私は邪馬台国からはじき出されております。というのは、吉野ヶ里が邪馬台国とは、実は、私は言っていません。候補の一つにはなり得るぐらいしか言っておりませんので、吉野ヶ里に対して忠誠が無いと思われているようです。

吉野ヶ里遺跡というのは、邪馬台国論争に大きなインパクトを与えたことは確かです。吉野ヶ里遺跡で発見された建物や囲いの壕など集落跡遺構のまとまりが「魏志倭人伝」の卑弥呼の都（御家拠）の記述と概略符合するということです。発見当時は、邪馬台国発見と騒がれましたが、こうした発見例として初めての例でしたし、その後巨大環壕集落の全貌は吉野ヶ里以外では明らかになっていません。したがって、唯一の例で邪馬台国と決め付けるのは学問的ではありません。しかし、奈良県纒向遺跡など実際の遺跡で邪馬台国論争が展開できるようになったのは「邪馬台国論争」として進化したのは間違いありません。吉野ヶ里遺跡の発見の意義のひとつであります。このことと並んで大事なことは、吉野ヶ里遺跡の全貌が明らかになることによって、日本の国、日本の国家の起源となるムラからクニへといった「国」の成立の過程、あるいは発展の過程を吉野ヶ里遺跡 700 年の歴史がそれを段階的に示してくれる、そういう貴重な遺跡です。日本列島における国家の起源の一端を明らかにできるのです。

といいながら、私は論争の一方の邪馬台国九州説をかたくなにとっています。とある邪馬台国に関するシンポジウムで、絶対唯一の王権が列島を統一するといった中央史観ではなくて、地域王権の競合の過程で統一政権が生成するといった地域国家の立場から、「邪馬台国は近畿にさえなければいい」と発言したところ、かっての上司、弥生時代研究の第一人者であった故佐原真さんから「君はアンチ巨人ファンか」と言われました。「はい、そうだ」と。「やはりそうだな。奈良の国立文化財研究所にいた時に、君の九州説はこてんぱんに、みんなからやられたからな。その時の怨念が、君の九州説のエネルギーになっているんだ」と、こう言われました。なるほどそうかもしれないですね。基本的に、僕は定説に抵抗する、あるいは反抗するというのが、私の研究姿勢であります。

余計なことを話していると、また時間がなくなりますので、今日はお手元に資料を渡しておりますけれども、論点を５つくらいに絞ってお話をしたいと思います。

第１点「弥生時代の国とは」

その倭人の国の政治的成長の過程というものを第１点として話をいたします。第２点は、「ムナカタの国の生成」、どのようにしてムナカタの国ができていったか、ということです。それから、３番目に「ムナカタの文化の広がり」です。それと関連しますが、４点目として「ムナカタの国の特色」です。先ほどの３番目の広がりは、系統と言ったほうがいいかもしれません。どういう所と文化的によく繋がっているかということですね。それから、５番

目に「邪馬台国はやはり九州」ということで、締めとさせていただきたいと思っています。

それでは、第一点弥生時代の国とはどういうものかです。ここに吉野ヶ里の復元写真を出しております。これはどう考えても邪馬台国？ですね。そのアンチテーゼとして、奈良県の纒向遺跡の遺跡が発掘されて、いろいろな想像復元図が出てきております。それでも、やはりこれまでのものは想像できません。ほぼ全域を発掘できた吉野ヶ里だから復元できたというものであります。

吉野ヶ里遺跡は邪馬台国ではないにしても、一つの国の首都のようなものであります。そういうものを首都とした国がどういうものかということを、一つ模式図でお示ししたいと思います。

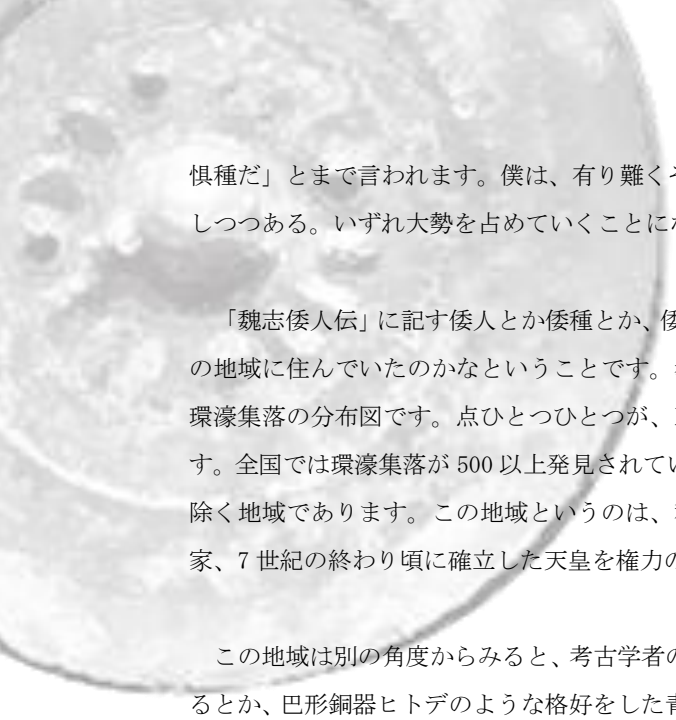
当時の「国」のイメージ図です。中心に吉野ヶ里の遺跡があります。周りに衛星的な集落が、さらにその周りにまた点々と集落があります。吉野ヶ里遺跡の環壕集落は日本最大で 40 ヘクタール以上あると言われています。吉野ヶ里遺跡というのは、脊振三麓から派生する長細い丘陵があります。東西 600m、南北 5 ㎞程の約 300 ヘクタール丘陵地帯に、環壕集落と同じ時期の遺跡が広く群在しています。その遺跡群を吉野ヶ里遺跡と通称しています。その南の端の所に環壕を設けた約 40 ヘクタールの環壕集落があるわけです。吉野ヶ里丘陵一帯の遺跡は結びつき、大きな社会集団の存在を窺わせます。

これが氏族社会を形成していると考えています。その中の一部に、40 ヘクタールを超える吉野ヶ里の環壕集落があり、上位の階層の居住・拠点となっています。それを中心に、周りの丘陵や平地・海岸部に環濠を持った別の氏族集団があり、そして、その周りに配下の親族的集団が存在、これが環濠を持っていない小規模な集落であります。こういうものを中心に吉野ヶ里遺跡、いわば吉野ヶ里の環濠集落を中心とした地域があります。そして、それぞれの衛星集落というのは、港の役割を果たす所とか、あるいは漁村的な位置にあるものとか、あるいは平地にあるものとか、あるいは丘陵地にあるものとか、あるいは山麓部にあるものとか、あるいは山村的なものとか、いろいろな立地によって生業・機能を持った集落群で、それらをまとめたのが吉野ヶ里遺跡の集団であります。この広がりは、弥生時代後期の遺跡を参考に模式図を作ってみたわけですが、周り、隣の地域の遺跡のあり方、遺跡の分布のあり方からすると、現在の郡くらいの広がりであります。それが、弥生時代の国として捉えていいと見ております。

それから「邪馬台国の構造と吉野ヶ里」です。吉野ヶ里を邪馬台国と考えているわけではありませんが、倭国と邪馬台国というものを図式にするとこうなります。邪馬台国を中心に、周りに奴国、伊都国、末盧、壱岐とか、あるいは不弥国など約三十国、その外側に女王国と争う狗奴国があります。そういうことで見ていくと、吉野ヶ里の国の存在位置は倭国と邪馬台国の関係とよく似ているということであります。

吉野ヶ里遺跡の発掘調査の主任で、この模式図を作成した七田忠昭さんは吉野ヶ里が邪馬台国だと考えています。吉野ヶ里遺跡が発見されたころは、近畿説をとっていました。吉野ヶ里遺跡が出てきて豹変されております。発掘現場のメンバーは７人でしたがその中に私が加わると、１対７で近畿説のほうが多かったのですが、いまやほとんどの人が九州説に変貌いや豹変しております。

しかし、今日のシンポジウムのパネラーでも、恐らく３対１くらいかなと思います。邪馬台国九州説は少数派であります。私の尊敬する奈良大学の元学長だった水野正好さんは、私に向かって、「君は、邪馬台国九州説絶滅危



倶種だ」とまで言われます。僕は、有り難くその言葉を頂いております。「いまや、邪馬台国九州説は徐々に増殖しつつある。いずれ大勢を占めていくことになる」と抗っています。

「魏志倭人伝」に記す倭人とか倭種とか、倭人の社会の記述が出てきましたけれども、倭人というのは列島のどの地域に住んでいたのかなということです。参考になる図面があります。この地図は日本列島における弥生時代環濠集落の分布図です。点ひとつひとつが、正確の数を表しているのではなくて、環濠集落分布の概観であります。全国では環濠集落が 500 以上発見されています。ただ、発見されるのは、現在の北海道と東北、そして沖縄を除く地域であります。この地域というのは、私は倭種・倭人の棲息地域と見ております。と同時に日本の古代国家、7 世紀の終わり頃に確立した天皇を権力の頂点に置いた初期の律令国家の版図でもあります。

この地域は別の角度からみると、考古学者の柳田康雄さんが指摘されていることですが、青銅器、銅の腕輪であるとか、巴形銅器ヒトデのような格好をした青銅の飾り金具があります。その弥生時代特有の分布範囲と、ほぼ一致するわけです。青銅器というのは、弥生の文化の特色の１つでもあります。そういうところから見ても環濠集落の分布範囲というのは、弥生時代文化を共有する何か意味を持っている。特に環濠集落というのは戦いの装置であります。こういうものがこの地域に分布しているということは、何かこの中に、全体としてうごめくもの、つまり倭人・倭種の政治的・社会的動向が共通して在るのではないかと考えます。

それで、私はこの地域に数百の国があると考えています。数百という言い方しかできませんが、初期の律令国家の時代には 400～500 くらいの郡がありました。それで、郡と国が対比できると私は言っていますので、では、500 くらいの国があるかというと簡単にそうは言えないというふうに思います。恐らく国を確立し、さらに国が連合している地域、あるいはまた国へ向かって突き進んでいる地域、あるいはまた国への胎動を示す地域、いろいろあるのではないかというふうに思います。そういう観点からしていくと、3 世紀には数百くらいの国は成立しているであろうと見ております。

それで見ていくと、九州に約 50 幾つかの国があるということが見てとれます。これは九州大学の岡崎敬先生が、弥生時代の一つの有力な遺跡を中心とした一定のまとまりがあると、後世の郡くらいの範囲であると。それは、古墳時代になっても前方後円墳を造営する地域単位でもある。さらに、奈良時代の郡の豪族である長官が氏寺を造営する地域である。それを見ていくと、歴史の長い間に、そこに統治された政治的な社会が継続してあったかということを見てとれると。それが、弥生時代であれば弥生時代の国である。そういうものを追い求めていけば、邪馬台国はその延長線上に浮かんでくるという考え方を示しておられました。岡崎説に基づいて作成したのが九州の「国々」図です。

この九州北部半部を見ていきますと、約 40 の国が考えられます。女王卑弥呼が統括した 30 国というのは、なにも近畿地方のお世話にならなくても九州だけで充分賄えるわけであります。こうした国がどのように成長を遂げていくかというのは、実は中国の歴史を見ていけば歴然であります。

最初に「国」が出てくるのは『前漢書』「地理志』ですね。朝鮮半島にある中国の植民地「楽浪郡の東南の海の彼方に倭人がいて分かれて百余国あると。中には朝見してくる者がいる」いうことが書かれています。これをみてもどうも中国は、倭という地域にある国のまとまりを、倭人と捉えているようです。一つの国を、倭としては捉えていないということです。

次に、『後漢書』。光武帝紀、建武中元二年（西暦 57 年）に、「東夷倭奴国王遣使奉献」、同東夷列伝に「建武中元二年倭奴国奉貢朝賀・・・光武賜以印綬」されたとされる記述があります。印綬は現福岡市の志賀島から出土した「漢倭奴国王」と刻まれた金印をさすといわれています。通説では「漢委奴国王」は「魏志倭人伝」に出てくる奴国の王であるといわれています。倭は文字通り委で奴は都で伊都国王ではないかという見方がありますが、私はどっちとも違う見方です。

当時、中国は倭人社会の一つの国を捉えることはありません。常に、倭人の国々の集団を捉えます。ですから、あの時期は、恐らく北部九州沿岸部と思います。このムナカタの国も入っていると思いますが、対外交易という重要な当時の政治経済上の中国との関係を、恐らく沿岸部の国々が連携・連合をして使者を送ったと考えられます。それで、倭奴の国王だということで金印を賜ったわけです。倭奴は騎馬民族匈を匈奴と呼ぶ蔑称説を私はとります。中国の古い漢籍の大家であった福永光司さんの「当時の中国からすると倭人を倭奴としたのは匈奴と同じ蔑称である」ということです。私は、中国が倭人、倭種を国々の集まりとみているところから、倭奴というのは一つの国を表していないからです。後漢書には倭奴の前の記述に匈奴とあります。一連の夷に対する呼称です。

志賀島の金印は、当時の一定の国々のまとまりのまとめ役である倭王に贈った印鑑であって、奴国王とも限らない、伊都国王とも限らない、ひょっとしたらカスヤか、ムナカタ王だったかもしれないですね。志賀島は現在は福岡市ですが、あそこは旧糟屋郡（カスヤの国―不彌国？－）に属しています。志賀島は神なる島で沿岸諸国の共通の海神の祭りの場であったと思います。そうした場所に奉献埋置したのです。いずれにしても、沿岸諸国が共通の利害、特に対外交易（朝貢交易）を宗主国中国とおこなうために連合するようになっていることを後漢書の記述は物語っています。この時期「国」の拠点になる(環壕)集落が吉野ヶ里の例が示すように「国」公設の市などが整備されます。

２世紀の初め、安帝永初元年に倭国王帥升等が 160 人くらいの生口を献じて奉見を請います。皇帝に謁見できたか不明ですが、160 の大人数を中国に献じます。これだけの大人数を送るということは、卑弥呼も後の壱与もしておりません。倭国王帥升等とありますので、これは倭国の連合の国々が、帥升を倭王として中国に使者を送るために、国々が供出し、朝貢交易の見返りに預かろうとしたのではないでしょうか。だとすると 160 人という数字もうなずけるわけです。この時も、中国は国々のまとまりとして捉えているわけですが、倭人の国々の連合は半世紀前より政権としては拡大・発展しているのではないでしょうか。

「魏志倭人伝」の段階、３世紀になっていきますと、少しその国々の連合も、先ほど市川さんがお話になったように、全体を統括する一大率とか、あるいは各国に共通する卑奴母離とかがみられます。女王国政権は、2 世紀段階よりは一段と整備されています。各国には官・副官と未分化な階層、大人による階級的支配体制、卑奴母離といった軍政官は沿岸部の国々に配置、女王国より北には朝貢交易を勝手にさせないように監察官である一大卒を伊都国に配置、伊都国の津（港市）における中国・韓諸国との朝貢交易の統制・独占など女王国は国々30 国をまとめていく上での新たな政治制度の整備を見てとることができます。各地の倭人社会も、かなり政治的な進化を遂げているということが言えます。

そうした連合の頂点に立っているのが、卑弥呼であるということが言えると思います。ですから、何気なく中国の文献を読んでしまうとわかりませんが、紀元前１世紀から紀元後１世紀、あるいは２～３世紀という段階の中

国の歴史文献を追っていくと、日本の国が生まれてそれが連合して、その連合の政治体制が整っていく有様がよく読み取ることができるわけです。そういう中に、北部九州の考古学的な成果を対応させていくと、よくまたそのことが理解できるようになるわけです。

第２点「ムナカタの国の生成」

現在の宗像地域に弥生時代に「ムナカタの国」が生成していたかということを弥生時代の遺跡の内容、分布状況から見ていきます。まず、この地域には縄文の晩期から弥生時代の初期にわたるお墓があって、朝鮮半島系の石製の武器を副葬したり、それが木棺墓であったりします。それからすると、縄文時代晩期（弥生時代早期という人もいる）、農耕社会が列島に成立した段階から、この「ムナカタ」という地域は、文化的に特色を持ち、北部九州弥生社会では一定の地位を占めていたといえます。結論からいうと一つの「国」を形成する対外交易の海人集団の拠点として大きな地位を占めていたと思います。

これまでの調査研究の成果から見ると、釣川中流域、それから上流で釣川の南部域、それから福津市の西郷川流域、もっと広げて、鞍手地域まで広げてもいいと思うのですが、弥生時代の遺跡のグループ分布があります。いずれも弥生時代の始まりから、弥生時代後期までの遺跡の展開を見ていくことができます。こうした各グループは祖先・血統を同じくする氏族だと考えます。そういった４つか５つの地域の氏族集団が政治的に一つにまとまって、ムナカタの国をつくったと見ております。その段階は、弥生時代中期前半の田熊石畑遺跡の時期だろうというふうに見ております。この時期に特定の区画墓、墳丘墓の可能性も考えられていますが、吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓のような特定の区画（墳丘墓）に青銅器を副葬した首長層のお墓が集まる。こういう現象は、北部九州の他の地域に幾つかの例を求めることができます。福岡市の吉武高木遺跡群、佐賀県鳥栖市の柚比本村遺跡であるとか、少し後れて福岡県の小郡市の隈・西小田遺跡、福岡市樋渡遺跡、同須玖岡本遺跡、糸島市三雲南小路遺跡など首長層のお墓が集まる墓域があります。そういう墓域が出てくるのと同時に、一般成員の墳墓造営に対して、強制的ともいえる一定の規制が働いてくる。一般に列埋葬といわれるこの時期に見られる墓制です。これは列状に縦長く、各墳墓が営まれている状況です。あらかじめ各村々の人たちのお墓の位置が決められているわけです。そこにお墓を作ることがなかば強制されている。

吉野ヶ里や吉武高木遺跡の例からみると、長さ数百m、長さ600mにもなる例があります。弥生時代中期前半に集中します。そして、そのお墓の中からは、戦いで傷ついたり、あるいは亡くなったりと思われるような証拠が、北部九州で 100 例近くあると思います。弥生時代中期前半、紀元前２世紀の終わりから紀元前１世紀の初めにかけて、各地で国が生まれるにあたって、その国の生成をめぐる主導権の争いがあったのではないかと思います。墳墓造営の格差、一般成員への墓造営の強制、そして戦いは、この時期北部九州各地において「国」が生成過程にあったことを示していると考えています。

ムナカタの遺跡、田熊石畑遺跡も同様な傾向が見てとれると思います。この地域集団が中心になってこの「国」づくりをしたのではないか、各地の集団を政治的にまとめる形で国づくりがなされたと見ております。

第３点目「ムナカタの文化の広がりと系統」

先ほどもお二人がお話しされました、なるほどという点もありますが、私は意見が違います。例えば、中細形銅剣というのが紹介されましたね。刃先が細く鋭い細形銅剣と違って、切っ先も元のほうも少し幅広いものです。これは吉野ヶ里遺跡の同じ時期の甕棺から出てまいります。それから、佐賀県鳥栖市の柚比本村遺跡から出てまいります。その鋳型が佐賀平野の各地から出てまいります。そういう目で見ると、私はむしろ、遠賀川をさかのぼるような形で、佐賀平野、あるいは筑紫平野と、中細銅剣出現のいち早い青銅器文化で結び付いているのではないかと見ております。

そして、飯塚市の立岩遺跡で作られ、北部九州一円に頒布された石庖丁という穂摘み具があります。これは、宗像南方の笠置山で採れる輝緑凝灰岩という特殊な石で作ってあります。これが宗像地域でも出土します。ただ、ほかの地域ほどたくさん出てきません。ほかの地域の４分の１くらいの数で、また増えてくるかなとも思っていますけれども、その点から見ると、どうもあまり石庖丁という、農耕に使うような道具の需要よりもムナカタの人たちは交易とか、漁撈のほうが主たるなりわいではなかったかと。やはり海人族ではなかったかと、海洋民ではなかったかというふうに思います。

また、先ほど銅戈が特色だと言われましたけれども、これはやはり遠賀川の中・上流との結びつきが説明されましたようにあります。特に立岩遺跡では、鋳型も出てきております。遠賀川の水源に近い所まで行くと鎌田原という遺跡で、やはり銅戈が出てきている。背後の南の山を越えれば、立岩の石庖丁がたくさん出てくる朝倉・甘木地域でもあります。佐賀平野の吉野ヶ里や周辺からもたくさん出てまいります。そういう石庖丁を媒介にしてのつながりが考えられます。宗像は遠賀川中・上流地域の「国々」にとって対外交易・交流の先端的役割を担ったのではないでしょうか。

それから、遠賀川流域の独特の土器の形があります。甕の口縁の端が上のほうにちょっと跳ね上がる、跳ね上がり口縁と言っています。こういう土器文化がこの宗像でも、弥生時代中期の土器の様相として見てとれる。これは、遠賀川流域、中流域の立岩遺跡でもよく見られますし、その一部が吉野ヶ里遺跡の近くの三津永田遺跡からも出てきております。私は吉野ヶ里周辺の佐賀平野と、それからムナカタの地域が遠賀川を通じてのつながりというのをより強調したいと思います。

銅矛においてもそうです。刃先の短い銅矛がありますけれども、あの鋳型は佐賀平野で各所に出てまいります。ですから、佐賀平野で作ったかどうかは別として、短い銅矛を使う、ひとつの武器文化というものは、やはり共通したものを持っている。ああいう武器がどうして用いられるようになるかというのは、戦いの武器としても使いますけれども、剣など武器というのは、政治的支配を示す象徴的なものであります。この草薙剣とか、神話の中でもその性格が言われているように、やはり、ああいうものを所持するというのはその地域の社会の指導者であり、首長であり、支配者であると。つまり政治的支配者の表象として終生所持されたことを示しております。

そういうものが、田熊石畑遺跡から出てきているというのはそのことだと思いますし、また、各地の氏族集団をまとめていく人たちもそういうものを持っていた可能性があると思います。釣川上流も南部もあちこち、それから福津市の西郷川流域でも青銅器が出てくる。一つのまとまりがあるのは確かですが、それらを大きくまとめたのが、私は田熊石畑遺跡の被葬者ではないかと思います。そして、それはむしろ、遠賀川を通じて、内陸と結び付いているということであります。

現に、立岩遺跡は甕棺が結構多く発見されましたけれども、筑紫平野・福岡平野ほどではありません。もともとの墓制は木棺であります。そういう意味でいうと、福岡平野も、最初は木棺であります。春日市の伯玄社遺跡です。いつのころからか甕棺になるのです。

木棺というのは見ていくと、どうも朝鮮半島の東半分の文化のようです。西半分は支石墓の墓制文化のようであります。朝鮮半島は、大きく分けて二系統の文化があって、それが日本、特に北部部九州に渡ってきているということが言えます。それは、初期の木棺墓の地域と、初期の支石墓の地域を見分けていくと、はっきりいたします。

そういうことで、ムナカタ国の特色としては、一貫してお墓が木棺、そして、変わるにしても石棺であります。成人の甕棺墓を受け入れなかった、そういう特色を持っております。宗像地域の弥生社会は、中細の銅剣を北部九州の中でもいち早く用いるようになった。中細形銅剣は中広形、広形への変化、祭器化への端緒である。銅剣が祭器化する。その地域の首長の政治的威信器として終生保持されると共に、戦の神を祭る軍事的祭祀の発展が背景にあると思います。そうした動きが「ムナカタの国」の先進性を表していると思います。

最後に邪馬台国は、やはり九州ということですが、何も卑弥呼が統括した 30 国に、このムナカタの国はこだわらなくてもいいと思います。『魏志倭人伝』は、倭人の社会を３つのグループに分けて捉えています。

１つは、卑弥呼が統括する 30 の国です。対馬、壱岐、末盧、伊都、奴、不弥、投馬、邪馬台国など含めた 30 国ですね。志摩国も入っていますかね、30 国。それとは別に、この女王国と、元から仲の悪い狗奴国の連合がいます。狗奴国というのは男の王でありまして、単独の国として戦っているのでなくて、狗奴国連合というのをつくっているようであります。その地域はどこかというのがありますけれども、私は熊本県の南部以南であろうと見ております。この地域は、非常に特殊な土器の文化圏であります。そして、環濠集落をつくるのもいますけれども、山岳地帯に村をつくって、狩り・焼畑を一つの大きな生業としている人たちが、山地中に、あちこちにいることが遺跡の分布から見てとれます。阿蘇のカルデラ内の平野には、弥生時代後期に鉄製品をたくさん持った環濠集落が多くあります。この地域の土器はどちらかというと、南九州との関係が深い土器です。

そういうことで考えると、30 国と対立する狗奴国の連合という２つ目のグループがあり、それからもう１つ、女王国から東、海を渡ること、千余里の所に国があって、これも倭種である。倭人であるということを記しています。列島に生息する倭種・倭人は少なくとも３つのグループに分けて捉えられているわけです。ですから、女王卑弥呼の政権は、倭人社会では限定的なものであるということであり、３世紀の段階に日本列島の大部分を統一したような政権は存在しないというのが、私の考えであります。

そうすると、先ほど申し上げたように、女王卑弥呼の統括する 30 国は、北部九州で十分であると。何も近畿地方のお世話にならなくてもいいと。また、30 国に収まらない国々もたくさんあるということであります。その１つがムナカタの国であってもいいし、その特色から見ても、そういう地域とは文化を違えた、あるいはアイデンティティを違えた、一つのムナカタの国というものを考えてみたらどうかと考えております。

以上でございます。どうも、ご清聴ありがとうございました。

いせきんぐ宗像
シンポジウム
２０１４講演録

パネルディスカッション

コーディネーター ：西南学院大学 非常勤講師　板橋 旺爾 氏
パネリスト ：学校法人旭学園 理事長　高島 忠平 氏
愛媛大学ミュージアム 准教授　吉田 広 氏
海の道むなかた館 館長　西谷 正 氏

（司会）それでは、これからは西南学院大学非常勤講師 板橋旺爾先生のコーディネートのもと、討論へと移ってまいります。それでは、板橋先生よろしくお願いいたします。

（板橋氏）皆様、こんにちは。今日は、田熊石畑遺跡の発見および絶大な成果をもとにしたムナカタ国と邪馬台国というシンポジウム、講演を頂きました。そのあとの討論を始めたいと思います。真ん中に九州説の高島先生がどんと座っているのは、主催者の宗像市教育委員会の何らかの意図があってのことかと思いますが、そういうプレッシャーにはかかわらず進行していきたいと思います。

討論では、少し時間が押してあまりありませんが、先ほどからの講演で弥生国家群の性格が出ておりましたので、まず、ムナカタ国の性格、どんな国であったかということを討論して、それから邪馬台国へ移りたいと考えております。

ということで、まず質問をこれからしていきます。講演の順ということでもありませんが、そうですね、吉田先生にですね、吉田先生の銅剣の刃の下の関（まち）部。あそこの穴の高さが、どうだ、こうだというあのグラフを見ておりますと、考古学者というのは何と細かいというふうに感じますが、まあそういう細かいところから天下国家を論じるというのが考古学でもありますので、まずその辺の銅剣のことから質問させていただこうかと思います。

銅剣の使い方および銅戈が頭の位置にあるということで、西といいますれば伊都、奴のいわば中枢部と、それからムナカタより東側、響灘、日本海、瀬戸内との関係が、その２つのあり方で示されましたけれども、それを２つ、東と西をムナカタがつなぐ位置にあったのか、それともどちらか寄りのほうが強いのか、その点を少し武器形青銅器の分析の点からお示しいただければと思います。

（吉田氏）長く話させていただきました。まずやはり、つないでいるのは間違いないと思います。その中で、このムナカタの立ち位置というのは、北部九州の中での位置付けというのが大きいのだろうと思います。私のいるような中四国とは格段の差があると思いま

す。そういう世界と、九州がつながっていくとき、大きな役割をこのムナカタの地域は果たしているのだろうと思います。

（板橋氏）石川先生のお話では、これは東と西を両面を見た扇のかなめの位置ということでありまして、ただ、吉田先生のほうは、中枢部から見れば東との門戸ということで、つないだというより、東側の文化、あり方を中枢部、西のほうに入れたというふうな理解でよろしいのでしょうか。

（吉田氏）そういう側面はもちろんありますが、その辺の比重は非常に難しいですね。時代によって多分変わるのだと思います。前半期というのは、西の文化要素を東に出していくときの出口だったし、中期の後半ぐらいは東の要素を取り込んでいくときの窓口であったというように、時代によってやはり立場も変わっていくのだと思います。

（板橋氏）そうすると、ムナカタ国の性格というのは、時代によって東から摂取したり、それを西に伝えたり、西から東のほうに伝えたりというような位置にあったということでよろしゅうございますか。

（吉田氏）はい、それで構わないと思います。

（板橋氏）分かりました。それから、次は高島先生にお願いしたいのですけれども、私はこの石畑遺跡を「ムナカタの吉野ヶ里」というふうにレジュメに書いておりますのですけれど、ちょっと高島先生には恐縮ですが、吉野ヶ里よりムナカタの石畑のほうが青銅器の数は、北墳丘墓に限っては多いということなんですけれども、北墳丘墓、吉野ヶ里と石畑を比較してどのように見られますでしょうか。

（高島氏）田熊石畑の青銅器ですけれども、僕は感心したのは、先ほど吉田さんの話もありましたけれども、日本に兵制があったかどうかというのを、昔、樋本杜人さんという朝鮮考古学の先生に聞かれたこと

があります。武器には長いものというか、槍のような、矛のような長い長兵、それから短兵、剣、つるぎですけれども、その組み合わせというものが日本であるかというのです。その時はありませんでした。だけど、それが出てきたのが福岡市の早良区の吉武高木遺跡ですよね。ああ、出てきたなと思って、そういう意味では、やはり海岸部に住んでいる人たちは、朝鮮半島とか、そういう所の兵制、武器の制度といいますか、そういうものを意外と敏感に受け止めているのではないかと思います。そういう意味で、矛があり、戈があり、剣が揃ってあるというのは、朝鮮半島的であると思います。

青銅器を掘るというのは、九州の考古学研究者の憧れであり、掘り当てることによって非常に満足感というか充足感を抱きます。では、吉野ヶ里の銅剣だけというのは何なのかですね。僕は先ほど申し上げたように、やはり剣というのは、これは私自身の説ではなくて、文化人類学者大林太良さんが、国づくりの神話の要素が３つあると言われたのですね。その中で、国づくりは、豊穣の神様ですね。多分稲とかそういう、神様でいえば大国主命です。それから、矛が要ると。そして、矛が、それは日本の神話にあるように、とろりとかき混ぜて、落ちたところが国土となる。天照大神に象徴される。それからもう１つは、素盞嗚尊の草薙の剣ですね。これは周りから火をつけられて、それで草をはらって、その地域の賊たちを平定した。そういう武力というか政治支配、この３つの神話要素が、これは東アジア的に存在するんだと、その一環としてやはり日本の神話も捉えるべきだという考えなわけですね。私も多分そうだろうと。

まず日本で最初に出てくるのは銅剣ですね。これは、地域にそういう政治的な社会、集団、国まではい

かずとも地域が政治化してくる。それに朝鮮半島の工人、技術者がその技術を持って渡ってくるわけですけれども、いろいろなほかの青銅器の製作技術も持ってくるということだと思うのです。

ですから、僕は、吉野ヶ里遺跡では銅矛も作っているのですね。近くでは銅戈も作っているわけですけれども、銅剣しか入っていない。やはり地域によってそういう銅剣だけに意味を持つ、政治的意図があったのではないかと見ています。田熊石畑のようにたくさん出てくるのはうらやましいですね。朝鮮半島の兵制に近いものが石畑にあると思います。僕はやはりその地域での青銅器の捉え方といいますか、それの違いがそこに現れていると思います。

（板橋氏）それでは、吉野ヶ里に関しまして、先ほどの高島先生の講演では、ムナカタを含む遠賀川から中流、上流域から筑紫、甘木、朝倉がつながって、吉野ヶ里というふうな文化的ルートがあるのではないかということをおっしゃっておりまして、例えば石包丁ですね。石包丁というのは稲の穂を手で刈っていく道具なのですけれども、例えば石包丁のあり方、ムナカタでは数が少ないとおっしゃっていましたけれども、ただ筑紫平野は農業国ではあるんですが、その辺の石包丁の出土の数、対比という面ではいかがでしょうか。

（高島氏）まだ正確に押さえていませんが、筑紫平野の方、立岩遺跡がある嘉穂盆地から南に冷水越えといいますか、峠を越えて筑紫平野に入った甘木地方は、各地に配布されている石包丁の約 25%ぐらいですね。それから、福岡平野もそれに近い数字があります。佐賀平野は、吉野ヶ里を中心に 10 数パーセント、15%ぐらいあります。それから遠賀川流域には、やはり同じぐらいあります。思ったほどないんですけれども、ただムナカタのほうは多分全体で５～６％ぐらいじゃないでしょうか。そこから見るとやはりその地域の生業、なりわいの違いがあるのではないか。いわば農業地帯と、それから漁撈、いわば対外交易地域ということだと思うのですね。

これは近世の事ですけれども、よく海岸部の所に登録される水のみ百姓の中に、田畑がないというのが結構いるんです。だけど、財力はすごくある。そういうのがいまして、それから見ると、やはり海岸部の人たちはむしろ海を通じた交易で栄えている。日本人というのは、農業の国なものですから、農業がどうかということで社会的な価値判断をしてしまいますけれども、交易というもののほうが、実は生産力は高いわけですね。財力を貯めることでは高い。そういう意味で僕はこのムナカタという地域はやはり海洋性、いわば海人（あま）族だと。九州の中央、筑紫の中央の脊振山の山頂の祭神が宗像三神の１人だったですね。それから、有明海沿岸に宗像三神、女神を祭る神社が、実は点々とあります。ですから、海洋、海人族というのは玄界灘にも広がっていますけれども、海岸を通じて有明海の周辺にも広がっていると考えられます。

その証拠として、吉野ヶ里遺跡の５㎞ほど南に貝塚があって、190 体ほどの弥生時代の人骨が出てきていますが、それは渡来系の弥生人と、在来系といいますか、西北九州型、海洋型の人骨というのが一緒の墓域を造ったりしております。ですから、そういう中で海洋族の中で比較的リーダー的役割を果たしたのがムナカタの一族ではないかと思います。当時どう言っていたか分かりませんけれども。

（板橋氏）それでは、吉野ヶ里は５㎞ぐらいに海洋的な遺跡はあるけれども、吉野ヶ里は大体内陸型で、ムナカタ国は海洋型ということが言えると。石包丁等々のことからということでしょうか。

それでは、そういう海洋民族、「海人」という言葉が出てきましたが、講演ではなく、今回討論で初登場の西谷先生に、レジュメで西谷先生はお書きになっておりますけれども、ムナカタ国に絞りますと、石畑遺跡が弥生の中期の前半ということで、その間、沖ノ島まで少し間があるのですけれども、ムナカタに、例えば吉野ヶ里の衛星中核都市、ないしは衛星集落といったような感じの遺跡の中から、石畑に続く有力な遺跡ないしは古墳というものがございますでしょうか。

（西谷氏）その前に、先ほどのご講演なり今の話を伺っていて、少しお話ししていいでしょうか。

高島さんのこの地域と嘉穂の石包丁の問題とか、あるいは筑紫平野の青銅器の問題、それとの関係、非常に興味深く拝聴したのですけれども、仮にその地域からの文化あるいは技術の流れがあるとしたら、やはりその見返りがあるはずですね。それもやはり、今ご指摘のように交易ということが大きいと思いますね。交易は海を通じて大陸につながるわけですけれども、対馬国を見た場合に、中心は漁業ですが、やはり交易が大きいですね。これは中世におきましても、「海東諸国記」にそう書いてあるのですが、対馬のなりわいとしては、漁業とそれから砂塩、塩づくりですね。そして、交易と書いてあるのです。そういうことから交易というのは大きいと思いますね。その一端を担うのが海人族ということでしょうが、そのような性格がこのムナカタ地域にもあったということは間違いないと思うのですね。

ただ、伺っていて少し気になるのは、対馬国は漁業を中心とした一つの地域社会で、次の一支国を見ると、これは漁業と農業が半々なんですね。これもやはり「海東諸国記」の中に、浦の半分は陸の農業で、半分は漁業だと書いていますので、農業と漁業から成っている一つの地域社会ということです。そういうのを参考にしますと、壱岐島の一支国という島の場合と、島ではなくても沿岸部で共通性があると思うのですね。

そういう意味では、このムナカタ国、ムナカタ地域についても、釣川がずっと内陸部に入り込んでいたと。そして、海に生きた海人族だという、これは誰でもおっしゃるのですけれども、と同時に、その奥まった所には、山のふもとに水田が早くから開けているわけですね。そういう意味では一支国と同じように、漁業と農業から成った一つの地域社会ではないかと、先ほど伺いながら思っていたのです。

そういう地域社会が一つの集団をつくって、それが『漢書』地理志や、『後漢書』『魏志倭人伝』に出てくる「国」と、中国が呼んだ地域社会ではないかと、そのように考えるのです。そのまとまりの最初を示す遺跡、根拠が田熊石畑ということで、あれだけ集中的に青銅器を保有しているリーダーがいて、リーダーに率いられた地域社会が生まれました。それを中国では「国」と呼んだわけです。

そして、田熊石畑につながる時代、つまり弥生時代の後期のころ、先ほど吉田先生も触れられておりましたけれども、そのころのムナカタ地域についての実態はよく分かっていなません。高島さんのお話によると、吉野ヶ里のような国の中心になる、これは中国の歴史書では「国邑」と表現していますけれども、そしてまた、その周辺に衛星集落があって、これは中国の歴史書でいうと「邑落」に相当するのですね。ですから、村々、つまり「邑落」が集まって１つの国を形成していました。その中心の拠点の集落、これが「国邑」であり、今流に言えば都ということになるわけです。ここのムナカタ地域におきましては、そういう吉野ヶ里のような「国邑」に相当するような中心集落の遺跡はまだ見つかっていません。そして、伊都国で申しますと三雲南小路、井原鑓溝、さらに平原という歴代の王墓が見つかっているのですが、それも見つかっていないのです。その辺が大きな問題というか、今後の課題で、私はどこかにまだ眠っていると思います。まだ未調査であるという、そう確信を持っています。

と申しますのは、その次の時代、胸形君の古墳時代になると、初期の前方後円墳が、徳重本村とか東郷高塚で出現しますからね。その時代の日本の地域は、お隣の岡の縣とか西の伊都の縣、さらにその西の末盧の縣という、縣（あがた）という地域社会になるわけですね。国が県になり、それが先ほど高島さんのお話にもあったように、律令時代には郡（こおり）となっていくのですね。そういう古墳時代、ヤマト王権の時代に前方後円墳がずっと造られていきます。そして

またお隣の岡の縣から類推すると、あるいは伊都国から類推すると、ここにも縣が置かれていたという、そのように考えます。

したがって、弥生時代の早いころの地域的なまとまりや首長の存在は、田熊石畑で裏付けられるのです。新しくなった古墳時代のことも、徳重本村や東郷高塚の前方後円墳で裏付けられます。その間が今のところ空白なんですね。資料的に空白ということであって、これは、私は将来いつか見つかる日が来るのではないかと期待しているというところでございます。

（板橋氏）今、西谷先生がおっしゃった壱岐は一支国ということで、レジュメの裏に『魏志倭人伝』が書いてありまして、それの９行目、10 行目で、この一大国（一支国）のあとに、最後に「亦南北に市糴（してき）す」とありますね。「市糴す」というのは交易するということなので、この一支国とムナカタ国が似ているということは、やはり交易ということを考えていいと。

もう１つは、奥のほうに畑があって、農と水、海で財をなした国、それがムナカタ国であるということが、今までの話から言えると思います。

それと同時に、中間が今ないと、弥生の後期がないと、そのあと徳重の古墳とか、石畑のすぐ近くにあります東郷高塚とかがあって、それがちょうど時代的には沖ノ島の祭祀につながっていくということでありますが、そのちょうど弥生後期ないしは終末期の遺跡は今のところ見つかっておりませんが、その時代の問題である邪馬台国問題に、それでは移っていきたいと思います。

邪馬台国問題は、今、お示ししましたレジュメの裏に道順といいますか、卑弥呼の女王国、邪馬台国に至る道筋が書いてありますが、これによりますと、不弥（ふみ）国ですね。だから、一支国の次が末盧国、その次が伊都国、その次が奴国、そして東行、東に行って不弥国と。奴国は福岡平野ですので、その東、不弥、これが国になりますが、実はこの不弥国には粕屋であるという説と飯塚であるという説がございます。これをどっち、どうなのかということを、九州説と畿内説で解いていくのですけれども、時間もあまりありませんので、なぜそれではそのムナカタ国が『魏志倭人伝』には一支国、不弥国のように登場しないのかと、そんな国があったら当然登場するのではないかというのが会場の皆様のご疑問かと思いますので、それを少し解いていただきたいかなと。

それで、不弥国がムナカタの隣の粕屋であった場合は、当然不弥国から南に行って投馬国と邪馬台国になるわけですから、不弥国の東にあるムナカタは登場しないということですね。邪馬台国の道筋ではないから、30 余国の中に埋もれているということになりますが、その辺はどうでしょうか、西谷先生。

（西谷氏）『魏志倭人伝』のみならず、『三国志』がそうですけれども、『三国志』の中で一番大事なのは外交関係なんですね。魏の使いが目指す所は邪馬台国なんです。その途中に投馬国に立ち寄るわけです。したがって、不弥国から次が投馬国、さらに投馬国から邪馬台国へ、その３つ以外の所、途中、随分いろいろな国を通っていくわけですけれども、それはいちいち書く必要がないということだと思っております。目的は邪馬台国、途中に強大な投馬国があって、その他ずっといろいろな国々があって、その横を通っていくのでしょうが、それらをいちいち書き出すと切りがないし、意味もないということだと思います。

（板橋氏）そういうことで、なぜ『魏志倭人伝』にそういう海洋および交易および農業の国、ムナカタのことが書かれなかったのかというのは、九州説で、かつ不弥国が宇美（うみ＝粕屋郡宇美町）の場合は、女王国に行くために政治的な目的で行くのだから、その東のほうは書いていないということで、『魏志倭人伝』にムナカタ国は登場しないということは理解できるのではなかろうかと思います。ただ、不弥国は、立岩がありました飯塚、嘉穂ではないかという説もありまして、当の立岩遺跡を高校時代に発掘されました高島先生、その辺は、九州説と不弥国の位置についてはいかがでしょうか。

（高島氏）僕は飯塚の出身なので、当然、不弥国飯塚

説、かつての穂波郡であろうと、周りはそう思っています。そのとおり思っております。

でもいいかなと思っているのは、あれから南のほうと書かれていますね。不彌国から南、に投馬国ですか、南に行くとするとちょうど筑紫平野に入るのですね。ですから、そういう意味ではいいかなと思っております。しかし、はっきり言って粕屋郡は捨て切れません。

僕は、今日ちょっと言い忘れたのですが、立岩の漢式鏡を実際、学生時代に掘りました。本当にびっくり、ほおをつねったくらい、夢かと思ったぐらいなんですが、多くの人があの鏡は奴国経由だと言う方がありますけれども、前から少し疑問に思っているのは、どうも鏡の質が違います。福岡平野、須玖岡本辺りで出てくる破片しかありませんけれども、見ていると、鏡の鋳上がりがよくないですね。ところが、立岩の漢式鏡は非常に鋳上がりがよくて、非常に角が立っています。これを何でもかんでも奴国に結び付けるということよりも、私は、あるいはこのムナカタに頼んで、ムナカタ一族によって、楽浪郡辺りから交易品としてもらってきたものではないか。それを立岩に、交易という形で持っていったのではないか。あるいはまた、立岩がそういうものとして要求して手に入れたのではないか。どうも立岩の漢式鏡というのは、遠賀川の水運、あるいはムナカタ経由で入ってきたものではないかと考えています。

（板橋氏）それでは、高島先生、講演で朝鮮半島に直接結びついたムナカタ族、および遠賀川流域ということをおっしゃっておりますけれども、不弥国を嘉穂説とすると、その立岩の鏡もムナカタ経由ないしはこの一円の勢力の経由で入ったのではなかろうかと、そういうことなのでしょうか。

（高島氏）僕は昔から気になっているのですが、福岡平野、奴国が常に中心で、そこからいろいろな弥生文化が周辺に広がっていくという、そういう見方が考古学者、特に九州の考古学者には強いです。何か権威主義的な物の見方でありまして、例えば熊本県に黒髪式土器というのがありますが、福岡のある偉い考古学者の方は、あの黒髪式土器は福岡の須玖式土器の影響を受けた極めて保守的な土器であるとか、何か常に福岡平野に中心を置いて物を見てしまう。僕はもっといろいろな、弥生文化にしても多元、多様に見て評価をしていかないとですね。そのつながりを、それぞれの地域の文化のつながりを明らかにしていくことは大事ですけれども、どこかに文化の中心を持って、それが広がっていってというような、そういう一面もあるかもしれませんが、こと弥生文化に関してはあまりそれを強調しないほうがいいかなと。そういう意味で、何も立岩の鏡を奴国のお世話にならなくても結構だと。石畑の発掘成果はそのことを物語っている。

（板橋氏）奴国のお世話にも、畿内のお世話にもならなくて結構だということでしょうね。

それでは、そういうことで、不弥国が隣にあっても嘉穂のほうにあっても、九州説では『魏志倭人伝』にムナカタ国が登場しないのは、今おっしゃられたような理由で明確に説明ができるということで、“合点！”ということになりますか。

ところで、先ほどから石川先生、吉田先生が縷々おっしゃっている畿内説に、高島先生は断固反対と講演の中でもおっしゃいました。その畿内説でムナカタ国が登場しない理由を説明しようとすると説明できないですね。なぜかといいますと、畿内説では不弥国から「南」という『魏志倭人伝』の記述を「東」に読み替えて、東のほうに行くのですね。考古学的には畿内説が有力なのですが、文献としては非常に解釈として、それはおかしいと。「南」を「東」に読み替えたら全部狂っちゃうと。だけど、仮にそれを「南」を「東」に読み替えるとすると、不弥国の「東」の場合はムナカタ国になるのですけれども、そうすると、当然、登場しなければいけないということになります。（九州説でもう一つ）不弥国が嘉穂であればその（ムナカタの）東に行っても、ムナカタは直接奴国から行ったので、女王国に行くためだから飛ばされたということは言えるのですが、そういう意味で畿内説ではムナカタ国が『魏志倭人伝』に登場しないことは説明できないと。九州説では明確に説明できると

いうことを、どっちの説をとられるにしても、皆さんここで了解といいますか、位置付けておいていただきたいと思います。

ところで、畿内説の場合は、投馬国は瀬戸内のほうとされる研究者が多いのですけれども、瀬戸内代表で吉田先生、いかがでしょうか。

（吉田氏）文献を素直に読めば確かにそうなのですね。ただ、やはりこれについては、先ほど西谷先生がおっしゃられたような形で、全てが記載されていないのではないかというように、私は考えております。自分が松山にいるものですから、松山は何か一国であってほしいというか、一国に値する力を持っていると思っております。そういった中で、邪馬台国当時の最大の遺跡を考えていくと、やはり畿内説の纒向を最有力候補と考えたほうがいいのではないかというのが、今の私のスタンスになります。

そうしたとき、その手前に書かれている投馬国について、私も、どちらかというと瀬戸内、それなら最大の吉備辺りを想定するのがいいのかなと思っていたのですけれども、瀬戸内というのを前提的に考えるのではなしに、日本海側の鉄器の状況とかを考えていますと、日本海側を回って行ったということも十分想定していいのかなとも思います。こちらでは私も関わっています出雲荒神谷、そのあとを受けたような形で、西谷の墳丘墓とか、出雲の大きな力が窺えます。邪馬台国畿内説の中でも、日本海側のほうに投馬国を想定する、その可能性が高いのでないかと、最近は思うようになっています。

（板橋氏）それでは、投馬国は瀬戸内海に限らず出雲、日本海側の可能性が畿内説では大きいということですね。それでは、九州説で投馬国を説明する場合はどの辺に想定されるかというのを、西谷先生か高島先生かどちらか…。高島先生、では、お願いします。

（高島氏）僕は九州説をとっています。いますが、九州説でもどこかというのは幾つもあるわけですね。吉野ヶ里もあるでしょうし、今の朝倉市の付近、それから福岡市を考える人もいますし、それから今の八女、あるいは瀬高、あるいは熊本県の山鹿であるとか、あるいは豊前であるとか、いろいろな考え方があります。僕は、九州だろうと言いながら、そしてある程度特定するとすれば、環濠集落が弥生時代後期後半に発達する有明海周辺で考えたらどうかと。吉野ヶ里もその１つに入るのですけれども、そういうことで考えていくと、そして先ほど不弥国を旧穂波郡、現在の飯塚に考えると、今の朝倉のあの一帯、甘木市から朝倉の一帯は一考に価すると思います。

あの地域は、古代の筑紫の本拠地を構成していますから、あの辺りに大きな政治的な弥生時代のファクターが存在すると。特に、あそこに平塚川添遺跡というのがありますね。あれは10ヘクタールほどありますけれども、あれは、僕はマーケット、市場のあるところではないかと。本当の本貫地は東側の台地に福田台地というのがありますが、そこに展開するすごい弥生時代の遺跡が、今いろいろな人が予想しています。そこに、実は吉野ヶ里のような巨大な集落が存在する可能性を多くの人が考えています。

だから、そういう遺跡のある所ですから、投馬国を甘木、朝倉一帯に考えてみたらどうかなというふうに考えています。

（板橋氏）分かりました。それで、少し会場からの質問にお答えしたいと思います。これは全員にと書いてありますね。少し時間がありませんが、先ほど石川先生が取り上げられました纒向遺跡ですね。畿内の説の有力遺跡だということで、纒向遺跡の最大の弱点は何かということで、（この質問に対し）畿内説の側から、自分の説を補強する纒向遺跡の弱点は言いにくいかもしれませんが、そこを何とか、せっかく東京からお越しなので、いい点と悪い点と言っていただければ。あと、また高島先生にも聞きますけれども、どうでしょうか。答えにくければ、別の纒向遺跡に関してお答えいただければと思います。

（会場の石川先生から回答）

（石川氏）弱点のみですね。

（板橋氏）質問はそうですね。

（石川氏）纏向遺跡を中心地と見る説の弱点は、纏向遺跡が突如出現するのですが、そこに至るまでの過程がまだ考古学的にきちっと説明できない点だと思います。奈良盆地中央にあって弥生時代をとおして中核的な集落であった唐古・鍵遺跡がしぼむのと歩調を合わせていることや、同じ河川沿いに近接することなどから、奈良盆地の弥生時代集落の再編と纏向遺跡の出現が連動するとみています。しかし、もう少し具体的な考古資料で、纏向遺跡が出現する過程や具体的に説明する必要があると思います。纏向遺跡の出現に付随する纏向石塚遺跡など前方後円形の墳丘墓―初期古墳とみる意見もありますが―についても、その成立過程は、瀬戸内地域で円形の墳墓に台形の突出部をつけたものから発展したものですが、纏向遺跡に登場するまでにまだ半世紀ほどの年代の開きがあります。弱点はまだたくさんあると思います。まだ決定打はないとみるのが適切で、期待が先行しているのも事実です。でもその期待は非常に大きい。纏向石塚やホケノ山などの前方後円形の墳墓から格段に大型で定型的な前方後円墳である箸墓古墳、さらにそれ以後の大型前方後円墳が継続的に大和古墳群で築造されるプロセスは、皆さん、合意しているかと思いますけれども。

（板橋氏）ありがとうございます。なかなか謙虚なご説明でございました。それでもう１つ、吉田先生に少し質問で、武器形青銅器文化と銅鐸文化が統合されているところが、少し分かりにくいので補足ということで、時間もありませんので簡単にお願いします。

（吉田氏）銅鐸も武器形青銅器も前方後円墳には絶対入ってこないのですね。弥生時代で終わってしまうのです。でも、唯一、鏡だけは弥生時代からずっと連綿と持っていて、古墳時代に引き継がれていきます。そこには、銅鐸で西日本一帯を統一できない、あるいは武器形青銅器の銅矛で統一できない、そういう限界というのが青銅器祭祀にはあるのだろうと思います。その祭器としての性格は、銅鐸は文様をしっかり鋳出した器物として、祭器としてあがめられた。銅矛のほうは、武器としての鋭さ、金属光沢故にあがめられた。それを実は、鏡というのは両面で併せ持つことができ、かつ漢の王朝に起因するような威信財性というのを持っていた。だからこそ、古墳時代に引き継がれていったのだろうということを、少し図式化したものでした。

（高島氏）鏡とそのほかの青銅器つまり銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈とは祭器としての根本的な違いが、僕はあると思います。鏡は、僕は祖霊神がよりつく祭器だと思います。ほかの銅鐸なり銅剣、銅矛、銅戈というのは、もろもろの神々ですね。空の神だったり水の神だったりいろいろな神々、これは縄文時代からある日本人の根源的な信仰なのですけれども、新たに鏡が何でああいうふうに採用されていくかというと、先ほど国というものが成立する段階で、私は祖霊信仰というのが新たに成立して、それが支配的な一つの秩序として広がっていくと。その祖霊を映す依りつくものとして鏡が存在する。

ですから、この鏡とほかの祭器が一緒に埋められることはないですね。別に扱われる。それが古墳時代に引き継がれる。よくたくさんの鏡が棺桶の外側に置かれたり、鏡が棺桶の中に置かれたりするわけですけれども、棺の外に置かれているのは、僕は供献されたもの、献上されたもの。何で献上したかというと、自分たちが信仰する祖霊神の祭祀を、その被葬者に委ねるという意味があるんですね。また、その鏡は祖霊神の託宣を受ける聖なる権威を持っている。そういう意味合いで、やはり弥生時代に成立した祖霊信仰というのがより高められる形で、古墳時代に引き継がれているというふうに見ています。

ですから、鏡とほかの青銅器が一緒に埋められることはない。ほかの青銅器は、一緒に埋められることはありますけれどね。

（板橋氏）分かりました。それから、これは九州説、畿内説にかかわらず、初期古墳ないしは大和の定型古墳に副葬される鏡、剣、玉、「三種の神器」ですけれど、これは弥生時代の九州の葬制であると。後期に

若干様態が変わってきますけれども、それがなぜ畿内に入るのかということが、畿内説への疑問になるかと思います。

時間もありませんで、まとめもできませんから、ここで皆様会場の方に、邪馬台国は畿内か、九州か、どっちか拍手をもってですね。これを提案したのは、もちろん、高島先生なんですけれども、畿内に行っては九州説の拍手の少なさにがっかりされている。まあしかし、それはいずれにおいても会場の方に拍手をもって、九州説ないしは畿内説を支持していただきたいと。

それではまず、邪馬台国は畿内と思われる方は拍手をしてください。

（会場「拍手」）

それでは次に、邪馬台国は九州と思われる方は拍手を。

（会場「拍手」）

圧倒的とは言いませんが、九州説のほうが多かったように聞こえます。しかし、畿内説の吉田先生も、石川先生も、九州説の高島先生も、皆さんの拍手に、にこにこ笑ってお応えしておられましたので、これからも論議はにこにこ笑いながら続けていただくということになるかと思います。皆さんもご研究されたらいいかと思います。

これで、討論を終わります。

（会場「拍手」）

温故知新と回想

―宗像二題―

滋賀県野洲市教育委員会　文化財保護課
花田　勝広

序

過去の事象は、世代の消滅と共に記憶から薄れ、記録として書いておかなければ、歴史から削除され、次世代に残らないものである。私たちは、生きている世代しか知る事ができない。こうなると、記録したものしか歴史にならない。他は露と消えるのだろう。

筆者は、宗像市図書館深田分館の郷土資料室に提供するために、宗像関連論文等 500 本を集め、戦前の雑誌を集成・デジタル化しているなかで、かつて研究内容や先学の書いた成果が次ぎの世代に伝わっていないものが多くあり、なぜ知識が蓄積される事なく、繰り返されるのか疑問を持つようになった。そこで本稿では、その中の気になる二題について検討する。

第１題　宗像会と出光佐三翁

明治 24 年に結成された宗像郷友会(宗像会)は、会誌『宗像』を通じて、宗像出身者の集まる東京宗像塾を基点に、全国の出身者の親睦・交友を図る会員数が千人の団体であった。出光佐三も会員の一人であった。戦後に宗像大社復興の本格的に進める原動力は、この会が母体となり、出光兄弟や出光興産幹部も会員であった。佐三の活躍を通じて、宗像の基層意識の本質と宗像会と佐三の行動と影響を検討する。

第２題　宗像の発掘調査黎明期

宗像に大規模団地の開始されたのは、昭和 40 年前半の日の里団地で、開発に伴い文化財の発掘調査が開始された。この頃に調査を実施された波多野晥三先生と福岡教育大学歴史研究部考古班の活躍や文化財啓発を紹介する。併せて宗像高校歴史研究部、東海大学付属第五高校歴史クラブの活動を関係者の一人として記録として纏め、その後の影響を考えた。

目次

第１題　出光佐三翁と宗像郷友会（宗像会）

１．宗像の基層意識の形成

（1）早川勇とは

（2）宗像会の概観

２．出光佐三翁と宗像

（1）佐三の事業と宗像

（2）佐三と宗像郷土館・郷土会館建設への支援

（3）宗像神社復興期成会会長就任と復興

（4）佐三と先人の顕彰

（5）佐三と戦後の宗像会

（6）鎮国寺の復興、東郷公園の再建

（7）福岡教育大学の移転統合

（8）出光佐三の宗像での講演会

（9）出光丸の竣工見学

３．著作・評論・出版と顕彰事業

（1）著作・評論・出版

（2）宗像での佐三翁顕彰事業

４．まとめ

（1）佐三翁はどんな人

（2）今日、出光佐三翁の痕跡を探す。

第２題　宗像地域における黎明期の遺跡発掘調査

１．波多野先生と福岡教育大学歴史研究部考古班

（1）波多野睦三先生

（2）福岡教育大学歴史研究部考古学班の活動

（3）調査活動と成果

２．文化財保護と啓発活動

（1）城ヶ谷古墳群発掘を通しての文化財保護運動の展開

（2）城ヶ谷古墳群調査の取り組みと評価

（3）城ヶ谷古墳群のその後

３．宗像郡内遺跡の分布調査

（1）調査とその内容

（2）宗像町遺跡分布調査のまとめ

４．野坂の土器と中松元古墳群

５．考古班活動がその後に及ぼした影響

６．高校クラブの活動

（1）宗像高校郷土研究部の活動

（2）東海大学付属第五高校歴史クラブの活動

７．まとめ

（1）40 年後の宗像の古墳

（2）40 年後の後悔

総括

１．宗像の特性

２．文化財の調査・啓発の歴史

３．結語

出典・参考文献

第１題　出光佐三翁と宗像郷友会（宗像会）

出光佐三翁
（画像提供　出光興産株式会社）

彼は、宗像大社を復興し、福岡教育大学の誘致、郷里の人材育成に尽力され、今の宗像の根幹を造った。宗像をこれほど愛し、宗像人に影響を与えた人物は、歴史上に存在しない。（筆者）

１．宗像の基層意識の形成

宗像の基層意識は、古代・中世の宗像大宮司が地域領主として、自主性を持ち独立していたものが、宗像氏貞の死去により統治権が崩壊、豊臣秀吉の九州征服により、後に黒田藩領地となることで変容する。江戸時代の黒田藩の時代は、農耕基盤の水田と玄界灘の領地・領民支配が行なわれる。唐津街道の宿である赤間と畦町に通るのみの静かな農村と漁村であった。大きく変わるのは、明治時代で、人々が自由に土地を離れ移動し、明治 20 年以後の鉄道開通によって大きく広がる。この流れの中で、郡民が土地を離れることにより、同胞意識の形成で宗像会が発生する。「宗像は一つ」という考えは、ここから始まる。その基層・同胞意識形成のきっかけは、幕末の勤皇志士である早川勇が関係する。

(1) 早川勇とは

天保 3（1832）年 7 月 23 日、遠賀郡虫生津村に生まれ、宗像郡吉留村の医師早川元瑞の養子となる。嘉永 2（1850）年、藩医の板垣養永に従って江戸におもむき、儒学を学ぶ。嘉永 6 年（1854）年のペリー来航で世の中が騒然とする中、福岡に帰った勇は勤王討幕の志士として活躍した。西郷隆盛、中岡慎太郎、高杉晋作らと接触し、三条実美はじめ五卿の西遷を実現させ、薩長同盟の基礎づくりに奔走した。五卿落ちの一行は、赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1 月 18 日～2 月 11 日に一ヶ月ほど滞在する。

早川　勇

ところが福岡藩の佐幕派は、勤王党の全滅を計画し、勇も幽閉される。その間、討幕の世論はいよいよ高まってゆき、慶応 3（1867）年 10 月、薩長に対して討幕の命が下り、12 月にはついに王政復古の大号令が発せられる。

この政変で勇も解放されて吉留の自宅に帰り、これを聞いた赤間、吉武方面の村民は、郷土の栄えある偉勲者を迎えるために沿道を埋めたそうである。時に明治元年（1868）1 月 1 日、勇は 38 歳であった。

その後、奈良府判事や元老院大書記官を勤め、晩年は郷土の育英事業に専念し、明治 32 年 2 月、68 才で亡くなる。ここまでが一般的な彼の業績で評価される。

ところが、彼が宗像郷友会（宗像会）の結成に関わり、もう一つの役割が明らかとなる。

早川翁は、何にも心に留めることもなく活淡たる心情は、晩年を子弟教育に捧げた。東京在住の時は、「その邸に出入りする書生（学生）は幾百人、その邸に寄食し補助を受ける者、幾十人、当時三十間掘の孟嘗君と都下に宣伝する所」となったという。早川邸は、現在の東京都中央区銀座 8 丁目にあ

たる。しかも、「翁は極めて質素倹約にして駄奢の風ない人」また、「その晩年は、藩の後進子弟の教育に捧げ、報酬の大部分を学徒の教育費に投じて、苦学生の訃報を聞き、その葬儀を行ったこともある」という。彼が、東京に上京した宗像出身者・旧黒田藩関係者を可愛がった。ここに連帯意識から宗像郷友会が生まれる。幕末の志士であるが、宗像会の精神的主柱として、戦後まで尊敬された。ただし、孟嘗君と呼ばれたころは良かったが、この後これが原因でご苦労された。

(2) 宗像会の概観

①宗像会の概要（明治～昭和前期）

明治 24 年 11 月、早川邸宅に集まり東京に在住する宗像郡出身者の間で、「郷友雑誌」の第 1 号が発行されたが、宗像会はこのとき、まず東京で自然発生的に結成されたものといえるが、中心人物は吉田良春（陵厳寺出身）で、伊東尾四郎（東郷出身）・中村哲二郎（原町出身）・伊豆直吉（武丸出身）が発起人となる。その後「宗像」を媒介として大阪・福岡・北九州・飯塚等の各市をはじめ、海外でも結成されるようになり、会員数は 1,200 人を越えた。宗像会は雑誌から機関紙へ変貌した「宗像」を通じ、会員及び宗像神社との連絡をはかるとともに、神徳を宣揚することを目的としている。ここで機関紙「宗像」の歴史をたどり、宗像会の変遷を概観すると、まず東京宗像会で発刊した会誌「宗像」は、在京の学生が輪番幹事になって編集にあたり、毎年 4 回発行して昭和 10 年に至る 46 年間に既に 144 号まで発行している。その後の経過は次のとおりである。郷友雑誌の題字は、幕末志士、早川勇による。昭和 11 年 8 月 3 日、宗像神社発行の「神光」と宗像会発行の「宗像」との合同を協議する関係者の会合が、宗像神社で開催され、その結果、両者を合同して年 4 回会員制によって会誌を発行することとなる。しかし、戦争により、会誌はつい漸次遅延し、昭和 18 年、遂に第 163 号で自然休刊の止むなきに至った。

宗像会全盛期の頃の大正 4 年に、石田和吉の記事があるので紹介する。
（宗像会と機関誌　「郷友宗像・宗像」について　『宗像』100 号　大正 4 年より引用）

「明治 24 年、11 月 9 日に、郷友雑誌として、第 1 号が発刊されてからは、号を重ねること 145 号となり、同 46 年、現在会友数千人に達している。この偉大な雑誌は、日本一で、他に類例ではないのである。名称は、初め郷友雑誌であったが、途中宗像と改称された。年 4 回の発行で、学生が余暇を利用して、編輯献身的な努力を以て今日に至らしめたのであるが、維持のための空前の灯というべき、状況に陥ったこともあった。責任者と云うべきものもなく、順廻りに学生が、世話人となって、斯くも長く保っているのは、全く宗像人の着実にして、持久性に富み粘り強い気質が、この雑誌において発現したものと言わねばならぬ。また、大正 4 年 1 月号は 25 年目で第百号記念号であった。実に堂々たる物で菊版三百余頁、宗像の誇りの偉大なるものと思われるのである。

本誌発行の所以については、郷友雑誌第1号（明治24年11月1号発行）の巻頭の主旨を記述して宗像人の意気を示すことにする。発行の主旨たる会員諸氏の熟知するところと雖も、或は未だ其の旨を解せざる人なきを保せず、故に今其の大略を述べて広く本郡有志の士に告げ、その賛成を仰ぎ併せて会員と為せるを諾せらんことを希望するものなり。

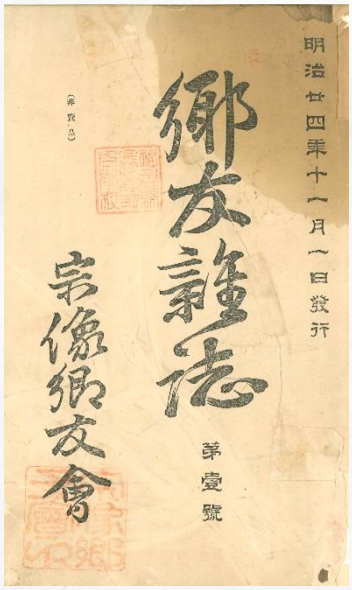
近代世相一変し所雲四塞の小天地間に躊躇し、我が国民も我が晴朗広潤なる蒼穹を仰ぎ万里の青涯を望んで東航西駛し、是において我郡の如き西陲陬邑の子弟も鍬を投じ超ちて中原遊ぶものあり、祖先以来十世未だ会いて四塚の麓を離れ釣川の岸を去らざるもの、今富士岳を仰ぎ太平洋を眺め利根隅田の河畔に吟じ、或は賀茂の清泉を掬し東山三十六峯の景を眺め、或は朝瞰金鯱に輝く奇景を賞し、或は更に進んで落機山に登り蜜櫛此河に浮かぶものあり。斯の如く一郷の士にして四方に離散し復した昔日の感にあらず、この本誌発行の止む能はざる所以なり。乞う詳に之を云わん、物相離れて情潮々疎なるは常なり、然れども離れて情喩々切なるものは故郷なるべし。故郷の光栄なる所は父母兄弟の住む所なり、疎ならんと欲すと雖も得ん、況んや少時遊嬉眺望せし、所の山川草木の美景は決して眼底を去らざるを、是を以て郷を離れるもの未だ会で故山を望みて其の他の災なからんことを希に父兄諸友の恙なからんを、祈らずんばあらず、郷にいる父兄諸友もまた懐慕して、故に各自の消息を報じ各地の状況を告げ兼ねて本郡の幸福増進の道を論じて本誌に掲載し以て親愛の情を表す交誼を全うせんと欲す、これ本誌発行の理由の其の一なり。

郷を同じくする人々は父子兄弟の情あり、老いては教え少なくは問い長き率い幼は従う、之自然の勢なるのみならず実に年少、徳乏しき者は長老の戒飾を仰ぎ幼学者は先進者の鞭撻を受ける必要あり、然れども山海阻絶ん相見ることを得ずんば何を以て其の胸憶を陳べ其の志念を談ることを得ん、今本郡子弟の他郡に遊ぶもの常に30～40人、長老の人豈憂慮する点なしとせんや、又本郡高等小学校を卒するもの50～60人、豈先進の士一言の其の志気を躊躇することなくして袖手傍観するに忍びんや、故に此雑誌において老幼少長各其の胸を披き、情を蓋し戒飾し鞭撻し以て老は安んじ少は楽しむ境域に進まんと欲す、是れ本誌発行理由の第二なり。

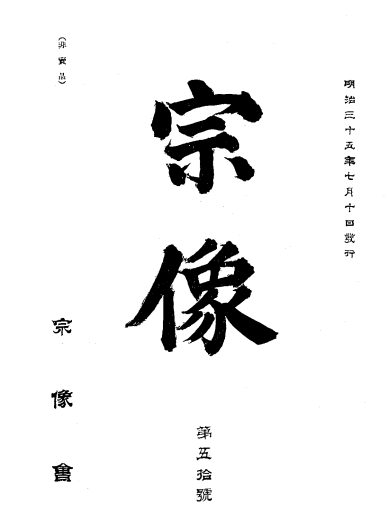
我郡は、古来、宗像神社の鎮座ましますを以て、中古親王公卿が下りて、祭祀を司り賜う例ありし故に、民俗徳化に風靡し古より孝子節婦の後世に伝うべきもの少しとせず。且つ宗像氏数十世の居城なるを以て一個独立の歴史を有す、此等の遺事古聞を蒐集せば、故事の煙没を担ぎ風化の万一に補うなしとはせず、是本誌発行理由の第三なり。

且つ近世学術の探究日に切に、之に従事する者山河を跋渉し湖海を横航し物事を見風俗を察し兼ねて名山に攀じ、大川を浄うじて活気を養うの徒、会員中数頗る多きを知る、故に此等の人々の記事必ず見るべきものあらん、且つ才能富みその文章詩歌を投稿せられ又文学上の好雑誌たるを疑わず、これ本誌発行理由の第四なり。

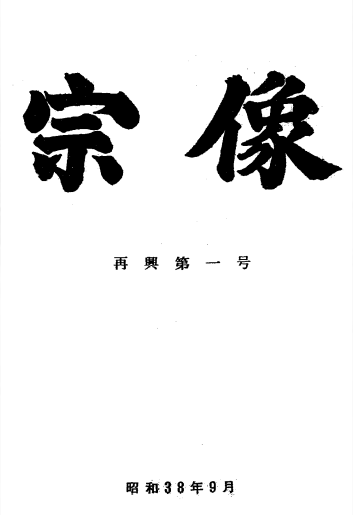
其の他本誌の直接または間接の目的は多かるべしと雖も要するに郷友の考誼を厚くし知識を交換し徳行を奨励し老幼少長其の責任を書し以て本郡の福利を増進するにあたり、会員諸氏幸に善く此の意を諒し投稿の労を敢えてくつす僻することなかれ。



郷友雑誌



宗像



再興　宗像

②宗像会と宗像塾の実態

宗像会は、昭和の高度成長期までは、有名な団体であったが、この団体を纏めたものがなく、昭和 61 年の占部玄海『郷土歴史資料叢書　人物往来』第 3 輯が最初で唯一のものである。東京の宗像塾で生活していた学生の柴田節郎の回想録「宗像塾の思い出」の収録があり、詳しく当時を知ることができる。以下、引用する。

*「**雑誌「宗像」の発行**　宗像会は、宗像会の機関紙「宗像」の編集発行をしていた。宗像会は本部を東京宗像塾におく旨の会則にある。しかし、宗像会の歴史は塾よりももっと長い。明治 24 年に第 1 号が発行されている。宗像出身の東大生が中心であった。誌名も当初は「宗像郷友会雑誌」といったが、31 年、35 号から「宗像」となった。はじめの頃の幹事をあげると、吉田良春（法学部、住友重役）、中村啓二郎（工学部、住友重役）、安部正也（工学郡、国際汽船重役）、深田千太郎（法学部朝鮮総督府、実業にて活躍）、伊東尾四郎（文学部、福岡県立図書館長）、八波則吉（文学部　五高教授）、平田知夫（法学部　駐ロシヤ大使館一等書記官）、入江海平（法学部　拓務次官）氏等、そうそうたる顔触れで、後年実業界、官界、学界、教育界等で活躍された宗像の代表的な人々である。宗像塾が「宗像」を編集するようになって、ここに宗像会本部が定着したのである。「宗像」は郷里*

を出て、愛郷の念やみがたい人たちと、郷土宗像との連絡の欄であった。会見消息と郡地のたよりが主要な記事であった。その他、論説、文苑等の欄があって会員の投稿による充実した内容の高級な記事がのった。本誌によって、宗像を離れた人は望郷の念をいやすことかでき、郡地の人は各地で活躍している人の動静を知ることかできた。在米会員の多かったこともうなずける。会員数は最盛時には1,200人に達したという。関東大震災で休刊するまで120号を出している。随分発行されたもので、今でも旧家にはこの雑誌が何号か残っている筈である。表紙の「宗像」という風格のある字は、教育家、書家として有名であった、田島の興聖寺の住職手嶋宥峰氏の揮毫であるという。この人の記念碑は興聖寺の前に今もある。この由緒ある雑誌も、あらゆる会員雑誌同様、会費の未納による財政難に悩まされたうえ、郡制廃止後は郡よりの補助金も打ち切られ、大震災後、塾の解散と共に自然休刊となった。

宗像塾のはじめ　宗像塾は「浩々居」の弟分ということになっている。では「浩々居」とは何か、福岡の生んだ宰相広田弘毅の伝記には必ず出てくる名前である。広田が一高時代、耕友の平田知夫とはかり、同郷の学友5人で、明治33年小石川に小さな家を借りて、自炊をはじめたのか「浩々居」のはじまりと言う。この平田知夫は私の伯父で修猷館、一高、東大、外交官と、広田と行動はしたか、モスコー駐在中病を得て40才にして世を去った。だんだん入居者もふえていったか、その中には宗像出身の人たちもいた。主な人をあげると、入江海平（上八出身、拓務次官）、林繁蔵（徳重出身、朝鮮殖産銀行頭取）、高武公美（在自出身、福岡市助役）、釜瀬富太（野坂出身、九州学園理事長）がある。そのうち、「浩々居」にはいれなくなった宗像人たちが、当時、東京外語の学生であった滝口亮造を中心として、平田と相談し、「浩々居」の近所に家を借りて作ったのが宗像塾である。その後、塾生もふえ、住所は小石川白山御殿町、原町、本郷千駄木町と変わったが、「清々居」との友好関係は続き、中には両方に籍をおいた人もいたくらいである。

宗像塾の発展　もともと宗像は教育熱心な郡、上級学校に志すものは多かったが、現在とちがって殆どの学校は東京だったので、上京者は年と共に増えた。さて子弟を上京させるとなると、父兄の関心は子弟が病気にならず、悪の道に迷わず、学に励んで無事学業を終えてくれるということに尽き、一方学生の方も、田舎から出てきて大都会の一隅で、一人で暮らすことは心細いことかぎりない。同郷の者が生活を共にし、共に戒めあい、共に学び、共に楽しんでいる宗像塾は、父兄、学生双方にとって頼もしい所であった。その存在価値を貫われて、郡からも補助金が出ていた。宗像塾が在京宗像学生の中心となったのも無理はない。創立後十年たった大正4年までに、塾に席をおいた人は70名を超えたというから、その盛況のほどか偲ばれる。

前期の終わり　全盛をほこった宗像塾も、本郷千駄木町時代、大正12年の関東大震災のため、家が大破し、塾生もちりぢりとなって解散のやむなきにいたった。しかし、この間数多くの人材を送りだした。今、千駄木町時代の在塾生中より全国的に活躍された人をあげると次の人々がある。倉田主税（東京高工、日立製作所社長）、安永渡平（東大、八幡製鉄所副社長）、古野清人（東大、学士院会

員）、出光計助（出光、出光興産会長）、安部隆任（一橋、三井物産重役）など。古野氏は九大教授を経て、独協大、駒沢大、都立大教授をされているが、52年学界最高名誉である学士院会員に列せられ、更にフランス政府からパルム・アカデミック勲章を受けられた。安部降は現在福岡市在住、会社顧問の傍ら、福岡宗像会の会長をしておられる。

『宗像』の復刊「宗像」が大震災を機として宗像塾の手をはなれたことは前に述べたが、宗像会本部は宗像中学におかれ、中学で何回か発行されたまま中断状態となっていた。しかし、この由緒ある雑誌を何とかして復刊させたいという意見や希望か会員間に多く、昭和5年の宗像会夏期総会は、暑い最中すきやき鍋というのか総会の慣例であった。出席した塾の阿部正彦を通じて、塾にたいして「宗像」引受の交渉があった。当時塾は阿部正彦、寺野泰雄（3回、東大）、安川太朗、永野高雄、趨智汎愛と柴田兄弟の7人であったが、協議のうえ、できるかぎりやってみようということで引き受けることにした。「宗像」復刊がきまると旧会員の反響は強かった。各地からの消息は集まるし、投稿も多かった。伊豆先生はじめ伊東尾四郎、深田千太郎、服部音太郎、石田和吉氏等、昔の幹事の方々より喜びのことばをいただいて一同大いに気をよくした。石田氏は「宗像」最盛時の幹事で、文名は関係者間に鳴り響いていた。原稿の割り振り、印、校正等、型通りの苦労を経て、昭和6年5月1日に復刊第143号を出すことができた。会員は当時450人位だったと思うが、帯封を書いて発送し、帰ってきて一同で打上げのスキ焼鍋をつついたときの楽しみは忘れられない。このように、苦しみと喜びを交えながら何号か出したが、先輩と同じように原稿難と会費未納には手を焼いた。この苦労は勉学中の学生の手にあまるものであった。何号か出したまま、また「宗像」は郷里へ戻った。今度は宗像大社で戦争まで発行された。昭和16年12月26日発行第162号が私の手許にあるさいごである。私も東京の委員として、集会の記事や会員消息を送った記憶はあるか、戦後はどうなったであろうか。塾での発行は長つづきしなかったが、尊い経験だった。

塾の終焉　天神の塾は十年以上もつづいたが、借家の悲しさ又家主の都合で立退かされ、昭和15年中野上高田に移った。塾ははじめから終わりまで借家住まいであった。兄貴分の「浩々居」が早くから自前の家を持ち、財団法人となっているのと対照的であった。何とか自分の家を持ち落ち着いた気分で暮らしたいというのが、歴代の塾生の願いであった。これは先輩から引き継がれた悲願ともいうべきものであった。しかし寄付金を募り、土地を買い、塾にふさわしい家を建てるということは、年々に交代していく学生にとっては無理な仕事であった。先輩の中服部吉太郎、出光万兵衛は熱心に協力して下さったが、いろいろのいきさつもあり実らなかった。その間、時局は急進し、上京学生は少なくなり、塾生も5人となった。上高田にいること一年、とうとう塾も解散のやむなきに至った。かくして宗像塾は、明治37年創立以来昭和16年まで、一時の中断はあったが、約40年つづいた輝かしい歴史の幕を閉じたのである。しかしその間に送り出した人材は200人に近かろうと思われ、その人々がそれぞれの分野で活躍していることを思えば、宗像人発展の礎石としての任務は充分に果たしたわけである。塾時代の思い出は各人の胸の中にいつまでも続いている。

この雑誌は、明治 25 年の 3 号に河邊稔が「教育家諸君の左右に致す」と教員の推進が書かれ、安部正也によって家庭教育の必要が説かれている。明治 33 年には、宗像教育会があり、女子教育の問題が議論されるなど、教育関係記事から始まる。明治の気風を強く持つ雑誌で、郷友の交友と新知識の取得や切磋研磨を目的としている団体であった。

注目されるのは、吉田良春（法学部、住友重役）が提唱者で、中村啓二郎（工学部、住友重役）、安部正也（工学郡、国際汽船重役）、深田千太郎（法学部、朝鮮総督府、実業にて活躍）、伊東尾四郎（文学部、福岡県立図書初代館長）、八波則吉（文学部、五高教授）、平田知夫（法学部、駐ロシヤ大使館一等書記官）、入江海平（法学部、拓務次官）等、そうそうたる顔触れで、後年実業界、官界、学界、教育界等で活躍された宗像の代表的な人々である。「郷友雑誌」1 号には、早川勇が 60 歳で元気であり、投稿されている。もちろん内容は、幕末の勤皇志士のことである。伊東尾四郎は後に、『福岡県史』・『宗像郡誌』等を編集・発刊するが、大学生の頃に貝原益軒の「続筑前国風土記」、青柳種信の「続筑前国風土記拾遺」の史料の重要性を指摘し、自らまとめることを宣言している。4 代目の編集長である。年四回の編集は、彼の能力を鍛えることになる。大正 12 年（1923）9 月 1 日にマグネチュード 7.9 の関東大震災が起こる。関東大震災前の編集長は、古野清人（東大、のち学士院会員）で、災害で印刷所がつぶれる中、ガリ刷りにより同年 13 年 1 月に 134 号を発刊した。何があろうと郷友の為、停められなかったのだろう。しかし、印刷所の復興が遅れ 2 年間ほど中断し、大正 14 年 8 月に 135 号が発刊される。後に、古野は昭和 12 年に宗像で宮座の民俗調査を実施している。この時は、古野の名が通り調査が容易に出来たようだ。古野は宗像への想いが強く、戦後に『農耕儀礼の研究−筑前宗像における調査−』1970 年　東京大学出版会から刊行される。この発刊は、宗像会への回想に近いものだったのだろう。関東大震災後、一時は再興したが、東京から宗像会本部が宗像神社に置かれ、宗像辰美（宮司）・石田和吉が昭和 10 年〜終刊の編集長であった。会員数は、名簿で拾うと明治 31 年に 262 名、明治 37 年に 423 名、大正 4 年に 1,005 名、最高で 1,200 名、昭和 14 年で 920 名となる。当時の有力者や知識層の殆どが入会している。

このように、当時、宗像名物は「教員・鶏卵」と云われるほど、福岡県下で有名であった。鶏卵は、江戸時代後期には黒田藩の検地や奉行などの役人視察の際は、常に卵がお土産であり、明治時代になると大阪に輸出する櫨実（はぜのみ）と共に一大産物になり問屋もあった。地元の宗像会の多くのメンバーは教員が多く、今日までこの伝統は続く。

戦前の地方雑誌としては、第 1 巻〜第 163 号まで、51 年間も続いた同人雑誌は殆どなく、当時より全国一と評価されている。宗像は一つと意識される基層意識は、この会の影響に神郡宗像の歴史性が後に付加したものである。『宗像』には、興味深く検討すべき内容があるが、ここで留める。

２．出光佐三翁と宗像

(1) 佐三の事業と宗像

佐三は、明治 37 年（1904）4 月、中野吉三郎の紹介により 19 歳で宗像会に入会する。記事によると、「赤間の人、目下福岡商業学校に在学中」とある。中野吉三郎は、「朝町の人、目下上京、下谷区車坂町 88 番地に御寄留の由、法律学校入学の準備中」とある。福岡商業学校 4 年の時であり、進路を考えていた頃である。会員であった兄の雄平が脱会し、佐三が入会する。明治 42 年（1909）までの 5 年間会員となり、神戸高商（神戸大学）に在学中までである。したがって、商業学校卒業後も宗像の情勢は、『宗像』の会員通信を通じ知っていたと思われるが、酒井商会の丁稚となり脱会している。卒業証書を捨てた頃である。

大正 6 年（1917）に門司で出光商会が軌道に乗った頃に、石田和吉の紹介で佐三（32 歳）が、再び宗像会に入会する。当時、明治 44 年に日田重太郎から資金を渡され、6 月に門司市に出光商会を創業し、7 年後である。数年前に南満州鉄道に車軸油の納入に成功し、事業が軌道に乗り出した頃である。石田は、雑誌『宗像』100 号の特集号を発刊した編集長であり、同郷の出光に入会を持ちかけたものである。関門海峡で「海賊」と呼ばれた頃である。以後、時系列で宗像の活動と彼の石油事業をまとめる。なお、宗像の視点で彼の足跡を追う。

貴族院議員　昭和 12 年（1937）貴族院多額納税者議員に出光佐三が選ばれ、2 月に宗像神社に参拝する。52 歳のころで以後、貴族院議員（多額納税）として登院し、貴族院が廃止されるまで議席を持っていた。次の昭和 13 年の記事には、出光の 53 歳で「貴族院議員、門司商工会議所会頭、満州国名誉理事として公務多忙の模様であるが、又一面、出光商会の家業も繁盛し、去る 6 月 10 日には、新鋭油槽船『日章丸』を進水させた。この船は三菱造船所の製造で一万一千トン、400 万円を投じたと云う巨船ですから、益々出光商会は発展するであろう。本会としても郡としても喜びに堪えない」とする。入会から事業に多忙であり、ほとんどこの間の記事は見られない。昭和 14 年に再選される。高橋昇委員の出光評に「氏は、明治 18 年出生と云いますから 55 歳。福岡商業高校を卒業後、神戸高等商業高校に学び明治 42 年に卒業された。在学時は外交官志望であったが、父上より・・・諭され独立自営の意を固めたと云う。」と紹介があり、先鋭の事業家として、認識されている。

郷土館寄附　昭和 13 年（1938）4 月に出光に関係者が、宗像郷土館の増資の懇願、郷土館建築状況の報告に行き、最終的に建設費用の 32,000 円のうち 2,500 円を賛助している。最も多い寄附である。開館は、12 月に宗像郷土会館と共にオープンする。

昭和 14 年（1939）に貴族院議員に出光佐三が再選され、『宗像』158 号に報告される。翌年に宗像会の終身会員となり、3 月には出光興産株式会社を設立、8 月には、『宗像』に出光の躍進記事があり、宗像出身者の事業家として、郡民にも広く知られる。昭和 16 年（1941）の宗像会創立 50 周年、弟の出

光弘が終身会員となる（160 号）。12 月には、太平洋戦争が始まる。昭和 17 年 3 月、出光興産本社を東京の東銀座に移転する。

昭和 17 年（1942）11 月に宗像神社復興期成会会長に出光佐三を選任される。昭和 20 年（1945）の 8 月に敗戦となる。宗像郡の当時人口は 54,321 人である。

敗戦　8 月 出光佐三は、終戦の 2 日後、従業員に対し「愚痴をやめよ。世界無比の三千年の歴史を見直せ。そして今から建設にかかれ」と訓示した。60 歳の還暦でも、我意思を通す人である。当時、多くの企業が人員を整理する中、出光佐三は約 1 千名の従業員の首を切らないことを宣言した。そして、タンク底油集積を経て、昭和 22 年 10 月、石油配給公団の販売店指定を受ける。11 月に出光商会と出光興産が合併し、出光興産として再出発する。昭和 25 年（1950）6 月には、朝鮮戦争が起こり福岡県板付飛行場は最前基地となり、F 86 戦闘機など一日約 300 機が発着する。また、朝鮮戦争で北九州に警戒警報が発令される。出光の石油輸入基地の室蘭・川崎・神戸油槽所竣工がなされる中の 7 月に「宗像神社」を書かれている。さらに、法事で宗像郡赤間町にもどり、町長や有志と会い懇親を広め「夢」を書く。これらは、『四十年間を顧る』に纏められる。

昭和 27 年（1952）4 月には、平和条約締結（サンフランシスコ平和条約）により、占領軍から日本が正式に独立する。

日章丸事件　昭和 28 年（1953）5 月に、日章丸事件となる。石油事業を国有化し大国イギリスと係争中のイランに、日章丸二世（1 万 9 千トン）をイラン石油輸入のため、イランのアバダン港から、ガソリンと軽油を満載し川崎へ入港する。英国アングロイラニアン社は、積荷の所有権を主張し、東京地方裁判所に提訴した。出光の奇策により出光の勝訴が決定し、日本国民を勇気付けるとともに、イランと日本との信頼関係を構築する。この時に出光佐三は、東京地方裁判所の北村良一裁判長に「この問題は国際紛争を起こしておりますが、私としては日本国民の一人として俯仰天地に愧じない行動をもって終始することを、裁判長にお誓いいたします」と答えた。歴史に残る有名な話である。宗像ではこの年、6 月に台風により北九州豪雨、釣川が氾濫し宗像大洪水害が起こる。宗像低地の海抜 4.5mライン以下は水没し、田畑に水害を与えた。記録に残る最大のものである。8 月に宗像神社の拝殿修理などに国庫補助 53 万円と文化財愛護委員会が発表した。昭和 29 年（1954）5 月、沖ノ島 1 次調査が実施される。12 月に沖ノ島を国営漁港として 4 億 5,000 万円で修築することが決まる。昭和 30 年 1 月に復興事業で田島・高宮の土地が買い上げられる。9 月には、孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松源寺で、200 回忌讃仰法会が行なわれ、翌日父の松寿の 13 回忌を赤間法然寺で行なわれ、9 日に武丸正助廟での 200 回忌に遺徳をしのび、正助伝記 3,000 部を寄附される。ここに序文を書かれる。12 月の復刊宗像に「宗像族の雄心」を書く。この年に沖ノ島 2 次調査が実施される。昭和 31 年（1956）7 月の復興宗像 2 号に「アメリカを視察して」が掲載される。昭和 33 年（1959）3 月、念願の出光興産の徳山製油所が竣

工する。昭和 35 年（1960）に宗像高校にて記念講演（創立 40 周年）で講演する。4 月には、出光興産がソ連石油を輸入し、マスコミに赤い石油と呼ばれる。

教育大学の統合移転　昭和 35 年（1960）12 月、高山勉町長が福岡刑務所の吉武地区への移転を断り、学芸大学の統合移転が検討される。昭和 36 年（1961）に「こころの世界」を書く。昭和 37 年（1962）3 月、沖ノ島出土の銅鏡などが国宝に指定される。鎮国寺の護摩堂が完成する。9 月には、宗像神社の長久手神事と呼ばれた「みあれ祭」が約 400 年ぶりに復活し、漁船 180 隻が参加する。この年に『人間尊重五十年』が出版される。復興期成会会長代理に出光泰亮（佐三の弟）が就任し、宗像神社の復興業務を取り仕切る。

一匹狼　昭和 38 年（1963）に出光興産の千葉製油所竣工（1 月）、出光興産が石油化学工業へ進出（4 月）する。出光興産は 11 月には、生産調整に反対し、石油業法に反対し石油連盟脱退を決める。マスコミに出光脱退が「業界の一匹狼」が檻を出たと呼ばれたころである。『「人の世界」と「物の世界」-40 の質問に答える-』が、出光興産社長室より出版される。復興された宗像会の会誌に再興宗像 1 号に「宗像会に寄す」書く、名誉会員となる。10 月 22 日、学芸大統合起工式に出光佐三社長が出席、城山中学校講堂で講演する。昭和 39 年（1964）、「年頭所管」で教育大学の設置の抱負を再興宗像 2 号に書く。4 月、宗像神社宝物館の本館が完成し引き渡しが行なわれる。5 月に東京で福岡県人会総会、会長に出光佐三に就任する。5 月 21 日に墓参り帰福し、八所宮・緑風園・武丸正助廟に参る。8 月に武丸正助翁の伝記 3,000 部を配布する。この年に『題名のない音楽会』が放映開始される。11 月に宗像神社宝物館が竣工する。

昭和 40 年（1965）1 月に宗像神社宝物館の開館、矢次ざまに宗像大社が宗像大社由緒記を作成、4 月に配布する。5 月にＮＨＫ「自然のアルバム」で沖ノ島を放映、『宗像神社史』上巻・下巻、『続沖ノ島』が完成し、全国の図書館・大学の研究施設に配布される。9 月 26 日、宗像高校で「宗像人の使命」再興 8 号を書き、宗像郡町村会館で宗像青年会議所の臨席講演が行なわれる。

出光丸の建造　昭和 41 年（1966）4 月、福岡教育大学が赤間に統合移転した。出光佐三が、出光興産の社長を退き、会長に就任する。出光丸は石川島播磨重工横浜工場で建造され、同年 12 月 7 日に竣工した。当時、このタンカーは世界最大であり、かつ史上初めての 20 万重量トンを超えたタンカーである。ペルシャ湾と出光興産徳山製油所を年間平均 9.5 往復して日本への原油輸送に大いに貢献した。10 月、本社に出光美術館が開館する。12 月の出光丸竣工には、全国の中学生 15,000 人を招待する。昭和 42 年（1967）4 月、再興 14 号、石田正實が「出光丸」を書く、8 月に沖ノ島 3 次調査が開始される。昭和 43 年（1968）7 月、早川勇翁像の除幕式を吉武村役場跡に建設され、会長代理として出光弘が出席、併せて、早川勇の伝記を桧垣元吉教授が出版（6 月）される。10 月、宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。

昭和 44 年（1969）4 月 20 日、宗像高校体育館で 3 度目の出光佐三の記念講演会が行なわれる。宗像高校創立 50 周年事業の一環である。その後に宗像高校創立 50 年に、千万単位の多額寄附が行なわれる。9 月、宗像神社神官の太田可愛らが『宗像史話伝説』を出版する。12 月、宗像神社本殿の解体が始まる。昭和 45 年（1970）1 月、宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれ、九州初公開される。8 月、沖ノ島丸（25 万 4 千トン）が完成する。12 月、宗像神社祈願殿が完成し、新殿祭が執り行われる。

昭和 46 年（1971）4 月、宗像神社史の付巻が刊行される。27 年かけて 3 巻が完成する。4 月、宗像神社境内が国指定史跡指定となる。6 月、東郷橋にあった九州一の大鳥居が神社正面に引っ越しする。11 月 11～12 日、総工費 10 億円をかけて神社復興事業が進み、遷宮大祭が行なわれる。また 11 月、出光佐三が三島由紀夫の葬式で弔辞を読む。

店主　昭和 47 年（1972）5 月、佐三は 87 歳で店主となる。7 月、出光佐三の生き方を描く映画「日本人」を福岡で上映。昭和 48 年（1973）2 月、瀧口凡夫（後の宗像市長）の『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』が生前に出版される。

昭和 49 年（1974）9 月に伊勢神宮の古材を移した第二宮・第三宮の造営工事が始まる。

昭和 50 年（1975）に『永遠の日本-出光佐三対談集-』が出版される。

昭和 51 年（1976）1 月に、出光佐三が自ら買い集めた中世の宗像神社文書を宗像神社に奉納（寄贈）する。昭和 52 年（1977）10 月、宗像神社から宗像大社に名称の変更が認められる奉告祭が行なわれる。

出光佐三翁と宗像会、宗像地域の主な歴史の概観

元号	西暦	月	宗像神社と出光佐三	調査・報告	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
明治44	1911	6	門司市に出光商会を創業する。		26	津屋崎の塩田が廃止される。	日田重太郎(資産家)が、別荘を売却して得た資金8,000円を託され、満26歳で独立。その条件が一風変わっていて、「ただやるのだから返さなくていい。利子もいらない。事業の報告もしなくてよい。君が好きに使え。ただ、独立を貫徹すること。そうして兄弟仲よくやってくれ。」というものであった。福岡県門司市に出光商会を設立。	出光佐三
大正元	1913				27	明治天皇の崩御。	下関で溜東燃料の販売に着手。	
大正2	1914				28	4月、東郷駅が開業		
大正3	1915				29		南満州鉄道に車軸油の納入成功。	
大正4	1915				30		満業燃料油の販売拡大、下関支店を開設。	
大正5	1916		雑誌『宗像』100号を発刊する。		31		事業拡大で、資金繰りの悪化する。	
大正6	1917		宗像会に石田和吉氏が紹介し、佐三が再入会。(138号)		32			
大正7	1918				33	米騒動が全国に広がる。	満州鉄道、車軸焼損事故の続発。	
大正8	1919				34	4月、宗像中学校が開校	鞍山の地・満州で車軸油が凍結し、貨車のトラブルが続出していた南満州鉄道に「2号冬供車軸油」を無償で提供。当初は使われてすらなかったが、単身満州にわたり満鉄本社に直談判し、現地で試験を行い、事故を一掃した。1927年(昭和2年)満鉄創立20周年のときに、感謝状と銀杯が贈られた。	
大正9	1920				35		佐三、チフスで死線を彷徨う。	
大正10	1921				36		創業10周年。博多支店の開設する。	
大正11	1922				37	大峰山頂に東郷平八郎を祭る公園が造られる。	台湾に進出する。	
大正12	1923				38		9月、関東大震災に際し、全店員に禁煙を呼びかける(2ヶ月間)。	
大正13	1924				39		第一銀行(現・みずほ銀行)からの25万円の借入金引き揚げ要請があったが、二十三銀行(現:大分銀行)の林清治支店長が肩代わり融資を決め、窮地を脱する。この頃、自殺説までささやかれる。	
大正14	1925				40	沖ノ島艇が津屋崎町に払い下げられる。		
大正15	1926				41	7月、宗像郡役所を廃止		
昭和2	1927				42	7月、豪雨で東郷一福間間、赤間一海老津間のトンネルが不通。		
昭和3	1928				43	昭和天皇即位記念、『沖津宮』を幡掛正木を出版する。		
昭和4	1929				44	博多湾鉄道の宮地岳線が電化される。	朝鮮における石油関税改正のために奔走。	
昭和5	1930				45	7月、暴風雨で宗像郡で47戸全壊。		
昭和6	1931				46		創業20周年。満州事変が起こる。	
昭和7	1932				47	田中幸夫による宗像での発掘調査が始まる。	門司商工会議所会頭に就任。	
昭和8	1933				48	『宗像郷土読本』を田中幸夫が刊行する	満州奥地に進出する。	
昭和9	1934				49			
昭和10	1935				50	『宗像の旅』を田中幸夫が刊行する	「満州国」の石油専売制に反対。	
昭和11	1936				51			
昭和12	1937	1	貴族院多額納税者議員に出光佐三が選ばれる。		52	沖ノ島祀台施設の地鎮祭		
		2	このころ宗像神社に参拝する。沖ノ島に祀台が建設される。			7月、盧溝橋事件。	2月 貴族院議員(多額納税)として登院。以後、貴族院が廃止されるまで議席を持つ。	
昭和13	1938	2	雑誌『宗像』150号を発刊する。		53		3月、国策会社大華石油設立に反対。	
		4				出光に増資の懇願、郷土館建築状況の報告する。		
		6				事務局が出光に5,000円で郷土館賛助懇願する。		
		7	田中幸夫が門司出光商会に再び1,500円で懇願。宗像の歴史を説明する。				日章丸(一世)就航する。	
		8				宗像に出光の記載あり。		
		12	宗像郷土館・宗像会館の開館、出光は参加せず。			12月、宗像郷土館・宗像会館が落成する。		
昭和14	1939	9	佐三、樺本憲三宮司と復興計画を協議する。		54			
		12	貴族院議員に出光佐三が再選			4月田中幸夫による宗像での発掘調査が終わる。	中華出光興産株式会社・満州出光興産株式会社設立する。	
昭和15	1940	3	佐三、宗像会終身会員(158号)となる。		55	大政翼賛会が発足する。	3月 出光興産を設立。上海油漕所竣工。	
		8	宗像に出光の躍進記事					
		11				11月、皇紀2600年式典		
昭和16	1941	4	28日、佐三、樺本憲三宮司と復興計画を協議する。宗像会創立50周年、出光弘、終身会員となる(160号)		56	6月、川端横が流失、吉田の交通がマヒする。12月、太平洋戦争が始まる。	北支石油協会の設立に反対。創業30周年。12月、太平洋戦争が始まる。	
昭和17	1942	2			57	味噌、醤油も配給、衣料は点数制となる。		
		8	佐三、竹間保史宮司と復興計画を協議する。					
		5				金属回収令による強制譲渡命令発動により町村内の寺社の鐘や仏具はじめ一般家庭金属類を回収する。	8月、南方に石油配給員を派遣する。	
		11	神社復興期成会　会長に出光佐三を選任。				出光興産本社を京銀座に移転	
昭和18	1943	4	佐三、復興期成会で上・下高宮の復興保存を決議する。		58			
		8	雑誌『宗像』163号で発刊が止まる。				石油販売法に反対。	
昭和19	1944	6			59	6月、米軍爆撃機B29が北九州を初空襲する。	11月、仙崖図を全支店に配布する。	
		8				8月、宗像郡誌の全3巻が完成、12月、津屋崎国防訓練場が開場する。		
昭和20	1945	8	8月、沖ノ島の下関重砲兵7中隊が沖ノ島から撤去、敗戦		60	5月、本土決戦で歩兵第146師団が配備される。7月、歩兵第351師団が配備される。敗戦。	8月 出光佐三は、終戦の2日後、従業員に対し、「急病をやめよ。世界無比の三千年の歴史を見直せ。そして今から雑設にかかれ」と訓示した。当時、多くの企業が人員を整理する中、出光佐三は約1千名の従業員の首を切らないことを宣言した。	
		11	佐三会長、①復興懇話は時機を待つこと、②調査資料は本印刷を延期することの今後の方針が示される。			10月、福岡市に占領軍の軍政部が設置される。11月、宗像郡人口54,321人	10月、石油配給会社から業界復帰を断られる。	
昭和21	1946		1月、昭和天皇の人間宣言が行われる。2月、GHQにより、官幣大社を廃止する。		61	2月、公職追放令の発布。	4月、旧海軍タンク油の集積作業を行う。	
昭和22	1947	10	第2次の農地改革による農地買収、売り渡しが行われる。		62	11月、池野村の池田炭鉱が操業開始する。	出光、石油配給公団の販売店指定を受ける(10月)。出光商会と出光興産が合併し、出光興産として再出発(11月)。	
昭和23	1948	4	立部住職により、荒廃していた宗像神社の記事が書かれる。		63	鎮国寺住職の立部瑞祐が復興住職として来る。		
昭和24	1949	8	宗像郷土館が廃館となる。		64	4月、鎮国寺の晋山式が行なわれる。	3月、石油元売り会社に指定される。	
昭和25	1950	4	公職選挙法を公布する。		65	6月、朝鮮戦争が起こり板付飛行場は最前基地となり、F86戦闘機など一日約300機発着	出光興産、石油製品の輸入を主張。	
						朝鮮戦争で北九州に警戒警報が発令される。	石油輸入基地の室蘭・川崎・神戸油槽所竣工する。	
		7	宗像神社を書く(人間尊重五十年)					
			法事で赤間町にもどり、町長や有志と会う。「夢」を書く				11月、川崎・神戸に輸入基地を設置する。	
昭和26	1951	9			66	池野村池田炭鉱に埋蔵量300万トンの新炭層が見つかる	・『四十年間を顧る』	
昭和27	1952	4	平和条約を締結、アメリカ軍の占領が終わる		67	平和条約締結、日本が正式に独立する	米国から高オクタン価ガソリンを輸入する。	
昭和28	1953	5	日章丸事件		68	8月、北九州豪雨、宗像大洪水、鈴川が氾濫する	5月9日< 日章丸事件、石油を国有化し英国と係争中のイランから石油輸入、アバダン港から、ガソリンと軽油を満載し、川崎へ入港する。	
		8	拝殿修理などに国庫補助53万円と文化財愛護委が発表。					
		12	9日、佐三、復興した高宮祭場に参拝する。			高宮祭場が保存整備される。		

元号	西暦	月	宗像神社と出光佐三	調査・報告	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和29	1954	12	沖ノ島を国営漁港として4億5000万円6年計画で修築することが決まる	5月、沖ノ島1次調査	69			
			「水を呑み冷暖自ら知る」を『如性』12号に書く。					
昭和30	1955	4	田島・高宮の土地買い上げ、祭場整備が竣功する。佐三ら多数が参列する。		70	4月、沖ノ島で密航朝鮮人39人が逮捕される。		
		8	沖ノ島漁港の修築に国庫補助3,500万円が決まる				8月、徳山旧海軍燃料廠跡地を払い下げが決まる。	
		9	孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松扇寺で200回忌賛仰法会			6月、水産高校校舎が完成する。		
		10	武丸正助廟、松寿の13回忌を法然寺、正助伝記3,000部を寄附。序文を書く。			鎮国寺に護摩堂の工事が着手される。	10月、佐三、初めて渡米する。	
		12	復刊宗像1号に「宗像族の雄心」書く。			12月、復刊「宗像」が発刊される。		
昭和31	1956	7	復刊宗像2号に「アメリカを視察して」を書く。	沖ノ島2次	71	8月、玄海国定公園の指定を受ける。		
昭和32	1957				72		3月、徳山精油所の起工式。	
昭和33	1958		『沖ノ島』が刊行される。	「沖ノ島」	73	2月、河東鉱山で落盤、生き埋め3人となる。		
		9	沖ノ島出土品が重要文化財になる。				3月、出光興産の徳山製油所が10ヶ月で竣工する。	
昭和34	1959	6	文化財収蔵庫を佐三が寄附し、竣工する。		74	7月、東郷に湯流、釣川の堤防が決壊、氾濫する。		
昭和35	1960	2	宝物館の計画を協議する。		75			
		5	20日、佐三が宗像沖ノ島に渡島、参拝する。				4月、出光興産、ソ連の石油を輸入する。	
		5	宗像高校にて佐三の記念講演(創立40周年)				5月、徳山精油所の第2期増設工事完成。	
		12	高山勉が福岡刑務所の移転を断る。					
昭和36	1961	1	「心の世界」を書く		76		創業50周年。	
		1	宗像大社が機関誌「宗像」を復刊	「続沖ノ島」				
		2	『宗像神社史』上巻の刊行、『続沖ノ島』が刊行される。					
昭和37	1962	3	沖ノ島出土の鈴鏡が国宝に指定される。		77		2月、創業の恩人、日田重太郎が死去する。	出光佐三
		5	佐三、東京で田島小学校の跡地利用を協議する。			4月鎮国寺に護摩堂が完成。		
		7	復興期成会会長代理に出光泰亮が就任、宝物館建設設置委員会の発会式。				7月 生産調整に反対し、出光興産、石油業法に反対。石油連盟脱退を決める。	
		9	みあれ祭が約400年ぶりに復活し漁船180隻が参加する。			みあれ祭りの復活。	9月、『人間尊重五十年』が出版される。	
		11	宝物館建設の募金集めを開始する。					
昭和38	1963	3			78	3月、再興宗像会の創設総会。鐘崎海岸で戦争中のピストル・弾丸1400発が見つかる。	出光興産の千葉製油所、竣工(1月)。出光興産、石油化学工業へ進出(4月)『「人の世界」と「物の世界」—40の質問に答える』出光興産社長室	
		8	再興宗像1号に「宗像会に寄す」書く、名誉会員となる。				本社を丸の内一丁目(パレスビル)に移転する。	
		10	22日、学芸大統合起工式、出光佐三社長が出席、城山中学校講堂で講演する				11月、出光興産、石油連盟から一時脱退する。	
昭和39	1964	1	再興宗像に「年頭所感」書く		79	1月、山田・畑から縞筒、町教委が現地調査を行なう。	1月、石油生産調整問題で、福田と会談。	
		4	宝物館の本館が完成し引き渡し			1月、宗像会が再興「宗像」が復刊する。		
		5	高山勉が落選する。					
		5	東京で福岡県人会総会、会長に出光佐三を選ぶ。				5月、佐三が声屋航空自衛隊の訪問する。	
		5	21日、墓参り、八所宮・緑風園・武丸正助廟に行く。					
		8	武丸正助翁の伝記3,000部を配布				『題名のない音楽会』の放映開始する。	
		11	宝物館の開館披露式				9月、出光石油化学会社の設立。	
昭和40	1965	1	宝物館の開館する。		80			
		2				宮地嶽神社の宝蔵庫が破られ日本刀が盗まれる		
		4	宗像大社が宗像大社由緒記を作成、配布					
		5	NHK「自然のアルバム」で沖ノ島を放映する。			宗像郷土館から宗像高校に資料を移動する。	5月、徳山市に出光会館建設。	
		6	『宗像神社史』下巻を配布する。					
		5				上妻医雄が民話「福聞の又べい」出版		
		8				上野古墳調査で横穴式石室を発掘		
		9	28日、佐三が宗像高校「宗像人の使命」を講演、宗像郡町村会館で宗像青年会議所臨席講演、教育大学統合が実現する。			9月宗像高校・宗像青年クラブ講演、福岡教育大学の統合する。	9月、千葉精油所に世界最大のLPGタンクを完成。	
		11	30日、宝満会を行なう。			12月東郷団地で弥生中・後期の竪穴住居を発掘		
		12				上妻国雄が『宗像伝説風土記』出版される。		
昭和41	1966	4	福岡教育大学の統合、赤間に移転する。		81	宮地嶽古墳遺物の保存修理か3ヵ年で開始される。	・『マルクスが日本に生れていたら』春秋社	
		9						
		10	出光美術館の開館(東京)				10月、佐三が 出光興産の社長を退き、会長に就任。	出光計助
		12	出光丸竣工、宗像の中学生をを招待する。			12月、釣川県道拡張計画で大島居の移転する。	出光丸25万5千トンタンカー竣工、全国の中学生15,000人を招待	
昭和42	1967	4	再興14号、石田正美「出光丸」を書く、大造営計画の協議		82			
		7	昭和大造営計画の打ち合わせを行なう。	沖ノ島3次調査		8月、宮地嶽・国宝の蔵骨器の補修が終わる。		
昭和43	1968	3	沖津宮・中津宮・辺津宮の境内を国史跡に指定に諮問。		83	4月～7月、校長落任招答闘争が行われる。		
		6				早川勇の伝記を桧垣元吉教授が出版する。		
		7	早川勇翁像の除幕式を古武村役場跡。出光弘が出席、宗像神社大造営計画のため募金の開始される。				5月、出光石油化学徳山第2期工事完成。	
		8	神社、白アリ被害で本殿と拝殿の改築申請する。				8月、出光美術館で、「宗像大社国宝展」を実施する。	
		9				9月、大峰山頂に東郷公園再建の造成が始まる。		
		10	宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。				11月、大阪市立博物館で、「宗像大社国宝展」を実施する。	
昭和44	1969	4	17日に宝満会で倉田主税と佐三が参拝する。20日、佐三が、宗像高校体育館で記念講演会を行う。	沖ノ島3次	84	4月、宝満会メンバーが宗像神社に参拝する。	1月、松寿丸竣工。	出光計助
		5				6月、津屋崎郷土史会の結成。5月、宗像高校創立50周年	5月、計助社長が石油連盟会長に就任する。	
		7				7月、早川勇の歌碑が吉武村役場跡に建立される。	・『働く人の資本主義』春秋社	
		7	宗像神社本殿解体修理に着手。			上妻国雄が「宗像伝説風土記」を出版する。		
		9	神官、太田可愛らが「宗像史話伝説」を出版	沖ノ島3次				
		10	沖ノ島調査団が神湍～宮地嶽の古墳の調査					
		10	三笠宮が宗像神社を参拝、11日に沖ノ島を視察。			11月、倉田主税が逝去する。		
		12	神社の本殿の解体が始まる					
昭和45	1970	1	大和勝理事、大造営事業の視察。		85			
		2	復興期成会事務局を福岡支店より、宝物館内に移す。			宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれる。九州初公開。		
		3	宗像神社復興地鎮祭・起工式。			5月、鎮国寺住職立部瑞祐が真言宗御室派大僧正となる。		
		5	宗像高校創立50周年で岡崎敬の「沖ノ島について」の講演。	沖ノ島3次		宗像高校創立50周年、宗像高校創立50年に多額寄付。		
		7				7月、天保年間の沖ノ島御番所などを大宰府で発見される。	8月、沖ノ島丸25万4千トンが竣工。	
		12	宗像神社祈願殿が完成、新殿祭。					

元号	西暦	月	宗像神社と出光佐三	調査・報告	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和46	1971	4	宗像神社史の付巻が刊行。27年かけて3巻が完成		86	1月、宗像神社宝物館で沖ノ島神宝展を開く。	11月、出光、三島由紀夫の葬式で弔辞を読む。	出光計助
		4	宗像神社境内の史跡指定告示される。			3月、三郎丸古墳群の調査が実施される。	創業60周年。	
		6	九州一の大鳥居が正面に引っ越し。『宗像神社史』付巻。					
		10	佐三、昭和大造営の進捗を視察する。			10月、桜京古墳を発見する。		
		11	12日、総工費10億円をかけて神社復興事業が終わり、遷宮大祭、佐三ほか出光関係者など、1,000人が参列する。			11月、宗像神社遷宮大祭が執り行われる。		
昭和47	1972	1	佐三が出光興産の店主となる。		87		1月、出光興産の会長を退き、店主に就任する。	
		3・4	佐三、宗像大社に参拝する。大造営史の大綱・編集会議。			5月、玄海町桜京古墳の発見を新聞が伝える。		石田正貫
		7	出光佐三の生き方を描く映画「日本人」を福岡で上映。					
		8	宗像神社復興期成会を縮小、収支決算する。			9月、津丸古墳群横で住居を発見する。	8月、佐三、米寿となる。	
昭和48	1973	2	滝口只夫『創造と可能性の挑戦　出光佐三の事業理念』の出版。		88	宗像郡4町が遺跡の分布調査を開始する。	2月、佐三、白内障手術。4月、出光興産、ソ連石油輸出公団と契約。	
		9				大石岡ノ谷古墳で、鍍銷古墳が見つかる。	9月、北海道精油所の完成。	
		10				10月、桜京古墳を県指定に答申される。	12月、第1次石油危機	
昭和49	1974	5	総額1億1千万円で、第二宮・三宮の復興を決定する。		89	3月、三郎丸・城ヶ谷古墳群で、現地説明会が開催される。		
		9	第二宮・第三宮の造営工事始まる。					
昭和50	1975	5	宗像神社第二宮・第三宮遷宮の挨拶「御神徳の尊さ」を行い、復興期成会ほか300人が参集する。		90	7月、津屋崎祇園山笠保存会の発足する。	・『永遠の日本-二千六百年と三百年- 出光佐三対談集』	
昭和51	1976	1	出光佐三らが古文書を神社に寄贈返納する。		91			
		2	『宗像大社昭和大造営史』が出版・全国に配布される。			2月、津屋崎町勝浦峯ノ畑古墳で、石柱構造が見つかる。		
昭和52	1977	10	宗像神社から宗像大社に名称変更が認められる奉告祭。		92		7月、フランス共和国文化勲章コマンドール受章。	大和勝
		11				宗像の古代文化を考えるシンポジウムが実施される。		
						津屋崎町奴山正園古墳から剣・鏡・勾玉が出土する。		
昭和53	1978	10	神宝館の起工式が行われる。		93	4月。上妻国雄が『宗像伝説風土記』上・下を出版する。		
		11	宗像町民名誉町民1号となる。					
		12	「宗像」宗像大社一同で名誉町民の祝辞が書かれる。					
昭和54	1979	1			94	1月、宗像町久戸遺跡の調査が終わる。		
		2				2月、鎮国寺本堂を茅葺きから銅板葺きにする。	2月、イランで革命が起こる。第2次石油危機	
		3				3月、福間町大門古墳の須恵器が盗まれる。		
		4	沖ノ島の香炉・高機が重文指定答申される。					
		6	宗像高校創立60年誌に石田正貫が佐三の言葉を紹介。			5月、宗像高校創立60周年、記念誌が出版される。		
		9	沖ノ島の国宝・重文の修復するための修理委が発足する。					
		9				宗像郡で歴史資料館建設準備委員会発足する。		
		11	沖ノ島出土品147点を内田義真が大社に返還。					
		12						
			岡崎敬が『宗像沖ノ島』を刊行する。	「宗像・沖ノ島」				
昭和55	1980	10	11月、神宝館の開館する。		96	5月、津屋崎町今川遺跡から鉄鏃・管玉が見つかる。	1月、イラン・イラク戦争が起こる。	
昭和56	1981	2	社報「宗像」満20年、240号までを縮少版の製本し配本。		96		2月、日章丸四世の竣工。出光創業70周年。	
		3	名誉町民、出光佐三の逝去、赤間に埋葬される。			4月、宗像市市制を施行する。	3月7日 97歳で死去。出光店主室『我が60年間』追補を出版。	出光昭介
昭和57	1982	4				八所宮氏子が広島県厳島神社に返却の申し入れる。		
		8				松崎文書館ができ古文書4万点を公開する。		
昭和58	1983	1				須恵クヒノ浦古墳の発掘が終わる。	・『道徳とモラルは完全に違ふ』 出光興産	
昭和59	1984	5				宗像高校『郷土資料図版・目録』を占部玄海が出版する。	・『出光の言葉』 出光興産	
		10				八所宮に厳島神社の鐘が借用される。		
昭和60	1985	8	17日、記念式を中央公民館大ホール、故出光佐三生誕100年祭で映画上演、生家公開する。宗像市商工会主催。			8月、故出光佐三生誕100年祭が行なわれる。	出光興産店主室『我が60年間』第1～4巻を出版する。	
		9				宗像市市文化財保護条例が施行する。		
		11				久原遺跡から鏡・家形埴輪が出土する。		
昭和61	1986	1				教育大学考古班が久原遺跡説明会を開く		
		4	沖ノ島の神宝3,000点が修復が終わる。					
		4				占部玄海が『宗像の文学遺跡』を出版		
		6				宗像郡誌が復刊される。		
		11	出光計助『二つの人生』			松崎武俊の著作集の刊行する。		
		11				石井忠、漢語物辞典の刊行する。		
昭和62	1987	9	出光昭介が『孝子武丸正助伝拾遺』に序文を書く。			『孝子武丸正助伝拾遺』を遺徳顕彰会が出版		
昭和63	1988	4				『宗像の歴史と文化財』を出版する。		
平成元	1989	4				宗像高校四塚金館の竣工、市史編纂室の設置。		
平成4	1992		『宗像大社文書』第1巻の刊行。					
平成11	1999		『宗像大社文書』第2巻の刊行。					
平成15	2003		出光真子『ホワット・ア・ラーまんめいど 』 の刊行。					
平成21	2009		『宗像大社文書』第3巻の刊行			田熊石畑遺跡が国指定史跡となる。		
平成22	2010	3	川嶋照充「宗像高校同窓会会報」に佐三のことが記される。					
平成23	2011	6					6月、出光創業100周年記念日には「日本人にかえれ」の名言が新聞広告に掲載された。	
平成24	2012	7	『海賊とよばれた男』 講談社が出版される。			海の道　むなかた館の開館する。		
平成25	2013	4	『海賊とよばれた男』が本屋大賞となる。					
平成26	2015	3～5	むなかた館「出光佐三展」に27,000人が見学する。			田熊石畑遺跡の開園する。	3月、RKB毎日放送で『出光佐三と宗像大社』を放映する。	

宗像神社復興の完成　昭和 53 年（1978）10 月、神社神宝館の起工式が行なわれる。11 月に、宗像町名誉町民 1 号となる。社報「宗像」に宗像神社一同で賛辞が書かれる。

昭和 54 年（1979）6 月、宗像高校創立 60 周年となる。11 月、沖ノ島出土品 147 点を内田義真が大社に返還する。同年、岡崎敬の編集『宗像・沖ノ島』が刊行される。

佐三の逝去　昭和 56 年（1981）3 月、名誉町民の出光佐三が逝去、赤間に埋葬される。

(2) 佐三と宗像郷土館・郷土会館建設への支援

経過　郷土館建設の気運は、宗像高等女学校に昭和 7 年（1932）　9 月に赴任した田中幸夫教諭が郷土教育資料として授業の合間をみて郡内の各地に現れ、土器・石器・文献史料等を採集されたことに始まる。これらの考古資料は、空室の 2 教室を埋める状況となった。

昭和 11 年 2 月に田中は、『宗像の旅』の刊行による収益金 300 円を郷土館建設とする条件で、許斐仙太郎校長に寄付した。許斐校長が中村堅太郎（宗像町村会代表）を通じ町村会に相談したところ、貴重な品物が集められていることは郡のために非常な喜びであるから、相当の保存方法を講じようとの機運が進んだ。その話を知った、宗像高等女学校後援会や学校から、「教室を使うのは不便で困るだろうから、ぜひ保存の部屋を設けたい」と熱心な希望があり、昭和 11 年 7 月には、発起人会の第 1 回委員会が開催され、教室に似たような建物を設けることで、建設計画と予算 6,000 円で決議を得た。その内訳は、本館 54 坪・戸棚・書籍等の備品・落成記念印刷物・庭園費などである。10 月には、建物を木造から鉄筋へ計画変更となったため総額 1 万 5,000 円として当初予算が決まった。そして、郡内外の有志に向かって建設趣意書が発送された。

佐三への資金依頼　昭和 13 年（1938）4 月、出光に事務局が、宗像郷土館の増資の懇願、郷土館建築状況の報告に行き、6 月に 1,000 円で郷土館建設の賛助懇願に行き、再び門司出光商会に 1,000 円の同額で承認、再び 1,500 円で田中幸夫が再度懇願するなど、郷土館建設で最も資金賛助に期待されていた。最終的に建設費用の 32,000 円のうち 2,500 円を賛助している。最も多い寄附である。開館は、12 月 5 日・6 日に宗像郷土会館と共にオープンする。当時のことを出光は、「狭しとも誰しもが神郡宗像人百年の大計を確立すべき瀬戸際と奮闘しこと」に千円の追加賛助を了解した。この時に、田中は宗像出身の財界人を訪ね全国に訪ねたが、昭和 13 年 7 月 11 日に 1 時間近く熱心に聞いたのが出光佐三と回想している。佐三は、昭和 12 年 2 月に貴族院議員当選の御礼詣に行って宗像神社の荒廃を宮司に聞いていたので、熱心に聞いたのではないかと思う。田中は、賛助資金を集めるため「目的の為に我慢強く語った。更に追加一千円を受け、なんたる鉄面ぞ」と記している。そのため、「宗像郷土会館」の額の文字を佐三の父松寿に依頼している。佐三は、「郷土館落成の御盛典を祝し、新日本の重責に任ずべき有為なる後進の輩出を祈る」と祝電を送る。開館には、3,000 人が見学に参加している。

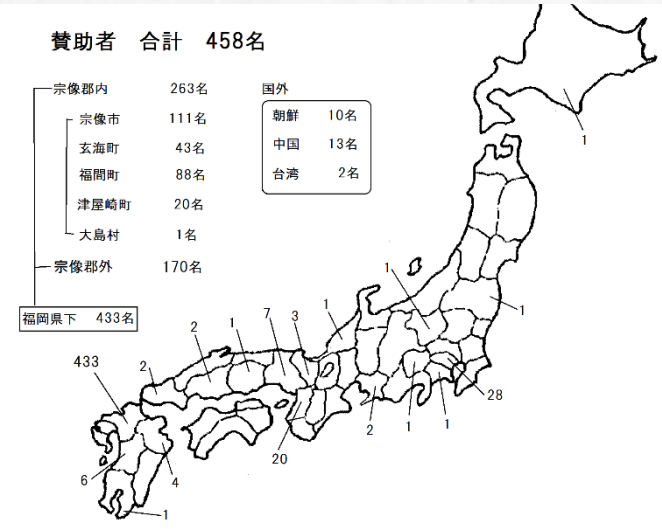
意義　当時の米価を基準に現代価格にすると、1 億 7 千万円に相当する。この時期、九州地方において、歴史資料館建設に寄付されたものとしては破格である。また、寄付金の筆頭 2,500 円は、出光佐三である。中村委員長をはじめとした、各委員の行動力と熱意はすさまじい。寄付金賛助者は、宗像会員で福岡県 433 名、東京 28 名・大阪 20 名など他府県から協力を受けたことが判る。郷土館の開館から閉館まで収蔵資料は、考古・古文書・古写真・図書・参考書、委託品 76 点などの内訳となり、総数 1,493 点となる。落成式の昭和 13 年 12 月 5・6 日には、寄付金賛助者、宗像高等女学校生徒、郡内の小学校生徒などが多数、来館した。また、参観者も九州大学の中山平次郎・竹岡勝也・春日政治・長沼賢海・鈴木清太郎・鏡山猛、東京国立博物館の後藤守一、国学院大学の大場磐雄、考古学者の森本六爾、京都大学の梅原末治・小林行雄、京城大学の藤田亮策、当時の学者たちが来館している。

事業期間は、昭和 11 年 2 月～昭和 14 年 5 月までの 3 年 4 ケ月である。田中幸夫は、『胷形（むなかた）』に、詳細な目録と事業報告が纏められる。しかし、教育改革により、戦後に廃館となる。以後、放置された。

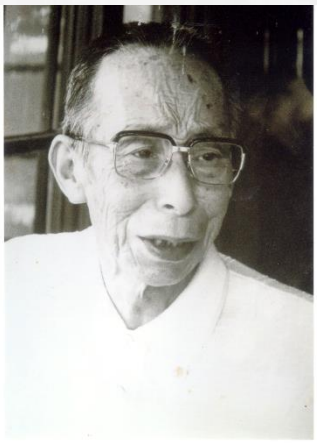
建設中の宗像郷土館と宗像会館（昭和13年）　占部玄海氏提供

田中幸夫先生（左端）と宗像の旅

宗像の旅



宗像郷土館の資金賛助者



田中幸夫教諭

（3）宗像神社復興期成会会長就任と復興

復興の発端は、佐三が昭和 12 年 2 月に貴族院議員の当選のお礼詣りに、「拝殿の屋根の屋根が暴風で破損していて、そこにトタン板がかぶせてあるのを見た。なぜ修繕しないかと聞いたら、この建物は国宝であるから勝手に修繕できないと宮司さんの話であった。宮司さんは神社の縁起から国宝建築物の由来等について次から次と話された。私は愕然と驚いた。国民の祖神であり、神社のはじめであり、伊勢大神宮と表裏一体であらせられるところの宗像大神の御神域、御社殿は荒れるがまま放置してある。私は驚懼した」とある。また、「宗像神社の復興のために神社史の編纂を企画しておりますが、往昔の御神域の広大なるとその祭祀の盛大なるは、今さらながら、驚くほかありませぬ。宗像神社の祭祀を知れば、神社の祭祀はすべて含まれるということである。全国の神社の数は三万社足らずと思いますが、そのうち九千社は宗像大神が御祭神であることからを見ても、その御神徳の一端を知ることができます」と『人間尊重五十年』「宗像神社」の章に書かれる。神社の縁起と「裏伊勢」と話したのは、櫟本憲昌宮司とされる。

昭和 17 年（1942）11 月 22 日に、清明殿で出光佐三・出光万兵衛・出光弘・伊東尾四郎・山本忠三郎・竹間保史宮司・小鳥居三思・宗像辰美などの氏子有志が宗像神社復興期成会会則を可決し、会長に出光佐三を選任する。昭和 18 年に①造営整備に関して現在の所を拡張すること、②上・下高宮の聖地として復興保存する事などの方針が決定された。

宗像神社復興期成會長 出光佐三氏の揮毫

昭和 18 年 8 月に発刊された『宗像』163 号に高橋昇「宗像神社復興計画の趣旨と経過を延べ神郡郷友一般の噴起協力を望む」に設立趣旨、経過、議事録が掲載される。併せて、宗像志江の「宗像神社復興期成会の設立」に会則が会員に報じられる。この前年には、出光興産本社を東京の東銀座に移転する。

事業は大きく、昭和 17 年～43 年までの第 1 次復興と、昭和 44 年～昭和 54 年までの昭和大造営事業の第 2 次復興に区別すると理解しやすい。

第 1 次復興　復興には、神祇院に宗像神社の由緒・学問的調査の報告が必要であり、同 18 年に神社史編纂が開始される。神祇院は、神宮に関する事、官国幣社以下神社に関する事や神官および神職に関する事、敬神思想の普及に関する事項を掌る機関であった。ところが、昭和 20 年（1945）の 8 月に敗戦になり、中断を余儀なくされる。

昭和 20 年 11 月 23 日に会長により、①復興問題は時機を待つこと、②調査資料は本印刷を延期することの今後の方針が示される。しかし、進められていた神社略史の稿本が、昭和 21 年 12 月が完成する。

竹原元凱が「宗像沖ノ島」の中で、「戦後、皇室や海の守り神としての海軍関係者からの庇護を受けていた官幣大社も国家神道の禁止や農地改革などで窮乏していた。神官 3 人も内職でやっと食いつなぐ状況だった」と、当時の状況を記述する。

昭和 23 年 1 月に入山した鎮国寺住職の立部瑞祐は、『心の旅路』の中に「辺津宮は、結構大きいものの、さびさびとした、閑古鳥が鳴いている社でした。当時団体で寺社に参ってはならない、教職にあるものが寺社参拝をしてはならない、寺社が寄附を募ってはならないほど、マッカーサー司令部の施策が浸透して、とくにこういう旧官幣大社からは人心が離反していたように思われます。広い社務所に 7～8 名の神官が手持ち無沙汰に屯している」と、当時のことを記述する。

昭和 27 年（1952）4 月には、平和条約が締結され、政情が安定してきたので、再び、宗像神社の復興期成会が動き始め、2 月に宗像神社の拝殿などに国庫補助 53 万円と文化財愛護委員会が発表された。5 月からは、神社史の編纂が小嶋鉦作を中心に再開される。これ以降は、上高宮・下高宮の主要部分の用地購入が進められ、以後、継続して用地購入と民家の建物・墓地移転が行われ、昭和 32 年までに大半が境内地に登記される。実施したのは、期成会傘下に「宗像神社文化財復興奉賛会」が昭和 27 年に組織され、会長に貝島太市、理事長に出光弘、顧問が出光佐三となる。会員は、宗像郡下を中心に福岡

県下の数千人とされる。事業は、神社の文化財の本殿・拝殿の修復、祭祀の復興、高宮の復元、宝物館等の施設に資金 3,700 万円を募集し、下高宮の整備などを行う。そして、辺津宮拝殿・境内域の整備も国庫補助事業で、昭和 30 年にほぼ竣功を見た。昭和 30 年に活動を終了される。

当時のことを葦津嘉之宮司は、社殿修繕のみとする出光佐三の提案を多く者が支持していたが神官達が断ったと語る。そして「立派な社殿をつくつても参詣人がいなくては何もなりません。参詣人を呼ぶのはご祭神の神徳です。宗像は千五百年以上、人々の崇拝を集めてきました。その由来と歴史を解けば、神徳を慕って参詣人がつめかけるでしょう。カギは沖ノ島にあると思います。ここをぜひ調査してください。」と話したと竹原元凱が記す。

また、沖ノ島避難港整備で、遺跡の荒廃を心配した福岡県教育委員会の武藤正行は、調査の必要性を説いていた。そこで、復興事業に伴う神島調査の問題が検討され、昭和 28 年 11 月に開催された神社史編纂委員会で、沖ノ島の発掘が正式に決まる。

昭和 29 年（1954）5 月、沖ノ島 1 次調査が実施される。12 月に沖ノ島を国営漁港として 4 億 5000 万円（6 年計画）で修築することが決まり、港の設置に伴い、遺跡の荒廃の心配が懸念された。この予想は的中し不幸なことに、港湾工事関係者の盗難があった。発掘調査を実施しなければ、多くの出土品が失われたと思う。昭和 30 年 1 月に田島・高宮の土地買い上げられる。高宮の地は、古代・中世の頃まで神域であったが、整備前は、私有地の畑地や山林となっていた。ここが古代風の祭場として再現された高宮祭場となる。

沖ノ島出土品は、昭和 33 年 9 月と同 34 年に重要文化財となり、昭和 37 年（1962）3 月、沖ノ島出土の銅鏡などが国宝に指定される。沖ノ島の報告は、昭和 33 年『沖ノ島』、同 36 年に『続沖ノ島』として刊行される。驚くべき沖ノ島調査の成果は、あまねく寄附頒布されたが、頒布希望が多く、配布は一千冊となる。発掘関連経費は、5,632,765 円とされる。

第 1 次は、沖ノ島調査を含めた神社史の解明と、聖地高宮などの用地購入と拝殿の保存修理と整備がほぼなされる。

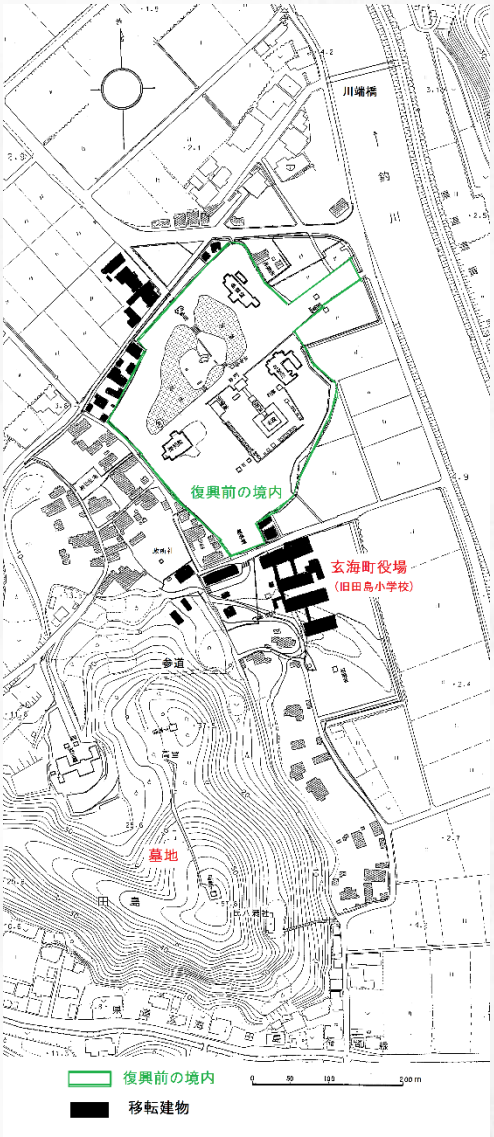
昭和 37 年 9 月には、長久手神事と呼ばれた「みあれ祭」が約 400 年ぶりに復活し、漁船 180 隻が参加する。この年 9 月に『人間尊重五十年』の普及本（A5 版 466 ページ）が出版される。郡内の広範囲に 280 円の安価で頒布される。

さらに、復興期成会会長代理に佐三の弟の出光泰亮が就任し、宗像神社の宝物館の実務を取り仕切る。泰亮は、沖ノ島調査団の調査員（団長）として、第 1 次～3 次調査に参加される。宝物館は、昭和 35 年に「宗像郡文化財共同収蔵庫」として建設計画が協議され、昭和 37 年に建設委員会が結成される。国庫補助事業の決定を受け、資金の募金が始まる。浄財は、総事業費の 4,020 万円中の 2,890 万円が、多くの宗像会関係者をはじめ、出光興産、倉田主税（日立製作所）などの

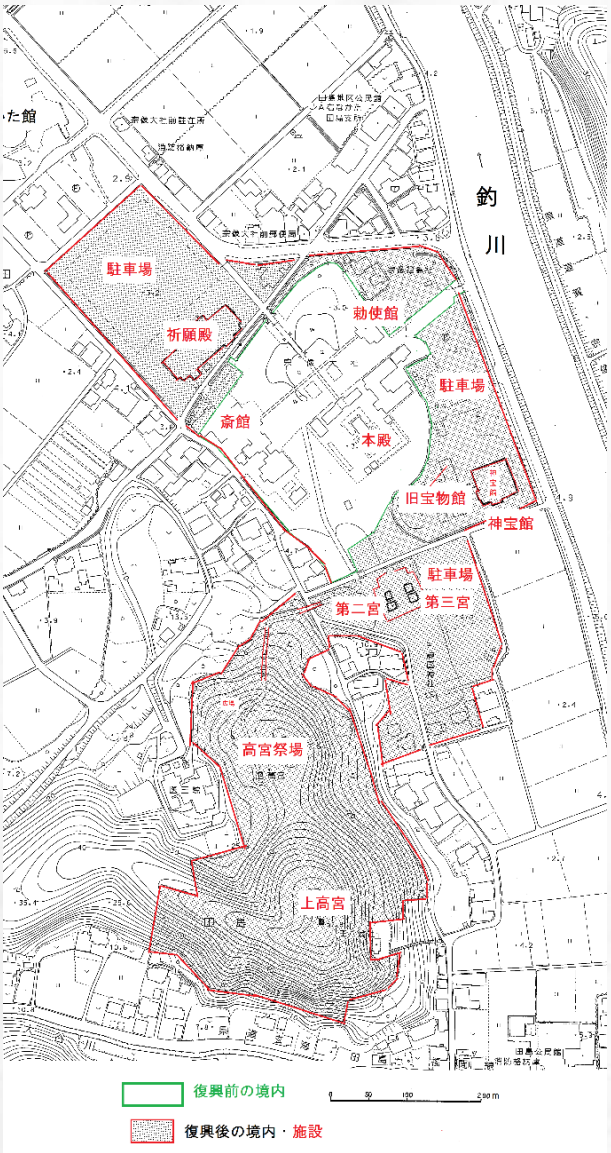
経済人からも支援を受けている。

昭和 40 年（1965）1 月に宝物館の開館、矢次ざまに宗像大社が『宗像大社由緒記』を作成、配布（4 月）する。ＮＨＫ「自然のアルバム」で沖ノ島を放映（5 月）、『宗像神社史』上下巻・『続沖ノ島』が完成し、全国の図書館・大学の研究施設に寄附配布される。『宗像神社史』の完結 3 巻の関連経費は、2, 902, 947 円で、27 年間かけて刊行された。昭和 43 年 8 月には、東京の出光美術館で、「宗像神社国宝展」が開催され、1 万 5 千人の見学者があった。

上記の『宗像神社史』の調査・編集・刊行費、沖ノ島発掘調査費や整理・報告書刊行費は佐三の全面支援によるものである。



復興前（昭和 17 年）



復興後（昭和 54 年）

第 2 次復興　昭和大造営を行うために宗像神社期成会の組織強化・変更を行い、本殿の解体修理、宝物館、神社の祈願殿・齋館・勅使館等の諸施設、第二宮・第三宮、神宝館などの参拝者を呼ぶ為の諸施設を増設することになり、沖ノ島 3 次の学術調査が実施されることになる。出光興産の現地事務所が開設され、幹部社員を置き復興事業が本格化する。

昭和 44 年（1969）、4 月に沖ノ島 3 次予備調査が開始される。また、重要文化財本殿の解体保存修理が実施される。昭和 45 年（1970）1 月、九州で始めて宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれる。

昭和 46 年（1971）4 月、宗像神社史の付巻が刊行される。4 月、宗像神社境内が国指定史跡指定となる。10 月に田島放生会に続いて翌月の 11 月 11・12 日、総工費 10 億円をかけて神社復興事業が進み、遷宮大祭が行なわれる。この時のことを滝口凡夫が書き留めている。「多年の念願を成就され、誠におめでとうございます。」参拝者のひとりがこう挨拶すると、佐三は「ありがとうございます。しかし多年じやありません。一生の念願でした。私にとってこんなうれしい日はありません」とある。翁が復興期成会を組織し、自ら会長として奔走してから、30 年を経過していた。

昭和 49 年（1974）9 月に、玄海町役場（元田島小学校）の移転で遅れていた第二宮・第三宮の造営工事が始まる。

昭和 50 年（1975）5 月に、第二宮・第三宮の遷宮の挨拶「御神徳の尊さ」、直会で永遠の日本を話す。昭和 51 年（1976）1 月に、出光佐三が自ら買い集めた中世の宗像神社文書を宗像神社に寄贈する。同月に『宗像大社昭和造営誌』が全国の図書館や神社、研究機関に無償寄附配本がなされる。昭和 52 年（1977）10 月、宗像神社から宗像大社に名称の変更が認められる奉告祭が行なわれる。

昭和 53 年（1978）10 月に、神宝館の起工式が行なわれる。11 月に佐三が、宗像町名誉町民 1 号となる。社報の「宗像」に宗像神社一同で賛辞が書かれる。

昭和 54 年（1979）11 月、沖ノ島出土品 147 点を内田義真が大社に返還する。同年、岡崎敬の編集『宗像・沖ノ島』の刊行がなされ、ほぼ事業は完了する。沖ノ島の調査成果は、岩上→岩陰→半岩陰→露天祭祀への変化を捉えた。社殿が出来る前のヤマト政権～律令国家の祭祀の様相が明らかになった。これ以後も、御神体を発掘した事例はほとんどない。

宗像神社の復興計画は、大正末年から何度も請願活動がなされたが進まず、出光が会長となる復興期成会を組織し、自ら会長として奔走してから、37 年を経過し、現在の宗像大社の景観と施設が整備された。その力の入れようは、現地事務所を開設し、幹部職員を配置するほどであった。

境内地は、『宗像神社史』の研究成果に基づいて古代・中世の境内範囲の用地購入や民家・墓地移転、玄海町役場移転までして整備がなされ、復興前の 5 倍の面積になり、現在の保存・整備された景観が出来上がる。祈願殿と駐車場部分を除いて、国指定史跡となる。

同様に大島の中津宮、沖ノ島においても用地購入・景観整備が実施される。そして総工費 10 億円の内、4 億円の浄財が出光興産の会社、従業員、販売店からの寄附によるものであり、出光関連企業で総額 7 億 4 千万となる。さらに、出光弘の新出光石油からも寄附があり、つまり、8 割が、佐三の人徳となる。そして、出光佐三と泰亮・弘の兄弟が一致協力して進められたことは特記される。同時に宗像神社宮司、宗像会、神社氏子会の強力なバックアップも見逃せない事実である。詳細な内容は、『宗像大社昭和造営誌』1976 年に纏められている。宗像大社が世界遺産の候補になりうる基盤は既にこの時期に、出光佐三と云う個性で結実したと見なしても過言でない。また、自ら計画・実施すること決めたならば、突き進むことを宗像人に示したことに意味がある。

（4）佐三と先人の顕彰

①武丸正助の顕彰と維持　（宗像市武丸）

武丸正助は、寛文 11 年（1671）に宗像郡武丸村に生まれ、宝暦 7 年（1710）に郡に親孝行が認められ、米 12 俵および田（1 反 7 畝）を貰う。さらに享保 14 年（1729）に福岡城に呼ばれ、親孝行で自田の税が免除され、農民の身分であるが「武丸」姓を授かる。宝暦 7 年に逝去する。黒田藩の褒賞で、有名人であった。黒田藩の領民政策の一環で、節婦も褒美が与えられた。地元では、戦前まで「節婦阿政（おまさ）」と武丸正助は共存した意識であった。

武丸正助の最初の記念碑は、明治 26 年の「郷友雑誌」で宗像会の吉田良春の呼びかけで建設される。

昭和 27 年に吉武村は、福岡県の農村振興計画指定を受け養老院（緑風園）と幼稚園の設置、正助翁顕彰会結成を進めていたが、前者は実施できたが、後者は資金不足で中断していた。時の村長であった立石昇、山下議、高山徳七郎が奔走していて、赤間出身の出光佐三に上京し、陳情の結果、「それは是非実現して貰いたい」と 20 万円の寄附がなされ、顕彰会の結成となる。昭和 28 年に武丸正助廟堂が改築・新廟となる。総事業費は、477,155 円の 213,000 円で 2 分 1 の援助である。

昭和 29 年（1954）9 月孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松源寺で、200 回忌讃仰法会が行なわれる。10 月 5 日には、200 回忌に遺徳をしのび武丸正助廟堂で、奉賛会祭主の出光佐三の祭文に続いて、子孫の武丸正兵衛の焼香があった。続いて、西本願寺の大谷光明上人の法話、高田旭操師の筑前琵琶、平田汳月師の博多仁和加などの余興も実施された。当時、西鉄の臨時バスも出されたと云う。佐三は、祭典にあやかり亡父藤六（松寿）の 13 回忌を赤間法然寺で行った。そして、佐々木滋著『孝聖武丸正助伝記』が 3,000 部を寄附配本して、供養される。佐三の挨拶が、『宗像』復刊 1 号にあり下記に紹介する。

「わたしは、子供の時から正助翁の親孝行のことを両親からいつも聞かされていてこの孝行な聖人にあやかりたいと思っていた。今回はからずしも奉賛会のお世話をいたすことになって非常な喜びを以て、郷里に帰って来た次第であります。戦後日本の道義も廃退いたしまして、忠孝と云うことが軽んじられてきましたが、この傾向はこのままで終わるものでなく、日本人も又目覚める日があることを信じています。戦後十年の月日が経過いたしましたが、この間どうゆう変化があったかということを考えて見ますと、まず海外では“もう戦争はこりごりだ”といっていながら相変わらず戦争の用意が続けられている。誠におかしな現象であるが、これは言えば何事も理屈一点張りではいかんということであります。いい事した人は必ず恵まれぬ。このようなことは裏を返せば孝子正助さんのような誠実な人間に全世界の人々が成っていたならば、世界はとっくに昔に平和なっていると思うのであります。深い人類愛が人間闘志の間をしみとおつていれば、あんな悲惨になくなって済んだと思うのであります。また翻って国内の事情を考えますと、この頃の日本人はしょうがない。道義は退廃してどうしょうもならぬと日本人を馬鹿の標本みたいに云う。これは日本人自身であります。ところが、外国人はどうかと云うと、“日本人は立派だ。日本の国は富士山のように立派だ。勤勉な国民だ。”という。軍人も一般人も褒める。日本人は決して悪い国民でない。正助翁がその手本である。この正助翁の心を心としていけば間違いない。立派な世界平和に貢献する事ができる。と私は思うのであります。」

昭和 39 年 5 月 21 日、赤間に墓参り帰福し、氏神の八所宮、緑風園・武丸正助廟に参る。8 月に武丸

武丸正助墓

「孝」

「恩」

正助翁の伝記 3,000 部を配布する。ここに序文を書かれ、経済的支援がなされる。

この本は、子供向けに書き下ろされたのである。昭和 39 年 6 月、孝聖武丸正助翁遺徳顕彰会の代表である滝口凡夫によって、『武丸正助さん』が刊行される。本は、A5 判 38 ページで、200 円の安価で配布される。

昭和 41 年 4 月 25 日に正助翁 210 年祭が遺徳顕彰会によって行われる。宗像会との協賛である。以後、滝口雪雄により、昭和 62 年に『孝子武丸正助拾遺』が刊行される。その中には、出光興産の出光昭介（5 代目社長）の「真の日本人を育てる鑑に」の序文が寄せられている。

「父は青年時代から、理想を掲げて実業界に入り、97 年の一生かけて、日本人の事業経営のあり方を実証してきました。その体験の上に立って、今日の世界は権利思想で行き詰まつているので、この混乱を救うものは日本の道徳・互譲互助の精神であるという信念をもって、日本人の世界的使命を全国の青年や経営者たちに訴えておりました。父の頭に描かれていた、道徳の日本人の原型と言うべきものは、恐らく子供心に知った、宗像の先生や地域風や私の家風であり、殊に正助翁の姿であっただろうと思います。その意味で、正助翁の教えは正に、今日の日本及び世界に大きな示唆を与えるものであり、この度、正助翁の伝記・資料が集大成されたことは、非常に有意義なことであると思います」

滝口は、「善を積む」・「孝養を尽す」・「仁徳」・「恩愛」・「正義」等の道徳再興を大事とする良き宗像人の創造を願求する情熱の気魂がある方であった。彼は、元宗像町職員で教育大学移転の企画室課長で手腕を発揮した。そして、出光の精神を受け継がれた。武丸正助廟の改築移転も佐三の了承と援助なくては不可能であった。

平成 4 年（1992）正助ふるさと村がオープンする。

このように、武丸正助翁の顕彰事業に深く関与し、経済的にも多く支援を継続的に行われていた。佐三の「孝」や「恩」の基層意識を窺うことができる。

②早川勇顕彰碑　（宗像市吉留）

昭和 43 年（1968）7 月 22 日、明治 100 年に併せて計画されていた早川勇翁像の除幕式を吉武村役場跡で行われた。再興宗像会が会誌で、寄附を呼びかけたものである。早川勇顕彰会は、代表は石田重成町長、顧問が出光佐三となる。式典には、早川勇の子孫や、佐三の代理として出光弘（新出光石油）が出席、350 人が参集した。併せて、6 月に早川勇顕彰会より依頼されていた早川勇の伝記を桧垣元吉教授により 5,000 部が出版される。建設碑は、250 万円の浄財で建立された。

早川は、宗像会を組織するにあたり中心的な人物で、後進育成に尽力しており、佐三と共通する部分が多くあったと思う。ただし、出光の書いたものに、早川の記述は殆どない。その原因は、早川が勤王のための家族を疎かにし、佐三の家族観と合わなかったのかも知れない。

（5）佐三と戦後の宗像会

雑誌名が同じであるが、出版の経緯が異なるので、復刊宗像と再興宗像に区別する。

復刊宗像　戦後、昭和 30 年 12 月 1 日、神湊町在住の中野正之によって、復刊記念号雑誌「宗像」が個人名義で発行された。復刊の目的と心意気の言葉がある。

「故郷は祖先の墓のあるところ、父母兄弟の住むところ郷を離れ故山を望む懐かしむものであるまい。各自消息を報じて、親愛の情を表わし、郷友の交流を厚くし、知識を交換し、徳行を奨励し、老幼少長その責任尽くし、郡の福祉に邁進するとある」とある。戦前の『宗像』の趣旨を継承し、進めるためとする。

復刊の要望は、東京・福岡の他郡の要望に応えたものである。当時、東京・津屋崎・福岡県人会・八幡・門司・飯塚・中間・遠賀宗像会などの親睦会は残っていたが、中間宗像会と有高巌（立正大学）、さらに宗像出身の多い出光興産の幹部からも熱望があり、それに応えたものである。編集の主幹は、中野正之、編集長は吉田和三である。

復刊記念号雑誌「宗像」の復刊宗像に佐三が「宗像族の雄心を」の祝辞を書く。

「宗像神社は単なる一つの地方的な宗派神道の社でなく、畏くも天照大神の御神勅により建立された社でありまして、宗像郡民の精神的中枢であるというような、小さなものではありません。実はわが日本国民の信仰の中心であると信じています。戦後日本人は。神ながらの道を忘れ、祖先の道を忘れて、精神的な心のふるさとを亡失してしまったような感じがします。そうした意味からいつても日本国民子々孫々相伝えて祭祀し奉るべしと御神勅に示されたこの宗像大社の神威を広く国民にしらしめん心の寄りどころを失って、右往左往している国民に、神に帰一して奉るという先祖崇拝、国民一致の精神を教え示すのは、我々宗像大社の氏子いうなれば、永らくこのうまし国土に住みついている宗像族に与えられた使命ではないかと考える」

と、宗像神社史・沖ノ島調査の成果を取り入れた独自の考え方を披露する。復刊には、交流を深める為に戦前の宗像会のメンバーのこの雑誌に対する期待、会員の顕彰記事が多くみられる。戦後の民主化

で多様な記事となり、檄文を書くのは出光翁ぐらいである。地域史に関するものが多くなり、歴史系雑誌の色彩が強くなる。その中で、日並文夫、上妻国雄、安川弘堂が執筆する郷土史記事が多い。2 巻で終刊、会員は 232 人前後であった。

再興宗像　昭和 38 年 3 月 8 日には宗像町東郷で有志が会合し、宗像会の会則を基礎として、新しい宗像会が発足した。その翌 39 年 1 月 15 日、東郷にある町村長会事務所内の井原元彦名義で、再興の「宗像」第 1 号が発刊された。再興宗像 1 号に「宗像会に寄す」に佐三の祝辞が書かれ、名誉会員となる。再興宗像には、交流を深める為に戦前の宗像会のメンバーのこの雑誌に対する期待や会員の顕彰記事が多くみられ、上妻国雄（津屋崎町在自）が編集長となり、安川浄生・筑紫豊・松崎武俊・田中嘉三・安部郁郎・小方正人らが執筆者となり、懐古録と歴史記事、会員通信となる。

この頃の著名出身者は、安部清美（参議院議員）・赤間文三（大阪府知事・法務大臣）・有高巌（立正大学教授）・吉田法晴（参議院議員）・倉田主税（日立製作所社長）・梶木治郎（熊本営林局長）・安永渡平（八幡製鉄所副所長）・石松正鉄（住友石炭）・釜瀬富太（九州学園校長）・阿部徹（俳優）・真武直（福岡教育大学教授）などが知られる。会員数は、約 800 人であったが、組織の賛助会員が多く、4 年間で 19 号まで刊行し終刊となる。

この時期は、高度成長期を迎え、人々の移動が当たり前となり、閉鎖的な共同体（同胞意識）が崩壊し、テレビの普及や出版物が多数あり、雑誌の役割が終えたと見る。昭和 43 年（1968）　10 月、宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。

昭和 45 年 4 月 10 日、東郷の宗像会発行の「宗像」と神社発行の「宗像」とが合同して、宗像神社から一元的にこれを発行することとなった。昭和 50 年 1 月、現在の発行部数は約 5,000 部とある。

（6）鎮国寺の復興、東郷公園の再建

①鎮国寺の助成（宗像市吉田）

安部照生の「鎮国寺」『神郡宗像 8 号』2015 年に記載があり、立部瑞祐の自伝『心の旅路』昭和 57 年が出版されていることを知った。安部によると、「昭和 30 年は開基 1,150 年を迎え、・・・昭和 33 年落成の大護摩堂建設費に 175 万円を寄附される」とある。現在の価値としては、当時の初任給が 1 万 5000 円であるから、10 倍ぐらいとなろう。

鎮国寺は、弘法大師が唐より帰朝後、日本で最初に開基された由緒があるとする名刹であるが、昭和 23 年に瑞祐師が特命の復興住職としてこの寺に来た時、まず驚いたのが荒れ果てた寺の様子だった。屋根がはぐれて雨漏りする。床は朽ち果て落ちたままという荒廃ぶりで、箸一膳、茶碗ひとつなかった位だから、もちろん明日の米の蓄えなどない。本尊の五体仏以外は既になく流出されていたようだ。出

光美術館蔵の両界曼荼羅図は、流失品が購入される。本図は江戸時代前期～中期まで鎮国寺に所在が確認される。

瑞祐住職と佐三との出会いは、「鎮国寺の入山当初（昭和 23 年）にさかのぼる。このとき鎮国寺復興の抱負を語ったところ、社長は予定を変更して寄ってくださり、年に二度、三度、宗像神社に参詣される時はこちらも参ってくださる」とある。

大護摩堂の建立（昭和 33 年）した頃で、勧業行脚に全国を募金で歩いていた。建立の負債の 175 万円を抱え、身動きが取れず佐三の弟の出光弘（新出光石油社長）を通じて、佐三に会うことになる。立部瑞祐の自伝『心の旅路』が引用する。

「鎮国寺の事情を説明し、高利貸しから金を借りているときついお叱りを受けた。口調は丁寧だったけど佐三氏の言葉はわたしの肺腑を抉ってきて、じっと首を垂れていたが、・・・わたしの命のある限り・・・絶対にお返しします。・・じつは生命保険にはいっております。死ぬつもりはありませんが、返済できないときは死ぬような成行きになるかも知れません。[わたしもずいぶん大勢の人と付き合ったけど、あんたは本当に命がけやな]と、返済額を融資された。・・１年三ヶ月後に返却するが、このお金を差し上げましょうと」

と詳しく記述される。そして、瑞祐門跡は、「わたしの人生にとって、これは涙の出るほど嬉しかった思い出の一つです」と回想される。佐三は、和尚の命がけの心意気に鎮国寺の復興を確信し信頼したのだろう。

また、鎮国寺の復興事業を親身になり、宗像郡人会を結成し、出光泰亮・吉武辰夫を幹事となり奔走し、東京虎ノ門の共済会館で発会式となる。顧問は、佐三と倉田主税（日立製作所社長）となる。会は、宗像会の結成と考えた人が多く、一杯食わされたと冗談を云われながらも、鎮国寺の寄附集めの会であった。この会でのそうそうたる人脈が、後日の募金行脚の旅に役立つことになる。この宗像郡人会は、後に東京宗像会となる。

瑞祐住職は、大護摩堂建設後に、境内拡張整備、客殿、諸堂宇、駐車場の整備を完成させ、名刹の大寺院を復興する。こうした苦境を乗り越え 2,500 万円に及ぶ浄財を独力で集め、鉄筋コンクリートの大寺院を建立し、西国随一を誇る大寺院にまで築きあげた。「寄附は余計に集めようという精神では集まらない」と云い、「誠のあるところ以心伝心、おのずから浄財は集まる」と云う師の言葉には、苦行を乗り越えた行者の信念を含んでいる。

立部瑞祐は、佐賀県鳥栖市生まれ、8 歳で久留米市安国寺に入ったが、のちに伊予小松の香国寺に修行された。彼は、後に自坊を離れ本山の京都市の仁和寺に出任することになる。この頃は、出光弘の好意と支援を受け、後に第 43 世の仁和寺門跡と真言宗御室派管長に推戴される。

鎮国寺の復興は、佐三・弘の兄弟の支援・寄附と宗像会の結束によるものである。また、神湊魚屋の女将、吉武りゅう・繁子の入山後に粋な支援で支えられた。

こうして現在の境内は、諸施設が復興整備され、宗像大社と共に宗像の由緒ある寺院である。寺院の歴史については、「中世宗像神社と鎮国寺」を『むなかた電子博物館紀要 4 号』（2012 年）に書いたので参照して頂きたい。

②東郷公園の再建

東郷公園の助成（福津市渡）　東郷平八郎元帥の遺徳顕彰施設として戦前に大峰山に完成していた。津屋崎港口には、日本海海戦で捕獲されたロシアの「アプラキシン」が昭和 14 年に海軍から払い下げられ、港に繋がれていた。海軍思想普及の展示館となっていた。明治百年を記念して、日本海海戦 60 周年を契機に東郷神社改築と宝物館を計画中だった「東郷神社宝物館及び養真閣再建期成会」では宗教法人の許可もおり、昭和 43 年 5 月 27 日に郡内外の名士参列のもとに、地鎮祭を行なった。敷地外郭に 4 千坪を発起人の安部正弘が寄附、造成が行なわれた。約 2 千坪の社殿及び宝物館建設用地と駐車場が 6 月 8 日に完成し、本殿の工事を着手、同 44 年 5 月に竣工している。宗像会会員の安部正弘が、佐三や倉田主税の寄附を呼びかけたものである。安部正弘は、倉田主税の子供の頃からの知人であった。

宗像には、日本海海戦の記念物が多い。沖ノ島の現地大祭は、この日が契機となり、今日も続く。明治 38 年 5 月 27 日には、沖ノ島沖海戦の砲音が玄界灘から聞こえたとの証言が多い。戦後は、戦争に関するものは全て負の遺産と考えられていたが、今後は平和学習の資産として活用できると考える。

（7）福岡教育大学の移転統合

福岡学芸大学誘致と福岡刑務所誘致については、当時の宗像町長であった高山勉の『たった 1460 日されど 1460 日−神郡宗像に挑戦した男−』（平成 4 年）があり、行政側の具体的な内容がある。また、川口洋一「刑務所と学芸大」『宗像市史』近現代編に詳しく経過が纏められる。併せて読むと興味深い。これらを引用しながら、要点を纏めた。昭和 34 年秋に福岡刑務所の宗像誘致の話があり、地元吉武の要望もあり、ほぼ決まる方向で進み、残る水問題で水源探しに全力を挙げていた。

昭和 35 年 5 月 29 日に町長選挙で、「教育・文化・住宅都市」を掲げた教員出身の新人である高山勉が当選した。町長に選ばれた高山は地元吉武であり、誘致を好ましく思っていなかった。東京に上京し、出光佐三社長に挨拶に行った。当時のことを下記に引用する。

“

「出光社長は、法務大臣から教えられはじめて知ったという刑務所誘致にひどく不快感を示した。現状は水問題を残すだけで九分九厘決定済みの説明を受けると、・・・その夜に宗像出身の在京大手社長を集めて懇談の場が設けられた。そろって反対の意向。・・・町長の持論の政策（教育・文化・住宅都市）に共感を得て、刑務所誘致見直し思い立った」

と高山・河口により記述される。当時の法務大臣は、岸信介 2 次内閣の井野碩哉である。

帰郷後に議会で経緯を説明し、再度議員が上京し出光社長に刑務所誘致反対の意向を確認し、学芸大学誘致への 3 億円寄附の支援も約束された。以後、昭和 36 年 12 月、高山勉町長が、福岡刑務所の宗像移転を断り、昭和 37 年 7 月、福岡学芸大学設置促進協議会が宗像町で発足した。町長や行政は多大な困難を乗り越え、昭和 38 年 4 月、福岡学芸大学の宗像移転が決まる。建設予定地は、赤間・陵厳寺、石丸地区にまたがる城山山麓一帯で、山林・田畑・県伝習農場跡・民家 7 戸・町営住宅 12 戸の所在地で、12 万坪で（39.6ha）あった。当時の国立大学では、収容学生数に比して全国最大であった。用地買収費は、7 千万円と見込まれ、当時の宗像町年間予算が 2 億円前後であり、3 分の 1 の額であった。用地買収費は、7 千万円は出光興産から借り入れた。後に、3 千万円は宗像町へ寄付される。誘致の条件の 10 万坪以上の国への無償譲渡の用地買収は進んでいたが、文部省の宗像移転は決定されていなかった。無謀と云える取り組みは、昭和 38 年 4 月に文部省の学芸大学統合移転の決定がなされ、軌道に乗る。

この困難を極めた用地買収承認の地主説明会での、出来事が記述される。土地地権者は、180 人とされる。佐三の説明が記述される。

「出光社長が宗像神社参拝のため宗像にきておられるので、社長にも出席いただきました。席上、社長は学芸大をこの赤間の土地に建設する建設するために努力しているので、どうか皆さんも協力して下さい。先日町長、議員さんたちが上京されたとき、もし大学統合が実現しなかった場合、買収地はどうなるか心配のようだったので、私の意向を伝えておきましたが、そのときは私立の出光工業学校でも建設する覚悟をしています。・・・福岡県教育会のため、町と赤間発展のために御協力下さいと懇願された。」

と高山町長が回想する。

昭和 38 年 10 月 22 日、福岡学芸大学の統合起工式に出光佐三社長が出席する。昭和 40 年 11 月、福岡学芸大学の赤間統合校舎で授業が始まる。昭和 41 年（1966）4 月に福岡学芸大学の統合、赤間に統合移転し、福岡教育大学となる。昭和 39 年に「年頭所管」で教育大学の設置の抱負を再興『宗像』2 号に書く。

「国民の祖神宗像神社の神域である宗像の地にも再び黎明が近づいて、城山の山ふところに教育大学が生まれんとしている。日本民族は数千年の長い間、皇室の恵みによって平和を楽しんできたが、こ

の民俗を育てていくものが、日本特異の教育であり、これは学問の切り売りでなく人間の育成を中心とするものである。その意味において、聖地宗像に教育大学ができることは非常に意義あることである。

権利思想に基づく対立闘争によって完全に行き詰ってしまった世界の人々が、皇室を中心として一致団結している日本民族のあり方を認識し、その民族を育てた教育のあり方を研究するようになるのは当然の筋道である。宗像の教育大学はこれに対して必ずやよい回答を与えるであろう。年頭に際して、この意義ある教育大学を抱く神郡宗像人はいかなる心構えをもって進むべきか、相ともに考えたいものである。」

赤間は出光生誕の地元であり、九分九厘決定の刑務所移転を高山町長と共に学芸大統合に転換し、福岡教育大学の統合移転となった。昭和 35 年～38 年の出来事である。出光は、学芸大学誘致に関することを昭和 26 年 3 月の『人間尊重五十年』「夢」の中で赤間町制 50 年の事を、下記のとおり記す。

「赤間の町会に来て皆に会ってもらいたいとのことであった。仏事の中を抜け出した。町長や有識者の話の中に、昨年町制 50 年のお祝いをしたが、町はいっこうに発展しないで困っているとの紋切型の話があった。私は次のような所感を述べた。事業には立地条件があるから、条件の悪いところには事業は起こらない。宗像郡は昔宗像神社の御神域である。大神の御神徳によって人情敦厚、気風剛健の特色を持っていて、多くの教育者を出している。人間をつくることには優秀の立地条件を備えている。事業を起こして金を儲けるだけが人間の事業でない。人をつくることこそ事業中の大事業である。この方向で進まれることをお勧めする。ただし、こんな大事業は簡単に短時日の間に出来るものでない。ことにお互い現代の国民は戦争をもとどめえなかったような弱い落第生であるから、われわれの子供や孫の時代にこの事業を完成する覚悟があらねばならぬ。まずお互いの家庭教育から始めるべきである・・・・私の言う人は、他人の金や恵みを期待しているような依頼心をもつ人をつくれと言ったのでない。まず自分のことを完成し、その余力をもって人のために尽くすような人を希望するのであって、依頼心のある人などは将来とても人のために尽くす人でない。排除すべき人である。・・・人間尊重は郷里へも徹底していない。人に頼る、さらに人より奪う、この思想は権利思想の履き違いである」

と答えたことが記述される。昭和 25 年の事と思われる。学芸大学の誘致 10 年前の事である。彼は、思量深いので、宗像の特性を見抜き、早い時期から宗像を教育者の町とすることを考えていたようだ。

城山より赤間を望む（昭和 30 年頃）　福岡教育大学の移転前の景観　神山義信氏提供

ところで、高山は 2 期の町長選挙で落選する。前掲の本人自著に教育大学の誘致が原因と記す。

「用地の立木などで・・・普通の買収慣例に従って一歩引いて地主主張通りに決定した。この価格決定が将来、私の政治生命を短くした原因になるとは、このとき思いもしませんでした。」

落選した数日後に陵厳寺の佐三の兄宅で、出会っている。昭和 39 年 5 月 20 日前後のことである。その時の佐三の会話が記述される。

「今回のことはまことにすまなかったね。刑務所の件で君に無理押しをして、ついに落選へ追いやったことに対して、ほんとうに申し訳ないと思っている。深くお詫びするよ。しかし、決して力を落とすなよ。神郡宗像に刑務所は絶対ふさわしくないという君の力強い信念と、戦後荒廃しきった福岡県教育界の立て直しのため福岡学芸大学の統合に全力を尽くして、全国で何人とも成し得なかった大事

業を見事に成し遂げた君の事跡は、宗像教育界、福岡県教育史に一番の功労者として末永く残るだろうと・・・」

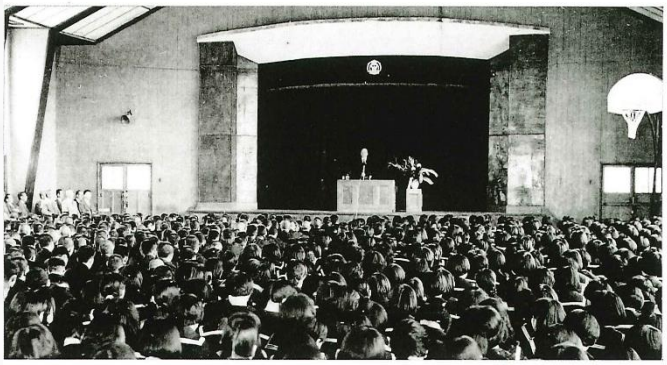
と賛辞があり、慰められたとされる。苦労人の佐三の義理・人情を知ることができる。そして、3 千世帯が赤間に集まり学園都市を形成する。

以後、宗像は高山町長の「教育・文化・住宅都市」へと進み、昭和 41 年の東海大学福岡教養部・付属第五高校が開校する。佐三の影響を受けた滝口凡夫が、平成 13 年に日本赤十字九州国際看護大学を誘致し、学園都市となる。出光佐三が福岡教育大学の統合移転を実現したことにより、50 年後の今日を方向づけたとも云える。

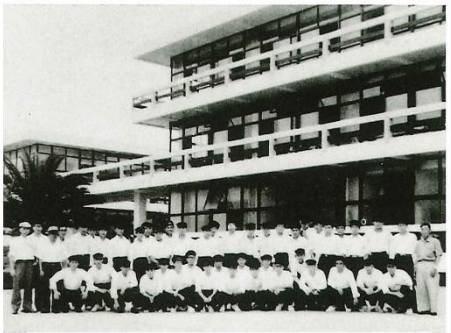
(8) 出光佐三の宗像での講演会

講演会は、知見したところでは、宗像高校、城山中学校・青年会議所で行われている。城山中学校の講演は、福岡学芸大学の統合起工式に出光佐三社長が出席した際に、実施されている。城山中学校は、彼が入学した赤間尋常小学校の跡地に戦後に開校していた。

宗像高校の講演は、高山勉町長の時代で、出光興産の石田正實・麻生和正が出身高校によるところが大きいと思う。昭和 35 年（1960）に宗像高校にて記念講演（創立 40 周年）で講演する。翌年から数年間にわたり、施設見学は出光興産徳山工場へ行くことになる。



出光興産社長　出光佐三講演会（昭和35年）



出光興産（徳山工場）見学　昭和36年

また、昭和 38 年 10 月 22 日に城山中学校講堂で講演する。この前に城山中学校の旧体育館建設、旧赤間小学校の図書室、赤間保育園に助成が行われる。

昭和 40 年（1965）　9 月 26 日、宗像高校で 2 回目の講演会「宗像人の使命」を行う。再興宗像 8 号にその内容が収録される。

同年 9 月に宗像郡町村会館で、宗像青年会議所の出光佐三の臨席講演が行なわれる。

昭和 44 年（1969）4 月 20 日、宗像高校体育館で 3 度目の佐三の記念講演会「日本人の世界的使命」が行なわれる。『出光佐三翁生誕百周年記念誌』に講演趣旨が収録される。この後に、宗像高校創立 50 年に後進育成のために、千万単位の多額寄附が行なわれる。

昭和 45 年（1970） 5 月、校舎の全面建て替えがなされ、宗像高校創立 50 周年が実施される。続いて、新体育館が佐三の助成により建設される。

宗像高校の出光講演録

「宗像人の使命」

今度の戦争に敗けて日本人は腰を抜かしてしまい、その上更に占領政策によって徹底的にいたみつけられ完全に外国色に塗りつぶされてしまっている。しかし本来の日本民族というものは、人を中心として心のあり方を知っている、世界で唯一の民族である。ところが外国は物を中心として対立斗争してきた民族である。その外国が今は完全に行き詰まって、いつ核爆発を頭上にうけて全滅するかも知れないというところまで追いこまれてしまっている。そこに日本民族の人間を中心として平和にしあわせに暮らすというあり方が、大きく浮び上ってきたというのが今日の世界の情勢である。

日本と外国のあり方がどうしてそんなに大きく違ってきたのかということであるが、それは一言でいえば祖先の違いであるが、外国の祖先は我欲の祖先であり、征服革命の連続が外国の歴史である。そういう征服、圧迫、搾取に対して出てきたのが自由や権利を主張する思想であり、自分や物に頼る個人主義、物質尊重の考えである。ところが、日本の祖先は無私無欲であり、国民に平和にしあわせに暮らすとを教えられできた。それをもっともよく現わしいるが、無防備の皇室と無防備の国民である。そこで日本人は平和に、しあわせに暮らすことを第一義とし、物や金は第二義的なものとするようになった。そして主張することにより譲るという互譲互助の精神とか、恩を知るといというようなことを大切にするようになった。こういう日本民族のあり方が世界の平和と福祉をつくるもとであるが、外国人にはその体験がないからどうしてもわからない。そこで日本人が早く本来の日本人に帰って、世界に平和福祉のあり方を教えなければならない。私が日本人に帰れとか、日本人の世界的使命とかいっているわけもそこにある。

ところがその日本人の中でも、その急先鋒の役目をしなければならぬが、宗像人である。宗像という土地は宗像神社の御神徳によって醇風美俗の地方色をもったところであり、宗像人は非常に素直でやさしく一致用結する。而も人間的に芯が強く、積極的な性格も持っている。宗像人はそういう人間として大切な秀れたものを持っている。私は出光の経営がどうしてそんなに力強いのかと開かれた時、順序立てて説明する場合には必ず自分が宗像に生れたお蔭であると、冒頭に言う。私が他の土地に生まれて他の学校に行っていたならば、今日の私はなかったと思っている。

私の子供の時は、宗像というところは小学校の名校長、名教員を出すので有名であつた。そしてそれは宗像神社の御神穂のお蔭であるということを聞かされていたので、子供心にも神の存在を知った。一方この醇風発俗の土地にも、一般の良民から毛虫の如く嫌われている人が何人かいたが、その人たちは外国の権利思想、自由思想の人であるということを聞かされて子供心に外国思想は悪いという観念を持つようになった。これは外国思想の悪い面のみを見せてつけられて、良い面は知らされなかったということだが、私は今日では日本人として自分育つのに非常に良かったと思っている。そういうわけで私の体験からしても、宗像人は本来醇風美俗で、人間として大切なものをもっているわけですから、この宗像人が本来の宗像人はどうあるべきか、真剣に研究されて、そして日本人が本来の日本人に帰る急先鋒となって貰いたい。幸い昨年（昭和 39 年）のオリンピックで日本人も漸く目覚めてきたので、君たち若い宗像人が、日本民族が世界に平和と福祉のあり方を教えなければならない。そのチャンピオンは宗像神社のもとに育った自分たちであるというような高い尊い目標をもって進んでもらいたい。

宗像高校における講演要旨（再興宗像 8 号　昭和 41 年 11 月）より引用

「日本人の世界的使命」

今日の世の中くらい簡単になった世の中はありません。これを、複雑に考えて理屈ばかり言っておれば、これくらい複雑な時代はありませんが、簡単に考えれば、これくらい簡単な時代はありません。

これはどういうことかと言うと、今日の世界は、個人主義、権利思想、自分のことばかり考えて権利を主張する、その結果対立固争して行詰ってどうにもならなくなっているということです。そしてそれを救うものは何であるかと言えは、すこぶる簡単なことで、お互いに譲り、お互いに助け合う、互譲互助の精神であります。戦後おこったことに、二つ大きなことがあります。

一つは交通が非常に早くなって、世界中を一日で廻れるようになっておるから、世界は福岡県よりも狭くなっている。次に核爆発が発明されて権利思想で対立闘争しておれば、それが頭から落ちて世界の人類が全滅するという、この二つのことです。

交通が非常に早くなって、世界が狭くなぅた。そこに百数十の異民族が住んでいる。それで、個人主義、権利思想で対立闘争することは、もう、許されない、時代遅れであるということです。権利思想の善し悪しを論ずる余地がなくなっておるということです。そういう簡単な時代なのです。そして権利思想で行き詰った世界を救うのは、日本の互譲互助であります。

まず、産業界が日本人の和の力を発揮して世界を驚かす、これは既にやっております。その次に、日本の教育が立派になる。先生の尊さと先生の教えによって、人間が育てられることを示す。政界も、今のように喧嘩、なぐり合いの場所ではなくて、日本の国政を真剣に討議する本当の議場にする。そうすると、このような日本を世界から見て、何と立派な国かということになっで、外国人が自発的

に、日本人の在り方を研究するようになる。その時に、はじめて日本の互譲互助とか、道徳が理解されて、世界の平和、人類の福祉の基礎になると思うんです。そこに、日本人の世界的使命があります。

「出光佐三翁生誕百周年記念誌」（昭和 44 年 4 月 20 日）より引用

石田正實（出光興産会長）は、これより 10 年後の昭和 54 年（1979）に、『宗像高校 60 周年誌』に「宗像の歴史と伝統に自覚と誇りを」を記し、宗像中学 4 回生の思い出と佐三翁の言葉を紹介している。

「私が宗中を卒業したのは昭和 2 年ですから今年で 52 年が過ぎたことになります。しかし当時の思い出は今でも鮮やかに残っております。私の家は赤間の陵厳寺ですから東郷までは約一里の距離です。それを毎日、下駄をはいて歩いて通学したものです。今でも足腰が強くて健康に恵まれているのはその時のお蔭だと思って感謝しております。

当時の校長は初代校長の松木五郎先生で修身を担当されていましたが厳格な方でした。また体育の吉武先生も厳しい中に人間味あふれる先生でした。宗中の草創期でしたから全学に活気が満ちて、質実剛健の校風が培われつつあった時です。いまからふりかえって、私の人生の極めて貴重な時代であったことを痛感します。

私は出光興産に入社して今日に至っておりますが、出光興産の創業者である出光佐三氏も赤間の出身です。今年 95 才になる出光氏はかねがね「私の今日あるのは、自分が宗像に生まれ、宗像大社のご神徳の恵みをうけたからである。」と言っております。

宗像大社といえば、私どもは子供の頃、田島放生会のお祭りに、友人と手をとり合って長い釣川の土手にそって二里の道を歩いてお詣りしたものです。今でもその頃、一面の田に黄色くなった稲穂と釣川の土手に咲いていた彼岸花の美しさが思い出されます。

この宗像大社は御承知の通り、天照大神の三人のお姫様〔田心姫神（沖ノ島）瑞津姫神（大島）市杵島姫神（田島）〕をお祀りしてあります。この天孫降臨に先立って、三人のお姫様は天照大神のご神勅を奉じて宗像の地にお鎮まりになられたのです。そのご神勅とは「汝ら三はしらの神、宜しく道の中に降りまして、天孫を助けまつりて、天孫に祭かれよ。」というもので、ご神勅の第一号と言われております。これは日本書紀に書かれております。

出光佐三店主に言わせますと、これは結局、日本の皇室と国民の間柄を示したもので、皇室に対する国民としての基本がここに示されているというのです。宗像大社が国民の祖神と仰がれ、また裏伊勢と呼ばれて尊崇される所以です。このご神勅はいま大社の拝殿に大きな額になってかけられていることは宗像の人はご承知のとおりです。私どもの会社にも宗像大社がお祀りしてあって、ご神勅の小さな額もかかげてあります。

宗像郡は、昔は宗像大社の神領になっていたために、神郡宗像といわれてきました。そしてご神徳をうけて、古来、醇風美俗の地方風ができており、昔から小学校の名校長、名教員が出るので有名でした。わが宗中、宗高の伝統もその根源を辿れば、宗像大社に帰することは間違いないと思います。

さて、今日の世界の様子をみてみますと、対立と闘争が世界的に広がっています。世界中の人々が平和と福祉を望んでいるにもかかわらず現実の世界は反対の方向に進んで益々行き詰まっています。これについて出光佐三氏は「日本以外の外国は物を中心とした“物の世界”であり、権利思想、個人主義の国である。日本は人を中心とした“人々の世界であり、和、互譲互助、道徳の国である。今日の世界の行き詰まりは、物の世界、物質文明の行き詰まりであって、これを解決するものは日本古来の道徳であり心のあり方である。」と言っています。私もそうだと思います。

このように日本人のあり方が世界的に注目され、殊に欧米では日本が盛んに研究されているということは、結局、世界の行き詰まりを解決するために日本的なもの、東洋的なものに精神的活路を見出さんとしている実証だと思われます。

そういう世界的状況の中で、日本人としては、現在の自分の姿をかえりみて、真剣に自問自答し、真の日本人の姿に立ち帰るように努力しなければならないと思います。その点では宗像は先にも述べたように、昔から神郡宗像といわれ、名校長、名教員を輩出した尊い実績と風光明媚な自然環境と醇風美俗の地方風をうけ継いでいます。宗像はいわば日本人の心のふるさとと言ってもいいと思います。宗像人の一層の自覚が望まれる所以です。そして特にこうした時勢の中において、宗像の中心的存在たる宗高の責任は極めて重いと言わねばなりません。」

昭和 56（1981）年、96 歳で出光佐三は逝去する。石田正實は、眠る佐三の横顔を見ながら、「この人は、生涯ただの一度も私に〔金を儲けろ〕とは言われなかった。40 年を越える長い付き合いだったのに……」と嘆いたそうです。

（9）出光丸の竣工見学

日本の将来を担う中学生にも出光丸を見せたいと、宿泊や交通費もすべて会社で負担、全国の中学生 15,000 人を招待する。この時、宗像郡からも中学生が参加する。佐三が発案し、11 ヶ月の日時をかけて周到に計画され実行された。

石田正實の「出光丸」が、再興宗像 14 号に記事が収録される。彼は、宗像の赤間町出身で宗像会終身会員、出光興産の三代目社長である。

出光丸は、全長 342m、重量 21 万トンの世界一タンカーで、東京湾を後にして、ペルシャ湾に晴れての処女航海に発ったのは昭和 41 年 12 月 12 日であったが、3 月 12 日には、第二航海を終えて徳山港に入港した。世界注視の中で、極めて順調に運航して、その威力を発揮している。

石田によると、「ペルシャ湾の標準運賃はトン当り 10 ドル（3,600 円）であるが、出光丸の場合は約 500 円である。3,000 トン級の内タンカーの運賃でいえば、東京－名古屋港間の海上運賃と同じで、中近東から日本に運べるわけである。まさに海上運賃の革命といってよい。現在世界の原油の埋蔵量の 60%は中近東にあるといわれているし、日本に輸入される石油の 80%が中近東からである。その中近東からの運賃が、東京-名古屋間の内航運賃に等しいとは、中近東の莫大な石油資源が日本の内地にあるといってもよい」、しかも石油の消費量は年々増加して、昭和 42 年度は 1 億キロリットルを超えることになり、昭和 60 年には 4 億キロリットルを超えるという、エネルギー調査会の報告がある。

石田正實「出光丸」再興宗像 14 号に収録を下記に引用する。

「出光丸の竣工に当つで、昭和 41 年 12 月 7 日から、11 日まで、5 日間にわたって、横浜根岸で竣工披露を行った。第 1 日は、高松宮、同妃両殿下の御臨席を得て、盛大に引渡式、竣工披露が行なわれ、第 3 日には、皇太子殿下の御台覧を仰ぎ、第 5 日目には、佐藤総理、大橋運輸大臣等の見学があった。この 5 日間の総見学者数は約 3 万人、そのうち、1 万 5 千人は、北は北海道から、南は鹿児島県までの全国中学生、及び同伴父兄である。明治以後百年間、英国その他の先進諸国を抜いて、現在日本の造船能力は世界の王座を占めるに至っている。昭和 40 年の世界造船量は 1,221 万トンであるが、日本の造船量は 536 万屯で、世界全体の 44%を占めている。かつての造船王国の英国の造船量は 107 万トンで、日本の 5 分の 1 も足りない。このことは、日本民族の優秀性と和の精神の成果であるとの出光会長の信念で、戦後日本人としての自信と誇りを失ってしまった現在、是非とも次代を背負って立つ少年に見せたいとの念願から行われたものであつた。

全国から集って来た手紙 1,000 通は、世界一の出光丸の勇姿を見ると、全く驚きと悦びに輝いた。なでるようにしてまた走るようにして、船内くまなく見てまわる姿が今も眼前に思い出される。感想はと聞いても、ただ大きい、デッカイという以外の表現をもたなかった。

彼等が帰校してから約 3,000 通に余る感想文や、お礼状が送られて来た。これらを整理してみると、面白い結果が出て来た。東京都の学校からは 1 通も来なかったし、大阪、名古屋、横浜の大都会からは極めて少なく、地方の農村、山村の学校からは殆んど全員が書き送って来た。都市と農村の世相を反映しているといっても良い。

内容の方から分析してみると、全体の 7 割が、王選手・3 回ホームランを打っても届かない長さとか、碇の一つの重さが大鵬より重いとか、主として外形の観察とどまって、2 割がこの世界一を生んだ日本人の力と、優秀性を認識し、最後の 1 割ぐらいが将来自分たちも、こんな大きな船を作る人になりたいとか、出光丸のエンジンのような力の持ち主になりたい等と自己の自覚と、希望を述べている。最後のグループは、将来国民の指導者になる素質を存じているといってよかろう。

3,000 通のうち、3 通ほどがこの見学を批判し、一通は接待の弁当がまずいし、待遇が悪かったと非難していた。しかも、それらの 3 通が何れも宗像から来た学生のもので、残念というより、むしろ唖然とした。世界一出光丸よりも、一糸乱れず、整然と、かゆいところに手の届く出光社員の行動に、より称賛の言葉を送って来た一般招待者に比すれば、なおさらのことである。出光会長は、これは神慮の顕れであるといっておられる。

神郡宗像の土徳に育まれて、幾多の名校長、名教員が出た。早良巡査に宗像教員というのが、私どもが子供の時からよく聞かされた言葉である。宗像卵とともに郷土宗像の誇りであったのである。宗像人の純粋性の故に、戦後の思想の変化に対応しきれずに、押し流されてしまったのではなかろうか。健康な人ほど病菌に弱いともいわれる。

故郷を離れて、時に静かに目をとじて憶えば、山紫水明の宗像の山々の姿、野の美しさが、過去の追憶とともに甦ってくるのは、誰でも同じであろう。宗像の発展と、宗像人の誇りを望むこと切なるものがある」

とある。当時、3 通の批判の手紙が、それが宗像の中学生であり、石田・出光ともに驚いて残念がっていると記されるが、意外とそうでもない。筆者の友人の姉がこの中学生参加に選ばれ、彼女や友人は非常に喜んでいたのを覚えている。家庭の事情で、いつも社会科見学・修学旅行も参加できなかった。中央中学校の先生の粋な計らいで参加できたのだろう。出光佐三と出光丸のことは、友人の笑顔と共に、記憶の中に鮮明に残る。

３．著作・評論・出版と顕彰事業

(1) 著作・評論・出版

出光の逝去後、彼が書いたものが続いて出版される。出光興産店主室『我が 60 年間』追補が出版される。

以後、昭和 58 年に『道徳とモラルは完全に違ふ』 出光興産、昭和 59 年に『出光の言葉』 出光興産、昭和 60 年に出光興産店主室『我が 60 年間』第 1～4 巻が出版される。評論としては、昭和 48 年（1973）2 月、瀧口凡夫より『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』が出版される。

昭和 61 年に出光計助『二つの人生』、平成 2 年に高倉秀二『評伝　出光佐三』、平成 15 年（2003）に、佐三の娘である出光真子『ホワット・ア・うーまんめいど –ある映像作家の自伝–』が出版される。以下、数多くあるので代表的な著作は下記の通りである。

・木本正次　小説「燃える男の肖象　出光佐三」1982 年

・高倉秀二『評伝　出光佐三』プレジデント社　1990 年

・堀江義人『石油王　出光佐三　発想の原点』三心堂出版社　1998 年

・滝口凡夫『決断力（中）』日本工業新聞社 2001 年

・佐々木聡編『日本の戦後企業家史―反骨の系譜―』有斐閣選書　2001 年

・水木楊『難にありて人を切らず』PHP 研究所　2003 年

・滝口凡夫『出光佐三　魂の言葉』海鳥社　2012 年

・水木楊『出光佐三　反骨の言魂』PHP 研究所　2013 年

また、平成 24 年（2011）に佐三をモデルとした小説、百田尚樹の『海賊とよばれた男』　講談社から刊行され、翌年に本屋大賞となり、再び関心を集めることになる。

（2）宗像での佐三翁顕彰事業

出光佐三の逝去後に顕彰の記念事業や追悼記事などがあり、原文を引用しながら、彼と宗像の関係者の繋がりを集めた。

出光佐三翁生誕百周年記念事業

昭和 60 年（1985）8 月 17 日・18 日に宗像市商工会青年部主催で、故出光佐三翁生誕百周年記念事業が、開催される。記念式を須恵の中央公民館大ホール、生誕 100 年祭で映画上演、赤間の生家公開が行なわれた。記念誌は、『日本人　出光佐三翁生誕百周年記念誌』に詳しく纏められる。地元で、唯一の佐三の業績・評価を知ることができる本である。

堤宏は、記念誌の中で「今から 20 年前（昭和 43 年）、当時の宗像は宗像高校の校長着任拒否闘争、勤評闘争等教育闘争の拠点として高名を馳せ、教育現場は大混乱でした。昔から神郡宗像、教育郡宗像と言われ、著名な教育者を多数輩出した、教育界の雄郡でありましたが、当時はその面影もない惨澹たる状況でありました。このように憂慮すべき状況を耳にされた出光店主は、地元青年代表を東京に招かれ、宗像の現状を憂い“宗像の若者よ立て”この混迷する宗像に何の生きがいを感じるか。このすばらしい環境に恵まれ、良き先輩をもつ幸せな若者よ、醇風美俗宗像の若者よ、勇気をもって奮起せよ。先輩に負けない人になれ、郷土を愛する人になれ。何事にも感謝し、互譲互助の精神をもって真の日本人のチャンピオンになれと激励され、その言葉に目覚めた当時の青年有志が集いも我々は将来の宗像

の礎になろうと結成されたのが宗像青年会議所の前身であります。」とあり、発足 10 周年記念誌に「宗像大社の御神徳を頂いている宗像人は特別の使命がある。それは実の日本人のあり方を、身をもって示して世界の平和、福祉に貢献しなければならぬ使命をもっている。そういう高い目標に向って進みなさい」の一文を寄せられ、「日本人のチャンピオンたれ」「日本人のあり方を示すことが、日本人の世界的使命である」など、世界的視野にたたれての御教示を賜わりましたと」と述べられる。

この高名を馳せたのは、昭和 43 年 4 月に福岡県高校教職員組合は、校長推薦者を巡って、全国でも例のない校長着任拒否闘争が始まった。学校の正門には組合員らがピケを張り、着任しようとする校長に対して阻止した。宗像高校の場合は 67 日後の 7 月 17 日にやっと着任したとされる。津屋崎町の水産高校でも組合員が、ピケを張り警察権力が介入することになる。佐三の誘致した教育大学のお膝元の出来事であった。

かつての宗像の教育は、「一人の子を粗末にする時 教育はその光を失う」・「地味だが堅実、一人ひとりに食いついて行く人間教育」とする安部清美や八波則吉などの思想があった。昭和 33 年～昭和 43 年にかけて福岡県教職員組合の勤評闘争が激化することになる。

小学校の頃、休みであった宗像神社の放生会も政教分離が進み、休日でなくなった。

川島照亮は、宗像高校と佐三翁との繋がりと感謝が書かれる。

「出光佐三翁の深い心」　『宗像高校同窓会　平成 22 年会報』

「現在の宗像高校の歴史を語るに出光佐三翁の名前を外すことはできない。・・・中略・・・翁はいつも言っておられました。「今の自分があるのは、宗像に生まれ育って宗像大社のご神徳に浴したお陰である。宗像は昔から名教員を輩出する教育郡であったが、私もその尊い先生に教え育てられ人の尊さを知った。それで私の会社の在り方は、人間尊重の精神が中心になった」と。そういうご自身の体験から、翁は郷土宗像に対する感謝、報恩の心が強く、それを色々の会に実行されたのです。50 年程前（昭和 35 年）には宗像高校で講演をされ、日本人の使命や宗像の若い人たちの役目を説かれました。また、創立 50 周年記念行事や新体青館の建設に際して、千万単位の多額のご寄付を頂きましたが、寄付のことは絶対口外しないでほしいと言われました。そして、この宗像から将来の日本を担う若い人が育つのが、一番の楽しみとも言っておられました。かく言う私も現在の伊豆会長、当時常任幹事だった故天野昭夫氏らと共に翁に直接激励を受けた一人であります。「宗像の若者よ立ち上がれ。」と語られた翁の慈顔を今でも忘れることは出来ません。

そのような翁と宗像高校をつなぐ掛け橋となって、今日まで多面にわたってご尽力を頂きました同窓会顧問の麻生和正氏には感謝の念に堪えません。」

昭和 53 年 11 月、宗像町民名誉町民 1 号となる。この時の『宗像』社報の記事がある。

郷土に対する永年の助力に町民挙げて感謝　　昭和 53 年（1978）2 月号

「人口約 5 万 2 千を数え、昨年末に新庁舎の落成を見た宗像町では当町初の名誉町民として、出光佐三氏（93 才）を選び、名誉町民章の贈呈式が去る 11 月 16 日に新庁舎会議室で行われた。当日出光佐三氏は、高齢のため欠席されたが、出光興産株式会社取締役の麻生和正店主室長が代理で出席され、天野町長から名誉町民章証書を受けられた。出光佐三氏は、明治 18 年 8 月 22 日、宗像町赤間（旧赤間村）に生まれ、赤間小から東郷高等小、福岡商業をおえ神戸高等商業学校を卒業。明治 44 年に門司市（北九州市門司区）で出光商会を設立。昭和 15 年に今の出光興産株式会社と社名を変え、今日の基礎を築かれた今日の間、同氏は教育郡宗像の教育環境整備への援助として、福岡教育大学の統合誘致、旧赤間小学校の図書館、城山中学校の旧体育館、赤間保育園の建設等々、郡内のあらゆる教育機関へのおしみない助力がなされた。

更に氏は、神郡宗像の文化向上のためにも、沖ノ島第 1 次から第 3 次にわたる学術調査を基として、宗像神社史上・下・附巻の編集、宗像大社昭和の大造営事業、宗像大社宝物館建設等、神郡宗像の発展に多くの功績を残されております。しかし、これ等の功績は郷土宗像のみならず同氏の著書「人間尊重」や「永遠の日本」などで述べられているように、会社の運営を通して、日本全体の教育と文化の向上に貢献するという出光精神の現われでもあります。また、これらの御功績に対し去る昭和 33 年には旧門司市名誉市民章も受章されています。このたび、出光佐三氏におかれましては、宗像町、初の名誉町民になられましたことを心からお祝い申し上げます。今後共、益々御健勝・御長寿を心より祈念申し上げます。」

昭和 53 年 12 月吉日　　宗像大社宮司・葦津嘉之、外職員一同　社報「宗像」編集部

昭和 60 年 8 月 27 日に福岡 RKB 毎日放送による特別番組「われ天地に愧じず」が放映され、彼の生涯と事業、友人のコメントが紹介される。出光興産の提供である。

平成 23 年（2011）、 出光創業 100 周年記念日には「日本人にかえれ」の名言が新聞広告に掲載された。イラストの日章丸（2 世）は、イランのアバダン港に石油を購入し、ペルシャ湾で大国イギリス軍に撃沈される可能性があるにも関わらず、新田辰男船長が航海し、川崎港に帰港する。出光の存在を示す世界的な出来事である。タンカーには、航海安全の宗像神社が祭られていた。この時も、「宗像大神」が加護してくれたのだろうか。

平成 27 年 3 月 24 日～5 月 10 日に、宗像市海の道　むなかた館で『日本人にかえれ-出光佐三展-』を実施し、期間中に 27,000 人の入館があった。

佐三と宗像の繋がりが、逝去 36 年を経て再び蘇る。

４．まとめ

(1) 佐三翁はどんな人

佐三について、弟の計助（出光興産　２代目社長）は、『二つの人生』に、「店主の場合は、物事を実行するに当たっては、事前に徹底的に調査、研究する。その結果、一度やると決めたら、だれがなんと言おうと絶対あとには引かない。非常に頑固だ。だから、たとえば、いったん怒り出したらそばには近寄れないくらい激しい。人並みはずれて頑固なところがある半面、実に情にもろい。女性や子供には無条件にやさしかった。逆に相手が強い役所などで、曲がったことがあると、とことん反対した。若いときから苦労ばかりしているから、いろいろとよく気がつくし、義理、人情を非常に大切にする。しかも、普通の人なら、苦労が続くとくじけて止めてしまうが、店主は苦労があってもへこたれない。禍いを次々と自分の栄養分にしていく。山を越すと、次の大きな険しい山をめざしていく。性格は父親に似て、楽天的で明るい。」とされる。

また、店主も明治 44 年、初めて門司に店を出したときは「これで両親や妹、弟たちの窮状を救えれば…といった程度にしか期待していなかったのではないだろうか。晩年、計助、出光がこんな会社になるとは思わなかったと述懐するのを何度か聞いたことがある。」と回想される。

佐三翁の好物は、赤間城山の山芋で、「青年会議所の人たちが、城山の山芋を持参すると、オレの堀り残したものを持ってきたと喜んだ」と、滝口凡夫は記す。

以下、いろんな方がエピソードと感謝が記される。『日本人　出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年宗像市商工会青年部より引用する。

宗像大社宮司の葦津嘉之は、復興期成会の頃に彼の宗像気質を下記のように書いている。

「宗像の人々は宗像大神のご庇護をいただいて、先祖代々醇風美俗の地方風を生み出し、それを良く受け継いで現在に至りました。その美わしい人情と素朴な地方風と、宗像大神の広大無辺なご神徳の中で私は生れ育ちました。今日の私がありますのは、全く宗像のお蔭です」といつも故郷宗像に対して、格別に報恩感謝の念をお持ちでありました。かつて、教育正常化の嵐に郡内が見舞われた時、宗像にも赤旗を振り廻して教育を荒廃させる悪い奴が多勢おりますよ。と申し上げたら、にっこりと笑われて、宗像人は純情、純真、無垢だから悪の色にも染まりやすいのです。しかし悪いとわかればすぐ治まりますからご心配なくと、心から宗像の人々に対して愛情をもって弁明された時は返す言葉もなくただただ頭が下りました。」

天野敏樹町長は、下記のとおり回想する。

「当市におきましては、昭和 41 年 4 月福岡教育大学の誘致を始め、孝子武丸正助翁の遺徳顕彰事業、旧赤間小学校の図書館の建設、城山中学校体育館の建設等の公共事業に多額のご援助をいただき、市財政の苦難の時代を乗り切ることが出来ましたのも、ふるさとをこよなく愛されていた現れであり、・・・宗像住民のシンボルであります宗像大社を氏貞が再建して以来約 400 年ぶりに、巨費を投じて修復されたことは・・・「宗像の心は一つ」という言葉がありますが、古代より宗像大社の秋季大祭を中心とする各種の祭りに氏子が集まり、情報交換、コミュニティ形成の重要な拠点となり、神郡宗像の意識が熟成されてまいりました。」

伊豆善也県会議員は、高山勉の政策を引き継ぎ、下記のとおり評価する。

「出光翁の郷土に尽された精神的、経済的ご貢献ははかり知れないものがあり、これほど郷土の為に尽くした経営者は他に類を見ないことでしょう。また、宗像の戦後の政治、教育の荒廃を深く考慮され、その健全化のため、陰に陽に尽力されたご功績を忘れてはなりません就中、教育大を城山山麓に私財を投じて統合、設置されたことは特筆すべきことであります。」

安永武一郎学長は、学芸大学統合移転を振り返り、回想する。

「当時の金で 3 億という巨額の寄附を下さった。大学側が「その金で出光会館を建設しましょう」との申し出も断わられ、御自分を表面に出す事をなさらなかったのみならず学生への奨学金を毎年継続して下さり「国家の役に立つ教師になって欲しい」との念願をこめて今も続けている。」また、教官諸氏に広く外国の実状を知り、教育の場で生かして欲しいと、助成の恩恵を賜つた教官は既に 100 名に達している」

文部省が「福岡教育大学のみに援助せずに、他大学にも及ぼしたら‥‥‥」と言った時、出光は「それなら私は寄附を止める」と断言されたと云う。

滝口凡夫は、出光翁については身近にあり多くの著作を書かれており、翁の実像を知る上で欠かせない。彼も宗像出身であり、佐三の宗像に対する基層意識とその影響を分析する。彼は、元宗像市長である。複眼的視野で書いておられる著作は下記のとおりである。

・滝口凡夫「出光佐三さんと私」『出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年

・滝口凡夫『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』西日本新聞社　1973 年

・滝口凡夫『決断力（中）』日本工業新聞社　2001 年

・滝口凡夫「あるべき人間の姿を求めて」『出光佐三　魂の言葉』2012 年

以下は、滝口凡夫「出光佐三さんと私」から、興味深い記述を下記に引用した。

互譲互助精神　どのような生き方をされ、どのような考え方を持っておられたのか、もう1つは佐三さんが生きてこられた人生、あるいは出光興産の経営理念と宗像との関わり、「日田重太郎に君の主義を貫き両親を大切に、兄弟仲良く暮しなさい」と教えられた。

「佐三さんはこの教えを、ずっと守り、出光興産の基本理念とされた。人間の出会いというもの、常識では説明できないほど神秘的だし、偉大な結果を生むものです。」

戦後に、「創業いらい営々と築いた販売網は終戦によってすべてなくなり、残ったのは210万の借金だけでした。60歳といえば今では停年の歳で、この歳から事業を起こすなど普通の人の考えではできません」そして、「佐三さんの考え方の基底にあるのはやはり宗像大社です。私達から考えますと佐三さんの生きた道は本当に一直線です。これは非常にむつかしい事で、誰にでも出来る事ではありません。ですから佐三さんは、人からも悪口を相当言われています。業界の一匹狼などとも言われています。これは徳山製油所もできて出光興産も一人前になった昭和58年、業界の生産調整に反対し、消費者本位の石油政策を主張して石油連盟を脱退したときのことです。」

根本思想　さらに、佐三さんの考えの根元にあるのは宗像大社です。「宗像大社に行きますと拝殿の所に木の額が掛けてあります。【天孫を助け奉りて、天孫に、祭かれよ】と書かれています。天孫とは天照大神の子孫で天皇家です。その天孫をお助けするとともに、天孫からお祭りを受けられよ、という神勅です。佐三さんほど純粋に豊かに生きた人はめずらしいですね。しかも自分だけでなく出光興産の事業経営の中で、それを実践して見事にやり遂げられた。これは宗像の人だけでなく日本中の人がどれだけ勉強してもいい人物だと思います。」、「おもしろいことにタンカーに大嶋丸や沖ノ嶋丸、赤間丸、高宮丸など宗像にかかわりのある名前がつけてあり、いかに佐三さんが宗像や宗像大社のことを考えておられたかの証拠と思います。」

宗像とは何か　佐三さんは、宗像大社の神領で、宗像大社の御神徳によって、これだけの醇風美俗の風土ができてきた、と言われています。「宗像とは何か」が問われなければならない。佐三さんは宗像、宗像と言われますが私は佐三さんの故郷は宗像だけじゃないと思います。逆説的ないい方になりますが、つまり日本人としての本当の在り方、人間としての本当の在り方を求めていくのが佐三さんのねらいであって、それがたまたま純粋な形で宗像にあった。そしてその宗像に佐三さんが生まれた。何も、宗像だけに日本人が住んでいるわけではありません。昔からの日本の農村、山村など、私は土に近いほど、自然に近いほど純粋な人間が育つと思いますが、その宗像という所は純粋な日本人の在り方を示す一っの地方である、ということです。宗像人だけが日本人じゃありません。

いづれにしても、今宗像がこんなに大きく変っている。そして佐三さんが自慢されたほどの宗像の醇風美俗、その人間のよさというものもだんだん変わってきている。

そして、滝口は『出光佐三　魂の言葉』の中で、その本質を「出光には人間尊重を初め互譲互助、資本は人なり、努めて難問に挑め、などの理念、教訓のたぐいが多いが、これはすべての土に生きた自作農民の発想から出たものだ」と考えている。

以上のように、宗像会の結成から戦後を経て、宗像会・出光佐三翁の宗像への影響や尽力の実態に眼を向け、歴史の観点から宗像の基層意識の形成を探った。本来は、佐三翁の嫌う金目のことは書くべきではないが、本来の実態がわからないので、記事のあるもの記述した。

幕末志士の早川勇の人徳で、宗像会が結成され、企業・官界・学会に人材が育ち、特に多くの教員が生まれ教育郡となる。大正期に再び入会した出光は、事業の成功と共に宗像会を代表する起業家となり、宗像神社復興期成会の会長に就任する。戦争で宗像会は停止に追い込まれる。戦後、出光は戦前の一切のものは失った。60 歳の年齢であったが、人を資産とする起業を再びはじめ、再び石油業界に戻る。併せて、自社の建物等が戦災に遭わなかったのは、宗像大神の力と信じ、自らの経営思想の実現を目指す。宗像神社の復興は、沖ノ島出土品などで神社の由緒と神徳を独自の理解を深め、武丸正助顕彰により自らの信念を確信することとなる。そこには、「日本人」をキーワードとした明治精神が加味される事になる。戦後は、宗像会のリーダーとして、念願である神社の復興に奔走しながら、宗像地域の武丸正助顕彰事業、宗像会の再興に進む。宗像会で育った教育をベースに昭和 25 年頃には、宗像は教育で進むことを構想している。昭和 35 年の福岡刑務所の移転計画は、反対意思を高山町長と共に示し撤回させ、福岡教育大学の統合移転の積極的支持者として私財を投じ実現させる。合せて、学生の奨学金制度を始める。こののち、再興宗像の激文を書く一方、宗像商工会青年部の若者を東京に呼び、激励すると共に、宗像高校・城山中学で講演会を行い、「宗像人」の育成に激を飛ばす。「日本人のチャンピオンたれ」「日本人のあり方を示すことが、日本人の世界的使命である」と諭す。出光丸竣工の中学生の 15,000 人を招待する考えも、これらを契機に生まれたものかもしれない。

出光佐三の郷里　（赤間町　昭和 23 年）

上部が赤間宿で、左下部が昭和 41 年に統合移転する福岡教育大学の造成前の城山山麓の景観となる。

昭和 46 年 11 月の宗像神社の遷宮大祭は、「一生の念願」という。宗像大社が世界遺産の候補になりうる基盤は既にこの時期に、出光佐三と云う個性で結実したと見なしても過言でない。また、自ら計画・実施すること決めたならば、突き進むことを宗像人に示したことに意味がある。

彼の宗像で行なった行動（事業）は、戦前の教育郡を再び呼び起こすことであり、その基盤を作ったことに意義がある。「宗像は一つ」から「宗像の心は一つ」と郡民意識は、戦後に引き継がれたのは、出光の鮮烈な個性によるものであり、彼の激が宗像会の同胞意識に強烈に影響を与えた。

彼は、常に自慢げに力強く語る。

「それは宗像大社のご神徳ですよ。これを今の若い人に言ったら「何をいうか、このおいぼれが」ということになる。宗像大社は、日本国民の祖神といわれておる。お伊勢さまは皇室のご先祖であり、宗像大社は国民の祖神であるといわれておる。『皇室を助け奉って、皇室に祭られよ』という御神勅の第一号がこの宗像神社にある。・・・このご神徳が、どういうふうにあらわれたかというと、まず学校の先生にあらわれた。私が小学校に行っておる頃は、小学校の先生は尊いと思ったものですよ。

私の育った宗像郡（福岡県）は教育郡で有名だった。今は福岡県が日教組のご三家だが、昔は福岡県と長野県はよい方のご三家で、福岡県は日本で有名な教育県であった。その教育県の中でも宗像郡は特に教育郡として有名で、多くの小学校の名校長、名教員を出した」

と昭和 42 年 5 月に「仲よくする力」『八幡製鉄幹部研修会』の講演会記事がある。以上のような、激を聞けなくなって 35 年が経過する。

宗像の人は、古代より神郡の氏子という意識が強く、自尊心と自立心に富むと言われている。佐三はその典型である。彼の行動や経営を彩る多分に観念的なところは、この宗像の氏子という代々踏襲される基層意識と無関係ではない。

宗像会、出光佐三翁の活躍は、世代交代と共に記憶から薄らいつつあるが、それは既に基盤となり基層意識の中にあると思う。たとえば、保存整備された宗像大社や鎮国寺の景観であり、教育大学などの大学施設、教育者と云う資産であり、宗像人の基層意識に存在する。多くの人々が恩恵を受けているはずである。しかし、基層意識は、無意識の中にあり、地元にいるとほとんど意識されることはない。

（2）今日、出光佐三翁の痕跡を探す。

彼に関するものは、生家・お墓ぐらいで痕跡が少ない。お墓は不謹慎なので触れない。

彼は、明治 18 年に赤間村で生誕し、赤間尋常小学校、東郷高等小学校卒業後の 19 歳まで主に過ごしている。その後、福岡商業学校に通学している。

毎日、汽車で赤間駅を「朝 5 時ごろの汽車に乗って夜 9 時、10 時の昼夜兼行であった」と回想する。商業学校時代も家業の手伝いで、藍玉の注文取りなどを手伝っている。佐三が直接的に宗像を郷里とするのは、26 歳ごろまでである。明治 42 年ごろに佐三の意に反して出光家の家族は、家業を閉店し、追われるように宗像を去っている。

出光商会を開業し門司市に居住していたが、27 年間の空白がある。大正 6 年に宗像会に再入会するが、会誌をどの程度読んでいたかわからない。本人は、視力が弱く、積読であったと云う。その後、昭和 12 年の貴族院議員に当選してから宗像神社復興完了まで昭和 50 年まで間､頻繁に帰ることがなる。52 歳から 90 歳の出来事である。

佐三生家（宗像市赤間）　赤間宿に佐三の生まれたころは、染料のである藍の卸商を父が営んでおり、徳島県から藍玉を仕入れて、郡内や福岡、久留米などに販売していた。赤間は、吉留にある八所宮の氏子であり、総社の宗像神社の氏子、いわゆる二重氏子である。菩提寺は法然寺である。

明治 9 年の赤間村の人口は、987 人、197 戸であり、唐津街道の宿場町であった。

法然寺には、「出光良元」の墓があり、弟の歴史好きの泰亮が調べたところ、宇佐八幡宮大宮司家の一族とされ、宗像へ移り住んだと云う。江戸時代の天明年間には、赤間宿で屋号を「中ノ紺屋」、後に「松屋」に変わるが家業は染物業であった。

佐三は、父から「一生懸命働くこと」・「質素であること」・「人のために尽くすこと」を毎日云われ、厳しく教え込まれた。母は、人前に出ることが嫌いな人であったが、何かことが起こると、「芯の強い女性」であった。出光兄弟が後に、一致団結するのは、両親の家風の影響が大きいと思われる。

赤間尋常小学校（宗像市赤間）　小学校は、明治 18 年 8 月に太政大臣の岩倉具視が、教育令改正で設置されたもので、当初は赤間本町の米屋（日新）を改造したものであった。まもなく、正式なものが御茶屋の跡に造られた。黒田藩の赤間宿にあった御茶屋の後の建物であった。

ここは、岩倉具視などが五卿落ちとなり、一行は赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1 月 18 日～2 月 11 日に滞在する。自宅の裏山が学校となる。城山中学校のグランドにあたる。

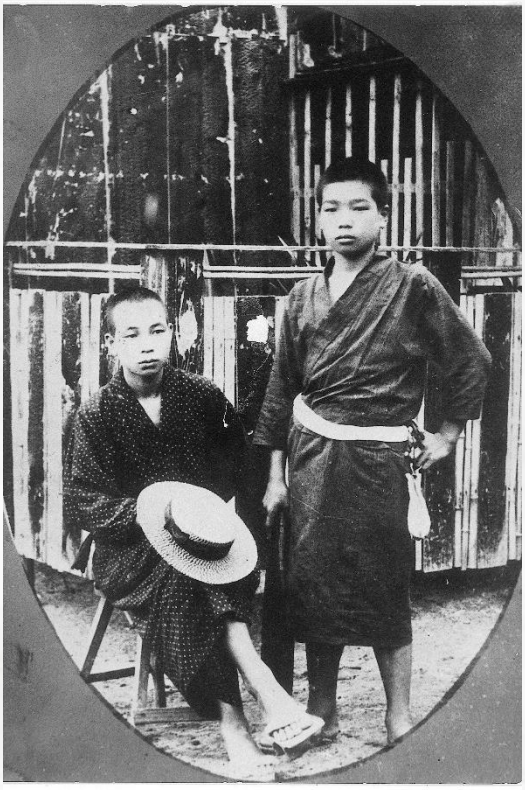
宗像高等小学校（宗像市田熊・田熊石畑遺跡公園内）　東郷村田熊にあった校舎で、明治 24 年に建設される。後に宗像農学校・宗像高等女学校、宗像中央中学校となる。明治の校舎は、写真が残っている中央のものである。現在、国指定史跡の田熊石畑遺跡内である。建物は残っていないが、発掘調査の際に校舎基礎が発見される。遺構は、布堀の基礎掘方がコの字状に配置され、床の基礎より建物の間取りが分かるので、写真を元に復元図を作成した。洋風の建物で、一階は教室・職員室・事務室、二階は、講堂として使ったと記事がある。

校長は、教育熱心で有名な名校長である牟田尻出身の大森達である。漢詩や書を嗜み、宗像教育会で手腕を発揮する。佐三の 2 年生の時（明治 29 年）の教員は、深田澄之助教頭、石松国太郎・真武民五郎・釜瀬新平（後の九州学園創立者）・伊豆房太郎・安部正威・薄知行・安部ミキ・釜瀬定蔵・松尾潔などの教員が知られ、翌年に天野開作・宗像マス子が赴任する。学年が、二つ上の有吉巌（後の立正大学教授）によると、4 年生は、生徒が 60～70 人であつた。但、他の資料によると、1 年生は、130 人とあり、学年を上がることに生徒数が減る。この原因は、農業従事者の子は、生業に追われやめる子が多かった。佐三の同郷には、四つ下に倉田主税（後の日立製作所社長）がいる。当時には、宗像教育会が組織され、会員 59 名が知られ、先生の給料は本科が 16 円、準教員が 8 円であった。

１年生　佐三は、宗像高等小学校に入学し一年生となる。東郷の校舎には、1 年しか通っていない。通学路は、赤間の自宅−唐津街道辻田橋を曲り、釣川北側の堤防道とおり田久橋を過ぎ、野添橋を過ぎ、釣川鉄橋前の踏み切りをわたり、天理教西海教会前を曲り−東郷橋を渡り、田熊の学校につく。明治 31 年作成の陸軍陸地測量部の地図があったので示す。

興味のある方は、歩いて頂きたい。この道は、当時の幹線の旧国道 34 号である。佐三翁は、「瓦となるな」『出光オイルダイジェスト』11 号（1966 年）に記す。

「私どもの尋常小学校は赤間にあったが、明治28年に尋常小学校を卒業して高等小学校に通うようになった。ところが、高等小学校は宗像郡の中心である東郷町に一ケ所しかできなかった。そこで私どもは一里半の道を歩いて通学することになった。川土手の吹きさらしを通学するので当時9歳位の私どもには、この通学がつらかった。今でも忘れられないのは、冬は「赤ゲットウ」をまとって西から真正面に吹き付ける雪を、こととともせず通ったことである。70年前はよほど寒かったらしいので、雪がたくさん降ったことを覚えている。互は帽子に日覆いをかけて、その土手を炎天下に通った。ある時は台風に川土手の道の真ん中に吹き倒されて、寝転んでいたこともあつた。この寒風、炎暑、台風によって私どもは鍛えられたことを、今は非常に有り難いことと思っている。空が黄色くなった、また大風が吹くよと平気で、むしろ面白がっていた子供時代が思い出される。子供時代に大風に吹き倒されんとしたり、またあるときは危うく濁流に吹き落とされんとしたり、近所の人たちの避難で家中坐る場所もないごったがえした脆かな光景などが、時代の風潮がそうせしめるのであろうか。交通の発達しなかった旧藩時代には、今でいう風水害というものは、その土地で自分の力で跡始末をなし、人の厄介になることを潔しとしなかった」。その後、「こうして天に試きれ、地に培われ、父母に諭されて、天を怨まず地を呪わず、神の試練として己れを励み、父を疑わず母を尊み、真の慈愛の呼吸を悟り、これらのことどもが数百年、数千年の長きにわたって九州男児というものが出来た」とも云う。



佐三少年(12才) 右側店主
(出光興産株式会社 提供)

これは、1年生の時の記事である。東郷の高等小学校に通っている時であり、風の強い場所は、釣川添いの東郷橋-田久橋間であり、おそらく釣川鉄橋付近と推察される。大雨洪水は、明治26年9月のもので、未曽有の大雨洪水で村民困窮、家屋倒壊と過去帳の記事がある。彼の話によく出てくる。勤勉に釣川の堤防道を毎日片道5～6kmほど通ったとされる。

2年生～6年生　高等小学校の2年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものであると記述される。この時に林繁蔵と出会う手記が残され、占部玄海により『郷土歴史叢書-人物往来-』昭和62年に下記のとおり、紹介される。

「高等小学校の二年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものである。そこで私は林君と机をならべて勉強したらしい。なぜそれをおぼえているかといえば、机の

蓋をあけて二人とも青い梅に塩をつけてかじっていた。それを見つけられて番止（放課後二時間立ち番）させられたことがあった。このことで私は林君をはっきり記憶している」

と書かれる。林繁蔵は、後に朝鮮総督府の官史（財務局長）となり、佐三の朝鮮進出の石油販売事業に協力する事になる。『旧宿場町　赤間』によると、「公立小学校も明治 24 年、尋常小学校が御茶屋のあった辺に造られた。高等小学校は、明治 31 年に町役場の二階に置かれた」とある。したがって、2 年～4 年生に赤間の「勧善舎」→5 年～6 年生に赤間町役場二階の高等小学校の授業となるようだ。番止は、筆者の小学校時代の昭和 38 年ごろまであった。

伊豆先生　「ひとすじの道」『我が 60 年間』に先生のことが語られる。

「小学校時代の伊豆という先生でしたね。私は宗像郡の赤間という人口三百くらいの町に育った。これは農村の街ですね。私はからだが弱かったくせに、いたずらっ子だったですな。だからいたずらをすると、父が「伊豆先生をちょっと呼んでこい」というのですよ。それで呼びに行くんですが、この先生は藁葺きの小さい家に住んでおられた。そして背が低くて、風采があがらず、実にみすぼらしい恰好をされていた。しかしそれが子供に何となく尊く感じられた。・・・・そして先生のおともをして家につくと、先生は、そこに父と並んですわられるわけですね。そこで父が私をおこるのだが、そのおこる父はあまりこわくなかったのですな。ところが伊豆先生は、ニコニコと笑って、父をなだめたり、私を戒めたりしておられるのだが、その先生がこわい。そして尊いのですね。これが、人間の感じじゃないですか。理屈じゃない。人間と人間との感じだと思いますね。それで先生というのは尊いものだと子供心に感じたのです。七つ八つのときですからね。この先生の尊さが私に非常な影響を与えた。」と云う。そして、「われわれの育った明治時代は、尊い人といえば小学校の先生でしたが、宗像郡はその尊い先生を出すので有名で、その先生は「宗像教員」といわれた。このように立沢な教員が出るのは、宗像大社のご神徳の賜物であるというふうに私は聞いておりました。」そして、「私はその後、神戸の高商に行って、投機で金を儲ける大阪商人のあり方をみたのです。買い占め、売り惜しみをやって人を搾取することの上手な人が利口な事業家となっておった。人を搾取して金を儲けることが事業の本質だとなっておったですよ。それをみて私は、社会は人間が中心である、人間が大事だ、金が何だということを感じるようになった。これは伊豆先生や校長先生あたりの尊さからでてきておると思います。」

と宗像高等小学校の先生のことが記載される。おそらく、大森達校長であり、赤間居住は伊豆房太郎先生ではないだろうか。共に宗像会の草創期の地元会員であり、宗像教育会の人々であった。伊豆は、養蜂の論文を『郷友雑誌』4 号に書かれる。伊豆は、明治 38 年に鞍手郡の小学校に転勤、大森校長は明治 31 年に宗像郡視学となる。彼の少年時代の基層意識は、江戸時代の幕藩体制が終えていたが、明治

維新後も農村社会の慣習や伝統は色濃く伝えられており、一新されているものでない。大きく変わるのは身分社会がなくなり、学制改革に伴う教育の場が提供された事だと思う。

同郷の倉田主税　主税（ちから）は、明治 22 年に宗像郡神興村津丸（現在の福津市津丸）で生まれた。明治 28 年に神興小学校入学、明治 32 年に東郷尋常高等小学校に入学し、同 36 年まで通学する。学制変革で、東郷尋常高等小学校は現在の東郷小学校である。小倉工業学校卒業後、東京の宗像塾に 1 年間居住する。仙台高等工業を卒業後は、久原鉱業所から日立製作所に入社。戦後、公職追放により社長に就任。昭和 22 年に日立製作所の二代目社長となる。そして、日立を世界の企業に育て上げた人物である。昭和 44 年に 80 歳で逝去する。

倉田主税は「私の履歴書」1982 年に敬神崇祖と祖国について書く。

「自分が生まれ、育まれた家庭を愛する心は全く自然の感情であり、麗しい心である。また自分が生を享け、生活している郷土を愛し、国を愛するのは、これまた自然の心であり、理屈ではない。祖国を愛する心を持つ国民に満ちた国ほど将来の繁栄が約束されるものである。第２次大戦がわが国にもたらした弊害の中で私が最も残念に思うのは、国民一般に祖国愛をうとんずる風潮が出てきたことである。戦後の変革があまりにも大きかったためか、戦前にあったものがすべて悪いものだとする考え方が一部にあるようだが、これはあまりにも偏狭な見方だと言わなければならない。先人が遺した正しい道徳や人間の道を深く身に付け、さらに進んで新しい伝統を産み出していくことは、われわれに課せられた義務であろう。

もとより、政治的な意図より出た、誤った愛国心の昂揚などは、避くべきものであることは、歴史の教えるところであるが、人間の本性に訴えた純粋な愛国心の昂揚は、忘れられるべきではない。」

さらに、昭和 30 年の復刊宗像 1 号に「放生会の想い出」、再興宗像 1 号に「科学技術の振興に想う」、再興宗像 5 号「年頭所感」を寄稿している。

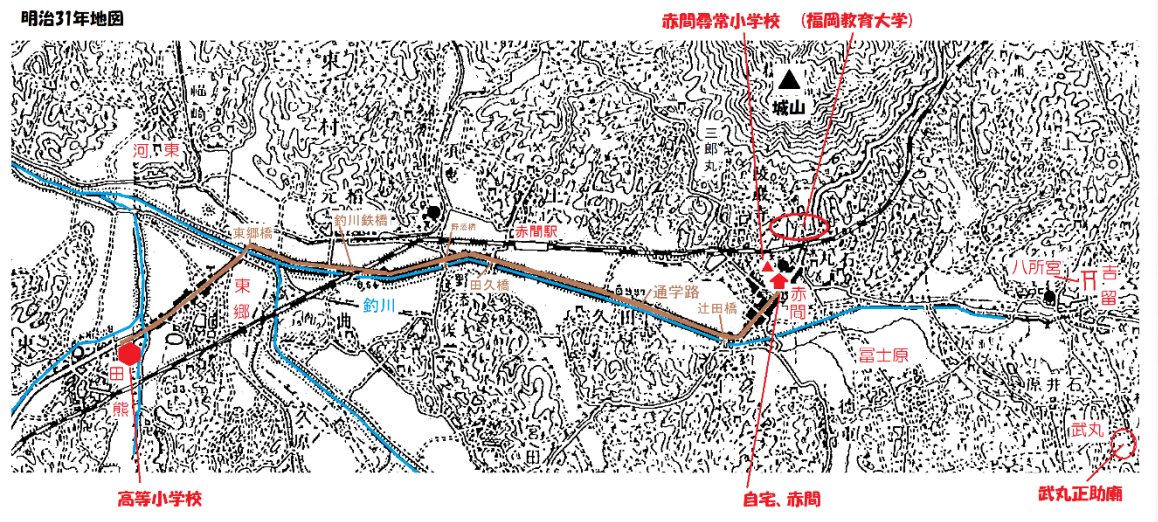
鎮国寺復興のため顧問に佐三と共になり、経済的支援を行う。東京宗像会の中心人物の一人であった。久保輝雄（宗像神社宮司）は、昭和 38 年に神社の沖ノ島出土品が国宝・重要文化財の指定を受け入れ、宗像神社宝物館建設の浄財の寄附のため、日立本社に依頼に訪ね、寄附を受けている。質素で口数のすくない、古武士のような人と評されている。

彼は、日立製作所の会長退職金（2 億円）を寄附、財団法人国産技術振興会を設置し、国産技術確立に貢献している。また、本籍を決して東京に移すことがなく、宗像に置き、神郡宗像人たる氏子意識は生涯を通された。なお、津屋崎町の東郷神社の復興に助成される。

佐三とは、昭和 35 年頃に結成された福岡県の同郷実業人が 20 人あつまった宝満会でも交勧された。逝去される同 44 年まで、宗像のために尽力された。紀元節の復興に熱心で、佐三翁とも共通の敬神崇祖が強かった。これは、明治時代の宗像の気風だろうか。

宗像神社への敬神崇祖は、祖父より代々繋がっており、どうも国粋主義と云った次元ものでなく、宗像の明治精神の方が実態に近い。

倉田主税が通学した
東郷尋常小学校
（宗像市東郷小学校　昭和 45 年）



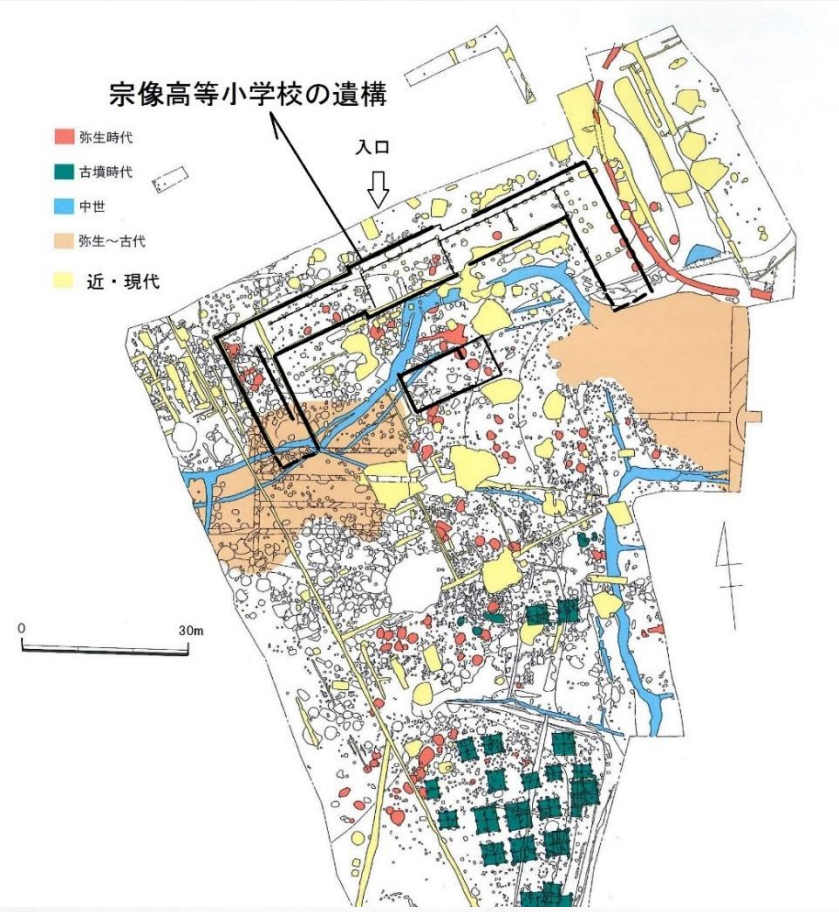
出光少年の通学路（高等小学校）

昭和 30 年ごろ(生家)　神山義信氏提供

赤間・出光生家

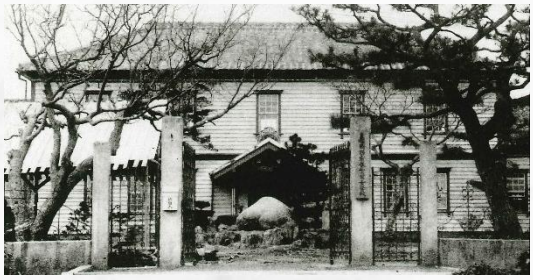
田久の釣川堤防道

宗像高等小学校跡(田熊石畑遺跡史跡公園)

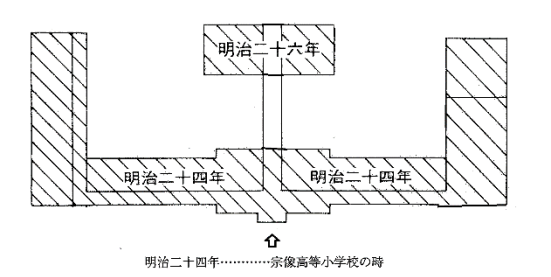


国指定史跡　田熊石畑遺跡の遺構図

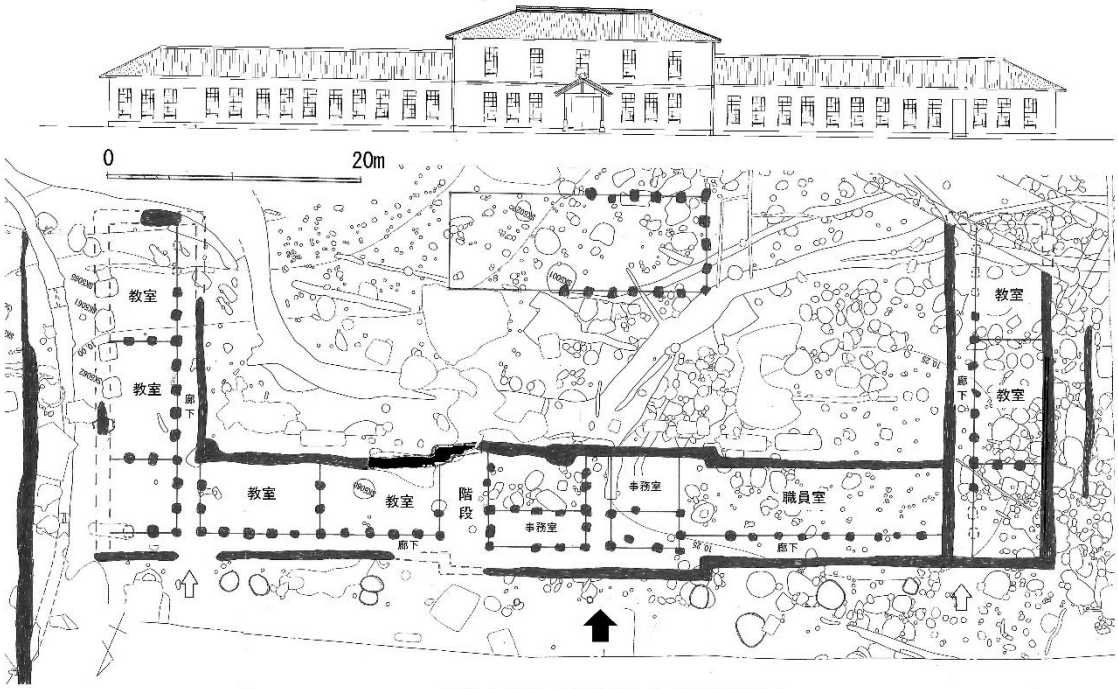
宗像高等小学校(明治 28 年～明治 29 年に通学)



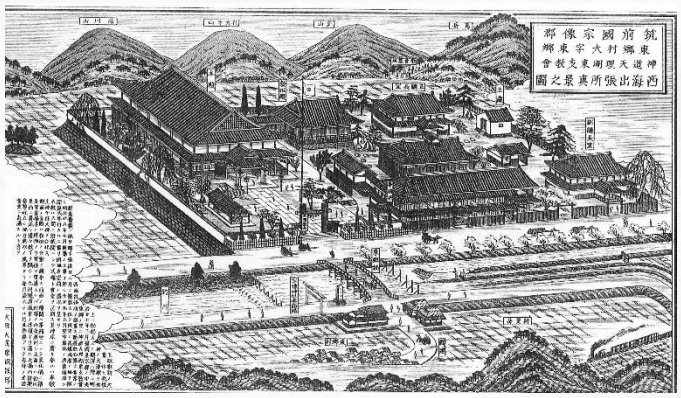
宗像高等小学校(明治 28 年～明治 29 年に通学)



校舎配置図

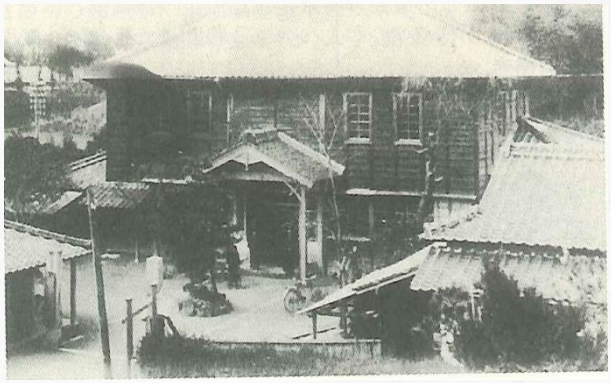


高等小学校の建物復元図（明治24年）

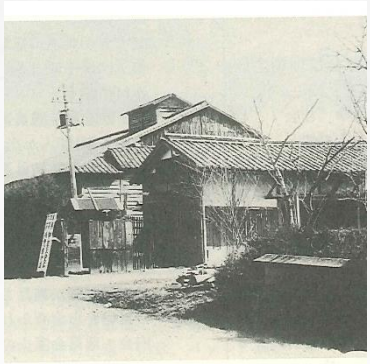


東郷橋と天理教西海出張所（明治 28 年建設）

辻田橋（釣川定石）



赤間町役場（2 階高等小学校）



赤間・観善舎（高等小学校）

佐三の幼少・青年期年譜　滝口凡夫作成の年譜・『宗像市史　通史編　第 3 巻』に加筆

西暦	元号	出光佐三の関係	宗像の主な出来事
1885	明治 18 年	8 月、宗像郡赤間村で生まれる。父藤六（松寿）、母千代	2 月、小倉―赤間―福間―古賀―福岡の国道が 34 号に指定される。
1886	明治 19 年		9 月、赤間警察署が開所
1887	明治 20 年		9 月、宗像郡内の官地櫨実(はぜのみ)の入札
1888	明治 21 年		
1889	明治 22 年		4 月、町村制施行により、赤間村・吉武村・河東村・東郷村・宮田村・野坂村が発足
1890	明治 23 年		9 月、九州鉄道の博多―赤間間が開通、赤間駅と福間駅が開業
1891	明治 24 年	4 月、赤間尋常小学校に入学 6 歳	11 月、宗像会が結成され、『郷友雑誌』が創刊。
1892	明治 25 年		伊豆房太郎が「養蜂」を書く
1893	明治 26 年	4 月、校長の大森達が高等小学校に赴任する。	9 月に未曽有の大雨洪水、村民困窮と過去帳。
1894	明治 27 年		日清戦争が始まる。
1895	明治 28 年	4 月、東郷の宗像高等小学校に入学　10 歳	
1896	明治 29 年	赤間に高等小学校仮校舎ができる。	4 月、郡制施行で宗像郡が発足、郡役所は東郷村。
1897	明治 30 年		
1898	明治 31 年		赤間村が町制施行、赤間町になる
1899	明治 32 年	3 月、宗像高等小学校を卒業 14 歳	2 月、幕末志士、早川勇が東京で逝去する。
1900	明治 33 年	家業を手伝う。	
1901	明治 34 年	4 月、福岡商業学校に入学　16 歳 八尋俊介らと交遊を深める。	宗像第 1 高等小学校に、宗像郡立宗像農業学校を設立される。
1902	明治 35 年	仙厓和尚の「指月布袋」を買う。	
1903	明治 36 年		
1904	明治 37 年	宗像会に入会する。会員は同 42 年 3 月まで。	日露戦争が始まる。
1905	明治 38 年	4 月、神戸高商に入学。20 歳。在学中に水島校長、内池教授から大きな教訓を受ける。	日本海海戦で勝利する。日露講和条約に調印。製糸工女養成所が神興村八並製糸所内に設置する。
1906	明治 39 年		赤間警察署が東郷に移転、東郷警察署となる。
1907	明治 40 年		
1908	明治 41 年		
1909	明治 42 年	4 月、神戸高商を卒業、酒井商会に入る。	城山トンネルが開通。（赤間-海老津間開通）
1910	明治 43 年	酒井商会で丁稚として下積みを行なう。 日田重太郎から創業資金を恵まれる。	
1911	明治 44 年	6 月、門司市に出光商会を創業する。26 歳	

第２題　宗像地域における黎明期の遺跡発掘調査

考古学の本格的な地域解明の意図を持った調査は、戦前の田中幸夫の田熊石畑遺跡の調査から始まる。昭和７年（1932）の宗像高等女学校の運動場拡張に伴う調査である。以後、鐘崎上八貝塚・釣川・沖ノ島・稲元経塚・香葉遺跡などが、昭和 14 年までに行われる。調査は、現在の試掘、工事立会調査に当たる。これらは、宗像考古刊行会『田中幸夫先生と宗像郷土館』2010 年に纏めておいたので、参照されたい。

これ以前は、福岡県史跡天然記念物調査で、島田寅次郎の鐘崎織幡宮の石棺、柴田常恵の上高宮古墳を実施されているが、概要のみで詳細が不明である。

発掘調査の開始は、昭和 41 年（1961）の東郷遺跡群の本格的な調査から始まる。日本住宅公団の日の里団地造成に伴う大規模開発（200ha）に伴う調査からである。福岡県史跡調査会委託を受け、九州大学（春成秀爾）・福岡教育大学（波多野睦三）を担当者とし構成される。波多野先生は、古代史を専門であつたが、考古学に造詣が深く、教育大学の宗像町赤間への移転に伴い、以後は発掘調査の依頼を受け、調査することになる。下記の内容は、この頃から宗像市の市政施行前の昭和 54 年頃までの内容となる。

1．波多野先生と福岡教育大学歴史研究部考古班

（1）波多野睦三先生　（1912～1992）

先生は、明治 45 年山口県下関市生まれで、九州大学法文学部国史科専攻され、後に福岡教育大学教授となる。退官後の 1975 年、梅光女学院短期大学教授となる。1978 年に福岡教育大学名誉教授となる。福岡県文化財保護審議会専門委員を務める。古代史を中心に研究され、代表的な研究に『筑紫史論 1～4 輯』、『久留米藩』などがある。福岡教育大学の宗像統合移転に伴い、宗像へ転居される。転居に伴い福岡県教育委員会から宗像地区の調査を依頼され、開発に伴う古墳・集落の調査を実施された。特に、歴史研究部考古班の育成に当られ、宗像郡内の分布調査を促進された。しかし、大学の休み期間中では、急速な開発の対応できず苦悩された。下記の調査は、先生が調査責任者として、実施した緊急発掘調査である。

元号	調査時期	調査された遺跡	備考
昭和 41 年	1966 年 7～12 月	宗像町東郷田熊遺跡群 ・スベットウ古墳の調査	東郷遺跡群 前方後円墳 1 基・円墳 3 基
	1966 年 11 月	福岡教育大学の移転に伴い宗像町へ転居	
昭和 45 年	1970 年 10 月	津屋崎町東郷古墳公園の調査	円墳 1 基
昭和 46 年	1971 年 3 月	宗像町三郎丸古墳群の調査	円墳 9 基
	1971 年 9 月	宗像町稲元墨巡須恵器窯跡の調査	須恵器窯 1 基
	1971 年 10 月	宗像町相原古墳の実測調査	前方後円墳石室の実測
昭和 47 年	1972 年 5～9 月	福間町津丸・久末古墳群の調査	円墳 7 基
	1972 年 10～11 月	玄海町会所坂古墳の調査（高向）	円墳 1 基
昭和 48 年	1973 年 1 月～3 月	宗像郡分布調査（宗像町・玄海町）	
	1973 年 10 月	玄海町田野瀬戸 2 号墳の調査	前方後円墳 1 基
昭和 49 年	1974 年 3～10 月	宗像町城ヶ谷古墳群の調査	円墳 19 基、前方後円墳 1 基
昭和 50 年	1975 年 4 月	福岡教育大学定年退官	
	1975 年 10 月	『筑紫史論３輯』の刊行	宗像の報告書を収録

（2）福岡教育大学歴史研究部考古学班の活動

昭和 45 年の遠賀郡岡垣町糠塚南遺跡の発掘調査を契機に結成された大学のサークル活動である。活動は。昭和 62 年度ごろまで自主活動が続いた。考古班の活動を纏めたものは、『城ヶ谷古墳群』1977 年から引用しながら、この組織の活動を明らかにしたい。宗像市制前の発掘調査を振り返る。

①目的

「古代宗像史を追求する」を活動方針とし、併せて文化財保護を行なうことを旨とされる。主に①文化財の分布調査、②遺跡の発掘調査、③文化財保護の啓発を活動の柱とされる。

その経過は、「はじめて文化財保護運動が問題となった糠塚南遺跡では、『古代遺跡がなんら調査もされず、人知れず破壊されようとしている。このことはどうしても許しがたく、また全国的に保存運動が叫ばれている情況下に、これを問題として取り上げないわけにはいかない。何とか保存すべき手を打つべきだ。』といった考えのもとに、行政機関へ保存を訴つたえていったが、実らなかった。

調査要求に対しても、その必要性はないと取り上げられなかった。そこで『文化財保護運動の一環として、私達自身で発掘調査に踏み切ろう。そして、発掘を契機として文化財保護運動を住民にアピールするとともに、私達のできうるかぎりの記録保存につとめよう。』という考えのもとに発掘調査へと踏み切ったのである。」とされる。

②考古班の結成まで

波多野晥三先生が顧問であり、発掘調査においては、調査責任者となる。波多野は、福岡教育大学の教授で、昭和 41 年（1966）の学芸大学統合移転に伴い、11 月に久留米市より宗像に転居される。調査担当は、スベットウ古墳・東郷 2 号墳・東郷 7 号墳・東郷 8 号墳、田熊中尾遺跡、田熊上ノ畑南遺跡・田熊上ノ畑北遺跡の調査に当たられた。

昭和 45 年 7 月に岡垣町糠塚南遺跡で発掘調査を実施される。翌年の昭和 46 年（1971）に宗像町三郎丸古墳群で古墳の調査を 2 月 28 日～3 月 18 日に実施した頃は、歴史研究グループとあり、この古墳群の調査・整理を経て、12 月に報告書刊行が行なわれる。

遺跡名	調査時期	調査成果
スベットウ古墳	昭和 41 年 7 月～12 月	前方後円墳、横穴式福室の石室
東郷 2 号墳・東郷 7 号墳・東郷 8 号墳		円墳、横穴式石室。石室の基底部を残す。

田熊中尾遺跡	昭和 41 年 7 月 16 日～8 月 5 日	弥生時代前期末～中期
田熊上ノ畑南遺跡	昭和 41 年 9 月 4 日、11 月 17 日	遺物包含層
田熊上ノ畑北遺跡	昭和 41 年 12 月 1 日～	竪穴住居・ピット・土坑

東郷遺跡群　1967 年 3 月日本住宅公団より作成。

遺跡名	調査時期	調査成果
糠塚南遺跡（岡垣町）	昭和 45 年 2 月 28 日～3 月 18 日	弥生時代集落
東郷公園内古墳	昭和 45 年 3 月 8 日～3 月 17 日	円墳、横穴式石室

学生は、報告書によると 1 年生～4 年生まで 20 名が知られる。新 1 年生も 5 名である。

昭和 45 年（1970）に津屋崎町渡の東郷公園で横穴式石室の調査がなされる。この続いた 2 件の調査に参加した学生が、翌年の昭和 46 年 4 月頃から、歴史研究部考古班として改称、組織化される。

③歴史研究部考古班の構成員

当時、所属していた班員を『三郎丸古墳群』・『津丸・久末古墳群』・『城ヶ谷古墳群』・『清田ヶ浦古墳群』・『野坂の土器について』などで年次と班員の名前を調べたが、昭和 53 年度以降の学生の名前が不明である。彼らの先輩には、福岡県教育委員会の川述昭人・森田勉が相談相手としてサポートした。

元号・西暦	班　員　名	参加した遺跡調査・整理
昭和 42 年度（1967）入学	芦田博之・高野信行・長嶺豊秀・大石官・尾崎義孝	三郎丸古墳群（調査）、東郷公園（調査）、大石津丸・久末古墳群（発掘）
昭和 43 年度（1968）	晃治・光枝房枝・竹林久美子・小島京子・田尻陽之助	光枝房枝（沖ノ島）、三郎丸古墳群（調査）、東郷公園（調査）、晃治・光枝・田尻、津丸・久末古墳群（発掘）、浜宮貝塚（発掘）
昭和 44 年度（1969）	江浜明徳・田代修司	三郎丸古墳群（調査）、東郷公園（調査）、浜宮貝塚（発掘）

昭和 45 年度（1970）	筒井亀・鹿島秀世・中尾徹・重住昌志・小沢純子・浦山博子・犬上芳枝・梶原麗子・大庭洋子・吉松恭子・上野正治・与那嶺裕重	三郎丸古墳群（調査）、城ヶ谷古墳群（発掘）、筒井・鹿島 勝浦峯ノ畑古墳（発掘）、浜宮貝塚（発掘）
昭和 46 年度（1971）	横山栄二・澤田康夫・高崎紀子・与田伸子・河口桂子・原真知子	三郎丸古墳群（整理）、城ヶ谷古墳群（発掘）、澤田　勝浦峯ノ畑古墳（発掘）　、宗像町遺跡分布調査
昭和 47 年度（1972）	荒石正・古賀茂雄・佐野哉夫・岸本真喜子・権藤八千代・直江千秋・鳴海豊子・西依美穂子・平野千鶴子・冨士崎秀子・村上千鶴・森木博子・中川原哲治・有津潤・麻生益子・森木弘子・木村あけみ	津丸・久末古墳群（発掘）　城ヶ谷古墳群（発掘）　、宗像町遺跡分布調査
昭和 48 年度（1973）	牛島康展・友延正広・山口聖一・菊池和子・三浦美恵子・森方和恵・吉原豊子	津丸・久末古墳群（整理）、城ヶ谷古墳群（発掘）　、宗像町遺跡分布調査
昭和 49 年度（1974）	耜田雄一・木村真一・松原恵治・江口まり子・御屋敷なおみ・倉地寛子・鍬釣真澄・古賀真由美・谷口可賀・永岡史子・平山昌子・木村真一・高木保	城ヶ谷古墳群（整理）、清田ヶ浦古墳群（発掘）、奴山正園古墳（発掘）、石丸遺跡（発掘）、宗像町遺跡分布調査、野坂土器（整理）
昭和 50 年度（1975）	落石俊則・石塚智子・居原和代・大賀玲子・藤丸悦子・大塚奈美子・古藤敬子・坂本律子・塚田富子・富永光子・村田ひとみ・米田輝子・江口まり子	城ヶ谷古墳群（整理）、清田ヶ浦古墳群（発掘）、奴山正園古墳（発掘）、石丸遺跡（発掘）　、野坂土器（整理）
昭和 51 年度（1976）	高木保・和田文子・森和代・三村芳香・大坪博子・山本嘉子・河野憲朗	城ヶ谷古墳群（整理）、清田ヶ浦古墳群（発掘）、奴山正園古墳（発掘）、石丸遺跡（発掘）　、野坂土器（整理）
昭和 52 年度（1977）	宮内智久・田上憲一・石塚智子	城ヶ谷古墳群（整理）、野坂土器（整理）
昭和 53 年度	以下、不明	
昭和 54 年度		
昭和 55 年度		
昭和 56 年度（1983）		宗像高校四塚会館資料（整理）
昭和 58 年度（1983）		城ヶ谷古墳群Ⅱ（発掘） 宗像高校四塚会館資料（整理）
昭和 61 年度（1986）		1 月 18 日、久原遺跡で現地説明会を開く
『三郎丸古墳群』・『津丸・久末古墳群』・『城ヶ谷古墳群』・『清田ヶ浦古墳群』・『野坂の土器について』の各報告書より、引用。		

（3）調査活動と成果

①巡検

新入部生の歓迎会を兼ねて毎年 4 月に実施された。昭和 47 年 4 月 23 日の開始された頃の日程を示す。見学用資料は、10 ページのガリ版刷りで作られた。赤間駅に 9 時集合、宗像大社→牟田尻装飾古墳（桜京）→神湊古墳群→須多田住居跡→天降神社古墳→宮地嶽古墳→宮地住居跡のコースである。当時は、桜京古墳に自由に入れた。

②調査活動

主な活動は、当初は、古墳数基を春・夏期などの休み期間中に実施された。したがって、田野瀬戸 2 号墳・高向古墳・相原古墳などの緊急調査等の小規模な調査と中規模の三郎丸古墳群、津丸久末古墳群、城ヶ谷古墳群などである。特に、三郎丸古墳群で 9 基、津丸久末古墳群で 4 支群 7 基、城ヶ谷古墳群で 20 基を調査することになる。三郎丸古墳群は、大学に隣接した地点であり、学生も参加しやすかった。これらは、いわゆる手弁当の調査であった。

ところが、昭和 47 年頃から、宗像郡の国鉄（ＪＲ）沿いの大規模な宅地造成に伴う津丸久末古墳群・城ヶ谷古墳群の調査になり、いわゆる調査費を開発者負担する方式に移行した。三郎丸古墳群は、古墳が 9 基の調査であり、何とか調査・報告書が纏められた。ところが、福間町津丸・久末古墳群の開発は、対象面積が 57 万㎡あり、野間尻 7 基、長林 2 基、長尾 2 基、赤はげ 1 基、飛塚 9 基の計 21 基と集落遺跡があったが、古墳 7 基、集落のトレンチ調査しか行なえなかった。九州大学の学生が応援に駆けつけたが、14 基が未調査でなくなることになる。開発業者は工程管理のみで、調査の終えることなく開発となる。大学の休暇利用の調査体制に限界があった。しかし、昭和 47 年 9 月 5 日に津丸公民館で調査説明会が開かれ、公開・啓発は実施されている。当時の新聞記事には、「福間町津丸の東急不動産団地造成で、5 月 1 日開始し、7 月 13 日～8 月末まで、現地に泊まり込み十数人が交代で 57 万㎡の古墳を発掘している。」とある。高校時代に手伝いに行ったが、7 基の古墳調査が実施されていたが、残る古墳はブルドーザーにより削られ、石室上面が露出していた。ある先輩は、「学生として精一杯やっているが、大学の授業もあり 7 基を掘ることしか出来ない。そこで、新聞発表をやり、期間の引き延ばしを求めたが無理であった」と聞いた。この教訓は、城ヶ谷古墳群に引き継がれる。報告書は、B5 版本文 66 ページ、図版 12 ページであり、2 年後の昭和 49 年 11 月に刊行される。

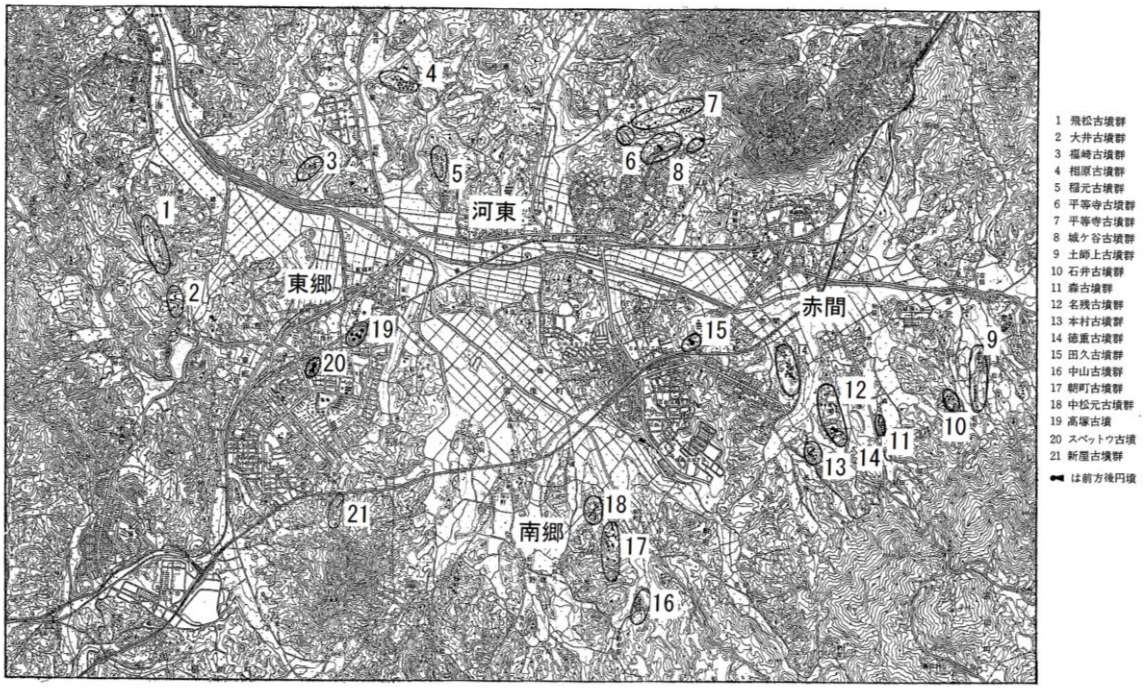
城ヶ谷古墳群は、前方後円墳 1 基を含む円墳 20 基が発掘され、群集墳一尾根支群を面で調査された。報告書は、B5 版本文 185 ページ、図版 52 ページであり、昭和 52 年 11 月に刊行される。報告書では、古墳の石室形態、その変遷、年代の検討がなされ、竪穴系横口式石室の変遷が纏められた。また、出土品に鋸があり、その検討と類似品の比較がなされ、出土の意義が書かれる。さらに、出土須恵器の編年案が示され、石室の年代ともあわせて、宗像における最初の土器編年がなされた。報告書は、昭和 52 年に刊行される。昭和 50 年 3 月に波多野睦三の退官後は、組織的な発掘調査は実施していない。

昭和 53 年頃までは、福岡教育大学の調査・研究成果が、宗像の最前線であった。

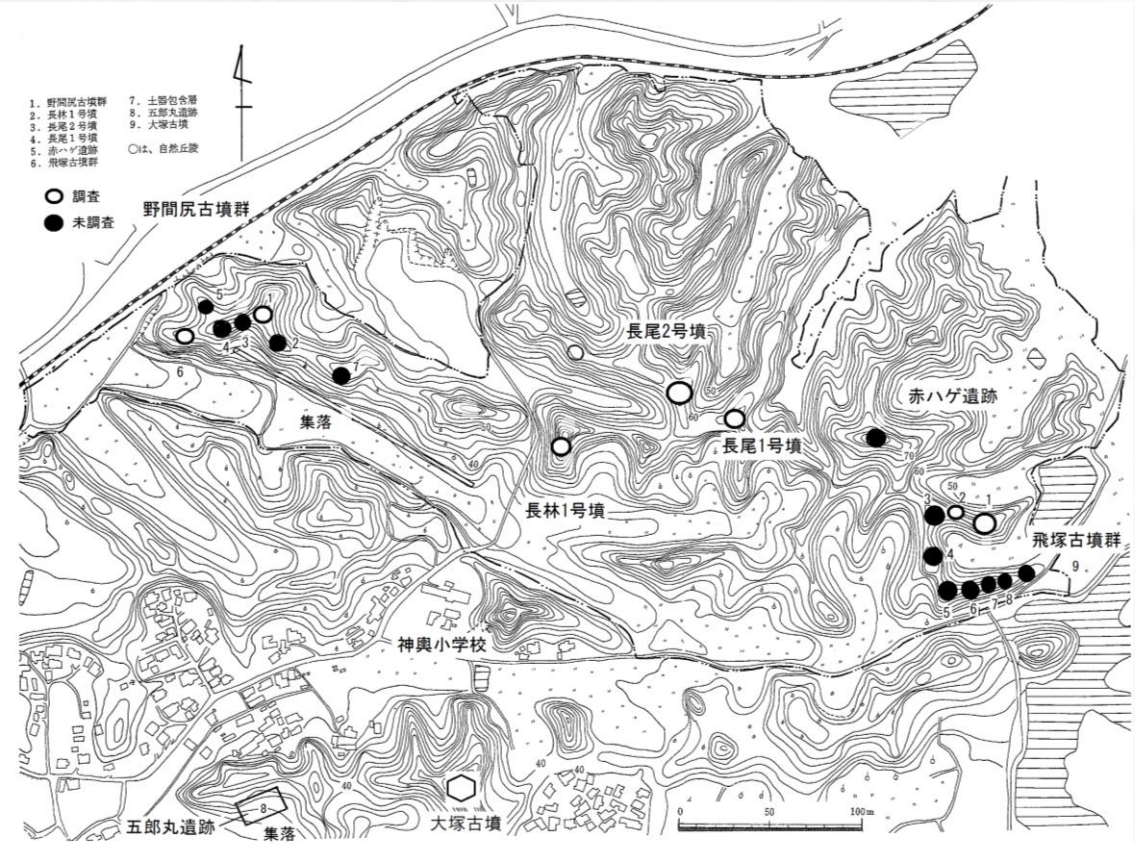
また、分布調査やその知見は、昭和 54 年の『宗像沖ノ島』の「宗像古代遺跡地名表」の成果として収録される。

発掘調査黎明期の昭和 40 年前半～昭和 54 年までは、発掘調査は小規模であり、「遺跡分布調査」の時代とも云える。

以後宗像市へ引き継がれる。



昭和52年頃の主な古墳の分布図



福間町 津丸・久末古墳群の調査（昭和47年）

津丸・久末古墳群（飛塚１号墳）　　未調査（破壊）

③波多野先生による歴史研究部考古班の評価

『筑紫史論』第３輯より下記に引用。

「昭和 41 年に四つの分校が宗像町赤間に統合し、教育大もやっと四年制大学としての正統な歩みを辿り始めた。学生が一ケ所に集ることで、これまで２年ごとに分断されて来た学生生活が、とにかく４年間一ケ所で済むことになり、学生との接触の面でも大きな変化があった。新しい校舎にも資料室が準備されてはいたが、持ち込まれたケースも遺物も大部分が久留米からのものである。その年の夏から冬にかけて行われた東郷日の里団地の造成に伴う遺跡調査には、はじめて久留米以外の田川分校から来た学生たちも参加して来たし、それからは年度が変るたびに新しい学生がつぎつぎと参加し、次第に資料室を中心に組織が拡大された。発掘への興味から集った単なる同好学生のグループも、何時かこの大学の歴史研究部考古学班と云う研究団体となり、資料室も土器の復原作業や研究討議の場となり、発掘調査を重ねるうちには資料整理から報告書の作成まで、総てが学生の手で出来るまでに

成長した。そう云う教育大考古学班の先頭にあって県内各地の発掘調査を繰返し、退官の今日まで大過なしに過せたことは、私にとって楽しい思い出の一時である。」

と評価がなされる。

学生であった澤田康夫は、「波多野先生は、人物はやさしく、面倒みの良い先生であったが、気を利かして仕事を手伝おうとすると、自分でやると頑固な側面もあったと云う。明治生まれの気質を感じたと云う。特に、学問に於いては、容赦なく厳しかった」と回想する。

２．文化財保護と啓発活動

代表的なものが、城ヶ谷古墳群の調査とその取り組みである。『城ヶ谷古墳群』1977 年に詳細が書かれるが、具体的取り組みが行なわれた。それは、①発掘ニュース、②現地説明会、教育現場の交流であった。

(1) 城ヶ谷古墳群発掘を通しての文化財保護運動の展開

昭和 48 年 12 月、福岡県教育委員会文化課を通して、業者より城ヶ谷古墳群発掘依頼があった。その経過を『城ヶ谷古墳群』より引用する。

「私達は、この発掘依頼を受けて文化財保護の立場・学術的な立場の両面から討論を積み重ねていった。その間、発掘依頼を拒否・全面保存運動を展開していくべきだという意見。いや発掘依頼を受け文化財保護運動を展開すべきだという意見の２つに分かれた。前者の場合、この宗像町内において住民運動を展開できる基盤が班内にも、住民にもまだ形成されていない。時期尚早であるという意見に押し切られた。後者の場合、あくまで発掘（記録保存）を肯定するものではない。いくら記録保存したといっても、その遺跡はこの地上から抹殺されてしまうのである。これでは、私達自身が破壊の手助けをしていると批判されても仕方がない。それで、今までのように記録保存のための発掘調査（最低限の資料保存）といったパターンから発掘をやらずに保存するという運動へ切りかえていくための過渡期であるという考えである。つまり、地域住民と連帯するための基盤を、この城ヶ谷古墳群発掘調査を通して作っていこうというものである。このような基本方針のもとに、私達は城ヶ谷墳群発掘依頼を受けていった」。

まず、彼らが取り組んだことは、地域住民との連帯を深めるために発掘調査の随時経過報告（発掘ニュースの発行）・現地説明会の開催・教育現場との交流であった。

「発掘ニュースの発行は、発掘調査開始報告と、第１回現地説明会案内をかねて３月に１回、第２回現地説明会案内で５月に１回それに大学祭（出土遺物展示会・文化財保護シンポジウム）への呼びかけで 12 月に１回、計３回町内全域を対象として 9,000 枚を配布した。

第1回現地説明会、第2回現地説明会では、延べ2,000人の町民の参加が得られた。また第2回現地説明会では、現場にて宗像町教育委員会・郷土史家・一般の人々それに私達との4者で、『文化財保護に関するシンポジウム』を開いた。その結果、町行政の文化財問題に取り組む姿勢の甘さがおおいに問題となった。また、一般の人々からは、『今まで、文化財保護と言われても、実感がなかった。今、自分が見学して来た。古代遺跡が永久になくなってしまうのかと思うと、どうにかして保存できないものかと痛切に思う。』『発掘調査をしている人々は、もっともっとこのような説明会を催し、1人でも多くの人に文化財保護を訴えて行くべきだ。』等の意見が出されていった。

教育現場との接触では、宗像町教育委員会の賛助をえて、町内の小学校へ発掘現場紹介、見学案内をしてもらった。その結果、河東小学校・赤間小学校の先生方の賛同を得ることができ、発掘現場における小学生の見学会が実現した。その後、赤間小学校では社会科クラブの6年生が、私達のクラブを訪問し、郷土の歴史の勉強会を私達と行なった。次に、行政機関への対応であるが、4月12日に宗像町町長へ抗議文（資料1）を提出した。これは、広報『むなかた』4月15日発行、第1面、『ご先祖さまも引っ越し』という記事が、私達の提出した文章とあまりにもかけはずれており、これを読んだ人々に誤解を生むと思われたから、その旨を抗議したのであった。その結果、文書での謝罪はなされなかったが、口頭謝罪という形で収容された。」

－昭和49年度（1974）－

日付	内容
2月15日	班会…城ヶ谷古墳群発掘依頼に関して
2月16日	班会…城ヶ谷古墳群発掘に関して
2月28日	班会…城ヶ谷古墳群発掘調査開始にあたって
3月1日	城ヶ谷古墳群発掘開始
3月7日	班室にて、県教委文化課・奥村組・教育大学波多野教授・考古学班の4者で、城ヶ谷古墳群調査計画打ち合わせ
3月15日	宗像町立河東小学校4年生68人、社会科見学として発掘現場訪問
3月23日	**第1回現地説明会（約1,000人）**
4月11日	班会…城ヶ谷古墳群発据について ・期間及び方針・広報　むなかたについて・第1回現地説明会反省 ・第2回現地説明会方針検討
4月12日	宗像町長へ抗議文提出・宗像町教育委員会へ質問状提出
4月15日	宗像町町長へ質問状提出
4月22日	班会･･・城ヶ谷古墳群発掘状況報告 質問状に対する回答報告 現場にて、県教委文化課・奥村組・考古学班の3者で打ち合わせ

4 月 26 日	班会…文化財保護条例の取り扱い方と、私達の文化保護運動に対する姿勢
5 月 2 日	町教育委員会と話し合い質問状回答に対するその後の取り組みについて
5 月 4 日	班会…第 2 回現地説明会打ら合わせ文化財保護に関する学生向けビラの読み合わせ、5 月 2 日、町教育委員会との話し合い報告
5 月 12 日	**第 2 回現地説明会（約 1,000 人）**
5 月 15 日	班会…第 2 回現地説明会反省町教育委員会からの提起事項について
9 月 5 日	『文化財についての懇談会』−文化財問題にどう取り組んだらよいか−
『城ヶ谷古墳群発掘期間中に於ける文化財保護関係活動報告』『城ヶ谷古墳群』より引用。	

また、宗像町町長・宗像町教育委員会へ質問状を提出された。これは、今までの宗像町の文化財に対する姿勢を告発するとともに、今後の町行政の文化財に対する基本方針を明らかにしてもらいたいと考え、その手始めとして、4 ヶ条からなる質問状を提出された。

その結果、昭和 49 年 9 月 5 日、宗像町教育委員会主催『文化財についての懇談会』−文化財問題にどう取り組んだらよいか−が開催された。

業者に対しては、保存される 14 基の古墳群が緑地公園として計画されていたので、公園内への収蔵庫の設置、古墳を巡回する遊歩道の設置などを要求された。

そして、このような一連の運動の中間総括として、12 月 6 日～8 日の大学祭において、『城ヶ谷古墳群出土遺物展示会』及び『宗像町における文化財保護の現状』というパンフレットを配布し、それをもとに懇談会を開かれた。

このように、考古班は城ヶ谷古墳群発掘調査を通して、徹底した班内討議をくり返しつつ、基本方針「文化財保護運動の展開は、単に行政批判のみにおわるのではなく、地域住民との連帯のもとに行なうべきである。そのための連帯基盤を作ろう。」に沿って運動を展開された。

(2) 城ヶ谷古墳群調査の取り組みと評価

発掘ニュースの発行は、発掘調査開始報告と、第 1 回現地説明会案内をかねて 3 月に 1 回、第 2 回現地説明会案内で 5 月に 1 回、それに大学祭（出土遺物展示会・文化財保護シンポジウム）への呼びかけで 12 月に 1 回、合計 3 回町内全域を対象として 9,000 枚を配布した。

第 1 回現地説明会、第 2 回現地説明会では、延べ 2,000 人の町民の参加が得られた。また第 2 回現地説明会では、現場にて宗像町教育委員会・郷土史家・一般の人々それに私選との 4 者で、『文化財保護に関するシンポジウム』を開いた。その結果、町行政の文化財問題に取り組む姿勢の甘さが問題となった。

また、参加者の意見が紹介されている。

「一般の人々からは、『今まで、文化財保護と言われても、実感がなかった。今、自分が見学して来た。古代遺跡が永久になくなってしまうのかと思うと、どうにかして保存できないものかと痛切に思う。』『発掘調査をしている人々は、もっともっとこのような説明会を催し、1 人でも多くの人に文化財保護を訴えて行くべきだ。』等の意見が出されていった。」

また、教育現場との関係では、古墳群に隣接する小学校への現場見学会が実施される。

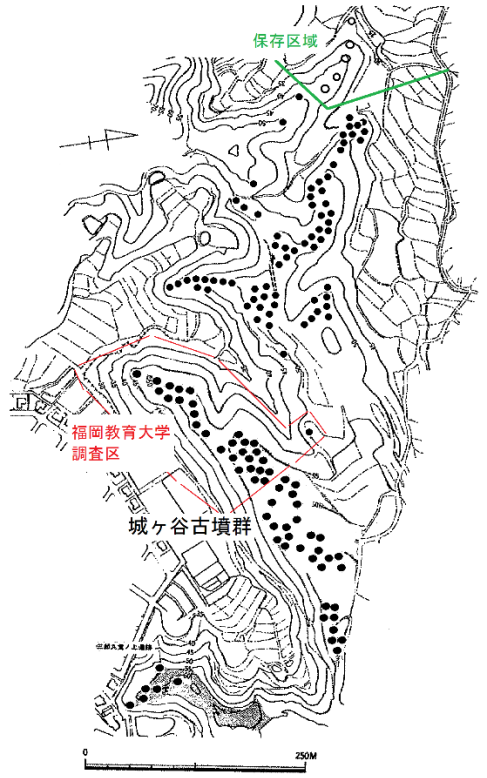
「教育現場との接触では、宗像町教育委員会の賛助をえて、町内の小学校へ発掘現場紹介、見学案内がなされた。その結果、河東小学校・赤間小学校の先生方の賛同を得ることができ、発掘現場における小学生の見学会が実現した。その後、赤間小学校では社会科クラブの 6 年生が、私達のクラブを訪問し、郷土の歴史の勉強会を私達と行なった。」

以上のように、当時としては発掘調査→保存啓発→地域学習の流れで、文化財保存の先駆的な取り組みが行われた。現地説明会は、2 回実施され合計 2,000 人である。平成 20 年（2008）の田熊石畑遺跡の現地説明会（1,800 人）でもこの参加者を超えていない。さらに、河東小学校・赤間小学校の生徒数を入れると、更に数が増えるのだろう。

当時、宗像町に出された公開質問状を受けて、宗像町教育委員会主催の「文化財についての懇談会」が実施された。参加した市民、学生、郷土史家に共通の文化財に対する認識ができ成果が上がった。

ある考古班の先輩は、「僕らは、教員となり文化財を大切にする生徒を育てたい」と云われたことが印象的であった。学生たちの積極性と行動力は、凄まじいものがあった。

城ヶ谷 12 号墳



城ヶ谷古墳群（赤間ヶ丘・泉ヶ丘）

この古墳群は、筆者が高校 2 年生の昭和 47 年 4 月に城ヶ谷の丘陵で 10 基の古墳群を発見し、教育大学の先輩に連絡したものであった。私も、城ヶ谷古墳群の発掘調査に参加し、赤間駅で第 1 回の現地説明会の案内と保存のビラを配った。翌年には、担当した城ヶ谷 12 号墳の遺物整理に参加した。

(3) 城ヶ谷古墳群のその後

『城ヶ谷古墳群Ⅱ』宗像市教育委員会によると、下記の通りの対応となった。

「1982 年 6 月 15 日、業者から、宗像市大字平等寺・三郎丸地区の土地開発に係る協議書が宗像市に出された。申請地は、かつて、1973 年 12 月に赤間宅地造成事業として開発申請が出されている。この時点では、業者・福岡県教育委員会・宗像町教育委員会・福岡教育大学を交えた協議により、平等寺地区の 14 基の古墳については緑地帯として保存し、緑地内には資料館・遊歩道を設置して古墳公園とする。そのほかの古墳群は、工事着工前に緊急発振調査をして記録保存することを決めた。これによって、三郎丸地区の古墳群の発掘調査を 1974 年 3 月に開始し、同年 10 月にこの地区の発掘調査を終了した。ところが、平等寺地区の発掘調査に入る段階になって、開発に伴う諸々の条件が整わないために本工事が中止となった。このため残りの発掘調査も中断することとなった。

1982年7月、事業区内を貫通する都市計画道路が事業認可を受けたため、宅地造成と道路建設が同時進行することとなり、緊急発掘は工期との関係上、急を要する事態となった。1982年の申請時点において、平等寺地区の約14,500㎡については自然公園として整備保存することが、福岡県教育委員会の指導として明記されていた。このため発掘調査は保存地区以外の平等寺地区の古墳群から着手した。1983年3月1日着手時には、約15基の古墳を確認していたが、調査の進行とともに、丘陵尾線上に、古墳の盛土をほとんど流失した古墳群の存在を知ることとなり、大規模調査の様相を示してきた。それにともない、調査計画は大きく変更され、工期との調整も困難をきわめた。

これとは別に、発掘調査の中途において、宗像市都市計画課から、保存地区の自然公園計画に異議が出された。宗像市が近隣公園として都市計画決定を受けるためには、自然公園としては認められないというものであった。現行の都市計画法では、開発事業区内には児童および近隣公園は開発面積の3%以上必要となっている。法の中では自然公園は含まれないとしている。このために急遽、福岡県教育委員会、宗像市教育委員会、宗像市都市計画課を交えた協議を行ったが、結果として、保存地区の5基の古墳について約5,000㎡のみは今後緑地帯として整備保存する。他の古墳については、発掘調査を実施して記録保存することとなった。また、緑地内に建設予定であった資料館は、宗像市中央公民館敷地内にプレハブを建設して、整理・保存することとなった。これを受けて、1983年8月に近隣公園は、都市計画決定した」。

城ヶ谷古墳群の開発区域には、北西部に5基の古墳が緑地帯（約5,000㎡）として整備保存された。

３．宗像郡内遺跡の分布調査

（1）調査とその内容

昭和47年から三カ年計画で宗像郡内の遺跡分布調査が実施される。当時、宗像郡の遺跡地図は、昭和36年『宗像神社史』収録図で、田中幸夫作成による成果が唯一で最も詳しいものであった。しかし、出土地点が大縮尺地図で照合が困難であった。宗像町では、昭和48年3月に実施され、宗像町役場からは牧田・尾山清・瀧口、教育大学考古班の澤田・高崎・與田・赤星と、東海第五高校の筆者・鎌田が参加し実施された。行政担当者は遺跡に詳しくなく、東海第五高校の歴史クラブの古墳分布図と教育大学歴史研究部考古班の自主分布調査の成果が収録される。調査は、先の調査の追認調査であった。分布調査の対象地は、教育大学考古班の今後の団地開発計画地を中心に精査を目指し、登録した。その成果は、『宗像町埋蔵文化財一覧』宗像町教育委員会1980年に纏められ、下記の表の通りである。

一方、玄海町でも昭和47年12月行われ、玄海町役場の桑野勇、松本肇（宗像大社）・江口航三（玄海中学校）、立部祐道住職（鎮国寺）・波多野先生と教育大生、東海大学付属第五高等学校（2016年度より東海大学付属福岡高等学校と校名変更。以下、東海第五高校）の鎌田・筆者が参加した。宗像町

と同様に、行政担当者は遺跡に詳しくなく、牟田尻・神湊地区、多礼・吉田・田野地区は東海第五高校の分布図、上八・鐘崎・池田地区は教育大学分布図が収録された。昭和 54 年に『玄海町誌』に収録される。

津屋崎町では､昭和 48 年 1 月に田中香苗･北野清美の所属する津屋崎郷土史会に調査が委託された。郷土史会は、昭和 44 年に結成されたグループで、自主活動をされていた。宗像会員の流れを引くグループである。特記されるのは、津屋崎古墳群の勝浦峯ヶ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳・奴山正園古墳・大石岡の谷 1 号･2 号墳などはこのグループの自主活動の発見によるものである。東海第五高校の歴史クラブは、新原・奴山古墳群と宮司地区の分布図を提供した。福間町は、福間町郷土史会により実施された。これらの成果は、昭和 52 年発行の福岡県教育委員会『福岡県遺跡地図』に収録される。当時、上記のある町の分布調査に参加とき、保存の悪い古墳は登録しない方が良いとか、形あるものは壊れるとか、高校生の筆者と鎌田は度肝を抜く発言に驚いた。この町は、古墳が後の分布調査で増えたのはそれが原因かも知れない。当時は、いわゆる手弁当の調査であった。

1975 年　宗像町 埋蔵文化財一覧	発見数	1979 年 玄海町誌	発見数	2011 年　宗像市 遺跡等分布地図 ✣	発見数	発掘調査数
古墳	435	古墳	202	古墳	2,236	780
集落・散布地	10	集落・散布地	2	集落・散布地	※	
須恵器窯	3	須恵器窯	0	須恵器窯	※	
その他	1	その他	10	その他	※	
合計	449		214	※古墳のみ比較		

✣宗像市の古墳数は、原俊一の御教示による。

宗像町の踏査日程	内容・踏査コース
3 月 2 日	役場打ち合わせ
7 日	河東・福崎・池浦
9 日	須恵・相原・稲元
12 日	山田・平等寺・陵厳寺
15 日	安倉・武丸・土師上・高六
16 日	徳重・富地原・名残・田久・朝町
18 日	野坂・中山・総括（東郷）
19 日	東郷・高塚・用山・平井
20 日	大井・総括（東郷）

宗像町遺跡分布調査、昭和 48 年

津屋崎郷土史会の田中香苗会長

(2) 宗像町遺跡分布調査のまとめ

当時の宗像町遺跡分布調査のまとめを宗像町で纏められている。下記に引用する。

「昭和 47 年以来、3 回にわたって宗像町の埋蔵文化財分布状況調査を行ってまいりました。今回の調査でだいたい完璧にちかいところまでこぎつけたと思います。実におびただしい古墳が宗像町内に散在しております。そして、これらの古墳が毎年確実に、破壊されていっています。急激にベッド・ダウンとして変貌している宗像町は、同時に自然の破損、文化財の破壊を道ずれにしてきているといえます。開発と文化財保護との関わりが、相互対立の関係として存在しているところに不正常さがあろうかと思います。ともあれ、文化財の破壊（＝都市開発等々）は、また、文化財問題を語り、考える機会を与えています。教育大学歴史研考古学班主催による城ヶ谷古墳群の現地説明会では延べ、1,000 名をこえる人々が、稲元古墳群では 1 日で 150 人もの老若男女が参加しております。日の里の古墳公園が教育大、地元の方々の自主的な集いによって清掃され、古墳公園にふさわしい装おいがなされようとしています。

この小冊子が、宗像町における開発問題、あるいは文化財問題を考えるうえで、多少なりともお役にたてば幸いです。昭和 50 年 2 月　宗像町教育委員会」

上記の日の里の古墳公園（東郷高塚古墳）の清掃は、次項の昭和 49 年度・50 年度入学生の教育大学考古班の活動である。

４．野坂の土器と中松元古墳群

昭和 49 年度・50 年度の入学生が中心となり、野坂中松元古墳群の破壊に伴う県・町への通報から、勤労者住宅生活協同組合が実施する開発区域で、古墳・遺跡破壊が行なわれた。

この古墳群は、昭和 50 年 2 月に宗像町遺跡の分布調査報告書に記載された、周知の遺跡である。この古墳群は、昭和 46 年度・47 年度の彼らの先輩により、発見されたものである。

『野坂の土器について』宗像町教育委員会　昭和 53 年（1978）より、引用しながら記述する。

野坂中松元古墳群の破壊経過

昭和 51 年　3 月	労住協（勤労者住宅生活協同組合）宅地造成をはじめる。
4 月 15 日	“北側 8 基発掘の上破壊、南側 8 基緑地として保存”という旨が、県の文化課と町の社会教育課と業者によって口答で確認される。（業者はこの確認にもかかわらず、発掘予定の 3 基を未調査のまま壊し、更に、保存されるはずの南側 8 基の山裾も削ってしまう。）
8 月 20 日	労住協の依頼した発掘調査団によって、北側 8 基のうち壊されていない 5 基の発掘調査に着手する。（この発掘は充分とはいえなかった。）
9 月 15 日	考古学班員によって住居跡らしいものが発見される。（町の社会教育課を通して、県文化課に調査を要請）
9 月 22 日	県文化課の技師による調査がなされたが、遺跡ではなく、流された土砂に土器が含まれていたにすぎない、と判明される。

	（多量の土器があったために 27 日 50m四方に縄を張り、以後 3 日間工事がストップされることとなる。実際に 10 月 7 日まで工事はストップされた。）
10 月 15 日	町主催の土器説明会が、中央公民館にて行なわれた。 （文化課の技師を招いて採集土器の説明、簡単な須恵器の変遷・窯・甑の説明などがなされた。出席者は小学校の先生 6 名、一般の人 8 名）
昭和 52 年　5 月	町に「土器の整理」をするように提起する。
6 月 15 日	町から「土器の整理」を依頼される。
7 月 10 日	野坂に関する現状報告と 7 月 21 日～24 日の「土器の整理」を知らせるビラを配布する。
7 月 21 日～24 日	中央公民館において「土器の整理」が行なわれる。考古学班は土器を整理ことにより住民の人と共に、文化財に触れていこうという主旨のもとで行なう。参加者 50 名あまり。
7 月 25 日～8 月 20 日	同志社大学が発掘調査を開始する。
9 月頃	県の文化課によって、保存されるはずの 8 基が発掘される。
昭和 53 年　3 月 11 日	採集遺物の本格的に報告書作成にとりかかる。

中松元には、確実な 2 つの古墳群（8 基ずつ計 16 基）の存在が確認されていた。昭和 53 年 3 月 1 日現在、中松元の古墳は、最初保存されるはずだった南側 8 基の発掘中に、8 基の他に 4 基見つかり、残されるはずの 3 基のうちの 1 基が今年度中に発掘される予定であるとされる。当時のことが『野坂の土器について』に「宗像の文化財の現状」として記載されるので、下記に引用する。

「先人の歴史をありのままに伝えてくれる文化財は、現代に生きる私達にとってかけがえのないものと思います。特に、十分明らかにされていない原始・古代の歴史を知る上で、古代住居跡・貝塚といった埋蔵文化財は貴重な史料です。1960 年以来、高度経済成長の名のもとに、全国いたるところで開発がすすめられています。それは、ここ宗像においても例外ではありません。宗像は、福岡・北九州のベッドタウンとして最適であるため、宅地造成、道路建設等によって日ごと変化しています。

宗像町には、約 500 の遺跡が確認されていますが、そのうちすでに開発の名のもとに壊されていった埋蔵文化財は、相当数にのぼっています。今年度・宗像町においても、開発優先の行政のもとで、住民に十分知らされることなく、石丸遺跡（弥生・古墳時代）、中松元・相原の古墳群が、期限つきの緊急調査をしたうえで壊されてしまっています。このように現在ほとんどの埋蔵文化財は、開発の中で破壊にひんしているのです。一方、この開発の波の中で、国指定・県指定として、また公園として残されている古墳等の埋蔵文化財も存在しています。しかし、せっかく残された文化財も、その地域の人々の間でどういうふうに活用されていけばいいかわからない状況の中では、遺跡の価値さえ半減してしまうと思います。この宗像にも、日の里に古墳公園が存在していますが、私達は、この日の里の古墳を宗像の地方史を知る上で十分に活用しているでしょうか。昨今、奈良県明日香村マルコ山古墳の発掘調査がマスコミで大きくとりあげられています。あのような著名な古墳だけが、埋蔵文化財だと考えている人も多いことでしょう。皆さんのまわりを見まわしてください。この宗像においても、宗像の歴史を物語ってくれる埋蔵文化財が数多く存在しているのです。今日の埋蔵文化財の破壊

の状況を考えると、すべての文化財が、いつの日かなくなってしまうのではないかと思うほどです。文化財の価値を十分に理解し、利用していくために、私達は文化財の保存を真剣に考えないと、とりかえしのきかないような状態になるのではないでしょうか。

<私達の活動について>

野坂とは別に、石丸遺跡を例にとってみますと、宅地造成中・偶然に考古学班点が土器片を一発見したことから、そこに宗像では珍しい弥生時代の遺跡が存在していたことがわかりました。そこで、私達は町の社会教育課に工事の中止と発掘調査を要請しましたが、工事は中止されず、かたわらでブルドーザーが動くなかで、わずか10日間の危険な発掘調査でした。それもただ掘り上げるといった程度のものでした。この破壊された遺跡の重要さを知っていただくために、私達は昨年7月4日、石丸公民館で独自に報告会を開きました。現在のような状況の中にあって、私達は昨年度、「文化財保護運動」を年間テーマの一つにかかげ、日常の活動として、遺跡の存在を発見・確認するための分布調査、また対外的には、中央公民館における野坂の土器整理など、十分であるとはいえませんが、私達なりに取り組んできました。住民の皆さんに、文化財を身近に感じていただき、文化財の現状・文化財保護について考えていただけたらと思い、この報告書を出版することになりました。今年度も、「文化財保護運動」を年間テーマの一つにかかげ活動していくつもりです。今後の私達の企画に、住民の皆さんが多数参加されることを期待します。」

当時、津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査に教育大学歴史研究部と共に参加していた筆者も、後に詳しく聞くことになった。当時の印象は、また同じ事が繰り返されたと感じた。波多野先生が退官後、教育大学で調査が実施できないので、開発が優先され、破壊が繰り返された。『野坂の土器について』宗像町のまとめが記述されるので、引用する。

「宗像の人口も5万をこえました。山紫水明の片田舎の町から、文字通り巨大なベッド・タウンへと変貌してきております。急激な変化は当然様々な矛盾を生みますが、宗像町の場合も例外ではなく、水問題・下水処理問題・公共施設の問題そして文化財問題等々生まれてきております。人口急増のあとに息をきらして追っかけていく宗像町政と評した方がおられますが、うがったことばだと思います。しかし、又、人口急増は住民間における多様な教育・文化要求の花も開かせています。ふるさとを見直す運動とサークル、地域史の発掘と学習等々…。さて、確たる歴史の事実をつみあげていくことで、宗像の歴史を明らかにしていく作業が今求められています。今回、その作業の一環にと、ほぼ一カ年かけて、野坂で採集された土器の整理と分析が行われてきました。そして、この小冊子にまとまりました。この作業にあたられた教育大歴研のメンバーを中心とする方々に、あらためて深甚の謝意を表します。この冊子が多くの方々に地域史学習の教材の一つとしてあつかわれれば大変さいわいです。　昭和53年3月　　宗像町教育委員会」

元号	年度	遺　　跡　　名
昭和 45	1966 年	東郷遺跡群（福岡県史跡調査会）
昭和 46	1971 年	三郎丸古墳群（福岡教育大学）
昭和 48	1973 年	陵厳寺茶屋辻遺跡（福岡教育大学）・三郎丸前田遺跡（福岡県教育委員会）・ 城ケ谷古墳群（福岡教育大学）
昭和 49	1974 年	稲元古墳群 1（稲元古墳群調査団）　　昭和 51 年に報告書が刊行される。
昭和 50	1975 年	稲元古墳群 2（稲元古墳群調査団）
昭和 51	1976 年	野坂中松元古墳群 1（野坂中松元古墳群調査団）・野坂大木遺跡（福岡教育大学）
昭和 52	1977 年	野坂中松元古墳群 2（野坂中松元古墳群調査団）・石丸遺跡（福岡県教育委員会）・相原古墳群 1（福岡県教育委員会）
昭和 53	1978 年	野坂中松元古墳群 3（福岡県教育委員会）・相原古墳群 2（福岡県教育委員会）・ 久戸古墳群 1（福岡県教育委員会）
昭和 54	1979 年	久戸古墳群 2（福岡県教育委員会）

黎明期の発掘調査　（外部委託）

当時、町には専門の文化財担当はおらず、社会教育主事が開発に伴い、開発業者に調査者を直接依頼する状況であった。筆者は、奈良の大学に進学したが、稲元古墳群の調査の依頼が業者から考古学の恩師教授にあった。断った方が良いですよと云った覚えがある。業者は関西や関東まで探していたようだ。

５．考古班活動がその後に及ぼした影響

(1) 田熊石畑遺跡の保存

宗像町遺跡分布調査の成果が、昭和 50 年 3 月に刊行された。これらの成果は、玄海町・津屋崎町・福間町の調査成果などと共に、福岡県教育委員会『福岡県遺跡地図』昭和 52 年（1973）で公開され、全国的に周知の遺跡として認識されることになる。宗像町庁舎は、昭和 48 に庁舎建設特別委員会を設置、昭和 50 年に建設委員会が設置、昭和 51 年に用地購入が済み、12 月に起工式が行なわれた。

昭和 49 年の後半は、稲元古墳群などの調査が問題となり、福岡教育大学考古班の町へ公開質問状等が提出されていた段階であった。由良半三郎の町長時代であった。知人より、宗像町庁舎を田熊石畑遺跡のある荒廃地に計画が検討された事もあったと云う。あそこは、「遺跡が出るから開発に手間が掛かる」との事で、候補から外され、現在の地に土盛されて着工されている。このころ、城ヶ谷古墳群の保存問題がなければ、市役所はこの地に建設された可能性があり、銅剣類も工事中の発見になっていたと思う。当時であれは、調査は不十分であったと思う。上記の件で、後に田熊石畑遺跡が残ることになる。城ヶ谷古墳群の保存運動は、一定の開発に対する抑止力が働いた一例である。その後、平成 20 年に田熊石畑遺跡の保存を求める会が結成され、市民の尽力と市長の英断で保存される。このことは、矢田公子「田熊石畑遺跡の保存を求める市民運動について」『むなかた電子博物館』創刊号（2009 年）を

参照されたい。また、昭和 47 年 7 月に牟田尻古墳群で東京の会社のゴルフ場開発計画があった。しかし、桜京古墳の発見と分布調査の成果で、92 基の大型群集墳と判明しており、15 年ほど開発を遅らせることができた。その結果、古墳群の開発による破壊から逃れ、多くの古墳が残る事になる。

(2) 人材と育成

歴史研究部考古班の卒業生は、多く方が教員となられた。全盛期の昭和 45 年入学生（1970）～昭和 50 年（1975）も、昭和 49 年を挟んで還暦前後となる。宗像の関係では、中尾徹が、昭和 56 年（1983）に宗像高校に赴任され、占部玄海と郷土研究部を復活され、旧宗像郷土館資料の整理を行い、昭和 59 年に『宗像高校視聴覚ホール資料図版・目録』を刊行された。中尾は、考古資料を担当された。さらに、資料を四塚会館に収蔵・展示された。澤田康夫は、唯一、教育の道から離れ、文化財担当者として福岡県那珂川町で遺跡調査に勤務された。江浜明徳は、2014 年に『九州の戦争遺跡』海鳥社で刊行される。彼は、高校教諭で平和教育担当として、戦跡遺跡をライフワークとして活動されている。多くの方が、昨今の教育現場でご苦労されていると思うが、盆栽の道で活躍される先輩もおられた。福岡県の教員で考古学に知識のある熱心な先生、管理職が多いと思うが教育大の考古班の方々かも知れない。

筆者や鎌田隆徳は、高校時代に三郎丸古墳群・津丸久末古墳群・城ヶ谷古墳群の調査に参加し、最も影響を受けた。田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に参加したのは、その影響と思う。筆者が宗像に異常に拘るのはその影響である。さらに、城ヶ谷古墳群の調査で影響を受けた少年がいる。調査後の古墳で遺物を拾い考古学を始めた白木英敏である。彼は、のちに宗像市で国指定史跡の田熊石畑遺跡の調査・保存整備を行うことになる。また、耜田雄一と交流し、彼らが日の里古墳公園の清掃活動を行っている頃である。その少年は、考古学に興味を持った川畑和弘（滋賀県守山市）で、弥生時代の環壕集落である国指定史跡の下ノ郷遺跡の調査・保存整備の担当者となる。

このように、40 年を振り返ると、直接的な方々を書いたが間接的に影響を受けている方々も多いと思う。

6．高校クラブの活動

(1) 宗像高校郷土研究部の活動

宗像高校四塚会館の資料で、宗像高校郷土研究部の活動アルバムを 4 冊ほど発見した。昭和 38 年～46 年頃の資料で、クラブ活動での遺跡発掘調査、踏査の記録が収録される。

宗像考古刊行会の『宗像高校郷土研究部資料　遺跡写真』で報告したが、再録する。

特に、宗像市神湊上野古墳、宗像市相原古墳群、宗像市浜宮貝塚、宗像市大井三倉古墳など埋蔵文化財報告書が刊行されないもの、当時の調査風景を知る上で貴重な資料が含まれる。郷土研究部の当時の記録類がほとんど残っておらず、知見する調査資料より、活動と調査を復元してみた。細部は、不明な点もあるが、大まかな概要を纏めた。

活動は、昭和 38 年（1963）～昭和 59 年（1984）までの資料である。自主調査は、相原古墳群の分布調査と大井石棺の調査がある。主に、宗像で実施された東郷遺跡群・神湊上野古墳・浜宮貝塚の参加が知られる。

顧問は、山田清・松永雅生→正木喜三郎・篠崎泰真→占部玄海・中尾徹先生に引き継がれた。正木喜三郎は、「旧宗像郷土館資料」について、当時のことを書いている。下記に引用する。

「私が宗像高校に赴任したのは昭和 40 年 4 月のことである。着任早々、山本三吾校長の案内で荒廃した郷土館内を見て廻った私は、校長の希望もあり、郷土館資料を引き取り、その保管を考え、社会科諸先生の賛同を得た。移管に際して、事前に相談した小田富士雄先生の御教示に従って、木端一つ残らず運ぶことにした。社会科主任の松永稚生先生指揮のもと社会科教師全員でこれに当り、社会科授業の時間を割き、生徒諸君二人に搬送用の魚箱一つを充て、魚箱に入れて人海作戦で社会科教室へ移し終えたのである。

移管された資料は反古とゴミ。塵にまみれた土器・石器の山であった。授業の合間をぬって資料を分類、ゴミ・ヨゴレ取りは郷土部女生徒諸君が担当した。着任された篠崎泰真先生を郷土部顧問に迎え資料の整理をお願いした。そののち、新校舎が落成し空室となった旧六棟の家庭科教室の一室に陳列ケースを収め、これに資料を収納することになった。社会科教室からの搬送は諸兄生や、郷土部諸君の協力で行い、大まかながらも整理もでき、展示出来る状況となった。一部の資料委託者が宗高事務へ返還を要求され、私の知らぬ間に引き取られてという事態が起ったのである。宗高は資料を移管しているだけで所有権はないという事務の説明である。移管と同時に所有権も移っていると思っていた私にとって寝耳に水の驚きで、同時に整理の情熱も冷める気持である。また資料を入れた旧家庭科教室は新校舎から離れており、心なき者によって窓ガラス・陳列ケースが破られる事件が続発した。その補修を再三、学校に申し入れたが駄目で、迷惑顔されながら、窓に格子を打つことで落着した。移管した時の先生方は転出されてしまい、協力者はなく、折からの校長着任拒否闘争（昭和 43 年）もあって一時的にしろ、ついに管理放棄をしてしまった。だがこうした私を深く反省させることがあったのである。また管理を放棄した後の資料室を見学（昭和 45 年 5 月）された九州大学岡崎敬先生から資料保管の重要性を説かれたこと、そして特に、放棄してしまった資料室の整頓と清掃を郷土部の諸君が黙々と続けてくれている姿を見たことが私の胸を強くうったのである。気をとり直し、整備を再開した。今日、郷土資料の散逸を免れたのは、学校当局・諸先生方の尽力もさることながら歴代の

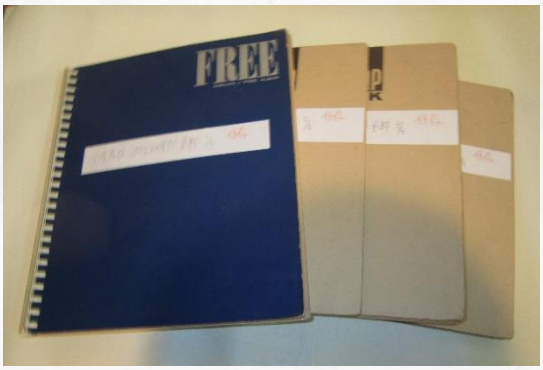
郷土部諸君の無償の奉仕の賜物だと感謝し考えている。資料移管から7年、部員減少から郷土部は休部し資料室の清掃をする者もなく、格子はあってもガラスは破れたままで、時折、一人で掃除をしていたものの、埃が積るままの資料を見ると尽力され転出されていった先生方やかつての郷土部諸君を考えれば、胸の痛む想いであった。昭和50年、私は退職することになった。気にかかるのは資料である。社会科の船津隆造先生の勧めもあり、今宮新校長とも相談し、九州歴史資料館の渡辺正気先生に子持勾玉・青磁碗・石剣や古文書など重要物品だけでもと保存管理をお願いした。快諾され館員の方々が引き取りに見えた。他は盗まれる心配はないであろうと判断し、後事を託すべき人もなく、複雑な想いのまま宗像を旅立ったのである。」

昭和43年の校長着任拒否闘争は、教員の疲労となり、文化財の保存にも影響を与えた。

特記されるのは、宗像高校教諭であった占部玄海・中尾徹先生によって、旧家庭科教室資料を再度整理がなされた。整理は、胷形目録と資料を確認し、1点ずつ写真撮影がなされ、写真図版を中心に目録が作られた。昭和59年（1984）発行の「宗像高校視聴覚ホール・郷土資料目録」がそれで、収蔵資料の全てが明らかとなった。作業は、郷土歴史研究会の協力を受け、考古資料を中尾徹、古文書等を占部玄海が担当された。なお、収蔵資料の重要性を公開するため目録を刊行し、費用は占部玄海の自費出版によってなされた。

元号（西暦）	調査内容	顧問（先生）
昭和38年（1963）	宗像町相原古墳群の調査・岡垣町高倉古墳群の調査参加、文化祭は「相原古墳群」の展示	山田清・松永雅生
昭和39年		山田清・松永雅生
昭和40年（1965）	宗像郷土館資料を宗像高校へ移動、8月、東郷遺跡群（日の里団地内の分布調査を実施）	山田清・松永雅生・正木喜三郎
昭和41年（1966）	東郷登り立遺跡4月～6月、7月～昭和42年2月に東郷遺跡群（日の里団地　スベットウ古墳調査参加）、8月頃か、玄海町神湊上野古墳に調査参加	山田清は10月明善高校へ転勤、正木喜三郎・篠崎泰真
昭和42年		正木喜三郎・篠崎泰真
昭和43年	4月～7月、校長着任拒否闘争となる。	正木喜三郎・篠崎泰真
昭和44年	（宗像町大井石棺の調査）	正木喜三郎
昭和45年（1970）	5月、宗像高校創立50周年　岡崎敬先生の「沖ノ島遺跡について」講演、文化祭は「宗像の仏教」	正木喜三郎
昭和46年（1971）	5月　玄海町浜宮貝塚の調査参加、文化祭は「宗像の万葉の道」	正木喜三郎・赤松
昭和47年	部員の減少で休部	正木喜三郎
昭和48年		正木喜三郎（管理）
昭和49年		正木喜三郎（管理）
昭和50年	4月、正木先生が東海大学へ転勤。	
昭和51年		
昭和52年		
昭和56年	4月に郷土研究部の復活	占部玄海
昭和57年	宗像郷土館資料の整理開始（歴史研究同好会）	占部玄海・中尾　徹
昭和58年	宗像郷土館資料の整理	占部玄海・中尾　徹

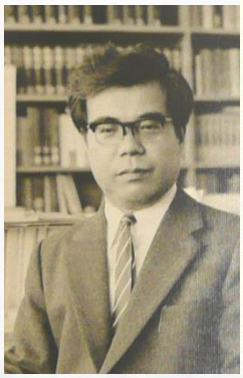
昭和 59 年	『宗像高校視聴覚ホール郷土資料図版・目録』の刊行	占部玄海・中尾　徹
平成元年	**四塚会館の竣工　宗像高校創立70周年**	**藤　清治**
宗像高校活動アルバム・『宗像高校視聴覚ホール郷土資料図版・目録』昭和 59 年より作成		



クラブ記録写真集

昭和 46 年

岡崎敬（九州大学）の講演　昭和 45 年



正木喜三郎先生とクラブ員

桑田和明は、正木先生について、「当時、先生は服装など気にせず、教員としても異質な感じで、学者風の方であった。高校時代は歴史部には女子が多く入らなかったが、文化祭の借用で甲冑を先生と借りに行ったこと、神湊浜宮貝塚の調査に参加したことを覚えている」、また先生との関係が深くなったのは大学時代、地元の宗像に戻り先生の退官後、『津屋崎町史』・『宗像市史』の執筆を依頼されている。

宗像の中世史は正木と桑田の師弟の研究で、画期的に進んだ。桑田は『中世筑前国宗像氏と宗像社』を 2004 年に発刊する。また、正木喜三郎執筆の『古代・中世　宗像の歴史と伝承』2005 年の刊行を病床の正木に代わり、実質的な編集・刊行を行なっている。

写真と解説

① 古墳時代 神湊上野古墳 （宗像市神湊）

神湊上野古墳

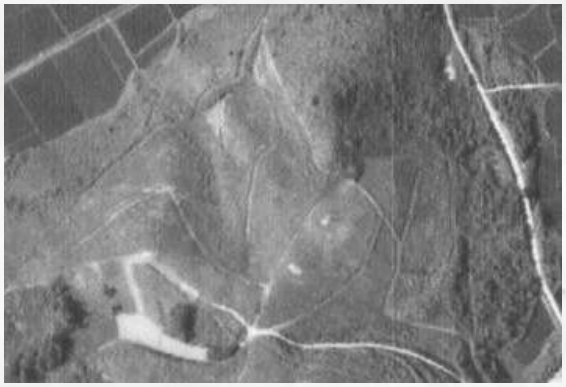
神湊上野古墳

（上）神湊上野古墳の覆石
（右）神湊上野古墳の石室

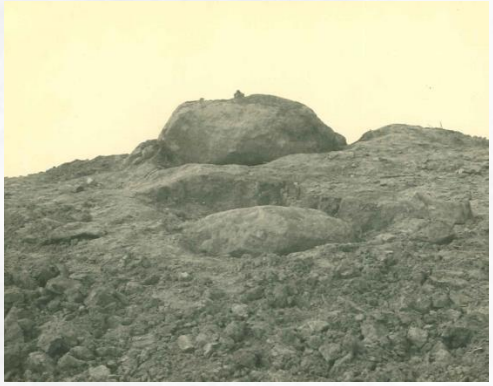
玄海町誌・宗像沖ノ島に前方後円墳の記事がある。横穴式石室を内部主体とする。後円部が前方部より高い。『アエラ』の武末純一の当時の想い出に、5世紀末の古墳とされる。調査担当者は、森貞次郎・渡辺正気とされる。短甲が出土する。

昭和 46 年の鎌田隆徳の見学メモに葺石と昭和 41 年 8 月ごろの調査とされる。今回の写真で、横穴式石室で墳丘に葺石を配置することが判明した。

② 古墳時代 相原古墳 （宗像市相原）



相原古墳群 昭和41年



相原3号墳の天井石

古墳群は、宗像平野の右岸、釣川の支流である横山川流域にあたり、谷奥を見下す丘陵上に位置している。丘陵は平野部との比高30mあり、平坦で緩やかである。周辺には、須恵墨巡・稲元日焼原・須賀浦の窯址群や稲元、久戸古墳群、須恵クヒノ浦古墳が分布している。視下の小平野は盆地状を呈し、古墳時代の集落である池浦高田遺跡が広がっている。 相原古墳群は、昭和35年頃に福岡県教育委員会の分布地図に5～6基が登録されている。その頃は、雑木の茂る丘陵で、5号墳の天井石や古墳の墳丘が比較的良好に保存されていた。古墳の所在する丘陵は、牧草地の開発によって、大きく3回にわたって削平が行われた。

宗像高校の分布調査は、昭和38年に前方後円墳を含む7基の古墳が発見される。1号墳の側面の写真と3号・5号墳の石室石材が撮影される。一部、掘削される。相原の前方後円墳は、昭和41年までは完存していた。

③ 古墳時代 東郷登り立遺跡 （宗像市日の里）

東郷高塚古墳に近接する遺跡で、春成秀爾（九州大学助手）を担当者として発掘調査が実施された。調査の結果、石蓋土坑・竪穴住居などが検出された。宗像高校に隣接しているので、参加したクラブ生徒のスナップが残される。

・日本住宅公団1967年『東郷遺跡群』福岡県史跡調査会

東郷登り立遺跡の住居

東郷登り立遺跡の石蓋土坑

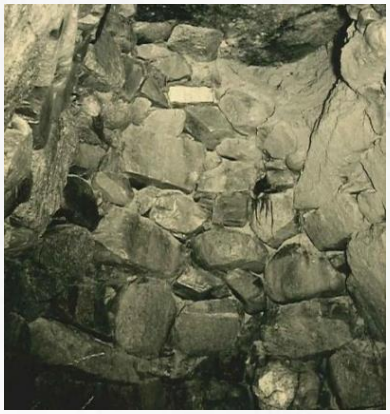
④ 古墳時代 スベットウ古墳 （宗像市日の里）

スベットウ古墳は、東郷田熊の小丘陵北端に位置する前方後円墳で、全長 35～40mと考えられる。主体部は、竪穴系横口式石室で、玄室は長さ 3.6m×幅 2m、高さ 3.8mのやや胴張りの長方形プランを呈する。玄門部には框があり、墓通が上方へ上っている。出土遺物は、挂甲・鉄鏃・刀子・帯金具・金銅製品・ガラス製小玉 719 個・ガラスの切子玉・須恵器片が出土している。造墓時期は石室の形態より、6 世紀前半に比定される。

日の里団地の造成後に消滅した。中学生時代の筆者の大井の友人が当時、採集したガラス小玉を10点ほど持っていた。 調査参加写真は、事前調査の写真、発掘参加時の写真があり、報告書掲載以外のスナップがあり重要である。

・日本住宅公団 1967 年『東郷遺跡群』福岡県史跡調査会

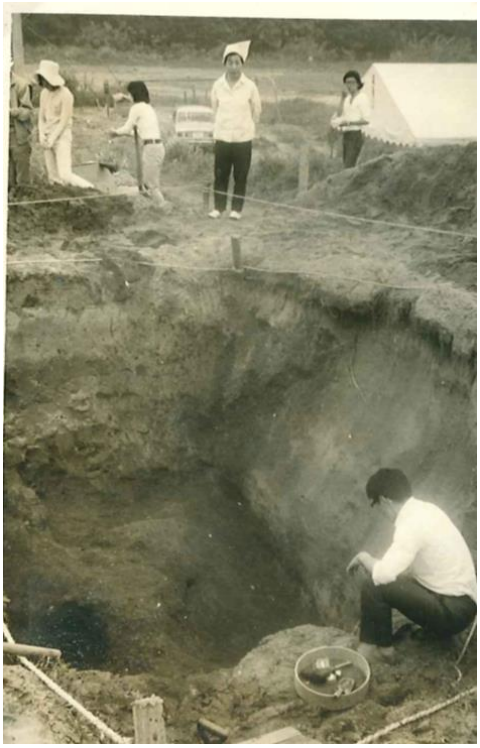
東郷・スベットウ古墳の石室(玄門)



東郷・スベットウ古墳の石室(天井)

⑤ 古墳時代 神湊浜宮貝塚 （宗像市神湊）

神湊の丘陵は、赤土の上に砂層が厚く堆積しており、砂層面に遺構群が検出される。神湊集落の東側の砂丘上に位置する貝塚で、確実な範囲でも東西 80m×南北 160mの範囲に貝の分布が確認でき、さらに両側に 50mの広がりが知られる。海抜 10mの宗像神社浜宮を中心に、北に伸びる緩い砂丘に立地し、もつとも低い４mの位置まで貝層がみられる。玄界灘沿岸で最大の古墳時代貝塚である。最初に田中幸夫により、「神湊貝塚」として紹介され、石井 忠によって貝層・土器・骨格器が採集され、遺跡の見直しが始まった。昭和 46 年 5 月に筑紫野史学会によって、北端の部分が調査される。現地表面から、0.5mまでは、二次堆積であるが、海抜 4.2mの基盤層の上に、混貝土層が確認された。混貝土層には須恵器が検出されており、6 世紀中～７世紀前半に比定される。自然遺物は魚骨（サメ・マダイ類・フグ・クロダイ・スズキ・カツオ・エイ）・貝類（サザエ・アワビ）は岩礁性のものが多く、潜水漁法の存在が予想される。これらに伴って鉄製ヤス・釣針・刀子・骨鏃・鹿角製品・土錘が出土している。当時としては、画期的な問題意識を持った調査であった。



神湊浜宮貝塚

⑥ 古墳時代 大井三倉古墳 石棺（宗像市大井）

スナップ写真が３枚あり、箱式石棺と内部の石敷きが確認できる。別の写真に蓋石が写っており、『宗像市史』に掲載の大井三倉の石棺と特徴が一致する。市史は、撮影時期不詳とされる。私は、昭和38～44年の間に調査されたと推察する。水糸が見えるため、実測がなされている可能性がある。当時おられた臨時職員の前川威洋先生（後に福岡県教育委員会文化課）あたりが、図化されたのではないか。再度、確認が必要。

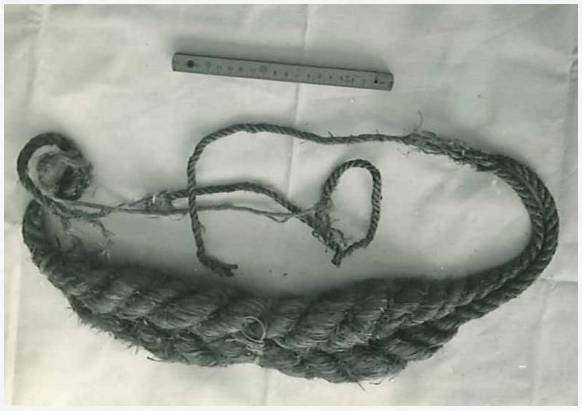
大井（三倉）石棺

⑦ 古墳時代 宮地嶽古墳 （福津市宮司）

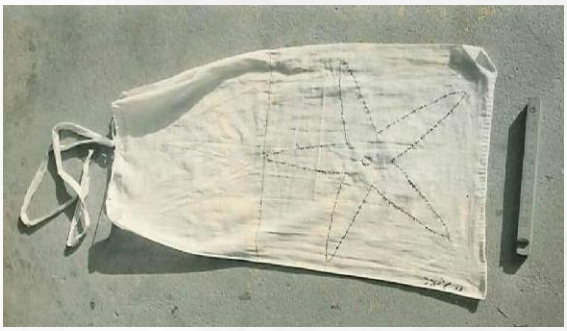
金銅製冠を含めて昭和27年と36年に新国宝に指定された。破損が著しいため昭和41年～43年の3年間

で文化庁の補助を受け保存修理がなされた。昭和48年より、東京国立博物館に勧告出品として、常設展示される。写真は、馬具の保存修理前であり、昭和41年以前に宮地嶽神社で撮影されたものである。また、鐘崎海女の資料がある。

宮地嶽古墳出土品(修理前)



鐘崎海女 はちこなわ



鐘崎海女 いそべこ

鐘崎海女 いそじゅばん

鐘崎海女（昭和30～40年代）

参考文献

・占部玄海・中尾徹『宗像高校視聴覚ホール　郷土資料目録』宗像高校　1984 年

・正木喜三郎「宗像郷土館資料の再生」『ふるさとの自然と歴史』110 号　1985 年

・福岡県立宗像高校『創立 70 周年記念』1989 年
・宗像考古刊行会『宗像高校郷土研究部資料　遺跡写真』2011 年　ＣＤ版
・宗像考古刊行会『田中幸夫先生と宗像郷土館―そして田熊石畑遺跡の保存―』2010 年　ＣＤ版
・宮地嶽神社『国宝 宮地嶽古墳出土品修理報告書』1968 年

（2）東海大学付属第五高校歴史クラブの活動

2016 年 4 月より東海大学付属福岡高等学校と校名が変更される。ここでは旧校名（以下、東海第五高校と略す）を使用する。

昭和 45 年に高校陸上部で筆者と鎌田隆徳と出会い、共に考古学に興味があり、意気投合した。玄海町・津屋崎町には鎌田、宗像町は筆者が興味を持っていた遺跡の踏査からこのクラブの歴史が始まる。高校時代のクラブノート手元にあり、これに沿って記述する。

顧問は、山隈惟美・秋元勇夫・高岡清・松岡哲先生で社会科担当であった。

昭和 45 年（1970）　高校 1 年生は、4 月 9 日・10 日、東海第五高校の曲丘陵の踏査から始めた。曲丘陵は、谷部に黒耀石・須恵器、丘陵頂部の平坦面に弥生時代前期の土器類を採集した。後に曲香畑遺跡と呼ばれ、発掘調査が実施される。

高宮祭場の周辺は、当時段々畑となっており、滑石製品・須恵器が散布していた。踏査の際に、水溜の畦に土師器（複合口縁の壺・甕）などが露出しており採集した。

9 月 20 日には、山隈・秋元両先生の指導を受け、須恵窯跡群の新池・古池の踏査を行い、灰原などを発見した。そして谷沿いの崖面の須恵器散布状況から、新池・古池周辺の分布図を作成した。10 月 8 日には、鎌田と考古学研究会を二人で立ち上げ、陸上部の合間や土曜・日曜日に遺跡の見学、分布調査を行った。11 月 7 日・10 日には、須恵・曲遺跡の踏査を再び行なった。12 月には、鎌田の村である桜京古墳周辺の牟田尻の踏査を安部・末続・鎌田・筆者が実施した。大島の踏査もこの頃である。12 月 16 日は、三郎丸古墳群の丘陵が伐採されたので、分布調査で 6 基の古墳を発見したが、開発業者に調査することをお願いしたが、殆どが破壊されたため、現状の記録を取った。

昭和 46 年（1971）　3 月に、三郎丸古墳群の残存する古墳を福岡教育大学の波多野先生が発掘調査を実施された。この時に、筒井亀などの教育大学の先輩らと出会うことになる。

研究会は、高校の必須クラブ活動で、歴史研究部となり部員も増えた。高校 2 年生は、4 月に城ヶ谷の丘陵で 10 基の古墳群を発見し、教育大学の先輩に連絡した。後の昭和 49 年に筆者が発掘調査と整

理に参加することになる。5 月の連休には、神湊浜宮貝塚の調査が筑紫野史学会主催であり、宗像高校郷土部と共に参加した。5 月には、牟田尻古墳群に尾根上に多くの古墳が群集しているので、再び分布調査を行なった。さらに、津屋崎町の新原・奴山の前方後円墳と円墳の分布調査を行なった。7 月には、宮地嶽古墳の見学の帰りに、境内の切り通しで環頭太刀の柄頭を採集し、宮司に届けたが、以後、この資料は、神社で行方不明となる。玄海町田野丘陵で、土器を採集したのもこの頃である。8 月には、田熊示現神社境内の裏で弥生前期の貯蔵穴が崖面に露出しており、土器を採集した。当時、『福岡県の歴史』に青銅器の地名表があり、田熊中尾(忠霊塔)で銅剣が出土しており、注意していた場所である。9 月には、福岡教育大学の稲元墨巡窯跡の調査を見学に行った。続く 10 月に福岡教育大学の相原古墳の石室調査が行なわれた。10 月 23 日の学園祭にクラブの展示に伴い牟田尻の桜京古墳が、秋元・高岡・鎌田・筆者が装飾古墳であることを確認した。11 月 12 日には、宗像神社遷宮大祭があり、出光佐三翁に出合った。

11 月の学園祭では、鎌田が中心となり、桜京古墳石室の実大模型を作成した。12 月には、新原百塔の配置図、拓本・実測調査を行った。

昭和 47 年（1972）　昭和 47 年 2 月には牟田尻古墳群の第 1 回目の分布調査を実施し、60 基の古墳を確認した。2 月には、奥野正男先生の主催する筑紫古代史研究会が、宮地嶽神社で開催されたので参加し、奥野先生に出会った。3 月には、池浦の削平された古墳より、ガラス丸玉を採集した。同じく、津屋崎団地東側の古墳削平地より、鉄器類を採集した。併せて山麓部の古墳の分布調査を行なった。高校 3 年生の 4 月 23 日には、福岡教育大学歴史研究部考古班と東海第五高校のクラブ合同の『巡検』を行った。私たちの古墳・遺跡の情報を共有することができた。澤田康夫とは、この頃からの知り合いとなる。4 月 13 日～16 日に相原古墳群の造成があり、削平された古墳の記録を取った。5 月には、大井丘陵上の 2 箇所で弥生土器を採集し、黒耀石なども採集した。さらに、南側の崖面で大量の弥生土器を採集した。この遺跡は、後に大井三倉遺跡と呼ばれる。この頃に田熊石畑遺跡南の崖面で弥生土器を採集した。また、廃屋となった宗像郷土館の写真撮影を行なった。5 月には、博多で『奴国展』を見学した。関心は、遠賀郡にひろがり、水巻町立屋敷遺跡、遠賀町城ノ越貝塚、鬼津横穴、鞍手町鎧塚古墳・古月横穴、中間市羅漢公園の見学に行った。6 月には、正木喜三郎先生の案内で、格子窓の部屋に納められた郷土館資料を見学し感銘を覚えた。6 月 25 日に相原・田野の分布調査を実施し、記録を報告した。8 月には、福間町の津丸古墳群を福岡教育大学の発掘調査に参加した。9 月 10 日は、牟田尻古墳群の第 2 回目の分布調査を実施、合計 92 基からなる大型群集墳であることを確認した。10 月は、学園祭に伴い須多田ニタ塚古墳の石室の計測を行なった。同時期に福岡教育大学による高向古墳(会所坂)・瀬戸 2 号墳の発掘が行なわれた。田野瀬戸 2 号墳は、私たちが工事中に発見し、福岡教育大学に通報したもので、波多野先生が緊急調査を実施された。10 月 28 日には、相原前方後円墳の墳丘が牧場の拡張で削平された。11 月の学園祭に『古墳宗像』を鎌田の編集で作成した。この時に正木喜三郎先生も見学に来られた。この時期に陵厳寺の高樹山の山頂に登った。12 月には、須多田天降神社古墳にて須

恵器・埴輪を採集した。また、宗像郡遺跡分布調査の一環で、玄海町の分布調査に参加した。この時に、松本　肇・桑野主事・立部住職と出会、私達の高校時代の古墳・遺跡分布図を玄海町に提供した。

昭和 48 年（1973）　昭和 48 年は、1 月に宗像郡遺跡分布調査の一環で津屋崎町の遺跡調査に参加した。津屋崎郷土史会は、調査を委託されており、自主活動の成果を盛り込まれた。私達も高校時代の古墳分布図を会に提供した。前年より研究会に参加していたので、田中が声を掛けてくれた。この時に、田中香苗・北野清美の所属する津屋崎郷土史会の皆さんにお世話になった。2 月には、許斐山城の踏査を行い、保存状況が良いことを知った。ただし、一部に電波塔が設置されていた。3 月 2 日～4 月は、宗像郡遺跡分布調査の一環で宗像町の調査が実施された。宗像町の牧田・尾山・瀧口、教育大学考古班の澤田・高崎・與田・赤星と実施した。宗像町の赤間地区は、福岡教育大学の歴史研究部が自主活動で、分布調査をされたものを提供された。なお、私達も高校時代の古墳・遺跡分布図を宗像町に提供した。分布調査報告書は、昭和 50 年 2 月に刊行された。

なお、東海第五高校旧蔵資料は、下記に報告した。
・花田勝広『宗像考古 1 号』　宗像考古刊行会　1976 年
・花田勝広『宗像考古 2 号』　宗像考古刊行会　1992 年
・花田勝広『宗像考古 6 号』　宗像考古刊行会　ＣＤ版　1992 年
・花田勝広『宗像考古 7 号』　宗像考古刊行会　ＣＤ版　2008 年
・宗像考古刊行会『東海大学第五高校歴史クラブ考古班の活動記録』　ＣＤ版　2015 年

高校時代は、宗像町三郎丸古墳群(6 基)、相原古墳群(13 基)、福間町井手ノ上古墳群(4 基)や、津丸・久末古墳群(12 基)、玄海町田野瀬戸 1 号墳などの多くの古墳が目の前で、未調査でなくなった。常に無力感を感じたので、余りいい思い出はない。また、大学時代も、津屋崎町宮地団地山麓の古墳群も登録されたはずなのに、調査されず住宅地となっていた。

クラブ顧問の山隈惟美・秋元勇夫先生は、生徒の調査に同行してもらったり、調査の方法や記録の取り方を教わった、よき恩師であった。先生方の導きには、今でも感謝しており、筆者や鎌田の歴史好きが「宗像のために役立てる」のは先生の教えによるものである。よく誤解されるが、筆者が直接宗像に関わるのは、高校・大学時代の 5 年間である。

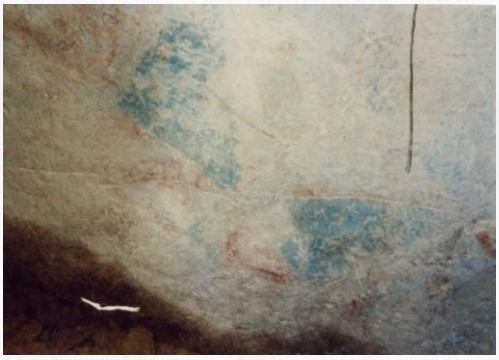
山隈・秋元先生と歴史クラブ（昭和 48 年）

玄海町田野・池田分布調査（昭和 47 年）

相原古墳（前方後円墳　昭和 46 年）

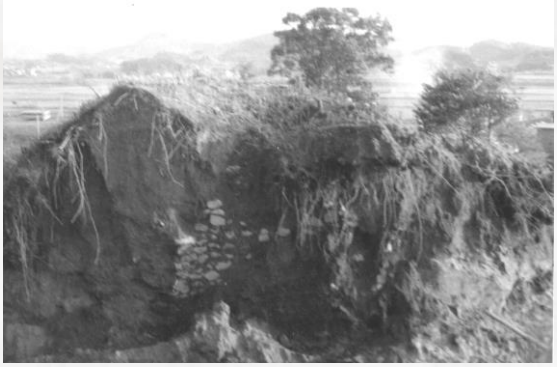
正木先生（文化祭見学）

田野瀬戸 2 号墳（前方後円墳　昭和 47 年）



桜京古墳の連続三角文

桜京古墳（装飾）発見当時



三郎丸 9 号墳（昭和 46 年）

田野上林 2 号墳（前方後円墳）

旧宗像郷土館資料（昭和 47 年）

高校時代以後について

筆者は、昭和 49 年（1973）に城ヶ谷古墳群の調査に参加、昭和 51 年に津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査に参加する。

平成 4 年（1992）から、鎌田と宗像郷土館考古資料の整理を行う。平成 20 年には、田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に 2 人が参加することになる。

以下はその成果である。

・花田勝広「宗像郷土館の研究 1」『古文化談叢』30 号　九州古文化研究会　1994 年
・花田勝広「宗像郷土館の研究 2」『文化財学論集』　奈良大学　1994 年
・花田勝広「宗像郷土館の研究 3」『滋賀考古』15 号　滋賀考古学研究会　　1994 年
・宗像考古刊行会『田中幸夫先生と宗像郷土館―そして田熊石畑遺跡の保存―』　2010 年　ＣＤ版
・花田勝広『宗像の歴史と文化遺産の研究』ＣＤ版　2013 年

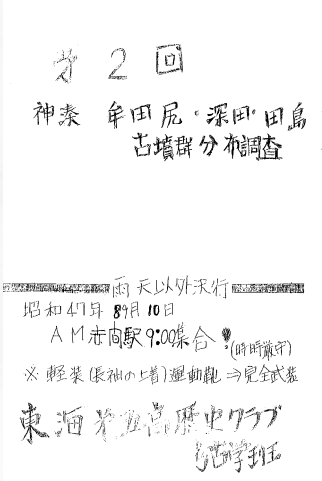
相原古墳（前方後円墳）　昭和 46 年

相原古墳　昭和 46 年

桜京古墳発見当時（昭和 46 年 10 月 23 日）

旧宗像郷土館資料の整理

津丸・久末古墳群の調査　昭和 47 年 8 月

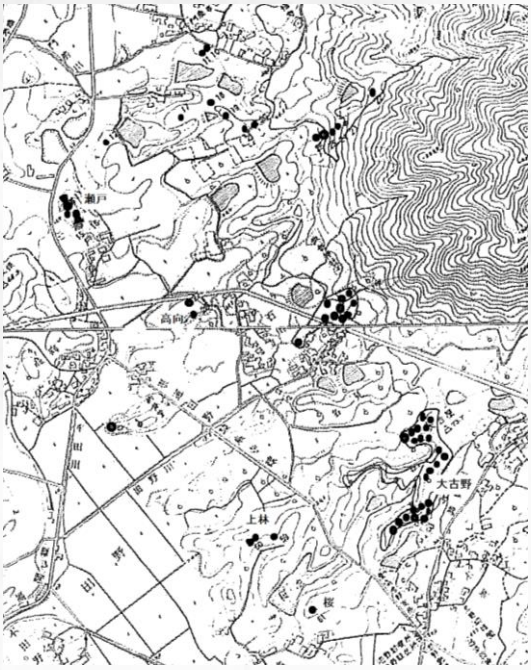


第 2 回
神湊　牟田尻・深田・田島
古墳群分布調査

雨天以外決行
昭和47年 8月10日
AM赤間駅 9:00集合！(時間厳守)
※ 軽装(長袖の上着)運動靴 ⇒見全武装
東海学園高歴史クラブ
見学引率者

牟田尻古墳群分布調査

玄海町牟田尻古墳群（92 基を発見）



玄海町田野地区・古墳分布図

宗像町遺跡分布調査報告より（須恵・河東）

宗像町遺跡分布調査報告より（三郎丸）

歴史クラブ考古班の調査

学年	西暦	元号	月	クラブの活動内容	資料	福岡教育大学の調査
小学5年	1966	昭和41年		牟田尻で古墳発見(鎌田)		教育大学の移転に伴い波多野暁三先生が転居
				相原古墳の見学(花田)		宗像町東郷遺跡群の調査　7月～12月
6年	1967	昭和42年	6月～9月	牟田尻で紡錘車・須恵器出土(鎌田)		
中学3年	1969	昭和44年	10月	宗像郷土館の見学(花田) 東郷高塚で弥生土器採集(花田)	○	
高校1年	1970	昭和45年	4月9日・10日	曲香畑遺跡の発見	○	
			7月	相原古墳群踏査		
			9月20日	須恵・須恵器採集		
			10月8日	考古学研究会結成(鎌田・花田)		
			10月			津屋崎町東郷公園の古墳調査
			11月7・10日	須恵窯跡分布調査		
			11月14日	曲香畑遺跡の分布調査		
			12月	牟田尻・数回調査(鎌田・安部・花田・末続)		
			12月	大島調査		
			12月16日	三郎丸古墳群発見と記録	○	
	1971	昭和46年	3月	下高宮で土器採集		
			3月			三郎丸古墳群の調査(福岡教育大学)
高校2年			4月	牟田尻古墳群見学(山隈・秋元・鎌田・花田)		
			4月	宗像町城ヶ谷古墳群の発見		
			5月	浜宮貝塚調査参加		筑紫野史学会、浜宮貝塚調査
			5月	牟田尻古墳群分布調査 新原・奴山・須多田古墳群分布調査		
			7月	宮地嶽2号墳の大刀発見	○	
			7月	田野で土器採集		
			8月	田熊中尾遺跡で貯蔵穴発見		
			9月			稲元墨巡窯跡の調査(福岡教育大学)
			10月			相原前方後円墳石室調査(福岡教育大学)
			10月23日	桜京装飾古墳の発見(秋元・高岡・鎌田・花田)、石室の計測		
			11月・学園祭	桜京古墳の模型	●	
			12月	多礼で石器採集	○	
			12月15日	奴山百塔図面		
	1972	昭和47年	2月	牟田尻古墳群分布調査(1)　60基確認		
			2月	筑紫古代史研究会(宮地嶽神社)参加		
			3月	池浦古墳よりガラス玉採集		
			3月	津屋崎・宮司分布調査・鉄器採集		
高校3年			4月21～23日	相原13～16号墳記録・消滅		
			4月25日	巡検(教育大・歴史クラブ)	●	巡検(教育大・歴史クラブ)
			5月	大井三倉遺跡で土器採集	○	
			5月	田熊石畑遺跡で土器採集		
			5月3日	奴国展の見学		
			5月5日	立屋敷・城ノ越遺跡見学		
			6月	宗像郷土館資料の見学(鎌田・花田)		津丸古墳群調査
			6月25日	相原・田野・釣山分布調査	●	
			8月	津丸古墳群調査参加		
			9月10日	牟田尻分布調査(2回)　92基を確認 (1班・北側、2班・南限確認)	●	
			10月	須多田ニタ塚古墳実測	○	
			10月	玄海町高向古墳の調査(福岡教育大学)		玄海町高向・会所坂古墳の調査(福岡教育大学)
			10月	玄海町瀬戸古墳の不時発見		玄海町瀬戸古墳の調査
			10月28日	相原前方後円墳の墳丘消滅		
			10月22日	須多田天降神社古墳で埴輪・須恵器の採集	○	
			11月	学園祭(正木喜三郎先生が来る)		
			12月	新原・奴山・須多田古墳群分布調査		
			12月	玄海町分布調査に参加(花田・鎌田)		
	1973	昭和48年	1月	津屋崎町分布調査に参加、津屋崎郷土史会が実施(花田・鎌田)		
			2月16日	許斐山城調査		
			2月18日	遠賀町鬼津横穴		
			3月2日～4月2日	宗像町分布調査に参加(花田・鎌田)		宗像町分布調査に参加(沢田・高崎・奥田・赤星・)
			3月	大井三倉遺跡で石包丁採集、久戸で土器採集	○	
大学1年	1974	昭和49年	3月	宗像町城ヶ谷古墳群参加(花田)		宗像町城ヶ谷古墳群の調査　3月～10月
2年			8月			津丸・久末古墳群報告書の刊行
			10月			瀬戸古墳の調査(福岡教育大学)
3年		昭和50年	3月	宗像町城ヶ谷古墳群の整理		宗像町城ヶ谷古墳群の整理
			8月	宗像郷土館考古資料の実測(花田)		
			10月			波多野退官論集『筑紫史論Ⅲ』
			12月	津屋崎町勝浦峯ノ畑古墳の見学(花田)		
4年	1976	昭和51年	3月	むなかた考古1の発刊(花田)		
			8月	宗像郷土館考古資料の実測(鎌田)		
			8月	津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査参加(花田)		津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査参加
	1977	昭和52年	8月	奈良大考古学研究会の古墳見学		
			12月			城ヶ谷古墳群報告書の刊行
	1978	昭和53年				
	1992	平成4年	8月～	宗像郷土館考古資料の実測開始(花田・鎌田)		
	2008～2009	平成20年～21年		田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に参加(鎌田・花田)		

7. まとめ

(1) 40 年後の宗像の古墳

高校を卒業して 44 年が経ち、今書いていることは、既に昔話になり歴史の一部となる。気付いたことを纏めておきたい。宗像市の遺跡数は、2011 年の分布調査の成果が明らかにされており、古墳総数 2,236 基となる。40 年前に比べるとの 3.5 倍にとなっている。古代の胸形君が予想以上に大きな勢力と考えられることになった。

特に、古墳の調査数が、非常に多いことである。古墳が多い事は、当時の埋葬される被葬者が多いことを示す。筆者は友人達と平成 19 年（2007）に横穴式研究会を関西で実施したが、その際に近畿地方の横穴式石室を集成した。ネットの【横穴式石室集成】を検索参照。

この時の発掘されている古墳数を調べたが、大阪府で 673 基、奈良県で 583 基、滋賀県でも 477 基であった。未報告があるので、各 100 基を加えても、旧宗像郡古墳調査数 866 基は、これら超える調査数である。福岡県行橋市の竹並横穴群は単独で 1,000 基を超えることは有名であったが、宗像もこんなに多いとは思わなかった。数値は、宗像市にご教示頂いた総数 2,236 基、調査数 780 基に福津市の 10 年前の数値を加えて独自に作成してので、概数は福津市分が増加する可能性がある。池ノ上宏の集計によると、総数は 2,830 基とする。

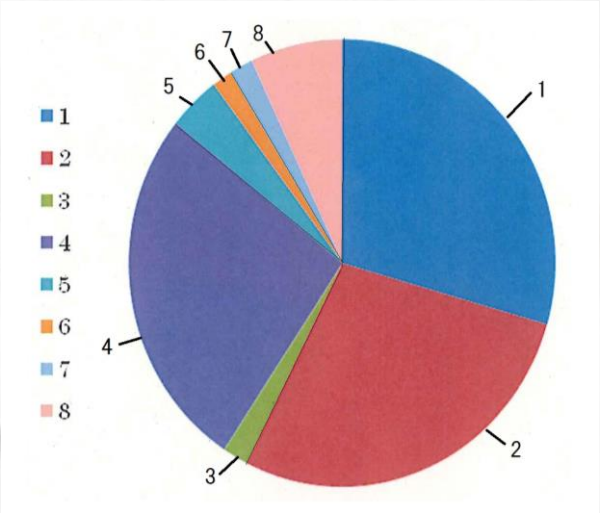
この表を基にすると、旧宗像町の半分の古墳は既に存在しない。旧福間町の 20%は、存在しない。これらは、ＪＲ沿いであり、交通の便が良く、宅地造成に伴う調査である。旧玄海町は、玄海ゴルフ場建設に伴うものが多い。旧津屋崎町は、宮地団地の未調査分を含めるともう少し増加すると思われる。旧宗像郡の古墳総数の 3 分の 1 前後はもう消滅している。この数値は、直視すべきである。全国的に群集墳の多い福岡県の開発が高度成長に伴い過激に進んだことが分かる。

宗像以外の福岡県の地域も同様な現象である。しかし、全国的にみると、関西の方が多くの古墳が残っていることになる。10 年前に調べた時も調査数が、約 550 基であったので気にはなっていたが、非常に大変に驚いた。

前方後円墳は、確実なのが 44 基あり、旧玄海町 9 基、旧津屋崎町 17 基、旧福間町 3 基、旧宗像町 15 基が知られる。旧宗像町の半分弱は、調査・消滅する。旧福間町・旧玄海町が各 1 基となる。旧津屋崎町は半壊 3 基を含めると、ほぼ 17 基が完存する。津屋崎の古墳群は町文化財担当者の池ノ上宏の尽力により、国指定史跡となり、今後も保存される。

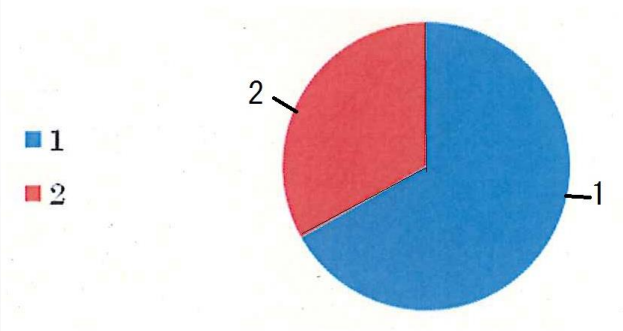
	前方後円墳数			備　考（全壊の古墳）
	現存	半壊	全壊	
旧玄海町	8	0	1	田野瀬戸 2 号墳
旧宗像町	8	1	6	須恵クヒノ浦古墳・城ヶ谷 3 号墳・スベットウ古墳・田久瓜ヶ坂 1 号墳・徳重高田 16 号墳、徳重本村 2 号墳
旧津屋崎町	14	3	0	
旧福間町	2	0	1	手光大人 4 号墳
合計	32	4	8	総合計 44 基

	地区名	古墳数（基）
1	旧宗像町未調査数	767
2	古墳調査数（宗像町）	729
3	古墳調査数（玄海町）	51
4	旧玄海町未調査数	689
5	旧津屋崎町古墳未調査数	102
6	古墳調査数（津屋崎町）	39
7	古墳調査数（福間町）	47
8	旧福間町古墳未調査数	183
	古墳総数（推定）	2,607



宗像の古墳総数と調査

	地区名	古墳数（基）
1	宗像郡古墳未調査数	1,741
2	宗像郡発掘調査数	866
	古墳総数（推定）	2,607



宗像の古墳と残存率

筆者が田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に参加したのも、少なくとも田熊を残さなければ、今後未来はないと感じたからである。沖ノ島や宗像大社だけが、宗像の遺跡ではない。世界遺産の認定後は、多くの遺跡が保存されることを「宗像大神」に祈るだけである。

(2) 40 年後の後悔

赤間宿の御茶屋　黒田藩の宿に設けられた別館で、『筑前国続風土記』に元禄年間に 19 箇所あった。藩主別邸として利用され、唐津街道を利用する大名や幕府役人の宿泊所として利用される。ネットの「唐津街道歴史研究所」で位置が検討されている。幕末に岩倉具視などが五卿落ちの一行が、赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1 月 18 日～2 月 11 日に滞在した所である。

「赤間塾」の中村哲一郎塾長ら 3 人は、小郡市の九州歴史資料館収蔵庫で発見された福岡藩御用大工の本陣の間取り、仕様を記録した古文書をもとに御茶屋の復元図を作成している。下記のものは、提供されたものである。天保 5（1834）年に黒田藩御用大工、林家文書（九州歴史資料館蔵）の指図がある。

明治時代の版籍奉還、廃藩置県後に御茶屋は、どうなったのかよく分からない。

赤間尋常小学校は、明治 18 年 8 月に太政大臣の岩倉具視が、教育令改正で設置されたもので、「当初は赤間本町の米屋を改造したものであったと。まもなく、正式なものが御茶屋の跡に造られた」と出光佐三は記す。さらに、「私どもの尋常小学校は赤間にあったが、明治 28 年に尋常小学枚を卒業して高等小学校に通うようになった。・・・高等小学校の二年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものである。そこで私は林繁蔵君と机をならべて勉強したらしい」とある。

前者は、黒田藩の赤間宿にあった御茶屋の後の建物であったのだろう。後者は位置が分からない。位置は、赤間村に隣接するが、陵厳寺村字寺田となる。

明治 24 年に陵厳寺に校舎を新築し、赤間尋常小学校と改称する。出光の記事と合う。おそらく、御茶屋の後の建物が利用された可能性がある。

明治 42 年に字茶屋辻に位置し、赤間尋常高等小学校と改称する。昭和 16 年に赤間国民学校と改称、昭和 22 年に新学制で赤間小学校となる。

昭和 3 年の『宗像郡史蹟名勝写真帖』に「お茶屋跡」の記事がある。

「当時のお茶屋跡は、赤間小学校の校庭東、小丘上、現在畑となっている。その玄関の扉が今、赤間有吉常松氏宅に保存されているときく、町内の有志の中に此地に記念碑を建立して遺跡を世にあらわさんと計画中である」

と記事の内容が分かる。

占部玄海の知見は、「茶屋の思い出」占部玄海『郷土歴史叢書』第１冊より引用。

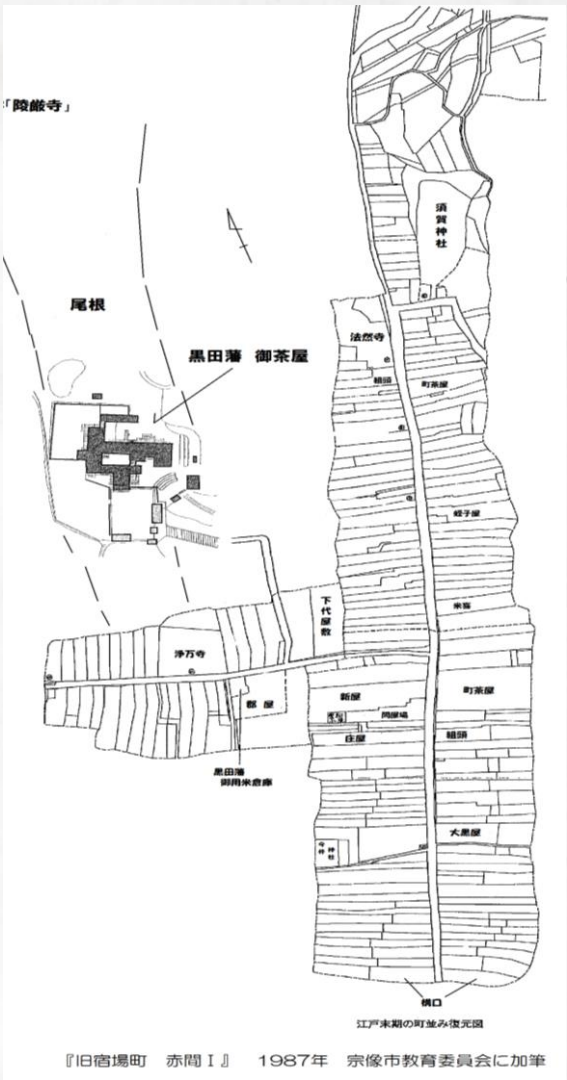
「子供のころ城山中学の運動場は小高い森であった。こんもり茂った雑木の中にとんがり屋根の洋館と純日本風の二階建ての豪邸があった。森の入口には子供三人でやっと抱きかかえるような杉の丸木が三本無造作に並んでいてそれが、茶屋の入口である。その門の一つ一つに管笠が宜しく大きな、それは大きなすり鉢がかぶせてあったのを思い出す。門は厚く戸板で閉ざされ、その奥に誰が住んでいるかも知らなかった。「茶屋の辻」この小字とも茶屋も森も消えてしまった。」

子供ころとあり、昭和９年（1934）年生まれからすると、昭和23年までの事と思われる。航空写真に建物が写る。とんがり屋根の洋館と純日本風の二階建ての豪邸は、個人の住宅で写真にぼんやり写る。御玄関の前の広場は、畑となる。他に、数棟の建物が確認できる。

昭和22年４月22日に赤間・吉武村学校組合東部学校として開校する。昭和26年９月１日に現在の位置に新築の木造建物校舎が建設される。とんがり屋根の洋館と純日本風の二階建ての豪邸は、中学校に取り込まれ昭和49年ごろまで残る。

昭和23年１月19日に米軍の航空撮影が行なわれる。昭和36年９月２日に国土地理院が撮影する。昭和50年３月８日に国土地理院が、カラー写真を撮影する。城山中学校の鉄筋校舎新築造成中の写真で、遺跡が削られる。御茶屋跡は現在の城山中学校のグランドにあたるが、完全に消滅した。御茶屋を失ったことは、今後、赤間宿の文化再生に大きく影響を与えると思う。

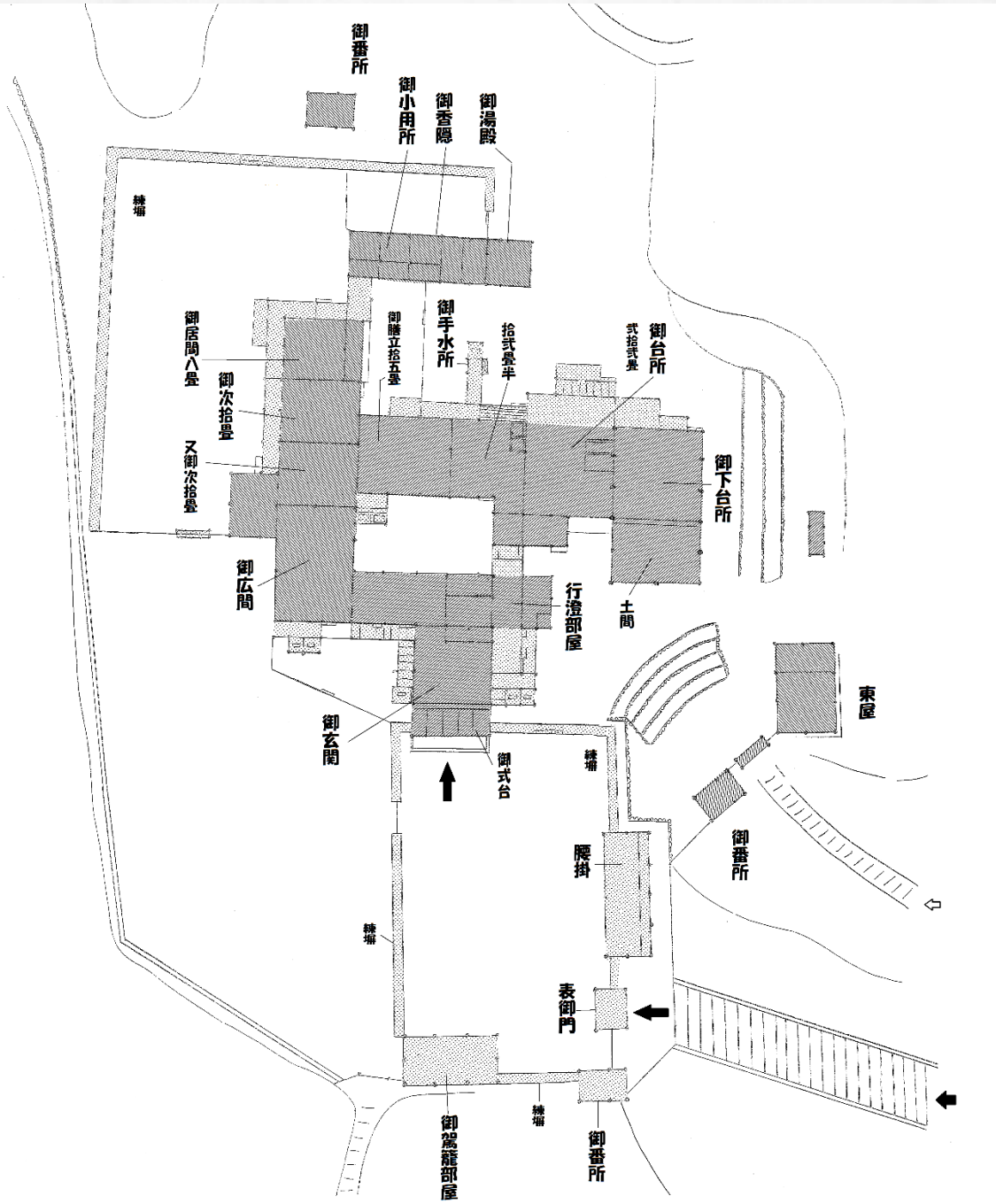
昭和23年１月　赤間撮影　（３Ｄに変更）　写真は拡大のため不明瞭だが、左の森に建物が確認できる。



赤間宿と御茶屋の配置（江戸時代末期の宿）

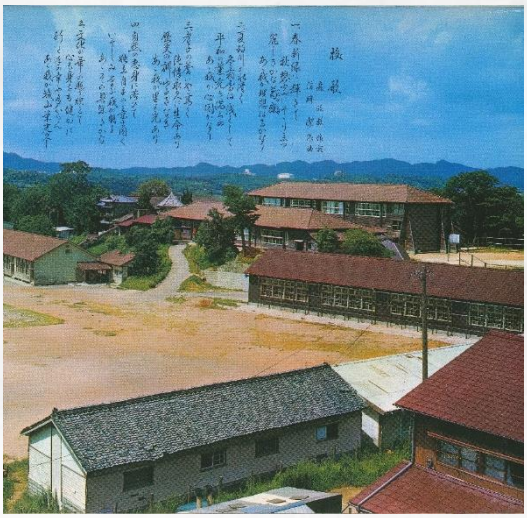
昭和 23 年 1 月の赤間御茶屋　航空写真

赤間・御茶屋造成　航空写真
昭和 50 年（1975）　3 月 8 日撮影



赤間宿・御茶屋の建物配置図(赤間塾提供)

御茶屋は、丘陵上に位置し階段を上り、表御門を入り籠に掛ける建物と、家臣の控える腰掛がある。上級武士は、御玄関で挨拶を交わし、大広間で会見をする。大名や幕府役人は、御居間八畳の部屋が宿泊所となる。建物には、御台所・御手水所・御湯殿などの施設がある。岩倉具視などの公家も御居間八畳(上)・御次間拾畳(中)・御次間拾畳(下)の部屋に宿泊したのだろう。各所に番所があり、練塀で守られる。現存する門部材は、東屋と御番所の間の勝手口に当たる通用門と推察される。

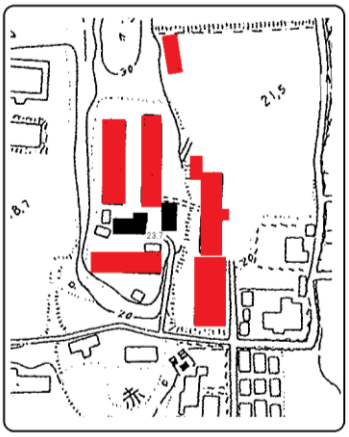


昭和 45 年の城山中学校卒業アルバム

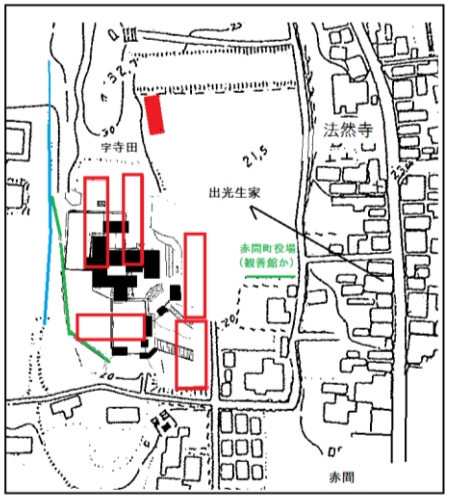
（奥の二つ校舎の位置が、御茶屋の位置となる）

赤間宿・御茶屋の復元図（赤間塾提供）

天保 5 年（1834）の指図（施工図）より復元された建物群、その一部は、戦後まで残っていたようだ。



城山中学校校舎の配置
（昭和36年）



御茶屋と校舎の整合図

当時、昭和 50 年以前には、絵図（指図）の存在は知られていなかった。このころは、埋蔵文化財は、古代を中心に登録され、周知の遺跡となっていた。城郭は、登録されていたが、近世はよっぽどのものでないと対象にならなかった。ふと思う、旧宗像郷土館が廃館とならず、公的に機能していたならば多くの人々に知られ、昭和 48 年の分布調査の台帳に登録され、調査ができたと思う。校舎は建設されていたが木造であり、地下に遺構は残っていたと思う。筆者は、昭和 50 年 3 月には帰省、赤間の福岡教育大学で遺物整理に 2 週間ほど赤間に通っていた。帰りに城山中学校のフエンス越しに造成をボートと見ていた。昼も夜も前を通っていたのに、存在を知っていれば記録を取れたものを。残念でならない。

総括

１．宗像の特性

第 1 題と第 2 題は、一見別々の内容に捉えがちだが、これらは歴史の一連の流れである。早川勇の後進育成が宗像会を生み、教育者が多く発生し教育郡と呼ばれ、会の雑誌を通じた交流が刺激となる。会で育った事業家・官界・学会関係者が、再び後進育成を行う宗像塾が東京に生まれ、戦前に宗像郷土館・郷土会館建設事業で結束した。宗像会本部が移転した宗像神社を核として継続される。戦争で中断した会は、戦後本格的に出光佐三の始めた宗像神社復興事業と共に集結があり、復刊宗像会・再興宗像会が再び結成され、出光の強烈な個性と実行力で、多くの事業の支援や直接執行が行われる。福岡教育大学の移転により、波多野先生と歴史研究部考古班がいち早く、埋蔵文化財の緊急調査にあたり、文化財調査・保存の啓発を行う。波多野・正木先生の活躍により宗像の文化財調査で、宗像高校や東海大学第五高校生徒の歴史クラブに影響を与える。また、復刊宗像会・再興宗像会の世代の郷土史系団体や個人は、城ヶ谷古墳群の保存啓発後、宗像の自然・歴史・文化財保存研究会の結成となる。一方、宗像神社の復興期成会の事業は、沖ノ島調査で成果を上げ、出土品が、神宝館の建設と公開となる。

全く関係ないように思われるが、元は一つであり、戦後に宗像神社系譜（宗像会）と福岡教育大学の系譜があり、これに昭和 56 年以降の行政が影響を与えた系譜の 3 つとなる。三つ目の行政系譜は、いずれ関係者に纏めて戴きたい。

雑誌『宗像』　この雑誌は、考古学の研究資料としては、ほとんど使い道がない。しかし、明治 24 年から大正時代を経て昭和 40 年代のこの地域の歴史を、民衆の立場から記録したものであり、宗像市町村史に記載と評価が欠落していた。宗像の人が歴史好き、宗像神社がなぜ復興できたか、郷土館に多くの浄財が集まったかなど、多くのこの地域の伝統を読み取ることができる。おそらく、高度成長期までの地域像を知るうえで興味ある内容である。宗像の文化財・歴史好きの伝統の根幹にかかわる資料と思い、あえて集成を進めた。

『宗像』は、明治 24 年～昭和 18 年までの約 50 年間続いた雑誌である。戦後再興され、昭和 30～43 年まで発刊された。184 冊の冊子は、宗像の人・文化の地域的気質・特性を窺う上で興味のある雑誌である。今後の文化財理解の啓発資料となると思う。

特に、戦前に伊東尾四郎が『宗像郡誌』と『福岡県史』を並行して無理してなぜ全三巻を編纂されたか。宗像は教育熱心な土地柄とは。宗像神社の信仰心が強い、宗像の心一つである一体感の理由。なぜ、世界遺産の基盤をつくった出光佐三があれほど、神社の復興に執着したのか。出光家の人々が宗像の地へ経済的・人的支援をいとまなかったのは何故か。宗像郷土館建設に寄附金があれほど集まった理由、戦後の再興宗像の雑誌が影響を与えた上妻国雄、吉武謹一、田中香苗、安川浄生、日並文夫、占

部玄海、安部郁朗、小方正人などの人々。私達から見たかっての年寄（第 3 世代）が自費出版までもして、なぜ郷土史研究に熱心だったのか。すぐに思いつく事例は、明治から発刊されたこの雑誌の気風が影響を与えたものである。この雑誌は、先人の活躍を記録したものであるが、多くのヒントがあるのだろう。もっと早い時期に、一般の多くの方が知られれば、今と違う宗像地域の構築が可能であつたと思う。過去の人々の思想が、現代に継承されることは何か。当時、郡単位での組織で 50 年近く続いたものは少なく、九州でも個性の強い一種独特の世界であると。筆者も全体像を初めて知った。

２．文化財の調査・啓発の歴史

雑誌『宗像』の集成を行い、その内容を読めるようにした。その中で、明治時代より 50 年以上も続いた宗像郡の同胞雑誌を読んでいる内に、この地域の独自性を知ることになった。雑誌『宗像』は、全国でも最も古く長く続いた地方雑誌である。筆者の関心に沿って、文化財理解・啓発を時系列でまとめてみた。

(1) 明治 24 年～昭和 19 年　第一波

明治 24 年、東京に在住する宗像郡出身者の間で、宗像郷友会が結成、雑誌『郷友雑誌』が発行されたが、その後『宗像』と名を変え会誌を媒介として大阪・福岡・北九州・飯塚等の各市をはじめ、海外（アメリカ）でも結成されるようになり、会員数は 1,200 人を越えた。宗像会は雑誌から機関紙へ変貌した『宗像』を通じ、会員及び宗像大社との連携をはかるとともに、新知識の取得や切磋研磨を目的としている。宗像会の変遷を概観すると、まず東京宗像会で発刊した会誌「宗像』は、在京の学生が輪番幹事になって編集にあたり、毎年 4 回発行して昭和 10 年に至る間に既に 144 号まで発行している。東京本部は、大正末年の関東大震災で被災したにも関わらず、昭和 10 年まで宗像塾の学生が編集・発刊した。昭和 11 年には、本部を宗像神社に移して敏腕編集長の宗像辰美・石田和吉により発刊がなされた。このころから時局の影響を受け、会誌はつい漸次遅延し、遂に自然休刊の止むなきに至った。

雑誌『宗像』に歴史関連記事を書いたのが、伊東尾四郎（福岡県立図書館初代館長）である。彼は、当初の発起人で、その件数は、27 篇あり、彼が宗像の歴史啓発の嚆矢であり第一人者である。昭和 5 年ごろに『宗像郡誌』の執筆を任されたのは、経験豊富と宗像会幹部であった為である。明治 30 年に『宗像郡誌』の必要性を説いたのが、伊東新であった。早くして逝去されたのは残念であった。昭和 12 年に江戸時代の百姓をまとめた脇野磐（八並村）は、自宅の古文書を纏め、優れた地域研究である。

昭和 13 年に宗像高等女学校内に建設された宗像郷土館は、当時女学校に奉職されていた田中幸夫の尽力と神郡宗像に誇りをもつ郡民により創設された。郡民の浄財の寄附は、全国の宗像会を通じて行われた。この間、田中幸夫の『宗像の旅』『胷形』、『宗像郷土読本』、田中政喜の『神郡宗像郷土史』が刊行される。当時、伊東が専門書の『宗像郡誌』、田中幸夫が郷土館建設と普及本のベストセラーと

なった『宗像の旅』を執筆した。沖ノ島の調査は、江藤正澄の「沖津島紀行」、柴田常恵の「沖島の御金蔵」、田中幸夫の「沖ノ島に詣で」、豊元国の遺物調査などがある。昭和 6 年に、桜田勝徳の鐘崎・大島の民俗調査はこの時期のものである。昭和 17 年、出光佐三を会長に宗像神社復興期成会が結成される。

（2）昭和 20 年～昭和 28 年

宗像郷土館の廃館状態により、歴史啓発施設の消滅となる。この施設が存続しなかつたため、高度成長期の開発に文化財への理解が大幅に遅れ、多くの遺跡を失うことになる。このことは前述した。しかし、宗像神社復興期成会の事業が着実に進む。この間に、野間吉夫の鐘崎海女の民俗調査が特記される。

（3）昭和 29 年～昭和 54 年

宗像神社復興期成会の事業が本格化し、高宮祭場の買収・整備、宝物館の完成が上げられる。宝物館の完成により、宗像の重要資料が保管・管理・展示される。小嶋鉦作よる戦後に進められた『宗像神社史』の刊行があり、神社の学術的成果が纏められた。この時、神社の始原に沖ノ島調査が欠かせないので、神域の学術調査が行われ、ヤマト政権による国家的祭祀が明らかになった。その成果は、『沖ノ島』『続沖ノ島』『宗像沖ノ島』として刊行され、併せて『宗像大社昭和造営誌』も纏められた。これらの成果に基づいて、境内地内の買収、社殿の整備、重要文化財本殿・拝殿の保存修理が行われ、遷宮大祭でピークに達した。この頃、宗像・沖ノ島出土品は全国で「海の正倉院　沖ノ島展」で一般公開が実施された。出光佐三の諦めない復興への行動力が際立っている。復興期成会は、氏子・信者も多いが、戦前からの宗像会がその精神的な母体であったことを忘れてはならない。

戦後、昭和 30 年、中野正之によって、復刊記念号雑誌『宗像』が発行された。昭和 38 年には、宗像会の会則を基として、再興宗像会が発足した。その翌 39 年～昭和 43 年までに 19 号が発刊される。宗像の人・文化の地域的気質・特性を窺う上で、興味のある雑誌である。注目されるのは、戦後も元軍人の顕彰もあり、以外と思ったが、明治時代から出光万兵衛・伊豆凡夫らは、宗像塾の学生達の面倒や良き相談相手となっている。旧軍人より、「宗像」の同胞が重視された。

この雑誌に歴史関連記事が多く収録された。そのメンバーは、上妻国雄・松崎武俊・安部郁郎・田中嘉三などである。戦前に宗像会の雑誌編集を行ったこともある古野清人は、『農耕儀礼の研究－筑前宗像における調査－』を地域の記録として刊行された。普及本として、安川浄生の『宗像の歴史散歩』が刊行される。宗像で最も多く読まれる普及本である。昭和 46 年に津屋崎郷土史研究会が田中香苗によって結成される。また、松崎武俊・尾山清などの古文書を読む会が結成される。

この時期は、宗像市日の里団地造成に伴う 218 万㎡の開発にかかる調査、自由ヶ丘団地の開発など住宅開発の徴候がみられる。昭和 45 年以降、福岡教育大学の波多野睦三による開発に伴う事前調査が

行われる。同大学歴史研究部考古学班も発掘調査を実施する傍ら、宗像郡内の分布調査を精力的に行った。分布調査による基礎的作業が遺跡保存の前提という路線へ意向し、城ヶ谷古墳群以降、主たる発掘調査への組織的参加を行っていない。昭和 50 年以降は、稲元古墳群の調査に代表される大規模開発が本格化しはじめた段階で清田ヶ浦・相原・久戸古墳群等の調査が目白押しとなる。県道建設に伴って、勝浦峯ノ畑・井ノ浦・新原奴山 1 号墳等の前方後円墳が調査された。次第に宗像氏の奥津城の一角も明らかになった。この時期に、宗像神社境内（昭和 46 年）、装飾古墳である桜京古墳（昭和 51 年）に国指定史跡となる。

（4）昭和 55 年～平成 15 年　第二波

宗像神社復興期成会の一連の復興事業が終わり、神宝館の開館により、沖ノ島の国宝が身近に見学できるようになる。宗像地域の自然・歴史系団体が集結し、宗像の自然・歴史・文化財保存研究会が結成された。田村圓澄を会長に、吉武謹一・田中香苗・上田年見・松崎武俊・尾山　清などの、個性的な面々の活動が、会誌を通じて精力的に「ふるさと宗像」の学習が始まる。そして、博物館の設置を求められた。後半期には、むなかた歴史を学ぼう会（会長　平松秋子）が結成され、講座・学習会が続けられた。20 周年誌によると、約 370 回の講座・見学会を実施された。小方正人が中心に宗像生活史研究会は、『宗像むかしの生活研究』を刊行され、土地の民俗伝承を詳細に纏められた。土地の伝承も含まれており、考古学の分野も活かせると考える。占部玄海は、宗像郷土資料を『郷土歴史資料叢書 1～6』として纏め、郷土史の集大成を発刊する。宗像会系の最後の郷土史である。中村正夫の『宗像郡地誌綜覧』は、『宗像市史』近世編の補足するために、自費で出版される。古野清人に続く学者の故郷を思う出版である。日並文夫による『鐘崎漁業誌』は、鐘崎の歴史を知る上で欠かせない。

宗像市の大規模開発が本格化するに伴って、文化財行政職員が配置される。その後の経過については、原俊一の「宗像の考古学」や『宗像市史』に詳しく纏められている。

文化財行政職員は、宗像市（1981 年）・津屋崎町（1989 年）・福間町（1990 年）・玄海町に配置され、宗像市町の大規模開発に伴う埋蔵文化財調査や、農業基盤整備・圃場整備事業に伴う発掘調査が実施され、遺跡の現地見学会が数多く開催された。調査も、弥生集落・前方後円墳・群集墳・須恵器窯、奈良～鎌倉時代の集落・墓址と全時代を通じた遺構群と遺物が出土し、宗像の全体像が把握される段階である。その中で、「海人シンポジウム」の開催、『宗像の遺跡をたずねて』などが刊行され、海人文化を理解が深まった。『宗像市史』が刊行され、地域の通史が明らかとなる。注目すべきは、昭和 62～63 年の『旧宿場町赤間』の記録調査は当時の建物群が詳細にわかる。

（5）平成 16 年～平成 27 年　第三波

平成 17 年に多くの前方後円墳が含くむ津屋崎古墳群が国指定史跡指定となる。さらに、国指定史跡の宗像神社境内である沖ノ島遺跡を中心に津屋崎古墳群、桜京古墳、東郷高塚古墳に田熊石畑遺跡を

追加し、「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」として、世界遺産の暫定リストに登録される。福岡県・宗像市・福津市を中心に世界遺産登録のために、尽力がなされる。この中で、沖ノ島国宝展、田熊石畑遺跡の国史跡指定に伴う田熊石畑遺跡とムナカタ展などが開催される。むなかた電子博物館は、ネットを活用・情報を俊敏に伝える取り組みがなされ、紀要 1～6 号刊行される。宗像の情報を世界に伝える広報の窓口となる。

この時期の特徴としては、『津屋崎町史』・『福間町史』などの刊行で、宗像地域の市町村史が全てまとまり、資料編と共に、容易に一般の方々にも歴史の学習が容易になった事があげられる。

さらに、桑田和明の『中世筑前国宗像氏と宗像社』・正木喜三郎の『古代・中世 宗像の歴史と伝承』、河窪奈津子の尽力した『宗像大社文書』の出版などの専門書が刊行され、基礎研究も蓄積がなされる。平成 23 年実施の九州前方後円墳研究会の『宗像地域の古墳』は、原俊一を中心とた古墳資料の集成が行なわれ、宗像の実相が明らかになった。特記されるのは、国指定史跡田熊石畑遺跡の保存は、市民の手によるものであり、市民参加主導の歴史学習が進んだ結果とみられる。宗像市の講座等に見られる息の長い地味な講座が、その基盤にあることは間違いなかろう。

今後、むなかた歴史を学ぼう会・福津郷土史研究会は、地域歴史学習と啓発を進める役割を果たすのであろう。宗像の歴史観光ボランティアの会の結成は、身近な遺跡の理解が深まっている。福岡教育大学の公開講座は、歴史に関心のある人々へ、専門的学習を促し、変化の起爆剤となっている。平成 24 年度の「海の道　むなかた館」の開館は、宗像文化を通史的に知る施設と歴史の啓発拠点になっている。平成 24 年 8 月には、市民団体の「赤間塾」、中村哲一郎を中心に実行委員会よる「大赤間展」では御茶屋・幕末の偉人らを紹介している。近年は、「街道の駅　赤馬館」の開館、岩熊寛を中心とした畦町宿の再生イベントが実施される。

書籍は、むなかた歴史を学ぼう会の平松秋子の『八所宮のおくんち』、安部照生の『福崎ものがたり』、吉村青春の『津屋崎学』、山口浩の『宗像あれこれ』、むなかた歴史を学ぼう会『創立 20 年記念誌』、吉武歴史観光ボランティアの会の『吉武物語』、平等寺伝承行事を伝える会『伝承行事を守り続ける平等寺』などの個人・団体系の出版がある。『福崎ものがたり』は、筆者の集落の歴史である。また、国指定田熊石畑遺跡の開園・イベント、宗像市主催の「邪馬台国とムナカタ国」の講演会などで、沖ノ島以外の文化財の理解が深まっている。田熊石畑遺跡は、田中幸夫先生が宗像を去り、76 年を経て復活し、宗像の歴史の基盤となり、新たな歴史の再出発となっている。

宗像でのかつてない第三波は、世界遺産の推進と共に、地域の文化財、文化遺産の認識と地域再生へ続くのだろう。明治 24 年の『郷友』『宗像』から流れる文化財への関心は、断絶はあったが変容しながらも、風土と共に地域的気質として受け継がれている。なお、宗像の世界遺産は、ホームページを参照されたい。

「宗像はなぜ歴史好きが再生産されるか。」

明治の歴史研究・啓発は、伊東尾四郎の第 1・2 世代（宗像会）、第 3 世代（復刊・再興宗像会）、筆者の属する第 4 世代となる。元祖は、早川勇の人徳による雑誌『宗像』の出現が、宗像の歴史好きを発生させ、会誌を通じて地域ナショナリズムによる出版物が現れ、伊東尾四郎・田中幸夫の 1・2 世代の影響が次ぎの 3 世代に引き継がれる。下記の表で最も多いのが、宗像会系譜の個人著作・団体ものである。ここが宗像の地域史の特徴である。行政刊行物を敢えて除いたのは、この地域の自力を知るためである。興味深い特徴は、「宗像のために」と自費刊行されたものが多く、第 3 世代が後進のための宗像会の精神が続いている事が分かる。特に、教員関係者の出版が多い。つまり、10 年間単位でみても、普及本により、歴史知識の再生産が行われる。これに、出光兄弟による復興された宗像大社・鎮国寺の保存された景観、行政の文化財調査・啓発活動・イベントが加わるためであろう。

元号	西暦	宗像会	宗像神社復興期成会	宗像沖ノ島の調査	研究書・啓発書	津屋崎郷土史研究会（福津）	宗像の自然・歴史・文化財保存研究会	むなかた歴史を学ぼう会	世界遺産	文化財への理解	学者・地域研究者
明治24年	1892	宗像郷友会の結成		江藤正澄「沖津島紀行」	雑誌 宗像の刊行 伊東尾四郎氏の歴史記事『雑誌宗像』						伊東尾四郎
（省略）											伊東 新
昭和2年	1927			柴田常恵「沖島の御金蔵」							江藤正澄 柴田常恵
	1929										原田淑人
昭和5年	1930									第一波 宗像会の組織力	
	1931	事務局宗像			伊東尾四郎『宗像郡誌』中巻						宗像辰美 桜田勝徳
	1932										
	1933	50年続いた雑誌で全国的最古の地方雑			伊東尾四郎『宗像郡誌』下巻						
	1934										伊東尾四郎
昭和10年	1935			田中幸夫「沖ノ島に詣でて」							豊 元国
	1936				田中幸夫『宗像の旅』						田中幸夫
	1937		出光佐三氏を会長に結成								出光佐三
	1938	宗像郷土館開館			田中政喜 『宗像郷土読本』 田中幸夫 『むな形』						田中政喜
	1939										脇野 毅
昭和15年	1940			豊 元国の遺物調査	古野清人「筑前宗像の宮座資料」						古野清人
	1941	宗像163号									大場磐雄
	1942										梅原末治
	1943										赤間太郎
	1944										
	1944				伊東尾四郎 『宗像郡誌』上巻						
昭和20年	1945	終戦	中断								
	1946										
	1947										
	1948										
	1949										
昭和25年	1950										
	1951										森貞次郎
	1952		用地買収								三野 章
	1953										野間吉夫
	1954			調査開始							
昭和30年	1955	中野氏、復刊	高宮の整備								
	1956										
	1957										
	1958			『沖ノ島 』							鏡山 猛
	1959										
昭和35年	1960										
	1961		『宗像神社史』上巻	『続沖ノ島 』							
	1962										小嶋鉦作
	1963										
	1964	再興・宗像を発刊。	宝物館の開館							第二波 沖ノ島効果	上妻国雄
昭和40年	1965										松崎武俊
	1966		『宗像神社史』下巻								安部都郎
	1967				鏡山 猛 歴史と風土『筑紫』 宮地嶽神社『国宝 宮地嶽古墳出土品修理報告』						田中嘉三
	1968										
	1969					田中香苗氏を会長に結成					田中香苗
昭和45年	1970				古野清人『農耕儀礼の研究―筑前宗像における調査』						古野清人
	1971		史跡指定 遷宮祭	『海の正倉院 沖ノ島』							
	1972					古墳分布調査			宗像神社境内の史跡指定		出光佐三
	1973										
	1974										波多野晥三
昭和50年	1975										
	1976		『宗像大社昭和造営誌』						桜京古墳史跡指定		
	1977										中村修身
	1978										安川浄生
	1979			『宗像沖ノ島』	安川浄生『宗像の歴史散歩』				文化財担当職員の宗像配置		岡崎 敬
昭和55年	1980		神宝館の開館				結成。吉武謹一氏を事務局長の活躍				松本 肇
	1981									歴史グループの連合	吉武謹一
	1982										田村圓澄
	1983										河窪奈津子
	1984				『宗像高校 郷土資料目録』						小川 賢
昭和60年	1985				占部 玄海『郷土歴史資料叢書 1～5巻				宗像市町の大規模開発に伴う埋蔵文化財調査。『宗像の遺跡をたずねて』		占部玄海
	1986										尾山 清
	1987										
	1988				小田富士雄編 『沖ノ島と古代祭祀』						小田富士雄
平成元年	1989										
	1990							結成。平松秋子氏を会長			
	1991			佐田 茂『沖ノ島祭祀遺跡』					海人シンポジウム1～3		佐田 茂
	1992				『筑前鐘崎漁業誌』						日並文夫
平成5年	1993		『宗像大社文書 第1巻 』		楠本 正『玄界の漁撈民俗』						上田年見
	1994										楠本 正
	1995				宗像市町史の刊行						川添昭二
	1996										田中正日子
	1997				中村正夫『宗像郡地誌綜覧』				農業基盤整備・圃場整備事業に伴う発掘調査		中村正夫
平成10年	1998										亀井輝一郎
	1999		『宗像大社文書 第2巻 』					約370回の講座・見学会を実施。			正木喜三郎
	2000										
	2001										
	2002										
平成15年	2003				桑田和明『中世筑前国宗像氏と宗像社』・正木喜三郎『古代・中世 宗像の歴史と伝承』						
	2004										桑田和明
	2005			弓場紀知『沖ノ島 古代祭祀とシルクロードの終着地』					津屋崎古墳群の史跡指定		石井 忠
	2006										弓場紀知
	2007				宗像市町史の刊行				沖ノ島展 『宗像遺産』・暫定リスト	第三波 市民参加	
平成20年	2008							田熊石畑遺跡の保存 20周年記念誌	田熊石畑遺跡史跡指定 田熊石畑遺跡とムナカタ展		小田富士雄
	2009		『宗像大社文書 第3巻 』	『古代の福岡』海鳥社	宗像電子博物館	吉原文書の調査 『福津の絵馬』 庚辰塔の調査					伊津信之介
	2010										藤野正人
	2011				『続宗像郡誌』の集成						
	2012								むなかた館の開館		矢田公子
	2013										
	2014										平松秋子
平成27年	2015								田熊石畑遺跡の開園		

	宗像会系（在地系）	研究系	団体系
明治・ 大正年間	**石田和吉**『むなかた』、**野口美造**『宗像の歴史』・『宗像遺徳集』、『貞婦はん・孝女こや』・『孝子正助伝』、『宗像郡郷土史』		
昭和元年～ 昭和 10 年	**幡掛正木**『沖津宮』		**宗像郡教育会**『宗像郡史跡名勝写真帖』
昭和 11～20 年	**田中幸夫**『宗像の旅』・『胷形』、**田中政喜**『神郡宗像郷土読本』 **福原軍造**『宗像郷土史』	**伊東尾四郎**『宗像郡誌・上・中・下』	
昭和 21～30 年	**田中嘉三**『増福寺始末記』、佐々木滋寛『純孝武丸正助』	**伊東尾四郎**『福岡県史料叢書』	
昭和 31～40 年	**出光佐三**『人間尊重 50 年』、**瀧口雪雄**『武丸正助さん』	**小嶋鉦作**『宗像神社史』	
昭和 41～50 年	**上妻国雄**『郷土の民話』・『宗像人物風土記』・『続宗像人物風土記』・『続々宗像人物風土記』・『宗像路散歩』・『宗像伝説風土記』，**安川浄生**『大島郷土誌』、**田中嘉三**『孔太寺神社考』、檜垣元吉『早川勇伝』、**安部正弘**『東郷公園と私』	波多野睦三『筑紫史論 3 輯』、**古野清人**『筑前宗像の農耕儀礼』、木村俊隆『宗像郡本木村定札制』、瀧口凡夫『創造と可能の挑戦』	**宗像大社**『許斐山物語』・『宗像史話伝説』
昭和 51～63 年	**上妻国雄**『宗像風物誌』・『福間の又べえ』、**田中香苗**『津屋崎風土記』、**松崎武俊**『部落解放史発掘―追悼集』、**安川浄生**『筑前の流人』・『宗像歴史散歩』・『安部宗任』・『宗像の歴史』、**占部玄海**『宗像高校郷土資料目録図版』、『郷土歴史資料叢書１～３』、**井上隆三郎**『筑前宗像の定札』、**立部瑞祐**『心の旅路』	石井忠『漂着物の博物誌』、原田大六『阿弥陀仏教の謎』	**正助翁遺徳顕彰会**『筑前宗像郡孝子武丸正助伝拾遺』、**宗像大社**『むなかたさま』・『宗像 20 年の歩み』、**壱岐貞実ほか**『宗像高校 60 年誌』※『福岡県地誌全誌二』
平成元年～10 年	**上田年見**『ふるさと文化財探訪記』・『福間のあのころ』、**日並文夫**『鐘崎漁業誌』、**吉武謹一**『玄海町史話伝説』、**占部玄海**『郷土歴史資料叢書４～５』、**高山勉**『たった 1460 日されど 1460 日』、木村俊隆『宗像の塩浜』、**日並文夫**『玄海町の民俗資料集』	**中村正夫**『宗像郡地誌綜覧』、石井忠『海辺の民俗学』、楠本正『玄界の漁撈民俗』、秀村選三・西村政子・平嶋浩子・瀬戸美津子『筑前国宗像郡吉田家家事日記帳』、**宗像大社文書編纂刊行委員会**『宗像大社文書 』	宗像を知る会『宗像ふるさと紀行』、**宗像の自然歴史文化保存研究会**『新抄宗像記・同追考』・**宗像生活史聞き書き研究会**『宗像むかしの生活研究』、**日並文夫ほか**『鐘崎漁業誌』
平成 11～20 年	吉村青春『津屋崎センゲン』	正木喜三郎『古代中世宗像の歴史と伝承』、	**福津郷土史会**『福津の絵馬』、許斐山愛好会『風と森

	この時期は、市町村史に宗像会系が携わる。	桑田和明『筑前宗像氏と宗像社』、**宗像大社文書編纂刊行委員会**『宗像大社文書 』	との物語』、むなかた歴史を学ぼう会『創立 20 年記念誌』
平成 21～27 年	平松秋子『八所宮のおくんち』、**安部照生**『福崎ものがたり』、吉村青春『津屋崎学』、山口浩『宗像あれこれ』・『ふるさと三郎丸のすがた』		吉武歴史観光ボランティア『吉武物語』、平等寺伝承行事を伝える会『伝承行事を守り続ける平等寺』、**福津郷土史会**『吉原文書追加目録』、津屋崎祇園山笠会『津屋崎祇園山笠 300 年記念誌』
主な単行本著作者（個人・団体）を集め、行政刊行物・沖ノ島関連を除く。 ※参考　**太字**は、宗像会会員・系が関与する。知見するもののみ。			

３．結語

一見、自然以外に何も恵まれていない宗像地域は、江戸時代以降の宗像の特産物は、ご承知のとおり、「教員・鶏の玉子」が多いのがこの郡の名物であった。明治時代に宗像会の結成により人材育成、「大きくなあれ」を合言葉に人材が育つ。宗像会は、宗像と東京を直接繋ぎ、明治の気風を強く持った雑誌『宗像』を通じて、郷友の交友と新知識の取得や切磋研磨を目的としている団体であった。その広がりは、国内を超えてアメリカ宗像会まで結成される。全国的に見ても、50 年以上続く地方雑誌は珍しく、九州の中でも同胞意識の強い特殊な地域であった。戦後も高度成長期まで引き継がれた。

滝口凡夫は、かつての宗像郡は「自作農が圧倒的に多く、地主―小作農の関係は小規模、沿岸漁業は、鐘崎、勝浦、津屋崎を基地として行われている。人情は純朴であり、敬神崇祖の念が強い。婚姻関係も郡内にとどまり、宗像神社の氏子としての一体感、相互扶養の気風も強い」とされる。そして、郡民の共通の性格、特徴を、「自作農的な土くささ、頑固一徹さ、それでいて温かい人間味といったものを感じられないだろうか」と評している。

しかし、近年はこの地を選んで住んだ新興住宅の人々は、宗像への関心が強く、積極性・行動力があるが、宗像会崩壊後の在地系の人々は、保守性が強いと見ることもでき、滝口の評した面影は薄らいだ。これは、全国的に地域の特徴として、同じ傾向である。昭和 55 年を境に人口も在地系と新興系の人口比は、1 対 2 で既に逆転し、新しい気風が入っており、今後が楽しみである。現在の人口は、15 万 5 千人（宗像市・福津市）となる。

子供のころは、宗像神社の放生会（秋季大祭）に参るのが、1 年のうち最高の楽しみであった。宗像以外の人々は不思議と思われるかも知れないが、結婚式を宗像大社で挙げる人々が今でも多い。氏神が身近に感じられる土地柄である。それでも、戦前は「裏伊勢」と自称し、戦後は「田島さま」、復興後は「むなかたさま」となり、時代の要請と共に変容する。したがって、時代の権力の関与により神社祭祀も左右され、昔のままでない。

ところで、出光佐三が、宗像神社復興に人的・金銭的支援を実施したのに、“境内に自分の記念碑的なものをのこすな” が気になっていたが、これは、宗像神社復興期成会の母体が宗像会であり、戦後も出光兄弟は「宗像人・宗像会の一員」とする意識が強いと思う。

早川勇の人徳から、宗像会が生まれ、有能な人材を輩出し、出光も一員と思う意識が強く、自らの事業理念とも合致し、宗像神社の復興で「一生の念願」とする発言となったと思う。

遺言に、自分の銅像・顕彰碑・施設などを建設するなと伝え聞くが、宗像会の一員意識によるものと考える。

宗像への支援は、宗像神社の復興・福岡教育大学誘致・宗像高校 50 周年事業と体育館への直接的な寄附が、判明するだけでも当時の 6 億円以上である。現在の価値の 2〜3 倍となろうか。惜しみない多額の寄附金は、福岡教育大学の学生奨学金制度、教官への研究助成以外に、城山中学校の旧体育館、旧赤間小学校の図書館、宗像神社宝物館・神宝館、四塚会館建設、鎮国寺の復興、福津市の東郷神社など施設、さらに、出光佐三が自ら買い集め、神社に寄附奉納した中世の「宗像神社文書」なども多数あり、正確な寄附額はわからない。

目的は、宗像神社の復興と教育施設の充実・人材育成の為と考えられる。

佐三の逝去後も、宗像大社平成御造営奉賛者の銅版には、出光興産並び関係会社、同販売店有志で 7 億円ほど寄附金がある。まだ、航海安全の神、宗像大社への支援は続く。

出光の企業理念とされるものは、宗像の風土と教育、宗像会の交流によったものが、基層部分のような気がする。出光は、これらを独自に特化させ、戦後に宗像地域を引っ張っていく。よく、宗像の子といわれる由縁である。

さらに佐三は、晩年に事業の芸術化を目指し、出光の事業はかくあるべきとした。

「真の芸術と真の事業とは、その美、その創作、その努力において相一致し、その尊厳と強さにおいて相譲らざるものである。美の創作に対して努力するわれわれが、事業の芸術化を信じ、これを主張するようになったのも当然の結果である。出光の事業は誰が見ても美しからねばならぬ。醜悪なる、単なる金儲けであってはならぬ」

出光の事業は、「誰が見ても美しからねばならぬ」は、今後、宗像が世界遺産登録により、彼の事業が芸術化され「永遠の日本」・「日本人にかえれ」の出光佐三翁の名言ともに「事業の美」として継承されるのだろう。今後も、出光興産の故郷の地として宗像が意識され、宗像大社が航海安全の神として、祭祀と支援が続くのだろう。

筆者は、宗像での彼の事業は、宗像神社の復興が「国家のために尽くす」の核であり、武丸正助翁顕彰が、親孝行・恩が「日本人の持つ互譲互助の精神、恩を知る」などの宗像の農耕社会に由来するものである。合せて、宗像郡にあった健康保険制度のモデルである江戸時代から続く「定札」（じょうれい）の相互互助精神が加味されると思う。福岡教育大学の誘致は、明治時代からの宗像会の教育を核とした人材育成の基盤を、宗像の地に持ってきたと考える。彼は、人間尊重の理念を宗像で体現されたとみる。

最近、「海賊とよばれた男」と再び脚光を浴びるが、筆者は、弟の計助社長が『二つの人生』に「周りから“一匹オオカミ ”というようなことをいわれるので、その語源を外人に調べてもらったら、ローン・ウルフ（一匹オオカミ）とは[集団の力を借りることなく独立独歩、荒野を進んで恐れないような事業家のこと]だそうで、一般に云われるような悪い意味でないことがわかった」と書かれる。こちら方が、的をえているような気がする。

今日の宗像大社の復興は、出光佐三の熱意と尽力である。そして、学園都市の流れは、戦前にその要素があり、現在の教育・文化の振興の特質を規定していると見る。

明治時代以降の 150 年を振り返ると、歴史は常に前代に要因があり、次の時代に変容しながら踏襲される。そして、社会の大きな変革があっても、人の基層意識は変わるものでない。宗像会を詳しく知ることが、今後の展望を知る上で重要と思う。

一方、平成 15 年（2003）に、出光真子『ホワット・ア・うーまんめいど ある映像作家の自伝』の中で娘の真子は、佐三について「徹底した儒教的、家父長的男女観を抱いており、妻及び四人の娘を「女こども」として軽蔑しその自立を否定し人格的に抑圧したと」と語っている。また、彼女は、「宗像から夜汽車で持ってきたのだろう」と厳しい批判が痛烈に書かれる。これは、江戸時代以来の宗像の家父長的男女観を引き継ぐ明治精神を機軸とし、民主化しなかったためであろう。お父さん譲りのストレートな内容である。

出光の人生理念は、明治時代の宗像の価値観を伝えるものであり、出光真子の記事や天皇に対する考え方は、平成の時代には批判される部分もあると思うが、人には一長、一短があるのだろう。

最後に回想を書きながら一文が気になった。『人間尊重 50 年』収録の「私の人生観」である。若者に話した言葉である。

「人生というものは老後にあるのだ。君らが六十ぐらいなって過去を顧みて、過去六十年間だったというだけで、一瞬にすぎない。その間に贅沢をしたとか、いいことをとか、反対に苦しんだとかいうことはたいした問題じゃない。ひと思いで消えてしまう。ところが、老後の一時間、一日というものは実に長い。その長い 1 日、1 ケ月、1 年というものを不愉快な思いをして暮らすか、ああいいこと

をしたと思って暮らすか、これが人生の幸、不幸のきまるところだ。それだから過去は短い、将来は長い、それならば過去にいいことをして将来を楽しめ」

とある。70 歳の時に書かれたものである。出光興産株式会社の『我が 60 年間』第 1～4 巻は、宗像の近代・現代史を知る上で貴重な資料であるが、佐三翁の人生訓を知る上でも興味は尽きない。

本稿は、近現代史を取り扱うために、本人自著、本人に近い方々の書き物を多く引用させていただき、実態が正確になるようにした。書き残された方々に謝意を表する。なお、内容が一面的な捉え方があるかもしれないため、関係者に失礼があったら、御容謝戴きたい。敬称は、偉大な先輩たちであり、失礼とは思ったものの略させて戴いた。

昭和 30 年生まれの筆者は、宗像神社の復興と変化を身近に接することができ、遷宮大祭で厳かに式典に出席する佐三翁を見たことがある。伝説のように語られた彼が、なぜここまで宗像に尽力するのかが、いつも不思議であった。本稿は、余り触れられることのなかった宗像の行動（事業）とその影響を明らかにする事に努めた。

地元の方々に、佐三翁の「宗像の心」が知られ、良い部分を受け継がれることを願望する。今後も出光関連資料を収集して行きたい。

謝辞

作成にあたり、滝口凡夫、出光弘、石田正實、出光昭介、柴田節郎・占部玄海・堤宏の各氏の文章を引用させていただいた。出光興産株式会社には、佐三翁の写真掲載の快諾を戴いた。さらに、井上正文氏には、宗像市商工会、公益法人　宗像青年会議所に『出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年を写真・引用に御配意を戴き、神山義信氏に貴重な写真の提供を頂いた。また、宗像高校四塚会館には、四塚会館収蔵資料を再録させて戴いた。

なお、澤田康夫、桑田和明、鎌田隆徳、山中紀美子の各氏には 40 年前の忘れ行く記憶を思い出してもらい、平松秋子、中村哲一郎、岩熊寛、尾山清、原俊一、白木英敏、山田広幸、耜田雄一、川畑和弘、伊藤美智留の各氏、赤間塾の方々には、資料提供に御協力を戴いた。記して感謝を申し上げる。最後に、本稿をむなかた電子博物館紀要委員会（平井正則委員長）に掲載の快諾を賜り、編集実務の宮川幹平氏には、長文の編集・校正で忍耐強く、御尽力を戴いた。心より深謝を申し上げる。

また、引用原文について、現在では不適切な表現・語句も含まれるが、歴史資料としてそのままとした。なお、市町村名は、当時のものである。ちなみに旧宗像郡は、現在の宗像市（旧宗像町・旧玄海町・旧大島村）、福津市（旧福間町・旧津屋崎町）の 2 市からなる。

（宗像市福崎生まれ、日本考古学協会会員）

出典・参考文献

出光佐三と宗像関連記事の出典一覧

元号	西暦	記　事　内　容	出　典
明治 39	1906	・編集部「会員消息」入会	『宗像』64 号　宗像会
明治 42	1909	・編集部「会員消息」脱会	『宗像』72 号　宗像会
大正 6	1917	・編集部「会員消息」再入会	『宗像』110 号　宗像会
大正 13	1924	・編集部「会員消息」	『宗像』138 号　宗像会
昭和 14	1939	・編集部「郷土特輯」	『宗像』158 号　宗像会
昭和 15	1940	・編集部「出光商会の飛躍」	『宗像』159 号　宗像会
昭和 18	1943	・竹間保史「宗像神社に仕へ奉りて」	『宗像』163 号　宗像会
		・高橋　昇「宗像神社復興計画の趣旨と経過を述べて神郡郷友一般の憤起を望む」	『宗像』163 号　宗像会
		・宗像志江「宗像神社復興期成会の設立」	『宗像』163 号　宗像会
昭和 26	1951	・出光佐三「美しい旅」	『我が 60 年間』第 1 巻
昭和 29	1954	・出光佐三「天災と九州」	
		・出光佐三「水を呑み冷暖自ら知る」	『人間尊重五十年』　春秋社
昭和 30	1955	・出光佐三「宗像族の雄心を」	『宗像　復刊記念号』宗像会
昭和 31	1956	・出光佐三「アメリカを視察して」	『復興　宗像』2 号　宗像会
昭和 35	1960	・出光佐三「心の世界」	『我が 60 年間』第 2 巻
昭和 36	1961	・出光佐三「序」	『宗像神社史』宗像神社復興期成会
		・小島鉦作「後記」	
昭和 37	1962	・出光佐三「宗像神社」	『人間尊重五十年』春秋社 『我が 60 年間』第 2 巻に収録
		・出光佐三「夢」	
		・出光佐三「古稀を迎えて」	
		・出光佐三「仙厓和尚」	
		・出光佐三「虎から兎へ」	『我が 60 年間』第 2 巻
昭和 38	1963	・出光佐三「宗像会に寄す」	『再興　宗像』1 号　宗像会
昭和 39	1964	・出光佐三「年頭所感」	『再興　宗像』2 号　宗像会
		・出光佐三「武丸正助さんの話」	孝聖武丸正助翁顕彰会
昭和 41	1966	・出光佐三「瓦となるな」	『出光オイルダイジェスト』11 号
		・出光佐三「宗像人の使命」	『再興　宗像』8 号　宗像会
		・石田正美「出光丸」	『再興　宗像』14 号　宗像会
		・出光佐三「不思議な宿命」	『我が 60 年間』第 3 巻
		・出光佐三「人間尊重の 50 年の完成は 20 代社員の責任」	
		・出光佐三「こんな大きな船は日本人だけが造れる」	
昭和 42	1967	・出光佐三「仲よくする力」	『我が 60 年間』第 3 巻
		・編集部「早川勇の顕彰碑」	『再興　宗像』第 3 巻　宗像会
		・出光佐三「若い人への遺産相続」－出光丸の竣工-	『我が 60 年間』第 3 巻
昭和 45	1970	・出光佐三「ひとすじの人生」	『我が 60 年間』第 3 巻
昭和 48	1973	・滝口凡夫「風土とおいたち」	『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』西日本新聞社
昭和 50	1975	・出光佐三「御神徳の尊さ」	『我が 60 年間』第 4 巻
昭和 51	1976	・出光佐三「序」	『宗像大社昭和造営史』
昭和 53	1978	・編集部「出光佐三氏　宗像町初の名誉町民に迎えられる」	社報『宗像』宗像大社

昭和 54	1979	・石田正美「宗像の伝統と歴史に誇りと自覚を」	『宗像高校 60 年誌』宗像高校
昭和 60	1985	・出光佐三「日本人の世界的使命」	『出光佐三翁生誕百周年記念誌』収録
		・滝口凡夫「出光佐三さんと私」	『出光佐三翁生誕百周年記念誌』 宗像市商工会青年部
昭和 61	1986	・出光計助「オオカミのあとのネズミ」	『二つの人生』講談社
		・出光計助「店主の思い出」	
昭和 62	1987	・出光昭介「真の日本人を育てる鑑に」	『孝子武丸正助拾遺』
		・占部玄海「金山の章」	『郷土歴史叢書-人物往来-』第 3 冊
平成 6	1994	・高山　勉「出光社長と私」	『たった 1460 日されど 1460 日』
		・高山　勉「人間出光佐三翁像」	
平成 11	1999	・川口洋一「刑務所と学芸大」	『宗像市史　通史編第 3 巻　近現代』
平成 22	2010	・川嶋照亮「出光佐三翁の深い心」	『宗像高校同窓会会誌』平成 22 年
平成 24	2012	・滝口凡夫「あるべき人間の姿を求めて」	『出光佐三　魂の言葉』

参考文献

- 出光佐三「私の人生観」は「水を呑み冷暖自ら知る」に収録『人間尊重 50 年』
- 高山勉『たった 1460 日されど 1460 日』1994 年
- 高倉秀二『評伝　出光佐三』プレジデント社　1990 年
- 竹原元凱「沖ノ島祭祀遺跡」『日本の遺跡発掘物語』7　社会思想社　1984 年　田中幸夫と宗像の関係がまとめられている。氏によると、出光佐三に宗像の歴史の理解に大きく影響を与えたとする。
- 占部玄海『郷土歴史叢書-早川勇とその群像-』第 1 冊　1985 年
- 占部玄海『郷土歴史叢書-人物往来-』第 3 冊　1987 年　出光佐三翁以外の宗像会員の人物について、詳しく調べられおり、詳細はこちらを参照して頂きたい。なお、柴田節郎の回想録「宗像塾の思い出」の初出は、『宗像高校 60 年誌』宗像高校 1979 年に全文が記載され、関係資料が収録される。また、釜瀬新平「宗像中学校開校式にのぞみて」も参照されたし。
- 宗像市商工会青年部『日本人　出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年
- 壱岐貞実ほか『宗像高校 60 年誌』宗像高校 1979 年、『宗像高校 70 年誌』宗像高校 1989 年
- 福岡教育大学歴史研究部考古班『津丸・久末古墳群』1974 年
- 福岡教育大学歴史研究部考古班『城ヶ谷古墳群』1977 年
- 宗像市教育委員会『城ヶ谷古墳群　Ⅱ』宗像市文化財調査報告書第 8 集　1985 年
- 宗像市教育委員会『旧宿場町赤間Ⅰ～Ⅲ』1986～1989 年
- 宗像神社復興期成会『宗像大社昭和造営誌』1976 年
- 吉武歴史観光ボランティアの会『吉武物語』2010 年
- 安部照生「鎮国寺」『神郡宗像 8 号』2015 年　宗像大社ホームページより。
- 立部瑞祐『心の旅路』鎮国寺　1982 年　法蔵館

出光佐三の著作、出光興産株式会社

- 『四十年間を顧る』 1951 年
- 『わが四十五年間』 1956 年
- 「前垂掛けから始めて」『現代教養全集　8-わが生涯-』筑摩書房 1959 年
- 『人間尊重五十年』 春秋社　1962 年
- 『人間尊重の事業経営』春秋社　1962 年
- 『「人の世界」と「物の世界」-四十の質問に答える-』 出光興産社長室 1963 年
- 『マルクスが日本に生れていたら』 春秋社 1966 年（1972 年改訂）
- 『働く人の資本主義』 春秋社 1969 年
- 『日本人にかえれ』ダイヤモンド社　1971 年
  （のちに『出光佐三の日本人にかえれ』あさ出版　2013 年）
- 『出光の言葉』 出光興産 1974 年

・　『永遠の日本-二千六百年と三百年- 出光佐三対談集』 平凡社 1975 年
・　『道徳とモラルは完全に違ふ』 出光興産 1983 年
・　「出光佐三」『私の履歴書-昭和の経営者群像-5』1992 年　日本経済新聞社
・　「生き仏との出会い」『鈴木大拙-没後 40 年-』河出書房新社　2006 年
・　出光興産株式会社『出光五十年史』1970 年
・　出光興産株式会社『ペルシャ湾上の日章丸―出光とイラン石油』1978 年
・　出光興産株式会社『アバダンに行け―「出光とイラン石油」外史』1980 年
・　出光興産株式会社『我が六十年間〈第 1 巻〉創業より～昭和 34 年 1985 年
・　出光興産株式会社『我が六十年間〈第 2 巻〉昭和 35 年～40 年』1985 年
・　出光興産株式会社『我が六十年間〈第 3 巻〉昭和 41 年～46 年』1985 年

出光興産株式会社『我が六十年間〈追補〉昭和 47 年～56 年』 1981 年

・　出光興産株式会社『月刊出光-店主追悼号-』1981 年

★近親者の執筆

★　出光計助『二つの人生』講談社　1986 年
★　滝口凡夫『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』西日本新聞社　1973 年
★　滝口凡夫『決断力（中）』日本工業新聞社 2001 年
★　滝口凡夫『出光佐三　魂の言葉』海鳥社　2012 年
★　高倉秀二『評伝　出光佐三』プレジデント社　1990 年
★　出光真子「父の名をのがれて」『ホワット・ア・うーまんめいど』2003 年
・　佐々木聡編『日本の戦後企業家史-反骨の系譜-』有斐閣選書　2001 年
・　水木楊『難にありて人を切らず』2003 年（のち、『出光佐三　反骨の言魂』PHP 研究所　2013 年
・　堀江義人『石油王　出光佐三　発想の原点』三心堂出版社　1998 年
・　斐富吉「出光佐三の経営思想の行方-日本的精神と日本経営-」『大阪産業大学経営論集』第 3 巻 2 号　2002 年

倉田主税の著作・出典

・　倉田主税「私の履歴書」『私の履歴書（経済人 12）』1982 年　日本経済新聞社
・　倉田主税『しみだらけの人生-日立・戦後 20 年-』1969 年　野田経済社
・　倉田主税『倉田主税の半生記』1962 年 日本時報社
・　倉田主税追悼集編纂委員会編『倉田主税追悼集』1970 年
・　安部正弘『東郷公園と私』1966 年

宗像神を祭る神社の全国分布とその解析

－宗像神信仰の研究（１）－

静岡理工科大学 名誉教授
矢田 浩

１．はじめに

平成 27 年 7 月 28 日の文化庁の文化財特別審議会で、「『神宿る島』宗像（むなかた）・沖ノ島と関連遺産群」が平成 29 年世界文化遺産登録を目指す候補として選定された。その構成要素としては、「古代対外交渉に関わる祭祀が行われた沖ノ島（とそこからの出土遺物）、祭祀に関わった胸肩（宗像）氏の墓域である津屋崎古墳群（などの関連遺跡）、そして信仰を継承している宗像大社」（平成 21 年 1 月の文化庁の暫定一覧表）が挙げられている(注1)。

古代の宗像と沖ノ島には、多くの謎がある。多くの人々の関心にもかかわらず、その解明はなかなか進展しない。沖ノ島祭祀の開始が、文献の欠如している「空白の４世紀」の出来事であるためである。『日本書紀』にも、宗像三女神誕生の誓約神話以降は、胸形大神または胸方神についての五世紀代の二・三の説話(注2)が載るのみで、そのあとは天武紀まで登場しない。『古事記』には、上つ巻の神話以降は全く登場しない。

文献と考古学の隙間を埋めるものとして、神と神社に注目することが重要ではないか。宗像の謎の核心は、宗像大社とその祭る神にある。日本の多くの神々が、前史時代に起源を持つ。宗像神もそうであるように思われる。日本古代の神信仰は長い時の間に多くの変遷を経てきたが、人々は原則として一度祭った神を捨て去ることをしなかった。神のたたりをおそれたためであろう。このため、その神を祭る神社がなくなっても、あるいはそれを祭っていた人々がいなくなっても、一度祭られた神の名は、多くの場合他の神社に合祀されるなどして残っている。筆者の実感では、その遺存率は考古遺物や歴史史料より遙かに高いと思われる。

これまでの神社研究は、主に文献に名がある各地の著名社について行われてきた。しかしこれら諸社についての由緒等の文書は、その古来の権益の主張や政治的な意図、あるいは関連祭祀氏族間の争いなどを反映している場合が多く、鎮座当時の姿を正しく伝えているものは少ない。むしろそれら著名社から広まった多くの末社の祭神が、古代の信仰の跡を留めているように思われる。

古代以降目立った活躍のない宗像族が祭る神が、南西諸島を除く全国に広く分布していることは、その顕著な例と考えられる。海神とされている宗像神が、海のない群馬・栃木・奈良の諸県にも多く祭られている。このような広い分布の一端は、平安時代に作られた『延喜式神名帳（えんぎしきじんみょうちょう）』などの古代の記録にすでに示されていて、宗像神の全国への普及が古代以前に遡ることを裏付ける。

宗像神信仰については、『宗像神社史（上）・（下）』［1］に詳述されて以来、これに続く研究はそれほど見あたらない。本研究も同書を出発点とするが、同書の性格上宗像神についての様々な謎に深く踏み込むことは控えられている。本研究ではその後公表された神祇資料の解析を中心とし、関連すると思われる最新の考古学的知見などを援用し、宗像神と関連神信仰の解析と実地調査を通じて、制約されない視点から古代の宗像と沖ノ島についての謎に迫ろうとするものである。

本報では、まず宗像神信仰の全国的な拡がりを検討する。なお歴史的に「宗像」は旧宗像郡の範囲を指すが、この地域は古代には胸肩・胸形・宗形などと書かれ、これらの表記は現在でも各地の神社名や地名・神名・人名に残っている。そこで本報では、これら地名等を総称してムナカタと呼ぶことにしたい。ムナカタの地域は、時期によって旧宗像郡域を越えて拡がることがある。

全国の宗像神を祭る神社の分布については、昭和19年に宗像神社の調査による『宗像三神奉齋神社調』［2］（以下『調』）がある。これによると、全国の宗像神を祭る神社は6312社となっている。この数は、境内摂・末社を含む数字であり、本殿に祭るのは4370社である。しかし『宗像神社史』はこれに言及しながら、祭神の認定に不備があるとして採用していない。

『調』は明治期に全国で作られた「神社明細帳」に基づくとしているので、「神社明細帳」の全貌が一般に閲覧できない現状では貴重な記録である。しかし他神が全く記されていないことや、宗像神の名が同一表記に書き換えられているなど、詳細な解析の基本データとしては問題がある。本報では、必要に応じて参考資料として用いることにする。

なお『宗像神社史』は、分祠社の例として宗像神を祭る神社として歴史史料に出る19社およびムナカタの名を冠する90社などを挙げている。これらについても、最近の史料に基づいて検討する。

２．基礎資料と解析方法

全国の神社のほとんどを統括する神社本庁が、所属する神社7万8960社の祭神、祭礼、由緒などを調査し、デジタル化して『平成「祭」データ』（以下『平成データ』と表記）として公表している［3］。本報では、最近公開されたその WINDOWS 版を基礎資料とした。なおこの調査には境内摂・末社のデータもあるが、個々の実例を見ると必ずしも全ての社について記入されてはいないようなので、以下の解析は本殿に祭る神のみについて行った。

この調査では祭神名は当該社の申告通りに記載されているので、同一神に多種多様な表記がある。表１に宗像神と判定した全ての表記を示す(注3)。これらの表記は、『日本書紀』と『古事記』とに拠っている(注4)。表２に両書に現れる全表記を示した。現在宗像大社は三女神を、『日本書紀』神代紀第六段本文に従って

田心姫神（たごりひめのかみ）・湍津姫神（たぎつひめのかみ）・市杵島姫神（いちきしまひめのかみ）

と表記する(注5)。この各神に対応する表１の表記群を、それぞれタゴリ・タギツ・イチキシマと呼ぶことにする。表１で、固有名で呼ばれる各神の表記は、表２の各書の表記から採られた（あるいは模された）ものと見られる。同表でＡに分類したのは『日本書紀』の各書に、Ｂに分類したのは『古事記』にそれぞれ拠った表記と見られる。Ｃは、いずれに拠ったかの判定が難しい表記である。

表１　宗像神を本殿に祭る表記別神社数

	タゴリ	社数			タギツ	社数			イチキシマ	社数		その他（1）	社数	その他（2）	社数
A	田心	700	732	A	湍津	561	618	A	市杵島	2318	2318	奥津島	22	宗像三（女）神	57
	田霧	27			湍津島	16		B	市寸島	324	481	中津島	17	宗像（数不明）	5
	田凝	5			滝津	31			狭依	157		瀛津島	10	宗像姫	1
B	多紀理	477	629		滝津島	4		C	市岐島	72	206	澳津島	2	宗像仲津姫	2
	多岐理	135			高津	6			市木島	6		興津島	2	宗形（三神）	5
	多記理	7		B	多岐都	253	635		市伎島	5		辺津島	2	宗形（数不明）	2
	多伎理	3			多岐津	197			伊都岐島	10		瀲津島	1	宗形（二神）	1
	多喜理	3			多紀津	57			伊都伎島	4				厳島三神	1
	多紀利	1			多紀都	56			伊知岐島	4				三（柱）女神（ヒメ）	181
	多紀岐利	1			多伎都	16			一杵島	3				道主貴	8
	多古理	1			多伎津	6			一寸島	2					
	多古利	1			多喜津	2			一伎島	1					
C	田紀理	4	6		多寸都	2			厳島（数なし）	98					
	田岐理	1			多木津	1									
	田許理	1			多芸津	1									
					田寸津	37									
					田岐都	4									
					田岐津	3									
計		1367		計		1253		計			3004	計	56	計	263
備考	・姫・媛・比売・比咩・比女のいずれかが附く ・さらに神・大神または命・尊が附くことも多い ・島は嶋・嶌・志麻と表記することがある ・Aは『日本書紀』の各書に、Bは『古事記』に拠った表記 Cはいずれに拠ったか判定できない表記													姫以外は原則として神または大神が付く	
														総神数	6433

表２　記紀の三女神の表記

書	日本書紀神代紀				古事記
	第六段 本文	同 第一の一書	同 第二の一書	同 第三の一書	
生まれた女神名（順序と鎮座地）	田心姫	瀛津嶋姫 （おきつしま）	市杵嶋姫…遠瀛 （おきつみや）	瀛津嶋姫 （市杵嶋姫）	多紀理毘賣(奥津島比賣)…胸形奥津宮
	湍津姫	湍津姫	田心姫…中瀛 （なかつみや）	湍津姫	市寸島比賣(狭依毘賣）…胸形中津宮
	市杵嶋姫	田心姫	湍津姫…海浜 （へつみや）	田霧姫	多岐都比賣…胸形辺津宮
その他		日神の神勅 （道中）		海北道中 （道主貴）	

これを見ると、全体として宗像大社が採用している『日本書紀』の表記が多数であることがわかる。江戸期以前は、『古事記』に拠った表記は殆ど見られなかった。明治神祇制度下で地域ごとに「神社明細帳」を作成させたとき、祭神記載の際に国学派の担当官が『古事記』風の表記に準拠するよう指導したものと見られる。江戸期の記録には祭神名が明記されていなかった社も多かったし、神仏混淆社では祭神の変更を指示されたケースも多かった。後述の八王子信仰社の宗像神の多くが、『古事記』に拠った表記となっているのはその例である。祭神の記録があっても、表記を変更させられた場合も多かったようである。宗像大社でさえも、昭和32年まで『古事記』の表記を用いていた。

表１の各表記で検索したデータを、Excel に変換して都道府県ごとに集計し、宗像神同士の重複を除いて宗像神の１柱以上を祭る全神社数、および三女神の全てを祭る数と、そのうち三女神を祭る数を求めて表 3 中に示す。その他必要により他神や社名および通称などについても同様に検索し、集計した。

地域ごとの宗像神信仰の強さを見るため、各都道府県の『平成データ』の総神社数との比を求め、表 3 中に示した。ここで問題になるのは、明治神祇制度下で１村１社を目指して神社の合祀が推進されたことである。『神道史大辞典』［6］によると、全国の神社数は明治 14 年から明治 39 年まで 19 万社前後であったが、明治 40 年以降急激に減少して昭和 20 年には 10 万 9733 社となっている。ただし合祀により社が廃止されてもその祭神の名を合祀社に残しているので、村社以上の社には 30 柱以上の祭神が祭られている例がかなりある。

合祀が強力に推進される以前の明治 39 年の神社数を、表３中に比較として示した。都道府県で合祀の実施状況に大きな差があることがわかる。『平成データ』の神社数の明治 39 年の全神社数に対する減少率が、沖縄県の 95％を最高に和歌山県の 89%、三重県の 87%など 13 都道府県が 70%以上を示すのに対し、7 都道府県は 30%以下に止まっている。このような神社数減少の影響も考慮して検討する必要がある（この中で明治以降の入植の影響があると見られる北海道と、米軍占領などの事情によると見られる沖縄県は以下除外して議論する）。

表3　宗像神を祭る全国の神社数と祭神の内訳

	全神社数			宗像神を祭る神社数と全神社数との比			宗像神を祭る神社のうち三女神を祭る神社数	宗像神を祭る神社のうち八王子信仰社	八王子信仰社を除いた宗像神を祭る神社数とその内訳										
	平成7年登録　神社数	明治39年登録神社数	減少率(%)	宗像神の一神以上を祭る神社数	対平成全神社数比(%)	対明治全神社数比(%)			宗像神を祭る全神社（八王子除く）	対平成全神社数比(%)	対明治全神社数比(%)	八王子除く三神	比率	タゴリ単神	タギツ単神	イチキシマ単神	タゴリ＋タギツ	タゴリ＋イチキシマ	タギツ＋イチキシマ
北海道	600	578	−4	38	6.3	**6.6**	4	0	38	6.3	**6.6**	4	10.5	0	0	32	0	0	0
青森県	730	839	13	17	2.3	2.0	10	0	17	2.3	2.0	10	**58.8**	0	0	6	0	0	0
岩手県	857	1186	28	19	2.2	1.6	2	0	19	2.2	1.6	2	10.5	0	1	15	0	0	0
宮城県	961	2627	63	16	1.7	0.6	2	0	16	1.7	0.6	2	12.5	0	1	11	0	0	0
秋田県	1135	4790	**76**	33	2.9	0.7	8	0	33	2.9	0.7	8	24.2	**8**	1	15	0	0	0
山形県	1742	3199	46	42	2.4	1.3	9	0	42	2.4	1.3	9	21.4	1	0	28	0	0	1
福島県	3046	4448	32	42	1.4	0.9	9	3	39	1.3	0.9	6	15.4	3	1	23	0	0	0
茨城県	2467	4344	43	67	2.7	1.5	0	0	67	2.7	1.5	0	0.0	3	1	62	1	0	0
栃木県	1909	6004	68	114	6.0	1.9	4	0	114	6.0	1.9	4	3.5	**61**	0	48	0	1	0
群馬県	1211	4022	**70**	122	10.1	3.0	14	4	118	9.7	**2.9**	10	8.5	2	1	**104**	0	0	0
埼玉県	2012	7377	**73**	117	5.8	1.6	23	7	110	5.5	1.5	16	14.5	2	0	**91**	0	0	1
千葉県	3160	6645	52	88	2.8	1.3	22	0	88	2.8	1.3	22	25.0	1	1	64	0	0	0
東京都	1411	2530	44	31	2.2	1.2	2	1	30	2.1	1.2	1	3.3	1	0	28	0	0	0
神奈川県	1128	2608	57	32	2.8	1.2	7	3	29	2.6	1.1	4	13.8	0	2	22	0	0	0
新潟県	**4782**	**8234**	42	80	1.7	1.0	10	2	78	1.6	0.9	8	10.3	**5**	**11**	50	0	2	0
富山県	2163	3790	43	23	1.1	0.6	1	0	23	1.1	0.6	1	4.3	3	0	19	0	0	0
石川県	1912	2834	33	47	2.5	1.7	6	3	44	2.3	1.6	3	6.8	2	**6**	28	0	3	0
福井県	1747	2825	38	31	1.8	1.1	6	2	29	1.7	1.0	4	13.8	0	2	23	0	0	0
山梨県	1299	1848	30	23	1.8	1.2	18	17	6	0.5	0.3	1	16.7	2	0	2	0	0	0
長野県	2466	6831	64	45	1.8	0.7	17	10	35	1.4	0.5	7	20.0	3	1	23	0	0	1
岐阜県	**3229**	6794	52	42	1.3	0.6	24	24	18	0.6	0.3	0	0.0	0	0	18	0	0	0
静岡県	2822	3880	27	95	3.4	2.4	50	**35**	60	2.1	1.5	15	25.0	2	3	35	0	1	0
愛知県	**3319**	5046	34	**189**	5.7	3.7	**129**	**111**	78	2.4	1.5	18	23.1	2	1	52	2	0	1
三重県	828	6489	**87**	**296**	**35.7**	**4.6**	**185**	**162**	**134**	**16.2**	2.1	23	17.2	3	2	**101**	0	0	1
滋賀県	1440	2872	50	48	3.3	1.7	9	1	47	3.3	1.6	8	17.0	0	3	22	0	0	0
京都府	1597	2900	45	52	3.3	1.8	23	12	40	2.5	1.4	11	27.5	3	1	24	0	0	0
大阪府	573	1886	**70**	33	5.8	1.7	3	3	30	5.2	1.6	0	0.0	0	0	28	0	1	0
兵庫県	**3845**	**7424**	48	132	3.4	1.8	28	18	114	3.0	1.5	10	8.8	**5**	2	**96**	0	1	0
奈良県	1323	1885	30	75	5.7	**4.0**	18	16	59	4.5	**3.1**	2	3.4	3	1	50	0	2	0
和歌山県	425	3721	**89**	82	**19.3**	2.2	4	2	80	**18.8**	2.1	2	2.5	0	0	73	0	2	2
鳥取県	822	1613	49	51	6.2	3.2	19	7	44	5.4	**2.7**	12	27.3	4	3	21	1	0	1
島根県	1163	3151	63	135	11.6	**4.3**	71	**42**	93	8.0	3.0	29	31.2	2	3	51	1	0	0
岡山県	1626	**9426**	**83**	75	4.6	0.8	42	7	68	4.2	0.7	**35**	**51.5**	1	3	26	1	1	0
広島県	1887	**9520**	**80**	**258**	**13.7**	2.7	**123**	18	**240**	**12.7**	2.5	**105**	**43.8**	**5**	**5**	**118**	2	1	2
山口県	742	2588	**71**	**169**	**22.8**	**6.5**	**135**	7	**162**	**21.8**	**6.3**	**128**	**79.0**	2	1	28	1	0	0
徳島県	1324	4198	68	25	1.9	0.6	9	2	23	1.7	0.5	7	30.4	0	1	15	0	0	0
香川県	774	3469	**78**	47	6.1	1.4	16	1	46	5.9	1.3	15	32.6	1	0	27	0	2	0
愛媛県	1247	5376	**77**	**168**	**13.5**	3.1	**119**	**26**	**142**	**11.4**	2.6	**93**	**65.5**	2	3	39	1	4	1
高知県	2178	6225	65	71	3.3	1.1	33	18	53	2.4	0.9	15	28.3	1	1	33	0	0	0
福岡県	**3364**	**7758**	57	141	4.2	1.8	68	17	**124**	3.7	1.6	**51**	41.1	**7**	1	53	1	2	1
佐賀県	1092	3549	69	72	6.6	2.0	35	0	72	6.6	2.0	**35**	48.6	3	0	34	0	0	0
長崎県	1278	1656	23	49	3.8	3.0	25	2	47	3.7	2.8	23	48.9	0	1	17	0	0	3
熊本県	1382	4708	**71**	36	2.6	0.8	21	3	33	2.4	0.7	18	**54.5**	0	1	13	1	0	0
大分県	2140	3175	33	116	5.4	3.7	41	11	105	4.9	**3.3**	30	28.6	**6**	2	61	0	3	1
宮崎県	654	878	26	23	3.5	2.6	5	4	19	2.9	2.2	1	5.3	2	0	16	0	0	0
鹿児島県	1137	2279	50	25	2.2	1.1	12	6	19	1.7	0.8	6	31.6	0	2	10	0	0	0
沖縄県	11	240	**95**	0	0.0	0.0	0	0	0	0.0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0
合計	78960	190265	58	3532	4.5	1.9	1421	607	2925	3.7	1.5	814	27.8	151	69	1755	12	26	16

・数字の太字は上位5位を示す

３．結果および考察

３．１ 八王子信仰社の除外

表３に見るように、全国の宗像神を祭る神社は3532社を数える[注6]。しかしその分布を見ると、やや違和感がある。最も多いのは三重県の296社で、以下広島県の258社、愛知県の189社の順で、福岡県は６番目の141社である。各都道府県での全神社数との比率で見ると、三重県は実に35.7％の神社が宗像神を祭っていて、福岡県は平均以下の4.2％に過ぎない。明治末期の大合祀の影響を小さくするため明治39年の総神社数との比で見ると、和歌山県や三重県など遠方の県の突出は小さくなるが、依然福岡県は平均以下である。

東海地方など遠方で異常に宗像神を祭る比率の高い諸県の社名には、八王子または八柱（やばしら）を名前に持つ神社が多く見られる。これらの名を持つ神社は全国で256社あり、うち195社が三女神を祭っている。その中では愛知県の 64 社、静岡県の 26 社などが多い。これらの神社の全てが、記紀神話で天照大神（あまてらすおおみかみ）と素盞嗚命（すさのおのみこと）（『古事記』に須佐之男、以下スサノオ）とが行った誓約（うけい）の際に三女神と共に出生した五男神を共に祭っている。すなわち、この八柱または八王子とは、誓約で生まれた八神の意味なのである。

東海地方などで祭られていた八王子は、本来祇園信仰の祭神牛頭天王（ごずてんのう）の八人の王子の意味であった[注7]。明治神祇制度下で神仏の分離が強制され、牛頭天王も殆どがそれと習合していたスサノオに名を変えられた。そしてその子神の八王子も、誓約で生まれた八神にすり替えられた。

従って、三女神を祭り八王子または八柱を名前に持つ神社は、本来の宗像神信仰社ではないことが明らかである。異なる名を持つ神社でも、三女神五男神がセットで祭られている場合は、牛頭天王の子神の八王子であった場合が殆どと考えられる。このような八王子信仰と考えられる社を抽出して表３中に示す。以下の解析は、八王子信仰社607社を除いた2925社について行うことにする（八王子神を含む場合でも、これとは別に宗像神を含む場合は除外しなかった）。

八王子信仰社を除いて都道府県別に宗像神を祭る神社数の明治39年の神社数神社数に対する比率を見ると、山口県が6.3％と最も高く、以下大分・奈良・鳥取の順となる。遠方での突出した高率はなくなるので、このようなデータ処理がほぼ妥当であると考えられる。福岡県は1.6％と依然としてほぼ全国平均並みになる。

八王子信仰社を除くと、宗像神が最も多く祭られているのは広島県の240社で、以下山口県・愛媛県・三重県・福岡県の順となる。福岡県を信仰の出発点と仮定すると、宗像信仰は周防灘から瀬戸内へ集中的に拡がったように見える。

３．２ 三女神の祭られ方

上記の誓約（うけい）神話では三女神はほぼ同時に出生したことになっていて、宗像大社もこれを社伝としている。三女神がこの神話のように揃って祭られている神社はどの程度あるだろうか。表 3 中に、三女神が全国でどのように祭られているかを示した。上述の八王子信仰社を除くと、三女神を全て祭る神社は 814 社で、全体の約 28％に過ぎない。三女神を祭る神社の比率が多いのは、青森県を除けば西日本の諸県が多く、特に山口県では 79％に達する。

最も多いのは、三女神のうちイチキシマのみを祭る神社で、1755 社と全体の 60%を占める。その比率は遠方の諸県で高く、北海道・東京都・大阪府と茨城・群馬・埼玉・富山・岐阜・三重・兵庫・奈良・和歌山・宮崎の諸県では 80%以上がイチキシマ一神を祭る。タゴリのみを祭る神社は 151 社あるが、栃木県に 61 社が集中していて、他には少ない。タギツのみを祭る神社は 69 社と少なく、北陸地方にやや多く分布する。このように少なくとも一部の地方では、三女神のそれぞれが選択的に単独で祭られてきたことがわかる。二神の組み合わせはさらに少ない。また注目されるのは、宗像神の海神のイメージにもかかわらず、栃木・群馬・埼玉など、海のない諸県に多くの宗像神が祭られていることである。

このような分布の特徴を図 1 に示す。三女神を祭る神社が多いのは中国地方西部以西であり、それ以東では少数の例外を除きイチキシマ一神の比率が圧倒的に多い。このことは、イチキシマ信仰の伝播が古い時期にあって、その後宗像神社の三神化がその近隣諸地方に波及した、と解釈できよう。そして他の二神も、三神化以前にそれぞれある程度の信仰域を持っていたと見られる

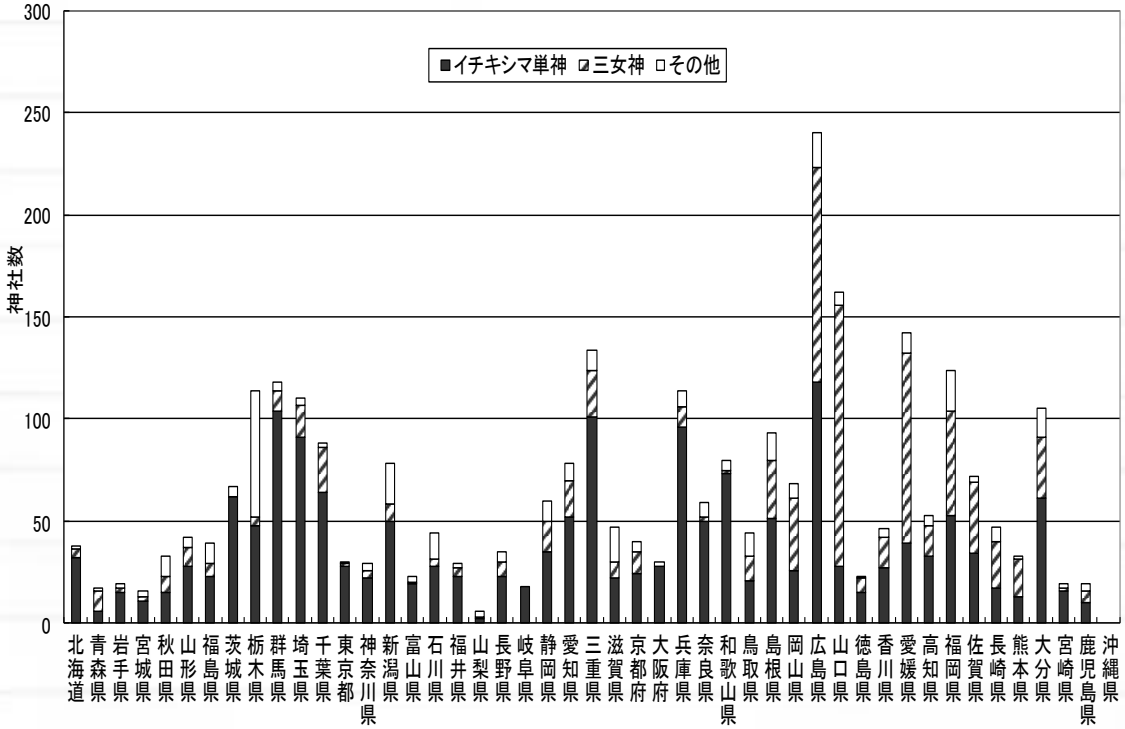


図１　ムナカタ神の一神以上を祭る神社の全国分布とその内訳（八王子信仰社を除く）

３．３ 厳島信仰との関係についての考察

厳島信仰も、宗像神の普及に大いに寄与したと考えられる。現在の安芸の厳島神社の祭神は、宗像大社と同一の三女神である。しかし延喜式神名帳(注8)の伊都伎嶋神社は一座であるので、『宗像神社史』はその社名から、はじめ市杵島姫命が祭られ、後に三神となったと推定している。安芸の厳島神社が三神の順序が市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命としているのも、市杵島姫命を特別視していることを示す。明治時代の神社明細帳に拠っている『調』にも安芸の厳島神社の祭神をイチキシマ一神とするので、三女神となったのは比較的新しいようである。神名については別報で議論するが、イチキシマの語源が「齋(いつ)く島」とされていることからも、『宗像神社史』の推定は正しいと思われる。由緒については様々な説があるが、ここでは『宗像神社史』に従って宗像神（イチキシマ）が勧請されたものとする。

厳島系の名を持つ全国の神社は、650 社が数えられる。これは社名がイツクシマ・イツキシマ・イチキシマと発音される神社の合計である。「厳島」にも様々な異字体があり、その発音もこの３種類ある。神名「市杵島」を表す社名にも前述のように多くのバリエーションがあり、発音も上記３種がある。これら表記を「厳島系」と「市杵島系」に分類すると、前者が 573 社で後者が 77 社になる。しかしこれら社名・神名相互間には、はっきりとした境を置くことができない。

上の社名の読みのバリエーションは、イツクシマ→イツキシマ→イチキシマと音韻変化をしたと考えることができよう(注9)。このことは、安芸の厳島神社の社名が、延喜式神名帳などに伊都伎嶋(いつきしま)・伊都岐島など中間の発音の表記で書かれていることからも察することができる。全国に広まった「厳島神社」の表記は、比較的古い発音に基づく表記を残しているのではないか。祭神として厳島神(いつくしまのかみ)などとも書かれるのも、古い発音を残しているものと思われる。

厳島系社の祭神は、イチキシマ一神が 472 社（厳島神の 18 社を含む）と全体の 75%で、他にタゴリ一神の 5 社、タギツ一神の 2 社などがある。三女神を祭る社は 116 社で全体の 18%に過ぎない。都道府県別の分布を図 2 に示す。宗像神全体と同様に、三女神は東瀬戸内を中心とする西日本にやや多く、東部瀬戸内以東はイチキシマ一神が圧倒的に多い。このことははじめ安芸の厳島神社に伝えられた宗像神がイチキシマ一神であり、ここを経由して伝播したときもその一神であったことを示唆する。

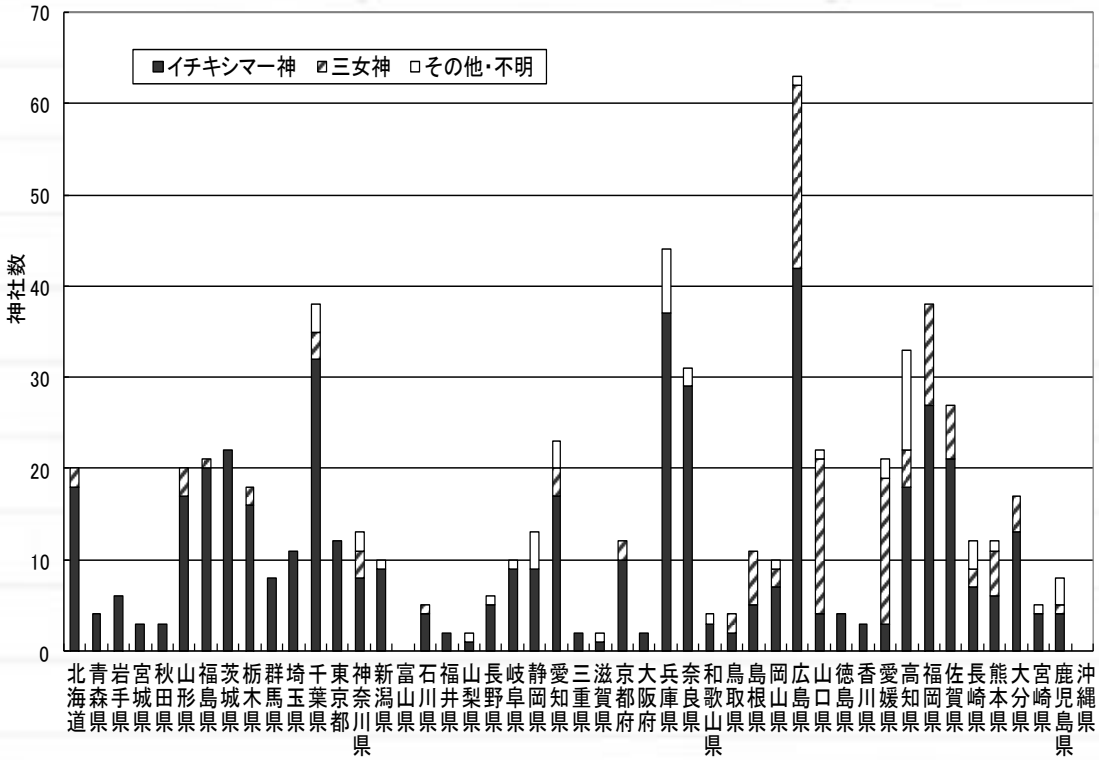


図２　厳島系の神社とその祭神の都道府県別の分布

以上のことから、厳島信仰は宗像神信仰の一類型であって、両者の間にはっきりとした線を引くことは難しいと言える。また「いつくしま」の名を持つ神社でイチキシマー神を祭るのは 406 社であり、全国のイチキシマー神を祭る神社の 23%に過ぎないので、イチキシマ信仰の大勢は安芸の厳島信仰とは独立に（おそらくそれより古く）全国に広まったものと考えてよいであろう。

３．４ 弁天信仰との関係についての考察

安芸の厳島神社は、日本三大弁天（弁才天）として知られている。全国の厳島系神社にも、弁天または弁才天と呼ばれた神社が多い。弁才天とは、もとはインドの川の神サラスヴァティーである。それが仏教に取り込まれ、中国経由で日本に入ってきたのは奈良時代とされる。平安時代に日本の女神と習合し、厳島神社のイチキシマも弁才天と見なされるようになった。さらに平安末期以降「才」が「財」と同音であることから弁財天とも書かれるようになり、室町時代以降は七福神の一神として日本国中に信仰が広まった(注10)。

『平成データ』に登録されている神社のうち、218 社に弁（才）天の通称が記録されている。このうちの 85%の 186 社に宗像神が祭られている。うち 154 社はイチキシマー神を祭っていて、厳島系の名を持つ神社は 145 社である。弁天信仰がイチキシマと、そして厳島系神社と強い縁があることがわかる。図３に、厳島系神社のうち弁（才）天の通称を持つ全国の神社の分布を示す。弁（才）天の名は東国に多く残っており、東国が弁天信仰の影響を強く受けていたことがわかる。ただしこれは、弁（才）天を

祭る神社が創始されことを意味するものではない。後に実例で示すように、あくまで宗像神が先に祭られていて、それに弁（才）天が習合したと考えられるのである。またこれは、西国で弁天信仰が普及しなかったことを意味するものでもない。江戸時代中期の『筑前続風土記付録』[9]には、宗像系神社や厳島神社とは別に弁天社や弁天堂が記録されているが、その多くは明治時代以降に残っていない。

このように弁天信仰は、現在祭られている宗像神を祭る神社数に、大きな影響を及ぼしてはいないと考えられる。

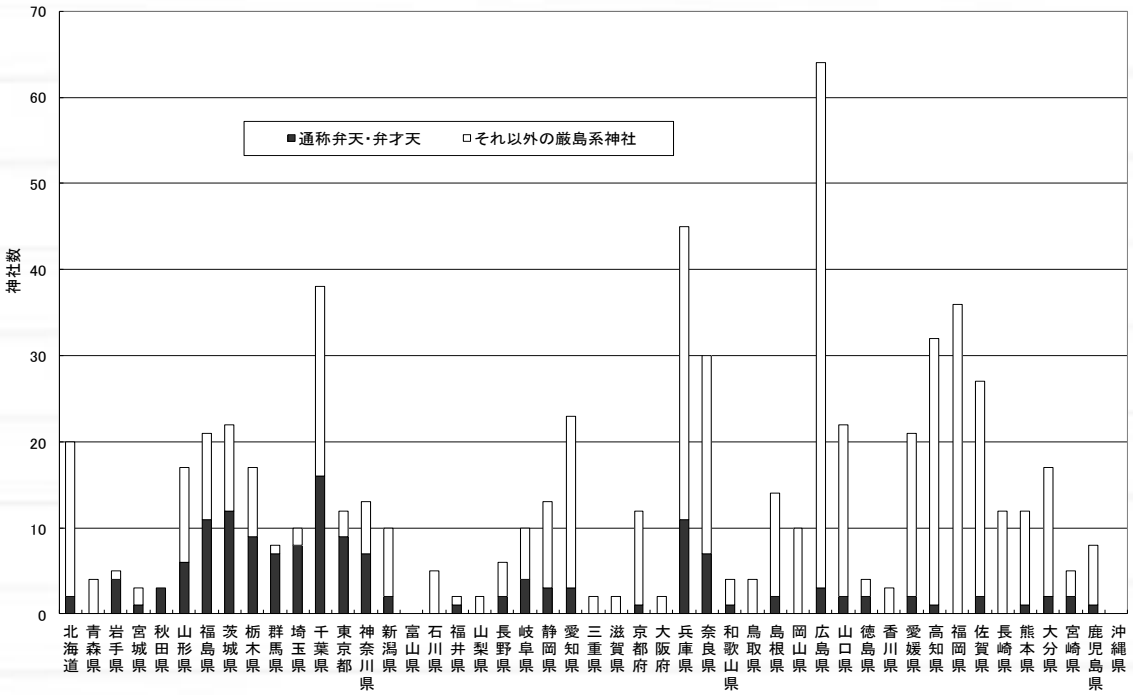


図３　厳島系神社のうち弁（才）天の通称を持つ全国の神社の分布

３．５ 全国のムナカタの名を持つ神社と純宗像系社の分布

表４に、全国のムナカタの名を持つ神社の一覧を示した(注11)。参考に『宗像神社史』に挙げている一覧表の 90 社（うち九社は摂・末社）をも示した。宗像神を祭る神社が 3500 社を越えるのに比べると、きわめて少ないことに驚かされる。後に示すように、これは古層の神々の特徴である。この中で、遠方の青森県、千葉県などで多いのが目につく。特に青森県では、「胸肩」という古名の神社が七社（『宗像神社史』では九社）あるのが特に注目される。これらの県については、後で別途検討する。

『宗像神社史』に挙げられて『平成データ』にない神社には、実際に廃社になっていることが確認できる例がある。山口県の 2 社のうち、宇部市東万倉（まぐら）の宗像神社は西万倉の宮尾八幡宮に合祀され、下関市武久の宗像神社は同市幡生の生野神社の境内末社となっている。九州で唯一の古名を持っていた上五島町の中通島（なかどおりじま）浦桑にあった胸肩神社は、台風で倒壊して廃社となり、近くの祖父君（おじぎみ）神社に合祀

されていた。本殿に合祀された場合は原則として祭神名として残るが、境内末社となった場合は記録が残らない限り次第に社名や神名が忘れられることが多い。早い時期に包括的な調査が必要である。

表4　ムナカタの名を持つ全国の神社

	社名表記						祭神（3女神以外の場合）	『宗像神社史』との異同		
	胸肩	胸形	宗形	宗像	宗方	小計		社数	『平成データ』欠	『神社史』欠
青森県	7	0	0	1	0	8	黒石市の宗像神社はイチキシマ	10	胸肩2社	
福島県	0	0	0	4	0	4	会津若松市・喜多方市・湯川村の宗像神社はイチキシマ	7	宗像3社	
茨城県	0	0	0	1	0	1	イチキシマ	1		
栃木県	0	2	0	0	0	2	鹿沼市の胸形神社はタゴリ	1	胸形1社	
群馬県	0	1	0	1	0	2		2		
埼玉県	0	0	0	2	0	2		1		宗像1社
千葉県	0	0	0	13	0	13	印西市船尾の宗像神社はイチキシマ	13		
長野県	0	0	0	0	0	0		1	宗像1社	
新潟県	0	0	0	2	0	2	新潟市西蒲区松野尾の宗像社はイチキシマ、同じく矢島の宗像社タゴリ・イチキシマ	3	宗像1社	
福井県	0	0	0	2	0	2	若狭町生倉の社はイチキシマ	3	胸肩1社	
静岡県	0	1	0	3	0	4	焼津市の宗像神社はイチキシマ	4		
愛知県	0	2	0	1	0	3	豊田市平戸橋町の胸形社はイチキシマ、同池島町の[illegible]形（胷形）神社はタゴリ	4	宗形・宗像各1社	胸形・宗像各1社
京都府	0	0	0	1	0	1		1		
奈良県	0	0	0	3	0	3	宇陀市菟田野と川上村の宗像神社はイチキシマ	4	宗像1社	
鳥取県	0	0	1	0	0	1		1		
岡山県	0	0	4	0	0	4	赤磐市今井の宗像神社は奥津比売	6	胸形1社宗像2社	宗形1社
広島県	0	0	0	2	0	2	三次市の宗像神社は宗像神なし	3	宗像1社	
山口県	0	0	0	0	0	0		2	宗像2社	
香川県	0	0	0	0	0	0		1	宗像1社	
愛媛県	0	0	0	1	1	2	今治市宗方の宗方八幡神社は宗像神なし	2		
高知県	0	0	0	1	0	1	土佐市本村の宗像神社は祭神記載なし	1		
福岡県	0	0	0	4	0	4		4	宗像1社	宗像大社
長崎県	0	0	0	6	1	7	諫早市宗方の宗方神社は宗像神なし	6	胸肩1社	宗像・宗方各1社
熊本県	0	0	0	0	1	1	山鹿市宗方の宗方八幡宮は宗像神なし	0		宗方1社
計	7	6	5	48	3	69		81		
備考	会津若松市の宗像神社、豊田市池島町の[illegible]形（胷形）神社はムナガタと読む							宗像大社を加え独立社82社		

神社名にムナカタがある神社は多くないが、社名にムナカタがなくても、宗像神のみを祭り本来宗像神の神社と考えられる社がかなり多く発見できる。そのような全国の「純宗像系」神社を、主に『平成データ』に基づいて抽出した結果を、表5に示す。ムナカタ（ムナガタ）社と合わせると390社となる。このほかにも本来宗像神のみを祭る神社と思われるが他神を併祭する神社があり、この数が400社を超えることは確実と思われる。これに厳島系社のうち宗像神のみを主祭神とする563社を加えると、現在950社以上が純宗像系神社として存続していることになる。厳島系社は広島・兵庫・千葉の諸県

で多く、このためこれら諸県は純宗像系社と併せても上位を占める。分布を見ると広島県と栃木県以外では北部九州の三県が多く、やはり信仰の発信地がこのあたりにあったことを思わせる。北部九州では福岡県や長崎県が旧三国にまたがるなどで県別の解析では不十分であり、別報でより詳しく分布を検討したい。

表5　純宗像系と推定される全国の神社

	社名ムナカタ	その他	その他の社名	計	厳島系純宗像	純宗像計
北海道	0	3	網走、澳津、留萌	3	15	18
青森県	**8**	4	善知鳥(うとう)、蕪島、四所、三島	12	4	16
岩手県	0	4	有家、市姫、三貫島、堤島	4	5	9
宮城県	0	3	石、一景島、清川	3	3	6
秋田県	0	3	八幡2、森嶽	3	2	5
山形県	0	5	奥津島、新山2、瀧姫、床浦	5	19	24
福島県	**4**	3	隠津島2、根渡	7	19	26
茨城県	1	5	一木、齋、三瓶、姫、水	6	20	26
栃木県	2	**22**	愛宕、綱戸、岩原、塩山、四社、白石、瀧尾9, 滝尾2、露垂根、野上岩嶽、蓬莱、御榊山、三島	**24**	16	40
群馬県	2	4	瀧宮、滝宮、鳥總、日光	6	8	14
埼玉県	2	6	通殿、姫宮、前川、身形2、若宮	8	10	18
千葉県	**13**	4	春日、高津比咩、姫宮大神2	**17**	**32**	**49**
東京都	0	3	利田(かがた)、貴志嶋、姫宮	3	10	13
神奈川県	0	3	江島、大沼、杉山	3	12	15
新潟県	2	9	風島、樹崎、多岐 4、瀧、都野、寺田	11	8	19
富山県	0	4	市姫2、市比賣、比賣	4	0	4
石川県	0	7	市姫、印鑰、意冨志麻、奥津比咩、唐島、滝津、姫滝	7	3	10
福井県	2	6	市姫2、齋、多伎都姫、福島、龍宮	8	2	10
山梨県	0	3	田上、八王子**、姫宮	3	1	4
長野県	0	5	相川、桐原牧、下水澤、伏谷社、山田	5	6	11
岐阜県	0	1	大代	1	9	10
静岡県	**4**	8	琴倉、琴海、鷲島、礫石(つぶていし)、八王子**2、八面、若磯	12	12	24
愛知県	3	12	雨、澳津社、奥津、ぎ稿社、関川社、豊島、馬場瀬、姫宮、深島、船塚社、藤嶋、山	15	23	38
三重県	0	0		0	1	1
滋賀県	0	6	石占井(いしらい)、奥津嶋、津久夫須麻、藤切、湯島、若宮	6	2	8
京都府	1	11	池姫、上ノ宮、岩尾、桑田、志高、七谷、白雲、住吉、多喜記、繁昌、三嶋	12	11	23
大阪府	0	0		0	2	2
兵庫県	0	**16**	一宮、三宮、四宮、池大、石部、磯崎、磯部、勝尾、岸河、佐用都比売、須浜、高井、姫宮、蛇穴、満田、焼尾	16	**36**	**52**
奈良県	3	7	天安川2、池、遠瀛、草川、国津、船倉	10	31	41
和歌山県	0	5	王子、大原、重山、志磨、姫	5	4	9
鳥取県	1	2	生石子(ういしご)、上船岡	3	1	4
島根県	0	6	市木、亀島、垂水、鳴滝、別所、三屋	6	9	15
岡山県	**4**	12	阿智、大瀧、大佐、三社女躰、綱掛石、八幡、明神、明釼3、湯舟、和忠	16	10	26
広島県	2	23	岡崎、大迫、大瀧、海山、亀尾山、衣羽、貴船、国光、嵯峨、鷺森、新堂平、宗造、糺津、築山、西脇、長尾、広瀬、美加登、宮ヶ瀬、宮畠、明神社2、湯舟	**25**	**50**	**75**
山口県	0	**14**	赤崎2、天浦、浮島、亀島、狩尾、木原、葛原、国津姫、三、新宮、装束、端島、横浜	14	19	33
徳島県	0	2	三所、八幡	2	4	6
香川県	0	5	久保、三所2、三条、新川	5	3	8
愛媛県	2	11	一の宮、瀛津、倉之町、桑名、高智(こうち)、三社、中巌前(なかごぜ)、日招八幡、姫坂、湊、明見	13	19	32
高知県	1	3	島宮、戸島、八幡宮	4	**24**	28
福岡県	**4**	**17**	岩津、景石(けいし)、三所 2 、十二社、背振、神興、津加計志、福、福足、福成、宮地嶽4、六嶽、横山	**21**	**36**	**57**
佐賀県	0	**24**	乙護、乙宮 、黒髪、昨礼、背振、田島 10、田嶋、多島、天山 2、仲宮、日時麗岳、寶満、三島	**24**	23	**47**
長崎県	**7**	13	赤島、巌立、大島、笠松天神、柏、白浜、田嶋、奈伊島、長島、原島、淵、若宮、和多都美	**20**	8	28
熊本県	1	3	温泉、平原、舟底	4	11	15
大分県	0	6	市姫、小嶽(おたけ)大年社、三女、大明神、高家(たけい)、二宮八幡	6	12	18
宮崎県	0	0		0	4	4
鹿児島県	0	6	楠田、瀧之、姫宮、弊串、宮崎、山宮	6	4	10
沖縄県	0	0		0	0	0
計	69	319		388	563	951

３．６ 古代の記録にある宗像系神社

古代の記録とは一般に、①延喜式内社 ②国史見在社(げんざいしゃ)(注12) ③国内神名帳記載社(注13) であるが、そのほかに各国の風土記やその逸文に宗像神が見える例がある。ここでは①・②について検討する。

宗像系式内社と国史見在社については『宗像神社史』に詳述されているが、その後完結した『式内社調査報告』［10］などの調査研究があるので、それらを参考にまとめたのが、表６である。現在その地（旧郡）に存在する神社で、神名帳との対応がかなり確実で異論が殆どない神社は、「比定社」と呼ばれる。いくつかの候補があって統一見解のない場合は、その候補を「論社」という。延喜式神名帳は社名と祭神の数（座）を示すだけなので、表中に太字で示したムナカタの名のある神社以外は、現在の比定社または論社に祭られている祭神から宗像神を祭る神社と判定して表示した。神の座数を示していない神社は全て１座であって、現在複数神が祭られている場合それがどの祭神に当たるかはわからない。

この表を見ると、現在の宗像神の分布と同様、宗像神を祭る神社は古代すでに全国に広く分布していたことがわかる。北は福島県から南は鹿児島県に到るまでの 25 の府県の、平安時代以前に遡る 56 の古社に、宗像神が祭られている。このうち、ムナカタの名があるのは、11 社である。このほかに、隠津島(おきつしま)（オイツシマの訓もある）・奥津島(おきつしま)（同上）・奥津比咩(おくつひめ)・辺津比咩(へつひめ)・恩津島(おきつしま)・伊都岐嶋(いつきしま)（現在の厳島神社に比定）の各社は、社名から見て宗像神を祭っていたと考えてほぼ間違いはないと思われるので（表１・２参照）、これを含めると 17 社となる。

この中には、宇佐神宮・松尾大社・厳島神社などの古来著名な神社が含まれる。現在は出雲大社の摂社であるが、瑞垣内で大社本殿に並ぶ筑紫神社が、タゴリのみを祭るのが注目される。またヤマト王権の勢力がやっと及んだばかりの福島県に、隠津島神社が記されていたことも見逃せない。

ムナカタを名乗る豪族の首長がこの時期以前から大和に根拠を持っていたことは確実である。大和の櫻井市外山(とび)の宗像神社は、天武天皇の最年長の皇子で壬申の乱で活躍した高市皇子(たけちのみこ)が修理させたという記録が残る。同皇子が胸形君徳善の娘尼子娘(あまこのいらつめ)を母とすることはいうまでもない。

表6-1　宗像神を祭る延喜式内社と国史見在社（1）

	式の社名と格	比定社（論社）社名	所在地	現在の祭神	備考
福島県	隠津島（おいつしま）神社*	隠津島（おきつしま）神社	二本松市木幡（旧東和町）	三女神（『調』にタギツトイチキシマ）	3論社の1。もと三宮あり
			郡山市福良町	三女神(明細帳にイチキシマ)	同上
栃木県	二荒山神社（名神大）	二荒山（ふたあらさん）神社	日光市山内	オオナムチ、タゴリ、アジスキタカヒコネ	2論社の1。天平神護二(766)開基と伝える
	胷形神社	胸形神社	小山市寒川	タゴリ	河岸に利根川の上陸地点。周辺に寒川古墳群
新潟県	川合神社	川合神社	胎内市（旧黒川村）	（主）多奇波世神、熊野加夫呂岐櫛御食野命、タギツ	立地からは水神？2論社の1
	多伎神社	多岐神社	村上市岩ヶ崎	タギツ	4論社の1。傍らに滝
			村上市小川（旧朝日村）	（主）タギツ	同上
	都野(つの)神社	都野（とのの）神社	長岡市与板町	三女神、他にオオヤマクイなど	2論社の1
富山県	比売(ひめ)神社	比売(ひめ)神社	砺波市柳瀬	イチキシマ	雄神神社（セオリツ）と関係？
			砺波市中条	イチキシマ	
			小矢部市宮中	タゴリ、アマテラス、イザナギ	
石川県	多伎奈弥神社	滝浪神社	小松市大野町	タゴリ、アマテラス	3論社の1。傍らに滝
	奥津比咩(おくつひめ)神社*	奥津比咩（おきつひめ）神社	輪島市海士町舳倉（へくら）島	タゴリ	舳倉島は元沖の島と。江戸時代弁才天とも
	辺津比咩（へつひめ）神社*	辺津比咩（へつひめ）神社	鳳珠郡穴水町	三女神（他に合祀神あり）	2論社の1。位置は輪島の重蔵神社の可能性も
	鳳至比古(ふけしひこ)神社	櫟原(いちきはら)北代比古神社	輪島市深見町	アマテラス、応神天皇など11神中にタギツ	4論社の1
岐阜県	養基神社	養基（やぎ）神社	揖斐郡池田町	養基大神（イチキシマ？）	治水の神
愛知県	藤嶋神社	藤島神社	あま市七宝町	イチキシマ	白鳳四(676)。海人族が祀る。藤島はもと海中の島
	宗形神社	宗形神社	稲沢市国府宮	タゴリ	現在尾張大國霊神社の摂社
滋賀県	山田神社	山田神社	彦根市宮田町	サルタヒコ、ホムダワケ（応神天皇）、三女神	六代孝安天皇時代
	岡本神社	五社神社	長浜市早崎町（旧びわ町）	アマテラス、スサノオ、三女神	4論社の1
	奥津嶋(おいつしま)神社(名神大)*	大嶋奥津嶋神社	近江八幡市北津田町	奥津嶋：奥津嶋姫（タゴリ？）、大島：大国主命	奥津嶋はもと琵琶湖中の島。大嶋神社も式内社
京都府	松尾神社（二座並名神大）*	松尾大社	京都市西京区嵐山宮町	大山咋（オオヤマクイ）、中津島姫命（イチキシマ）	秦氏が筑紫胸形中都大神を祀る。社殿は大宝元(701)
	（国）**宗像神社**	宗像神社	京都市西京区嵐山中尾下町	奥津嶋姫（タゴリ？）	現在は松尾神社の摂社
	櫟谷（いちひたに）神社*	櫟谷（いちたに）神社		イチキシマ	同上
	鴨岡太（おかもと）神社	上賀茂神社末社山森神社	京都市北区上賀茂本山	スサノオ、櫛稲田（クシイナダ）姫、タゴリ	4論社の1
		厳島神社	京都市左京区静市市原町	イチキシマ	同上
	（国）**宗像神社**	宗像神社	京都市上京区京都御所御苑内	三女神	藤原冬嗣が795勧請と。それ以前から存在？
	日向（ひむかい）神社	日向大神宮	京都市山科区日ノ岡夷谷町	アマテラス、三女神	疑問視もあり
	（国）恩津島(おきつしま)神	老人島(おいとしま)神社	舞鶴市西大浦冠島	天火明（アマノホアカリ）命、イチキシマ	元慶四(880)昇叙。イチキシマ以外の言い伝えも
	和伎坐天乃夫支売神社（大）	和伎坐天乃夫支売(わきにますあめのふきめ)神社	木津川市山城町	天乃夫支売命、三女神	天平神護二(766)伊勢より。三女神も伊勢から飛来と伝える
	桑田神社	桑田神社	亀岡市篠町	イチキシマ、オオヤマクイ、オオヤマツミ	由緒にイチキシマを主とする。湖を干拓
大阪府	加支多（かきた）神社	加支多（かいた）神社	泉佐野市鶴原	イチキシマ、ホムダワケ、天児屋根（アメノコヤネ）命	元は市杵島神社でイチキシマを祀る
	意支部(おきへ)神社	長田神社	東大阪市長田	ホムダワケ、神功皇后、タゴリ（中）	2論社の1。百済帰化人長田使主の祖神？

*『宗像神社史』の認定

（国）は国史見在社、（准国）は六国史以外に古代の記録があるもの

表6-2　宗像神を祭る延喜式内社と国史見在社（2）

	式の社名と格	比定社（論社）社名	所在地	現在の祭神	備考
兵庫県	佐用都姫神社	佐用都姫（さよつひめ）神社	佐用郡佐用町	狭依姫=イチキシマ(風土記には伊和大神の妃佐用都姫と)	干拓・水の神。弥生遺跡あり
	石部神社	石部（いそべ）神社	加西市上野町	三女神	養老三(719)厳島よりと。旧地名は上鴨（加西＝西加茂）
	岸河神社	岸川神社	洲本市上内膳	三女神	河畔にあり
奈良県	高天彦神社（名神大）	高天彦（たかまひこ）神社	御所市北窪	タカミムスビ、イチキシマ、菅原道真	「高天原」の地と伝える
	高鴨阿治須岐託彦根命神社(四座並名神大)	高鴨神社	御所市鴨神	アジスキタカヒコネ、下照比賣、天稚彦、摂社にタゴリ	現在タギリは境内摂社の祭神であるが、四座のうちとされる
	宗像神社（三座並名神大）	宗像神社	桜井市外山（とび）	三女神	天武以前
和歌山県	志磨神社（名神大）	志磨神社	和歌山市中之島	中津島姫命（イチキシマ）	紀ノ川の中州にある。大同元(806)以前に存在
鳥取県	手見神社	手見（てみ）神社	鳥取市国府町	オオヤマクイ、イチキシマ	大同年間(806-810)勧請と伝える
	美歎(みた)神社	美歎（みたに）神社	同上	タケフツヌシ、タケミカヅチ、イチキシマ	香取・鹿島の神を勧請と伝える。もと水神でイチキシマか
	胷形神社	宗形神社	米子市宗像	三女神	背後に宗像古墳群
島根県	布弁神社	布弁（ふべ）神社	安来市広瀬町	オオヤマクイ、イチキシマ	出雲国風土記にあり
	杵築神社（名神大）同社神魂（かむたまの）御子神社	出雲大社境内摂社神魂(かみむすび)御子神社(筑紫社)	出雲市大社町杵築東	タゴリ	出雲大社の第一摂社。出雲国風土記では杵築大社とは別社
	御碕神社	日御碕（ひのみさき）神社	出雲市大社町日御崎	アマテラス、スサノオ（配）三女神五男神、境内宗像神社にタゴリ	出雲国風土記にあり。三代安寧天皇の時スサノオを祀る
岡山県	**宗形神社**	宗形神社	赤磐市是里	三女神	十代崇神天皇の御代勧請と。
	宗形神社	宗形神社	岡山市大窪	三女神	吉備氏が筑紫より勧請。背後に4C後半の古墳
広島県	伊都伎(いつき)嶋神社（名神大）	厳島神社	廿日市市宮島町	三女神（イチキシマが主祭神といわれる）	推古天皇元(593)勅許を得て三神を祭る宮殿創立と伝える
山口県	（準国）**長門宗形神**（寛平三年-891-昇叙の記録あり）	宮尾八幡宮に合祀の旧宗像神社	もと宇部市東万倉	三女神	宗像神社は天平宝字八(764)勧請と伝える
		生野神社に合祀の旧宗像神社	もと下関市武久	三女神（もとタゴリ）	弥生時代の武久浜遺跡の場所にあった
香川県	大水上神社	大水上神社	三豊市高瀬町	オオヤマツミ、ホムダワケ、宗像大神	水神。讃岐二宮。空海が参籠したという
愛媛県	姫坂神社（名神大）	姫坂神社	今治市日吉	イチキシマ	もとは河岸にあった。雨乞いの社
	多伎神社（名神大）	多岐（たき）神社	今治市古谷（旧越智郡朝倉村）	タギツ、スサノオ、多伎都彦	多岐川の扇状地上。タギツが主祭神か
福岡県	**宗像神社**（三座並名神大）	宗像大社（三坐並明神大）	宗像市田島	三女神	
	織幡神社（名神大）	織幡神社	宗像市鐘崎	武内大臣、志賀大神、住吉大神、天照大神、宗像大神、八幡大神、壹岐眞根子	
佐賀県	田島坐（たしまにます）神社（名神大）*	田島神社	唐津市呼子町加部島	三女神	天平三(731)稚武王を配祠と伝える。
長崎県	和多都美(わたつみ)神社(名神大)	海神神社	対馬市峰町木坂	豐玉姫、(配)ヒコホホデミ、宗像神、道主貴神、ウガヤフキアエズ	ワタツミ4社の1（いずれも論社）。ワタツミ・住吉・宗像未分化時代の社か
	（国）**宗像天神**	宗像神社	平戸市田平町	三女神	貞観一三(871)授位
大分県	比賣神社（名神大）	宇佐神宮	宇佐市南宇佐亀山	三女神	八幡大菩薩宇佐宮神社・大帯姫廟神社（いずれも名神大）と並んで同所に祭られている
鹿児島県	加紫久利神社	加紫久利（かしくり）神社	出水市鯖渕	アマテラス、（配）タギリ、住吉三神、ホムダワケ、神功皇后	

*『宗像神社史』の認定

（国）は国史見在社、（准国）は六国史以外に古代の記録があるもの

３．７ 古代における宗像神の位置と現在との比較

延喜式神名帳には、現在社名最多の八幡社は全国でまだ豊前・筑前の 2 社が見えるのみで、熊野系は 5 社、日吉神・稲荷神・春日神・諏訪神などはまだ元社以外見えない。天満社・神明社・白山社などはまだ全く現れていない。この時期に北は陸奥にまで式内社があった宗像神は、式内社以外にも全国にかなり高い密度で普及していたことが推定できる。たとえばほぼ完全な形で残っている天慶（てんぎょう）七年（944）成立の『筑後国内神名帳』には、筑後 7 郡のうち御原・御井・三潴・上妻・山門の 5 郡に宗形の名を冠した神社が計 8 社見える［11］。ところが『平成データ』には、ムナカタの名を冠する神社は筑後地方に全く登録されていない。しかし宗像神を祭る神社は二〇社あり、うち八社が厳島神社である。上記神名帳には厳島の名はないので、宗形社の多くが後に厳島神社に名を変えたのではないか。これは『安芸国内神名帳』で、後年の厳島神社に相当すると考えられる安芸郡の二社が宗方という名で出ていることからも推察できる。このように、神社名は後世の流行神によって変えられやすいこと、それにもかかわらずかなりの比率で祭神が生き残っていることがわかる。

延喜式神名帳から、社名が同一であるか、同一と判断される社の数を集計し、10 社以上ある社名の系統を表 7 に挙げた。ムナカタ系社では、表 6 中の国史見在社等は除いている。ムナカタ系社は、上位の 8 系統の中に入っている。参考までに、同一系統の社名が『平成データ』にどの程度存在するかをも示した。この社数は、現在社数の多い系統に比べると少ないものが多い。

表7　延喜式内社の主な社名系統（10社以上）

番号	系統	社数	平成社数
❶	鴨	19	44
❷	兵主	18	32
❸	ミワ系（大神・美和・三輪）	15	108
❹	物部系	14	14
❺	丹生	14	102
❻	宗像系（奥津島など含む）	13	69
❼	海（わたつみ）系	13	234
❽	石部（いそべ）社	13	30
❾	オオナムチ系（大穴持・大名持）	12	12
❿	倭文（しどり）	11	15
⓫	大国魂	10	125

表 8 の左欄に、現在の系統別社数を多い順に示した。このデータは、『平成データ』を用いて國學院大學がまとめたものである［12］。上位を占めるのは、平安時代後期以降の流行神を祭る社が殆どである。表 7 の古代の系統社のうちでは、賀茂信仰に対応する鴨社が辛うじて 26 位に入っているだけで、他は『平成データ』の社名の上位には入っていない。上位 15 位以内に、ムナカタの 7 社を上回る数の式内社がある神社名はない。

表 8 の右欄に、『平成データ』を用い代表的な神々について、祭神名で検索して名寄せした結果を対比して示す。この上位 7 位までは、左欄の上位の社名とかなりよく対応していることがわかる。すなわち現在の神社の社名の多くは、中世以降の流行神に基づいていることがわかる。

表8　神祇信仰分布の社名からの調査と祭神からの調査との対比

順位	社名で検索	社数	平成社名との対応	祭神で検索	主な表記例	祭る社数	式内社名との対応
①	八幡信仰	7817	①	八幡神	応神天皇・誉田別・大鞆和気	13488	
②	伊勢信仰	4425	②	アマテラス	天照大神・天照皇大神・大日霎貴	11315	
③	天神信仰	3953	⑤⑦	スサノオ	素盞嗚・須佐之男	9211	
④	稲荷信仰	2970	④	穀霊神（豊受除く）	倉稲魂・宇迦之御魂・保食	9046	
⑤	熊野信仰	2697	③	菅原神	菅原（道真）・天満天神	7708	
⑥	諏訪信仰	2616	⑤	イザナギ・イザナミ神	伊弉諾・伊弉冉	7298	
⑦	祇園信仰	2299	⑩⑬	オオヤマツミ	大山祇・大山津見	7066	
⑧	白山信仰	1893		**オオナムチ・大国主**	大己貴・大国主	6183	❷❸❾
⑨	日吉信仰	1724	⑫	愛宕・秋葉神	火産霊・迦具土	3811	
⑩	山神信仰	1571	⑥	タケミナカタ	建御名方・武御名方	3734	
⑪	春日信仰	1072	（①⑭）	**宗像神＊**	表1に示す	3532	❻
⑫	愛宕信仰	872	⑪	春日神	天児屋根・斎主（春日系）	2652	
⑬	三島・大山祇信仰	704	⑨	比叡神	大山咋・日吉	2399	
⑭	鹿島信仰	604	⑧	白山神	菊理姫・白山比咩	2447	
⑮	金比羅信仰	601		スクナビコナ	少彦名・少名彦・少名毘古那	2446	
⑯	住吉信仰	591	②	豊受神	豊受姫・豊受大神	2158	
⑰	大歳信仰	548	㉑	事代主	事代主	2121	
⑱	厳島信仰	530	㉕	ミズハノメ	罔象・水波女	1953	
⑲	貴船信仰	463	⑤	紀伊熊野神	事解男・速玉男・家都御子・夫須美	1940	
⑳	香取信仰	420	㉒	コノハナサクヤヒメ	木花咲耶姫	1847	
㉑	えびす信仰	408	（⑮）	**大物主**	大物主	1778	
㉒	浅間信仰	397	⑯	住吉神	表筒男・中筒男・底筒男	1694	❷❸
㉓	秋葉信仰	362		ヤマトタケル	日本武・倭武	1572	
㉔	荒神信仰	317	⑭	タケミカヅチ	武甕槌・武御雷	1465	
㉕	水神信仰	277		**志賀系海神**	綿津見・少童・豊玉姫	1375	
㉖	賀茂信仰	277	⑲	オカミ神	龗・淤加美	1327	❼
備考	岡田荘司ほか『現代・神社の信仰分布』による		⑰	オオトシ神	大歳・大年	1223	
				オシホ*	忍穂耳・忍骨・押穂根	1011	
				ホヒ*	穂日・菩卑・菩比	912	
				フツ・フル神	経津・布都・布留御魂(春日神除く)	828	
			㉖	**カモ神**	別雷・建角身	790	❹
			⑳	フツヌシ（春日社以外）	経津主・布都主	752	❶
				アマツヒコ*	天津彦根・天津日子根	648	
			㉔	竈神	奥津彦・奥津姫	636	
			参考	神功皇后（八幡神と殆ど重複）	神功皇后・息長足姫・大帯姫	3934	―
				イチキシマヒメ*（宗像神に含まれる）	市杵島姫・狭依姫・厳島姫	3004	―
				タゴリヒメ*（同上）	田心姫・多紀理毘売	1367	―
				タギツヒメ*（同上）	湍津姫・多岐都比売	1253	―
				武内宿弥（八幡神と殆ど重複）	武内宿弥・建内宿禰	745	―
				フツ・フル以外の物部神	饒速日・天香語山・高倉下・宇麻志麻治	319	❹
				丹神	丹生津姫・爾保都比売	138	❺
				大国魂	大国魂	125	⓫
				天羽槌	**天羽槌**	24	⓪

＊八王子神を含む

太字は延喜式に10社以上現れる系統社に対応する祭神

表 7 で上位にある宗像神は、中世以降の流行神を除くと、オオナムチ・大国主に次ぐ数の神社に祭られている。左欄の八幡信仰社と厳島系神社にも祭られているが、前者は 573 社、後者は 571 社でそれぞれその一部に止まる。宗像神の多くが、古代以前から祭られていたことが示唆される。ところが 6000 社以上で祭られている代表的出雲神のオオナムチ・大国主に対応する社名は、左の表には全く出ていない。しかし表 7 の❷❸❾番の社名の神社の現在の祭神を見ると、その多くに オオナムチ・大国主が祭られている。神話の時代にヤマト勢力に屈服した出雲勢力であるが、古代にはその神を祭る神社がまだ有力であったのである。

以上から、全国の神社には古代以前から祭られてきた祭神がかなりの比率で残っていること、そしてその解析により古代以前の信仰の姿が浮かび上がってくることがわかる。有名社の由緒の研究や、現存神社の社名分布などからは、このことは見えてこないのである。

３．８ 顕著な宗像神分布域についての考察

①津軽のムナカタ神社

『平成データ』には、青森県に「胸肩神社」という最も古い名前の一つを持つ神社が７社も登録されている。これらはいずれも旧北津軽郡・西津軽郡・南津軽郡にある。これ以外に、『深浦町史上』（昭和 52 年刊）には、同町（西津軽郡）に 2 社の胸肩神社が記されている。『宗像神社史』と『調』にはこのほかに東津軽郡の 2 社が記録されている(注14)。また『青森県の地名』［13］は、南津軽郡の田舎館村に胸肩神社を記している（この社は現存が確認された）。以上を合わせると、少なくとも昭和期には、12 社もの胸肩神社と 1 社の宗像神社が津軽に存在したことになる。これらの分布を、図 4 に示す。なぜ津軽に、胸肩のような古社名が数多く残ったのだろうか。

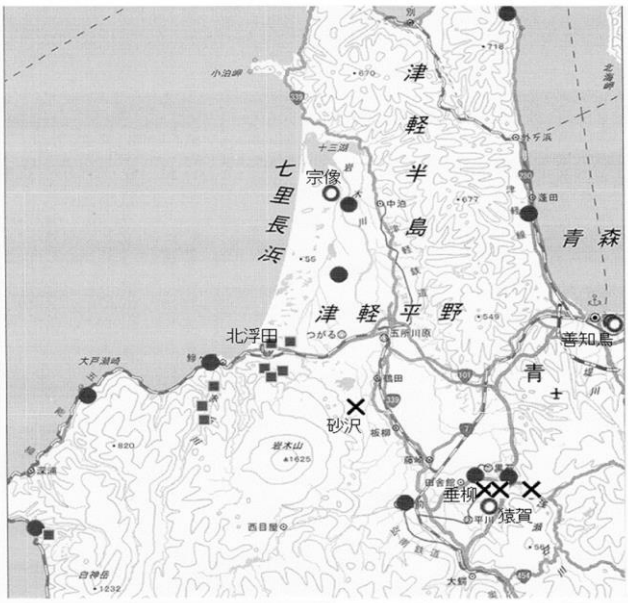


図４　津軽のムナカタ神社と弥生の水田（地理院地図により作製）

●胸肩神社　○その他宗像系神社

■高倉神社　x 弥生の水田

江戸期の資料を見ると、これらの神社の多くは、かつて弁天と呼ばれていた。しかし弘前市品川町と西津軽郡鯵ヶ沢（あじがさわ）町浜町の二社の胸肩神社が、いずれも宝

暦九年（1759）の神社書上帳に胸肩社と書かれ、安政二年（1855）の神社書上帳にも胸肩宮と書かれているのである（他の時期の記録には弁財天堂と書かれている）［14］。この記録が残っていたので、明治の神仏分離の時に胸肩神社と名乗ったことがわかる。もちろん胸肩の名は弁才天より古いので、この名が残っていたことは、中世以前にこれらの社が胸肩の名を持っていたことを示すものである。

弘前市の胸肩神社は、津軽藩のお膝元弘前にある津軽の代表的な古社の一つである（写真 1）。鰺ヶ沢町は西海岸最大の町で、津軽平野の入口に当たる港町である。浜町の胸肩神社は港の入口にあり、いかにも海神の神社らしい（写真 2）。津軽の他の多くの弁才天社は、由緒の古いこの二社に倣って、ほとんどが明治期に胸肩神社と改名したものと思われる。

写真 1　弘前市品川町の胸肩神社

写真 2　鰺ヶ沢町浜町の胸肩神社

胸肩神社にならなかった宗像系神社もある。青森県には戦前までの県社が二社あるが、そのいずれもが宗像神を祭っている。青森市の県庁のすぐそばの善知鳥（うとう）神社は、かつて外ヶ浜と呼ばれた青森市発祥の地にある（写真 3）。版画家の棟方志功はその氏子の家に生まれ、宗像族であることを誇りにしていた。

この神社の祭神が宗像三女神である。江戸時代の文筆家菅江真澄が天明八年（1788）の日記「そとがはまづたい」に、「うとうのみやしろ」を「棟方明神」と記し、宗像の神を祭ると書いている［15］。安政二年の神社書上帳にも善知鳥宗像宮とあるので、純宗像系神社であることは間違いない。

写真 3　青森市安方の善知鳥神社

もう一つの旧県社は、弥生時代中期の水田遺跡垂柳（たれやなぎ）遺跡の近くにある猿家（さるか）神社である。この神社の主祭神は仁徳天皇の時代にこの地方を平定しようとして敗れた将軍というが、このような伝説は東北地方に多く、後世の付会と思われる。この神社は鏡ヶ池という大きな溜め池に接しているが、この池の真ん中にイチキシマを祭る摂社の胸肩神社がある。もともと水田地帯の灌漑用溜池に宗像

神を水神として祭ったのが起源ではないかと思われる。垂柳の「弥生の水田」も当然その恩恵を受けたであろう。その垂柳地区がある田舎館村にも、上記の胸肩神社がある。

写真 4　秋田市河辺松渕の胸形神社

垂柳よりさらに古い前期の「弥生の水田」の跡が、より日本海に近い岩木山北麓の砂沢で発見されている。ここは宗像神の分布するルート上にある。宗像神も日本海沿岸から津軽に入ったと思われる。垂柳遺跡では、遠賀川系(注15)の壺などが出土している。遠賀川系土器は、弥生時代前期のうちに秋田市の地蔵田遺跡まで到達している。この近くには前出の胸形神社が祭られている（写真 4）。ムナカタ神社は、「弥生の水田」および遠賀川系土器とともに、日本海沿岸を北上して津軽に入ったように見える。遠賀川式→遠賀川系土器は、弥生時代のかなり早い時期に水田稲作と共に日本海沿岸に沿って北上するが、表 6 で見るように、宗像系式内社も米子市、舞鶴市、小松市、能登半島の各社、富山県、新潟県と日本海の海の道に沿っている。

最近、遠賀川式土器の誕生地が旧宗像郡内であったらしいという研究が発表されている［16］。遠賀川式→遠賀川系土器の北上が、宗像神の北上と対応していることを支持する知見である。

ところで津軽に来た九州系氏族は、宗像族だけではないらしい。図 4 中に示すように、鰺ヶ沢町を中心に、胸肩神社の分布域内に 9 社もの高倉神社が分布する。高倉の名を持つ神社は、中世の高倉天皇または以仁王（もちひと）を祭る神社を除けば、全国で 29 社しかない。このように集中するのはきわめて異例である。

古代以前に起源がある高倉神社の祭神は、本来高倉下命（たかくらじのみこと）（以下タカクラジ）である。この神は、記紀に神武東征の時に熊野で神武一行を救ったとされるので、熊野地方の 4 社などで祭られている。この神は、『先代舊事本紀（せんだいくじほんぎ）』［17］（以下『旧事紀（くじき）』）に饒速日命（にぎはやひのみこと）（以下ニギハヤヒ）の大和入植以前の子の天香語山命（あまのかごやまのみこと）の別名とされている。この神が、鰺ヶ沢町北浮田町の高倉神社に祭られているのである（写真 5）。ここには他の 8 社と同様に、高皇産霊命（たかみむすびのみこと）（以下タカミムスビ）も祭られている。この神は、延喜式の宮中八神の高御産日神（たかみむすびのかみ）と同一神で、皇室ゆかりの神である。津軽の高倉 9 社は、江戸期の資料では飛竜宮などと書かれ、高倉の名は見えない。おそらく何らかの伝承があって、神仏分離の際この社名になったと思われる。祭神のタカミムスビは、おそらくその際の役人が社名からの類推で指導したものであろう。ただし全国の高倉神社で、タカミムスビを祭神にする例はない。ここにポピュラーではないタカクラジの名が一社とはいえ見られることは、何らかのいにしえの記録があっと考える他はない。もしそうであれば、他の社もかつてタカクラジを祭っていた可能性がある。

この高倉神社の古社が、宗像市の隣の遠賀郡岡垣町にある。その祭る神は大倉主命（おおくらぬしのみこと）と菟夫羅媛命（つぶらひめのみこと）という珍しい神で(注16)、『日本書紀』仲哀紀に仲哀天皇らが遠賀川河口の港に入るときに出てくる。この大倉主命は、タカクラジと同一神と考える人が多い。それはタカクラジとは高倉主がなまって呼ばれたものと考えられるし、タカもオオも美称に過ぎないからである。以上のことから、北部九州の物部系の人々が、宗像神を祭る人々と同様、古代以前に津軽に入った可能性が考えられる。

写真５　鰺ヶ沢町北浮田町の高倉神社

②栃木県の田心信仰

栃木県でタゴリを祭る66社はすべて神名を田心と表記し、『古事記』風の表記は全くない。これはこの信仰が、古くかつ強固であることを示唆する。タゴリのみを祭る神社61社のうち社名がもっとも多いのは滝尾（瀧尾）神社（タキオまたはタキノオと読む）の14社（うち1社は日光滝尾神社）で、うち10社は田心のみを祭り、他神がない。1社はイチキシマを配祠し、3社は他に大己貴命（おおなむちのみこと）（以下オオナムチ）と味耜高彦根命（あじすきたかひこねのみこと）（『古事記』に阿治志貴高日子根（あじしきたかひこね）、以下アジスキ）を祭るが、いずれも筆頭神が田心である。日光神社が8社あるが、これはいずれも田心、オオナムチ、アジスキの三神を祭る。二荒（山）神社 の7社のうち6社もこの三神を祭るが、1社は田心とオオナムチである(注17)。

この三神は、日光二荒山（ふたらさん）神社の現在の祭神である。瀧尾神社はその別宮で、日光二荒山神社のある谷の上流約1kmの白糸滝の上にある（写真6）。現在は本社と同様この三神を祭るが、『調』には田心のみが記されており、かつては中禅寺湖畔の中宮祠と同様田心のみを祭っていたと考えられる。上記14社の滝尾（瀧尾）神社のほとんどが田心のみを祭るのは、この別宮からの分祠であることを示唆する。日光の語源となった二荒（山）神社の多くは日光二荒山神社に合わせて上記三神を祭るが、このほかに田心を祭らない二荒（山）神社が七社ある。そのうち6社はオオナムチを主神としており、二荒山神社本社の祭神が本来オオナムチであったことを示す。滝（瀧）尾神社はこれと独立に白糸の滝の上に祭られ、はじめこの名で普及していたのが、その下流の二荒山神社（現在の日光二荒山神社よりも下流にあった）と一体化され、アジスキが加わって日光三山（男体山・女峰山・太郎山）に対応する三神を祭る神社となってさらに普及したのであろう。

表 8 で見たようにオオナムチは全国で６千社以上が祭る出雲系の主神であるが、栃木県には最多の 334 社で祭られている。このように強い出雲神信仰に伴って、田心が祭られるようになったと思われる。

アジスキは、『古事記』に大国主命とタゴリとの間の子とし、出雲本宗家の系譜を載せる『旧事紀』にもオオナムチとタゴリの子とする。記紀神話にもこの神の挿話がかなり詳しく書かれており、天平五年(733)撰上の『出雲国風土記』 [18]に 5 箇所も出てくるので、古代出雲の重要神であったことは間違いない(注18)。アジスキは全表記を合わせても全国で 225 社が祭るのみで、なかでは栃木県が 46 社と飛び抜けて多い。これも栃木県が、出雲信仰の中心地の一つであったことを示す。このように、宗像神、とくにタゴリについては、その信仰伝播の検討には出雲神との関係が考慮されなければならない。

写真７　小山市寒川の胸形神社

なお栃木県には２社の胸形神社があり、その１社小山市寒川（さんがわ）の式内社（写真 7）は三女神を祭るが、鹿沼市の社は田心だけを祭り、配祠神の中にも田心がある。田心信仰が滝尾（瀧尾）系社のみに限られていないことを示す。

図５ 栃木県のタゴリを祭る主な神社の分布

●タゴリ一神を祭る滝尾神社
〇他神も併祭する滝尾神社
ｘ日光二荒山別宮の瀧尾神社
■タゴリ一神を祭る胸形神社
□三女神を祭る胸形神社
▲タゴリ一神を祭る他の神社

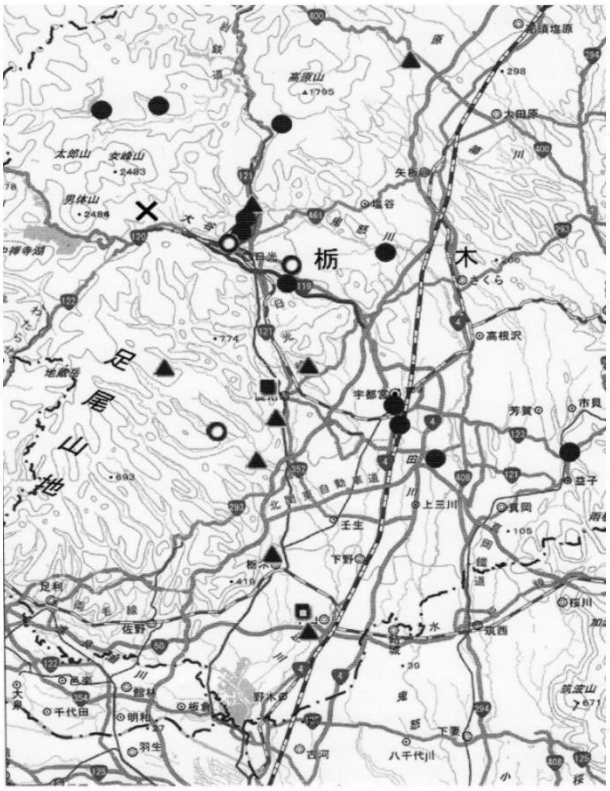


図 5 に、これら神社の県内の分布を示した。ここは、思川の流域である。思川は、はじめ上記小山市の胸形神社の主祭神から田心川と呼ばれていたのが、田心の二字が結合して思川になったと言われている（Wikipedia などによる）。

思川は、足尾山地の地蔵岳東麓を源流とし、東流して鹿沼市の南で平地に出てから壬生町、小山市の西を通り渡良瀬遊水池に入る。図に見るように、この流域にはタゴリを祭る神社が特に多い。タゴリ信仰は、おそらく利根川から栃木県に入り思川を遡ったと考えられる。そして日光市方面に向かい山内の滝の上に祭られた神社が、滝尾神社として拡がったのであろう。

西隣の群馬県でタゴリを祭る四社は、いずれも利根川流域にある。長野県の千曲川上流の佐久市に純宗像系の山田神社があり、上田市には「思姫」を合祀する八幡神社がある。「思姫」は全国で他にも三社が祭るが、栃木県日光市小林（旧今市市）の滝尾神社はオオナムチを併祭し、久留米市の天満神社と高知市春野町の八王子宮にはタギツとイチキシマと共に合祀されていて、いずれも田心の誤記であることが明らかである。

千曲川流域には、弥生時代後期鉄剣など鉄器流入が顕著であることなどから考えても、タゴリーアジスキ信仰は千曲川を遡って毛野国（けぬのくに）（群馬・栃木）にもたらされた可能性が強いであろう。西隣の福島県にも式内の隠津島神社と、4 社の宗像神社があり（江戸時代初期の会津藩の調査［19］では、11 社が記録されている）、宗像神が多い。しかし福島県では、宗像神の中でイチキシマが優勢である。栃木県にもイチキシマを祭る神社は多いが、上記 1 社を除いてタゴリとは共祭されないのが特徴である。栃木県のイチキシマ信仰は、あるいは別途福島県側から伝えられたかと思われる。

③印旛沼周辺の宗像神社群

千葉県の 13 社の宗像神社は、すべて旧印旛沼の北岸に沿って丘陵上に分布する（写真 8 はその 1 例）。印旛沼は、現在ではいくつかの小さい湖沼に分かれているが、かつては利根川に繋がる長大な河跡湖であった。図 6 に郷土史家の小倉博氏による分布概略図を示した［20］。この図に示すように、この宗像神社群と接して、19 社の鳥見神社群（かつては 21 社）がある。またさらに、印旛沼を挟んで 15 社（かつては 18 社）の麻賀多（まかた）神社がまとまって分布する。

写真 8　印西市平賀の宗像神社

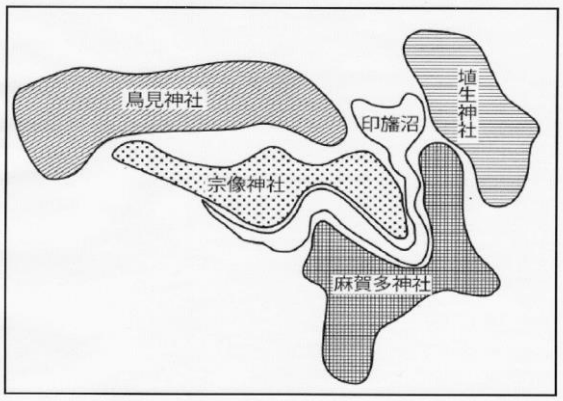


図６　印旛沼周辺の神社群の分布（小倉博による）

この分布が、宗像神を祭る氏族（以下宗像族とする）の役割を示していると思われる。小倉氏によると、麻賀多神社は全国でもここだけに分布する神社で、応神天皇の時代に印波国造（いにはのくにのみやつこ）となったという伊都許利命（いつくりのみこと）を祭る。すなわち地元のローカルな祖先神である。

一方鳥見神社群は、全て物部族の祖神饒速日命（にぎはやひのみこと）（以下ニギハヤヒ）を主神として祭っている[注19]。鳥見の名のある神社は全国でここだけであり、ニギハヤヒを祭る全国の135社のうちでもここが最も多い。この社名は現在殆どトリミと読まれるが、2社はトミと読む。地名もかつてはトミといったようである[注20]。

これらの組み合わせは、大和の櫻井市に見られる。大和の聖山三輪山の南に向かい合うのが鳥見山である。これはトミヤマと読まれるが、すぐその下に鳥見（とりみ）という字名（あざめい）があるので、トリミがトミとも呼ばれたことは間違いない。そしてこの一帯の大字は、外山（とび）である。この地名は、もちろんトミから来たものと思われる。この外山の鳥見山北麓に、前述の式内の宗像神社がある（写真9）。そして鳥見山の西麓桜井には、古社の等彌（とみ）神社がある。この神社の祭神は現在大日霎貴命（おおひるめのむちのみこと）（天照大神（あまてらすおおみかみ）の別名）を祭神としているが、本来の祭神がニギハヤヒとする説も根強い。外山に対して大和盆地の反対側の奈良市石木町に同じ発音の登彌神社があってニギハヤヒ他四神を本殿に祭るが、神社の由緒には本来の祭神をニギハヤヒとしている。神武紀にニギハヤヒが大和に入り土地の豪族長髄彦（ながすねひこ）（『古事記』に登美の那賀須泥毘古（とみ　ながすねびこ））の妹三炊屋媛（みかしきやひめ）（亦の名鳥見屋媛（とみやひめ）、『古事記』に登美夜毘売（とみやびめ））を娶って可美真手命（うましまでのみこと）（『古事記』に宇摩志摩遅命（うましまじのみこと））を生んだとある。このようにトミがニギハヤヒと特別の縁のある地名であるので、等彌神社の祭神もニギハヤヒであった可能性が高い。これらから、上記印旛周辺の鳥見神社の社名と祭神の由来が理解できる。そして宗像神社の鳥見神社群とのつながりも、大和以来であることがわかる。

どうして物部系の氏族が宗像族と共にここに入植したのか。上記小倉氏などは、『続日本後記』承和2年(835)の記事に物部小事大連（おごとのおおむらじ）がかつて板東を征服して匝瑳郡（そうさ）（現在の匝瑳市）を立てることを許されたという由緒が載ることから、この子孫が印旛にも拡がったのではないかと推論している。しかし『旧事紀』の「国造本紀」によると、それ以前に印波と下海上（しもつうなかみ）の国造が任命されていて、支配体制ははっきりしていた。小事連（系譜には大連とは書いていない。その兄が大連であったので、朝廷に一人しかいな

写真９　櫻井市外山の宗像神社

い大連に小事がなれるはずがない）が功績により下海上の最南部を割譲してもらったに過ぎないのである。匝瑳郡と印旛郡との間には下海上郡があり、直接接していない。そして匝瑳郡には現在物部系の神を祭る神社は存在しない。上記推論はおそらく当たらないであろう。

物部系を名乗る古代の氏族はきわめて多かった。京および畿内の古代日本の氏族を分類した『新撰姓氏録』（平安時代初期編纂）によると、「神別」（神代の神々の後裔）の 404 氏のうち、ニギハヤヒの末と名乗る物部系は 107 氏で、最多である。しかし前述のように、ニギハヤヒを祭る神社は少なく、畿内には 16 社しかない。大和にも物部系氏族 7 氏が記録されているが、ニギハヤヒを祭る神社は前記 2 社のみである。物部系氏族でも、おそらく本宗家に属する人々だけがニギハヤヒを祭っていたのではないか。これは本宗家の根拠地があった大阪府に、ニギハヤヒを祭る神社が 11 社集中することからもわかる。

その畿内の物部本宗家は、587 年の「蘇我・物部戦争」で滅びた。本宗家ゆかりの人々はおそらく土地を取り上げられ、各地に四散したであろう。その人々が落ち着いた土地の一つが、印旛だったのではないか。

では宗像族はなぜ物部族の隣に住んだのか。宗像族と物部族との関係については別報で詳述する予定であるが、宗像の周囲の筑豊地方には物部系の神社が多い。前述のように、宗像市の東隣岡垣町の古社高倉神社は、物部神を祭る神社と考えられる。そのほかにも筑豊地方には物部神を祭る神社が多く、宗像市の南隣宮若市の天照神社とその他三社が、ニギハヤヒを祭る。『旧事紀』のニギハヤヒ東征説話に出てくる地名ゆかりの氏族名からも、物部族の故地が筑豊であったとする考えが強い。

以上のように、津軽でも、印旛でも、ムナカタと同様、物部系氏族が宗像族の近くに住むが、決して混住はしないという現象が認められる。これが両者の関係を表しているのであろう。このことは、両者はおそらく出自がかなり異なり、相互の利益供与のため近接して住んでいることを示すと思われる。そして、居住地の状況を見ると、いずれも宗像族が先に到着し、その後物部系氏族が入植したように見られる。これをはっきり示しているのが、印旛の例である。図６の各神の配置から、麻賀多神を祭る地元の氏族の隣にまず宗像族が入植し、続いて物部系氏族が到着した状況が明らかである。

宗像族は、宗像神の広い全国分布が示すように、おそらく通商のために、日本全国に足跡を印し、各所に拠点を作っていた。しかしおそらく縄文以来の海人としての性格上、武力による土地の占拠とは無縁であった。しかしその宗像族が、弥生文化の伝達を始め、各所に弥生集落が成立すると、土地占拠の争いが生ずるようになる。そうすると武力を持つ氏族の後ろ盾が必要になってくる。

印旛の場合宗像族が入植した理由は、その配置から見て、印旛沼の干拓であったと思われる。これは後世のことになるが、『宗像市史』［22］によると、『続日本紀』解工の宗像朝臣赤麻呂が褒賞を受けた記事が載るという。解工とは、土木工事の技術者と考えられている。正史に載るということは、その背後に大きな技術集団が居たことを意味しよう。印旛沼でも、麻賀多神を祭る地元の豪族が、干拓のた

めに宗像系の技術者を呼んだのではないか(注21)。干拓には長い時間がかかるので、宗像族の人が定住することになったのであろう。

物部本宗家ゆかりの人々は、かつての両者の故地でのつながりから宗像族の住む土地を追って入植したのではないか。武力を持つ物部系の人々は、宗像族を護る役割も持っていたであろう。また宗像族は、武力を持つ両氏族の間で、緩衝の役割を持っていたとも考えられる。

以上三カ所の例から、宗像神の広い分布から推測される古代宗像族の広域活動には、有力な友好氏族、特に出雲族と物部族との関わりが強かったことがわかる。

④中国山地の宗像神

広島県は宗像神を祭る神社が最も多いが、どのようなところに分布しているのだろうか。

近年地方自治体の合併が進み、現在の住所からは神社分布の地理的特徴が見えにくくなっている。『平成データ』には、明治年間の神社明細帳に基づくと思われる所在地の郡名がデータに含まれているので、広島県の宗像神を祭る神社をその郡名でソートし、得られた郡別分布を図７に示した。各郡中に書き込んだ上段の数字は各郡の全神社数に対する宗像神を祭る神社の比率、下段の数字は表 5 の純宗像系社（宗像神社を含む）の数である。宗像神は、安芸の厳島神社のある海岸地帯ばかりではなく、内陸部にも多い。特に現在三次（みよし）市の一部となっている旧三谿郡（みたにぐん）で、最も高い集中を示す。なぜこのような山奥に宗像神が多く祭られているのだろうか。

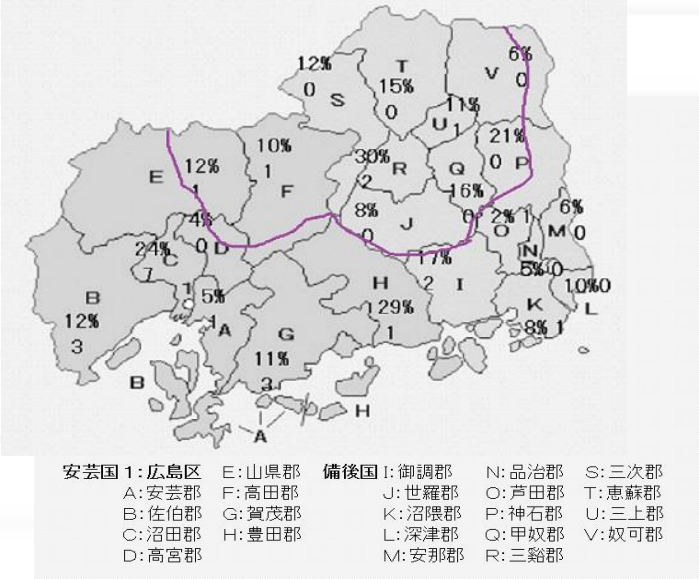


図７　広島県の旧郡別の宗像神を祭る神社の全神社に対する比率（%で表示）と純宗像系社数（宗像神社を含む）

図中の曲線内は江の川流域
（旧郡の図は石田 諭司 氏のホームページの図を利用）

http//www./tt.rim.or.jp/~ishato/tiri/gun/map/1889/34hirosima.htm

このあたりは、島根県江津市に河口を持つ江（ごう）の川の流域である。図７中に示したように、江の川は広島県東部の山間部に広い流域を持ち、流域面積は広島県全体の面積の３分の１に近い。宗像神は、このような江の川の支流に沿って多く祭られている。旧三谿郡は、その名が示すように東・南方からの馬洗（ばせん）川、北方からの神野瀬（かんのせ）川、北西からの西城（さいじょう）川の三川が合流する交通の要地である。江の川から入り、瀬戸内方面に出るにも、岡山県方面に向かうのも、ここを経由することになる。この地帯はまた、岡山県の西部を流れる高梁（たかはし）川の上流域と近い。有名な帝釈峡（たいしゃくきょう）も、岡山県の高梁川支流の成羽（なりわ）川（広島県では東条川）に流れ込む渓谷である。このあたりは内陸水運の要衝であるとともに、岡山県を通って兵庫県まで続く吉備高原の西の入り口である。

この帝釈峡周辺は、縄文時代を中心とする多くの遺跡群で有名である。ここからは、九州南部に起源を持つ縄文前期（約 6000 年前頃）の轟Ｂ式土器が出土している(注22)。この土器は、中国地方では山陰に多く分布し、山陽には少ない。形式から見ても、山陰から帝釈峡経由で山陽にもたらされたと見られている［23］。この土器は、最近宗像市のさつき松原遺跡で、これに続く時期の曽畑（そばた）式土器と共に出土している［24］。これらの形式の土器は、遠賀川河口から下流域の多数の貝塚から出土しており、さらに海を渡って釜山市の東三洞（トンサンドン）貝塚など朝鮮半島南部の遺跡からも出土していて、北部九州海人族の広域活動で拡散したものと考えられている。曽畑式土器は沖ノ島からも大量に見付かっており、これらの土器の伝播に宗像から遠賀川河口付近の海人族が関与した可能性が高い［25］。この時期に宗像神信仰がすでにあったかはわからないが、宗像海人族が縄文時代以来中国山間部とつながりを持っていたことが推定できる。

そのことをさらにはっきり示唆する例が、すぐ隣の地域にある。

弥生時代中期から後期のはじめにかけての中国地方や愛媛県などの諸遺跡から出土する奇妙な形の土器があり、その形から分銅形土製品と呼ばれる。図 8 の左に示した例は、弥生時代の出雲を代表する松江市の西川津遺跡から出土したもので、中期中葉のものと見られている。島根大学の三浦清氏らの研究によって［26］、この土製品は岡山県北部から広島県北東部にかけて分布するクローム鉄鉱というきわめて希少な鉱物を原料として作られていることがわかった。またこの遺跡から出土した北部九州型の漁業用の石錘（せきすい）（弥生時代前期から中期）も同一の原料から作られていることがわかった。図 8 の鉱床分布に見るように、この鉱物は先述の西城川、成羽川と岡山県の高梁川、鳥取県の日野川の上流域に分布している。上記帝釈峡は、その西端に当たる。そしてこの地域には、同図中に示すように、宗像神を祭る神社が集中的に分布する。西川津遺跡との関連について言えば、土地を離れられない農民に代わって、宗像神を祭る人々が原料の採取と運搬に関わったことを推測させる。

クローム鉄鉱に限らず、高梁川上流域には多くの鉱産資源がある。このことは弥生時代から知られていたらしい。その情報を弥生集落にもたらし、採取と運搬にも携わったのが、宗像神を祭る人々だったのではないだろうか。

鉱床が岡山県側に多いのと対応して、宗像系神社も岡山県側に多い。分銅形土製品の出土が岡山県に最も多いのと対応しているようである。これは宗像族が分水界を越えて瀬戸内方面へのルートを開拓していたことを示す。前述の例から見て、このような南北交通の起源は縄文時代にまで遡るようである。

ムナカタと縁のあるこの時期の出雲のその他の出土品に、中国系の土笛（陶塤（とうけん））が挙げられる。西川津遺跡からは、隣り合うタテチョウ遺跡と合わせて、38 個も出土している [27]。もちろん日本最多である。この土器の出土は、旧宗像郡の 2 個（宗像市と福津市）が最西端で、ムナカタ経由で日本海沿岸に広まったものと考えられている。

西川津遺跡出土の分銅形土製品

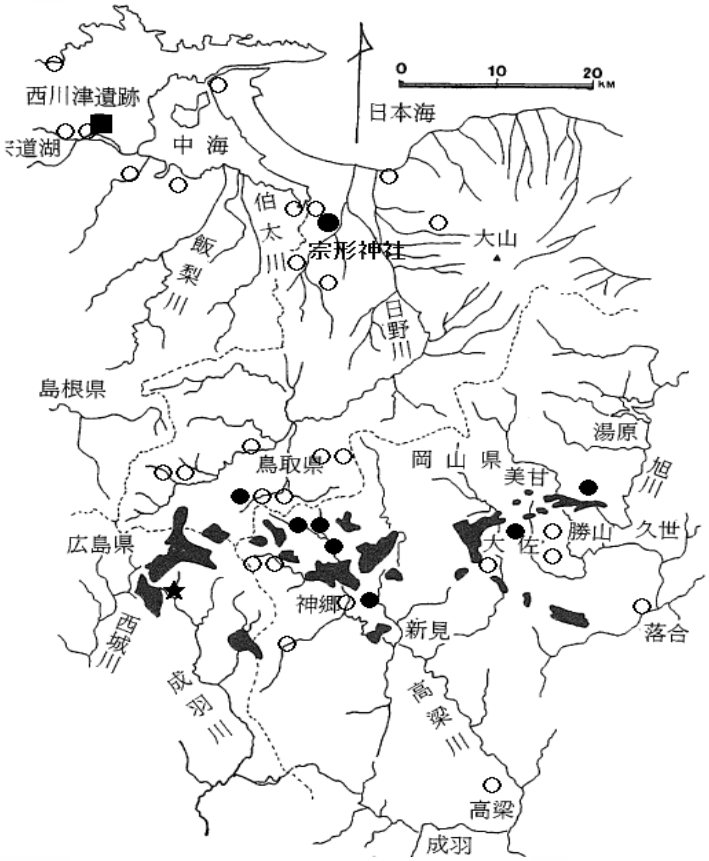


図８　西川津遺跡出土分銅形土製品の原料のクローム鉄鉱産地
および宗像神を祭る神社の分布（三浦清らの図を改変）

● 宗形神社　● 純宗像系神社　○ 宗像神を祭る神社
★ 帝釈峡　■西川津遺跡

上記二例より以降に重要となったと思われる中国山地縦断ルートが、図９に示す丹波市の氷上回廊（ひかみかいろう）を通るルートである。このルートの分水界の高さは 95m しかなく、重量物を水運で運ぶのに適している。このルートの入口は舞鶴港外の栗田湾に注ぐ由良川であって、河口から約 10km 遡った河畔にタゴリを祭る志高神社がある。福知山市の東で土師川（はぜがわ）に入りさらに竹田川に入るが、このあたりにも宗像神を祭る神社が多い。竹田川流域には市島町という地名もある。丹波市春日町で本流と分かれ、黒井川を西流し突き当たる辺りにタゴリを祭る楯縫神社がある。ここを南に折れると分水界で、殆ど高低差なく加古川の流域に入る。このルートに沿って宗像神を祭る神社が多いが、中でも集中するのが、西方に分岐する万願寺川に沿った加西（かさい）市域である。

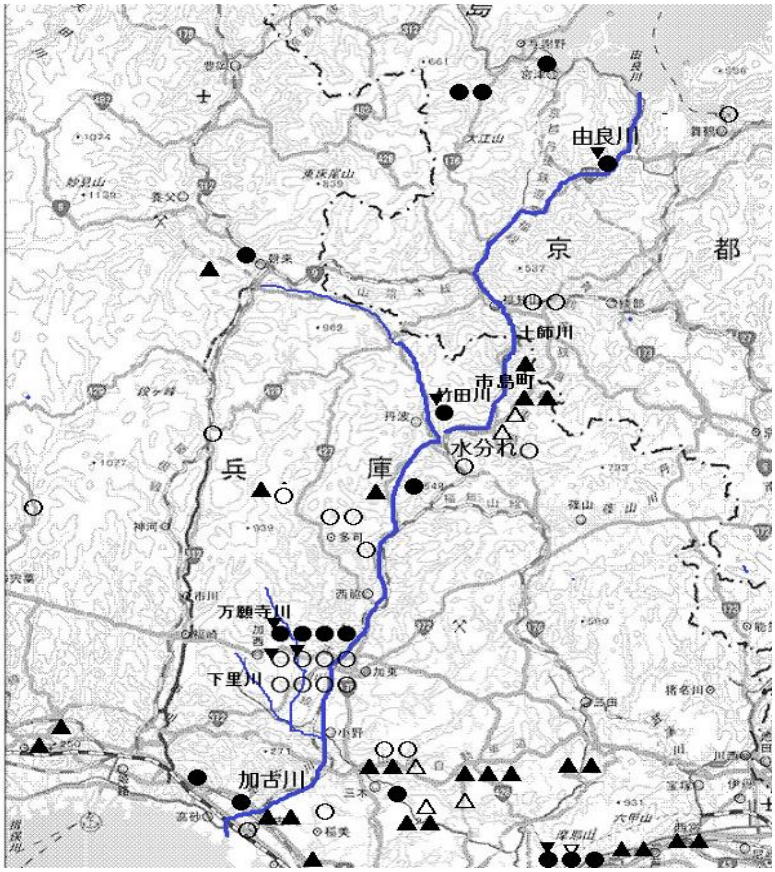


図９　兵庫県氷上回廊とその周辺の宗像神を祭る神社
（国土地理院地図を利用）
●純宗像系神社　○その他の宗像神を祭る神社　▲宗像神のみを祭る厳島系社
△その他の厳島系社 ▼を付したのはタゴリのみを、
▽を付したのはタギツのみを祭る神社を示す

写真 10 に、加西市の三女神のみを祭る石部（いそべ）神社を例として示す。石部社が延喜式に 13 社も見えることを先に述べた。イソベを名とする神社（磯部と書かれることが多い）は全国で 30 社あるが、おおむね出雲系の神を祭り、宗像神を祭るのはここだけである。祭神名として多いのは、（天日方（あめひかた））奇日方命（くしひかたのみこと）（以下クシヒカタ）である。上記分水界（水分（みわか）れ）にあるイソベ神社も、この神を主神と

している。この神は『旧事紀』にオオナムチ三世の孫として出ていて、父はオオナムチとタギツとの子八重事代主神（やえことしろぬしのかみ）とされている。イソベ社に出雲の主神オオナムチよりもこの神が多いのは、このルートが比較的後で開発されたからであろうか。

写真 10　加西市上野の石部神社

このルートに沿って、宗像神でもタゴリを祭る社が多く、アジスキを祭る社もあることは、栃木県と同様鉄器の流入に関係があるように思われる。このルートは、弥生時代後期に丹後に多くの鉄器製造基地が開かれた後、重量物である鉄を、鉄の欠乏していた畿内方面に運ぶために利用されたのではないか。

加西市とその周辺には、非常に多くの溜池が存在する。前述の宗像族の水理土木技術との関連も考えられる。出雲族などと協力してこの通商ルートを開発した宗像族の人々が、その技術を買われて住みついたものであろうか。この辺りは、加古川やその支流が山間部から平地に出る地形で氾濫を起こしやすかったと思われ、小雨地帯でもあるので溜池の必要性が大きかったであろう。

加古川河口付近に厳島系の神社が多いのには、安芸の厳島神社の影響もあると思われる。これに続く神戸市に、三女神それぞれを単独で別社に祭る三社があるのが注目される。その一つ、タギツを祭る三宮神社が神戸三宮の名になっている。

３．９ 宗像神が祭られた時期についての考察

以上の宗像神を祭る神社の分布状況を見ると、かなり多くの社が中世の流行神のような親神社からの勧請では全く理解できず、過去の宗像神を祭る人々の全国的活動を反映していると考えざるを得ない。そして歴史時代には、「解工」として推定される活動以外に、ムナカタの名のある人々が全国的に勢威を振るったという記録もないので、宗像族の広域活動は主に有史以前であったと考えられる。

そのような古代の活動は、縄文時代ムナカタ周辺に根拠を持っていた海人の広域活動に起源があったように思われる。そこで養われた全国の地理や物産に関する知識の蓄積が、弥生文化の東漸に当たって大いに力を発揮したらしい。具体的には、北部九州に収まりきれない稲作農耕民集団が各地へ移住を企てる際に、有望地の紹介や水先案内を務め、その後の各集落間の交易や有用資源探索とその流通など、現代の総合商社的な活動を担っていたと推定することができよう。このような活動は、土地から離れにくい農耕民にとって、きわめて好都合であったと思われ、相互に持ちつ持たれつの関係を築いていたであろう。そしてムナカタから遠く離れた土地で強固な宗像神信仰が維持されているところから見て、各地域の求めによって定着していた場合も多かったに違いない。

このような広域活動は、中央集権国家が確立し律令体制が敷かれるとその余地がなくなり、秩序を乱すとされて規制されるようになったと思われる。歴史資料にその痕跡を求めると、まず宗像三神が誕生する誓約神話がある。この「うけい」神話については別報で解析する予定であるが、それ以前に宗像神を祭る人々の活動が全国に拡がっていたにもかかわらず、この神話では三女神の活動を「海北道中」に限定していることが重要な意味を持つと考えられる。つまり「国内交易はもう結構だから朝鮮半島との交通路に活動を限定しなさい」という意味に受け取れるのである。

これと同一文脈の『日本書紀』の記事として、応神天皇の三年に、処処の海人が命に従わないので、阿曇連（あずみのむらじ）の祖大浜宿弥（おおはまのすくね）を遣わしてそのソバメキを平らげ、海人（あま）の宰（みことも）としたことが載る。これは、これまで広く国内航路で活躍していた宗像海人族を締め出し、安曇族の首領に海人の統括を委ねたと解釈できる。このあと応神の五年に、「諸国に令（のりごと）して海人及び山守部を定む」とあるので、明らかに全国の海人を、諸国の国造を介して中央の統制下に置いたのである。

このような措置が取られた理由は明らかではないが、神功皇后伝説を信用するとすれば、平和的な通商活動を旨とするムナカタの海人が、四世紀後半以降と考えられる朝鮮半島への武力侵攻に協力しなかったのが理由ではないか。『日本書紀』によれば、宗像海人と関係があったと考えられる（あるいはその代表であった可能性がある）岡県主（おかのあがたぬし）の熊鰐（わに）が(注23)、はじめ仲哀天皇と神功皇后を大歓迎したのにその後の記述が全くなく(注24)、朝鮮半島への航路に不案内な吾瓮（あへ）の海人（新宮町沖の相島と考えられる）や磯鹿（しか）の海人（福岡市の志賀島と考えられる）に国見をさせて、後者が山から島が見えたというのでやっと渡海したという。案内役がいないため神功皇后が困った様子がわかる。住吉神の創始も神功皇后の出兵に絡んでおり(注25)、宗像神に代わる朝廷に従順な海神（とそれを祭る海人族）が必要であったと思われる。神功皇后が実在の人物かは疑問があるにしても、広開土王碑文［28］(注26)から倭国が４世紀末から５世紀初めにかけて朝鮮半島南部 に出兵していたのは事実であり、この伝説はそれを反映していると思われる。

四世紀後半に始まるとされる沖ノ島祭祀は、まさにこの時期に対応している。誓約（うけい）神話が創られ宗像神が三神化されたのも、この頃ではないか。原則として古代氏族が複数神を祭ることはないので（祖神の家族神を共祭する場合は除き）、神名の性格が全く異なる三神が共祭されるのはきわめて異例であり、そこには政治的意図が感じられる。本報で見た祭神分布から、宗像海人族がはじめに祭っていたのはイチキシマー神であったことは疑いない。

本報で見た宗像神の全国分布の特徴の多くは、ヤマト王権が確立したとされる 4 世紀以前の、宗像海人族の広域活動を反映していると思われる。

４．まとめ

主として神社本庁が平成 7 年に公表した全国の神社データに基づいて、全国の宗像神を祭る神社の祭神の内訳およびその分布を調べた。その結果全国で 3500 社以上が宗像神を祭ることがわかった。そのなかで約 600 社は明治初期の神仏分離の際に八王子が牛頭天王（ごずてんのう）八人の王子が記紀神話の三女神五男神に置き換えられたものと推定されたので、これを除く約 2900 社について、都道府県別の分布とその内訳を検討した。

宗像神は、沖縄県を除く全国の都道府県で祭られている。広島県の 240 社が最も多く、宗像大社お膝元の福岡県は 141 社と全国で五番目であり、全神社に対する比では全国の平均以下に過ぎない。

宗像神は、その誕生神話にあるように三神がセットで祭られていることはそれほど多くなく、全体の 28%に過ぎない。最も多いのはイチキシマー神を祭る神社で、1755 社と全体の 60%を占める。その比率は関東・東海・近畿の各県に多い（三女神には非常に多くの表記があるので、各神の全表記をそれぞれタゴリ・タギツ・イチキシマで代表させる）。その他の二神のそれぞれ単独と、三神のうちの二神の組み合わせはおおむね少ないが、栃木県ではタゴリのみを祭る神社が 61 社と突出して多い。

イチキシマー神を祭る神社が多いことについては安芸の厳島神信仰や近世の弁天（弁才天）信仰の影響が考えられるが、解析の結果これらが祭神分布に大きな影響を与えてはいないと考えられた。

多くの神社が宗像神を祭るにもかかわらず、ムナカタ（ムナガタ）の名を持つ神社は 69 社と少ない。その表記には宗像だけではなく、胸肩、胸形、宗形、宗方などの古名を持つ社がある。古名を持つ社の多くは宗像からは遠方の社で、とくに津軽に 7 社の胸肩神社があるのが注目される。このほかに宗像神のみを主祭神とする社はかなり多く、これを合わせると純ムナカタ系社は少なくとも現在でも 950 社以上存在する。

古代の歴史史料で見ると、平安時代の延喜式神名帳（えんぎしきじんみょうちょう）にムナカタの名のある神社が 7 社あり、そのほかに隠津島（おきつしま）などムナカタ系の名の神社が 6 社ある。これは祭神のわかる式内社ではベスト 8 に入る。その他歴史史料に出る神社と現在宗像神を祭る神社を加えると、福島県から鹿児島県まで、全国の 56 の古社に宗像神が祭られている。その他断片的な記録から、延喜式神名帳に採録されにくい地方では宗像神がさらに高い比率で祭られていたと推定される。

現在の神社名を多い順に並べると、15 位以内にムナカタの 7 社を上回る数の式内社がある神社名はない。すなわち現在の神社名はほとんど、中世以降の流行神による名になっているのである。古代以前に起源を持つ神で現在最も多く祭られているのは大己貴命（おおあなむちのみこと）（大国主命）などと書かれる出雲の主神で、今でも全国 6000 社以上で祭られているが、現在の社名には殆ど残っていない。宗像神は古代の神のうちではこれに次ぐ数の神社に祭られている。このことから、神社名を調べるだけでは古代以前

からの信仰の姿は全くわからないこと、しかし祭神としてはかなりの比率で残っているので、これを集計することでその姿が見えてくることが確認できる。

次に上記の集計結果から、宗像神が特に集中して祭られている地域の状況を、文献資料や考古学的知見などと対比して検討した。

津軽地方には、『平成データ』に他の文献を合わせると 12 社の胸肩神社と 1 社の宗像神社が記録されていて、そのほかに古来宗像神を祭ることが明らかな善知鳥(うとう)神社などがある。江戸時代の記録ではその多くは弁天宮と呼ばれていたが、少なくとも 2 社に胸肩の名が、一社に棟方の名があるので、ムナカタは古くから伝えられてきた社名と思われる。これらの分布と重なって、4 カ所で弥生時代前期から中期はじめまでの水田跡が発掘されており、遠賀川系土器も出土している。秋田市にも胸形神社があり、その近くに弥生前期の集落も見出されているので、これらムナカタ社の起源は弥生時代に遡る可能性がある。また津軽の宗像神の分布域に重なって、全国で他に例がない 8 社の物部系高倉神社が集中する。これも宗像市の隣町岡垣町の高倉神社との関連が考えられる。

栃木県には、三女神のうちタゴリのみを祭る社の数が 61 社と、全国で突出している。その社名で最も多いのは滝（瀧）尾神社で、これは日光山内の日光二荒山(ふたあらさん)神社別宮の瀧尾宮から広まったと見られる。日光二荒山神社は大己貴命(おおなむちのみこと)と味耜高彦根命(あじすきたかひこねのみこと)（大己貴命とタゴリとの間の子とされる）の出雲二神を共に祭る。この二神も栃木県が国内最多である。多くの日光系の神社の殆どは、これら三神の一神以上を祭る。栃木県には 2 社の胸形神社があるが、その 1 社はタゴリのみを祭るので、今は三女神を祭る式内社（延喜式には一座）もやはりタゴリを祭っていたと見られる。この両社は思（＝田心(たごり)）川に沿っており、タゴリ信仰はその流域を経て日光に入ったと見られる。味耜高彦根命は鉄器文化との関係が指摘されており、宗像神の分布と鉄器の出土状態から、タゴリと味耜高彦根命への信仰は弥生時代後期ころ千曲川を遡り毛野国(けぬのくに)へ入り、利根川から思川流域に達したのではないかと思われる。

千葉県の国内最多の 13 社の宗像神社群は印旛沼(いんばぬま)に沿っていて、西方には物部の祖神饒速日命(にぎはやひのみこと)とその家族を祭る 19 社の鳥見神社群があり、沼を挟んだ東方に地元の祖神を祭る 15 社の麻賀多(まかた)神社群が分布する。大和の鳥見山の北麓の櫻井市外山(とび)に式内の宗像神社があり、その西麓には本来饒速日を祭っていたと思われる等彌(とみ)神社がある。上記の鳥見は大和の同地名から来たと思われ、宗像と物部とは大和以来の繋がりと考えられる。饒速日を祭る神社がこのように集中的に鎮座する例は他にないので、この人々は物部本宗家に近い人々が集団移住した可能性が強い。その動機としては、物部本宗家が敗れた 587 年の「蘇我・物部戦争」が考えられる。本宗家に近い人々が畿内を脱出するとき、古くから縁が深く地理的知識の豊富な宗像族の人々に移住先の案内や紹介を頼んだのではないか。神社の配置から、宗像族はそれ以前に印旛沼干拓のため入植していたと思われる。宗像族が土木技術に優れていたことは、文献に出る。

広島県には全国最多の宗像神を祭る神社があるが、その分布は必ずしも安芸の厳島神社がある海岸部にばかり集中していない。最も密度が高いのは内陸部の旧三谿郡（みたにぐん）で、ここは江の川本流（可愛川（えのかわ））へ北・東・南から支流が流れ込む内陸水運の要衝であるとともに、岡山県を通って兵庫県まで続く吉備高原の西の入り口である。すぐ東の帝釈峡周辺は、縄文時代を中心とする多くの遺跡群があり、そこで九州南部起源の轟Ｂ式土器が出土している。この土器は、宗像市を含む九州北岸の多くの遺跡から出土しており、海を渡って対馬や朝鮮半島南岸のいくつかの遺跡からも見付かっているので、北部九州の海人が広めたものと見られている。中部地方では島根県の沿岸で多く、瀬戸内地方には少ない。山陰から帝釈峡附近を経由して山陽へ達したと見られている。

海人族が内陸部の水運にも携わったことをよりはっきり示すのは松江市の西川津遺跡で、ここから出た弥生時代中期の分銅形土製品と石錘が、吉備高原の北の山岳地方に広く分布する鉱物を原料として作られていることがわかっている。そして宗像神を祭る神社が、西川津遺跡附近から式内の宗形神社のある米子へ出て、日野川を遡りその鉱床に達するまでの途中に多く、特に日野川の上流と岡山県新見市の鉱床中心地に集中する。西川津遺跡からは上記轟Ｂ式土器も出土しており、九州海人族とのつながりが縄文時代から始まっていることが分かる。宗像市と福津市が伝播の起点となっている中国系の弥生の土笛も、ここで全国最多の数が出土している。

この時期以降に重要となったと思われる中国山地縦断ルートが、丹波市の氷上回廊（ひかみかいろう）を通るルートである。このルートの分水界の高さは 95m しかなく、重量物を水運で運ぶのに適している。弥生時代後半山陰地方への鉄器流入が活性化し、後期～終末期になると丹後地方で鉄器製造が行われ、多くの鉄器が保有されていた。一方「畿内」の中央部にはこの時期殆ど鉄器が見られないが、古墳時代に入ると鉄器の出土か急増する。考古学的な証拠は十分ではないが、このルートの重要性が高かったと推定される。このルートにも、入り口の由良川河口のタゴリを祭る志高神社はじめ、ルートに沿って多くの宗像神を祭る神社がある。出口に近い加古川支流の万願寺川流域には宗像神を祭る古社が集中し、河口付近から畿内へ向かう辺りにも厳島系を中心とする宗像神を祭る多くの神社がある。

以上のような宗像神を祭る神社の広域的な分布状況を見ると、その大半が中世以降の流行神のような親神社からの勧請ではなく、宗像神を祭る人々のかつての全国的活動を反映していると思われる。そしてムナカタの名のある人々が歴史時代全国的に勢威を振るった記録もほとんどないので、宗像族の広域活動は主に有史以前であったと考えられる。

このような古代宗像族の活動は、縄文時代の海人の広域活動に起源があったと思われる。そこで養われた全国の地理や物産に関する知識の蓄積が、弥生文化の東漸に当たって大いに力を発揮したらしい。具体的には、北部九州に収まりきれない稲作農耕民集団が各地へ移住を企てる際に、有望地の紹介や水先案内を務め、その後の各集落間の交易や有用資源探索とその流通など、現代の総合商社的な活動を担っていたと推定される。

このような自由奔放な広域活動は、中央集権国家が確立するとその余地がなくなり、規制されるようになったらしい。宗像三女神誕生の誓約（うけい）神話には、三女神の任務が「海北道中」に限定されている。これは、祭神分布から推測されるそれ以前の宗像族の全国的活動のイメージと大きく異なる。この神話は、宗像の海人が国内交易活動から軸足を移し朝鮮半島へのルートの業務に専念することが求められたと受け取れる。神話の時代以降『日本書紀』に海人としての宗像族に関する記事がなく、他の海神や海人に関する記事のみが見えるのも、この推定を支持する。

このような措置が取られた理由としては、平和的な通商活動を旨とする宗像海人族が、4 世紀後半以降のヤマト王権の朝鮮半島への出兵に、はじめは協力しなかったためではないか。4 世紀後半に始まるとされる沖ノ島祭祀は、まさにこの時期に対応している。誓約神話が創られ宗像神が三神化されたのも、この頃ではないか。神名の性格が全く異なる三神が共祭されるのはきわめて異例であり、そこには政治的意図が感じられる。

以上のことから、本報で見た宗像神の全国分布の特徴の多くは、ヤマト王権が確立したとされる 4 世紀以前の、宗像海人族の広域活動を反映していると思われる。

注

(注1) 「津屋崎古墳群」は、そのうち保存状態のよい 41 基の「新原（しんばる）・奴山（ぬやま）古墳群」に最終的に絞られた。

(注2) 応神紀３７年阿知使主（あちのおみ）が天皇の命令で呉（くれ）から連れ帰った工女の一人を胸形大神が所望した件と、履中紀５年筑紫の三神（宗像神とされる）が宮中に現れて「なぜ我が民を奪うのか。後悔することがあるであろう。」と脅かしたが、宮廷では祈っただけで祭りを行わなかった件など。

(注3) このような「名寄せ」による集計では、把握できなかった祭神表記が発見される可能性が排除できない。従ってここで記す神社数は、下限の価と認識しておかねばならない。

(注4) 本報ではいずれも岩波文庫版［4］［5］による。

(注5) 岩波文庫版『日本書紀』には、タゴリは「タコリ」、イチキシマは「イツキシマ」という古訓を採用している。

(注6) 現存神社数は、この表の数字をかなり上回ると思われる。それはまず、現在も存在しているにもかかわらず収録されていない神社があるからである。宗像市内でも、昭和７年の『宗像郡誌』［7］（以下『郡誌』）では大島に中津宮以外に 12 社が記録されており、現在も中津宮とその境内社を除いて少なくとも 8 社以上の神社が確認されるにもかかわらず、全く登録されていない。これは、これらを管轄する宗像大社が一括して登録している、という理由によるらしい。『郡誌』の 12 社と確認した 8 社の名はほとんど一致しないので、大島には 12 社を上回る数の神社があったことになる。ムナカタを名乗る神社でも、後述の秋田市河辺町に胸形神社が現存し、『河辺町史』（昭和 60 年）にも記載されているが、この神社は『平成データ』に入っていない。

また記載に祭神が欠落している神社も多少ある。特に兵庫県の旧神埼郡には、多くの神社に祭神の記載がない。

表 3 の全国の宗像神を本殿に祭る神社数 3532 社は、『調』の 4370 社に比べ 19%少なく、『平成データ』の全社数の昭和 20 年の全社数からの減少率 22%にほぼ見合っている。社数についての『調』の調査が、かなり信頼できることを示している。そして戦後の神社の廃絶がある程度あったとしても、『平成データ』の捕捉率にある程度の限界があることをも示す。従って以下の検討では必要に応じて『調』を参照することにする。

(注7) 牛頭天王信仰は仏教に起源を持ち中国で発達した俗信であるが、奈良時代までには日本に入り、疫病よけの祇園信仰となってのち全国に広く流行し、夏の祇園祭や茅の輪くぐりなどを生んだ。

(注8) 延喜（えんぎ）5年（905）編纂が開始され延長5年（927）に完成した格式（律令の施行細則）を、延喜式という。その中に官社に指定された全国の神社2861社（祭神3132座）の一覧である神名帳（じんみょうちょう）があり、「延喜式神名帳」と呼ばれる。これに含まれる神社を「式内社」と呼ぶ。大小の区別があり、大社の中には神験が高いとされて名神祭（みょうじんさい）を受ける社があって、これを名神大社（略して名神大（みょうじんだい））と呼ぶ。ムナカタでは宗像神社と織幡神社が名神大である。式内社は、その性格上五畿内とその周辺に多く、地方には少ない。東北は南部に限られる。

(注9) 田井信之の『日本語の語源』［8］によれば、「ウ」音が弱化すると「イ」音になる古代の例は多い。特に「イ」がはじめにあるとき、音韻調和でイツクがイチキになるのはごく自然である。厳島（いつくしま）の名は、最も古い音を留めていると思われる。

(注10) 弁天様になったのは、イチキシマだけではなく記紀神話のウカノミタマなどの別神もある。ウカノミタマは倉稲魂あるいは宇迦之御魂などと書かれる日本の代表的な穀物の神様（穀霊）で、稲荷神社の主祭神である。しかし『平成データ』には、ウカノミタマを祭る弁天社は三社（福島・長野・愛知県）しか見えない。うち福島・長野ではイチキシマをも祭っている。

宗像神でも、タゴリのみ（山形・長野）とタギツのみ（神奈川2社）を祭る弁天社もある。そのほかに豊玉姫（静岡・千葉）、瀬織津姫（静岡・富山）を祭る場合もある。一部の地方では、その土地で強い信仰を集めていた女神が弁天様とされたのではないか。このことは、弁天信仰が広まる以前に、イチキシマ信仰がかなり広く存在し、かつ深かったことを示唆していると思われる

(注11) 宗像神のない4社のうち、三次市の宗像神社は、『宗像神社史』・『調』にタゴリ、今治市の宗方八幡神社は『神社史』『調』にイチキシマとしている。諫早市と山鹿市の宗方八幡神社は小字宗方にあるので、かつては宗像神が祭られていたと思われる。土佐市の宗像神社は祭神が記されていないが、『宗像神社史』と『調』にはイチキシマとある。

(注12) 『日本書紀』以降『日本三大実録』までの六国史に見える神社で、通常は式内社以外をいう。そのほかの史料に見える神社も含めることもある。

(注13) 貞観（じょうがん）5年（863）の太政官の命により諸国の国司が作成・提出した神名帳で、現在18国の神名帳が残る。

(注14) 『宗像神社史』と『調』が同一資料（「神社明細帳」）に基づいていることを示唆する。

(注15) 縄文土器の技法を残しながら遠賀川式土器を模倣した土器をいう。最近は「類遠賀川式土器」という名称も使われる。

(注16) 他に岡山県の大倉神社に大倉主が、長崎県の和多都美神社と遠賀郡の他の二社に両神が祭られるのみである。

(注17) これら社名の関係は、はじめフタアラ（フタラ）と呼ばれていた社名が二荒と表記され、これがニコウとも読まれたため、好字を当てて日光の名になったと考えられる。

(注18) 『古事記』にアジスキを謡う歌謡があり、「み谷二（ふた）渡らす」とあるので、一般に雷神と考えられている。しかしこれが製鉄または鉄器製造の情景を表すと考える人もある。大和の鴨族の主神でもある。

(注19) 1社は香取鳥見神社と称し香取神宮の神である経津主命（ふつぬしのみこと）を、また1社は鳥見愛宕神社と称し愛宕神を共祭しているが、その他は全てニギハヤヒのみか、これにニギハヤヒの后神御炊屋（みかしきや）姫（登美屋（とみや）姫ともいう。トミにゆかりの名前である）やこの両神の子宇摩志摩治命（うましまじのみこと）（表記はいずれも多様）を共祭する。いずれも『日本書紀』神武紀で、神武天皇が大和に入ったときそこを治めていた一族の名である。

(注20) 平安時代中期に作られた辞書『和名抄』（和名類聚抄）の 印旛郡に言美郷が記されているが、これは登美の誤りかとされる［21］。

(注21) 宗像族がこのような水理土木技術を身につけたのかは、かつて宗像に深い入り海があって、その後水田地帯に変わったこととの関係があると思われる。この点は別途考察が必要である。

(注22) 熊本県宇土市の轟貝塚から名付けられた。後出の曽畑式も、同市の曽畑貝塚により名付けられた。

(注23) 遠賀川河口部一帯は、かつてオカと呼ばれていた。

(注24) 熊鰐は、仲哀天皇を周芳の沙麼（さば）の浦（防府市佐波）まで迎えに来て、船に立てた賢木（さかき）に掛けた三種の神器（珠・鏡・剣）を献呈し、穴門（あなと）（長門）から向津野（むかつの）大済（おおわたり）（宇佐市付近か）までを東の門とし、名護屋大済（北九州市戸畑区か）を西の門とする地域を魚塩（なしお）の地（魚や塩を取る土地）として進呈し、没利（もとり）嶋（六連島（むつれじま）とされる）・阿閉（あへ）嶋（藍島とされる）を御筥（みはこ）（食料供給地か）とし、柴嶋（洞海湾にかつてあった島という）を御瓮（みなえ）（魚を捕るところか）とし、逆見海（さかみのうみ）（北九州市若松区の逆水か）を塩地（しおどころ）とすると言ったという。熊鰐の勢力の大きさがわかる。

(注25) 出兵に懐疑的であった仲哀天皇に祟ってその急死の原因となった神であり、神功皇后が凱旋後北部九州から畿内入りする途上で始めて祭られた。

(注26) 中国吉林省集安市にある高句麗（こうくり）第19代の広開土王（好太王）の業績を讃える碑に刻まれた1800字余りの文。同碑に414年建立と刻まれている。391、399、400、404の各年に倭が新羅・百済に派兵していたことを示す記事がある。

参考文献

[1] 宗像神社復興期成会，『宗像神社史』 上巻・下巻，1961,1966.

[2] 宗像神社，宗像神社史料第二輯『宗像三神奉齋神社調』，1944.

[3] 神社本庁，『全国神社祭祀祭礼総合調査（平成七年）』，2005.

[4] 坂本太郎他校注，『日本書紀』（一）～（五），岩波書店，1994-2005.

[5] 倉野憲司校注，『古事記』，岩波書店，1963.

[6] 園田稔ほか編，『神道史大辞典』，吉川弘文館，2004.

[7] 伊東尾四郎編，『宗像郡誌』，臨川書店，1986.

[8] 田井信之，『日本語の語源』，角川書店，1979.

[9] 川添昭二他校訂、加藤一純・鷹取周成編，『筑前国続風土記付録』（上）（下），文献出版，1977-1978.

[10] 式内社研究会編，『式内社調査報告』 第1巻～第24巻，皇學館大學出版部，1978-1990.

[11] 三橋健，『神道大系　神社編　総記』（上），神道大系編纂会，1986.

[12] 岡田莊司他編，『現代・神社の信仰分布』 文部科学省21世紀COEプログラム國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」，2007.

[13] 日本歴史地名大系第２巻『青森県の地名』，平凡社，1982.

[14] 加藤慶司，『古文書による津軽の神社縁起』，（自家出版），1995. などによる

[15] 菅江真澄，『菅江真澄全集第一巻』，未来社，1971.

[16] 松尾奈緒子，『九州考古学第87号』，九州考古学会，2012.

[17] 鎌田純一，『先代舊事本紀の研究　校本の部』，吉川弘文館.

[18] 萩原千鶴，『出雲国風土記　全訳注』，講談社学芸文庫，1999. による

[19] 保科正之，『神道大系　続論説編[14] 會津神社総録』，神道大系編纂会，2002.

[20] 小倉博，『印旛沼―自然と文化―No.1』，印旛沼環境基金，1994.

[21] 館野和己，『日本古代村落・都市空間の形成と変遷の復元』，Nara Women's University Digital Information Repository，2004-2005.

[22] 宗像市史編纂委員会編，『宗像市史通史編』 第二巻，宗像市，1999.

[23] 李相均，『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 12. pp.113-167，1994.

[24] 白木英敏，『むなかた電子博物館紀要』 第2号，2010.

[25] 古澤義久，『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 28. pp.27-80，2014.

[26] 三浦清他，『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』 23-1. pp.1-6，1998.

[27] 『松江市史　資料編２』，2012. などによる

[28] たとえば 井上秀雄，『古代朝鮮』，NHKブックス，1972.

2015年5月1日

よしたけ八福神めぐり

四月一八日土曜日、春のうららかな天候に恵まれて、「よしたけ八福神巡り」が行われました。吉留に古くからある神社を歩いて参拝するという、地域おこし事業の一環です。

吉武地区コミュニティと八之会(地域おこし団体)が共同で主催して行われました。

事前に申し込みをした一七〇人と五〇人を超えるスタッフが集まりました。受付を済ませて、会員手づくりの根っこの部分のついた竹の杖と、御朱印帳とおむすび二個をいただき出発点の八所宮へ。ここから順に8箇所の神社を歩いて回る九キロメートルのウオーキングです。

上：受付を済ませ、現人神社へ。御朱印帳、杖、おむすびを手に歩く。
右上：参加者の安全を願って祈願祭が拝殿で行われた。
：参加者に渡す御朱印帳と杖もお祓いを受ける。

神社の中には、本殿まで急な階段を上って行かなければならない場所や、次の神社まで歩く距離が長く、なかなか大変な箇所もありましたが、ところどころに置かれた案内板の墨書の文字がやさしく、ユーモアがあふれる言葉で書かれて、疲れた身体も癒されます。木々に囲まれた山道では頭上から鶯うぐいすの声が聞こえたり、樹木に囲まれた緑色の池の傍を歩いたり、宗像市内でも特に自然が多く残されていると言われる吉留地域を歩いて、心も体も癒されました。

宗像にもこんなに自然が残されている事を実感できた1日となりました。

1. 現人(あらひと)神社

目、耳、肩、手足などの病気を治す神様。記帳をすませて次の安座神社へ。(写真下)

2. 安座(あんざ)神社

安ノ倉の地名の元となった神社。(写真下)

3. 豊日(とよひ)神社

食物の神様。

4. 妙見(みょうけん)神社

高天原(たかまがはら)に最初にあらわれた神様。神仏習合により「妙見さん」と親しまれるようになった。(写真下)

鉄分を含んだ茶色の滝・落差4メートルの妙見の滝がある。

5. 豊日(とよにち)神社

コースの中で一番の難所である。急な石段を随分のぼらなければならなかった。(写真下)

地元では「豊前坊様」とよんでいる。古くは修験者の道でもあった。

6. 菅原(すがわら)神社

祭神は菅原道真。「ヲンガミ」などとよばれていたが、天神(菅原)に改めた。(写真下)

上：神社の傍にある農家の納屋(なや)には、いろいろな形をした農作業の鍬(くわ)がかけてあった。

下：こいのぼりが泳いでいる道を下って平山天満宮へ。

7. 平山天満宮(ひらやまてんまんぐう)

祭神は菅原道真。宗像大宮司・氏能が建立。社殿は宗像市指定文化財。鳥居の傍には福岡県指定天然記念物の大クスがある。

8. 水神社（みず）

江戸時代には参勤交代の行列が通った道・唐津街道中筋往還ともいう。今もその面影が残る道。街道を行きかう人や、地域の水飲み場として、祭神・水速女神（みずはやひめのかみ）が祀られている。八福神めぐりの最後の神社。

上：神社境内の木陰で休息をとり、出発点へ戻る。
右：水神社拝殿

宗像市東部の山あいにある吉武地区。普段は農道を歩く人の姿もまばらな静かな地域である。

右：平山天満宮本殿
左上：お参りした後には、地域の方々による「おつかれさま」の声とお接待があり心がなごむ。
左下：参道には八重桜があざやかに咲いていた。

ユウモアあふれる神様が描かれた手作りマップと御朱印帳、杖を手にして歩いた。

八所宮の神様も大勢の人々が元気に里を歩く様子をご覧になり、喜ばれたのではないでしょうか。

秋には西回りコースが予定されています。

お問い合わせは吉武地区コミュニティセンターへ。

（記事：むなかた電子博物館運営委員　平松）

2015年5月15日

海の道むなかた館
日本人にかえれ 出光佐三展
出航の地・宗像から世界へ

平成27年3月24日から5月10日まで、海の道むなかた館に於いて、宗像で生まれ育ち世界を舞台に活躍した故出光佐三氏（以下佐三氏という）の功績をたどる特別展が開催されました。期間中には大勢の来館者が訪れて、熱心にパネルに書かれた説明文を読む姿が見られ、好評の内に終了しました。

今年は生誕130周年に当たります。この特別展をふりかえり、あらためてその生涯と宗像とのつながりについて紹介します。

1.「日本人にかえれ」

これは佐三氏の有名な言葉です。

現代は、「世界は一つに」とグローバル社会の様相を示す半面、環境破壊や、地域紛争など憂慮する問題が山積みです。このような現状において、日本人がこれまで大切にしてきた「互譲互助」の精神が必要で「日本人にかえれ」という氏の言葉は今、とても新鮮です。

宗像をこよなく愛し、自身の精神のよりどころとして守り続けた宗像の神。故郷宗像を誇りに思い日本人として何をなすべきかを考え、世界を視野に活躍した生涯でした。百田尚樹氏の著書『海賊と呼ばれた男』の主人公は佐三氏をモデルにして書かれ、日本本屋大賞に選ばれ話題にもなりました。

展示場内では佐三氏が昭和56年に帰省した際、八所宮、緑風園、宗像大社参拝などの貴重な映像がテレビを使って、放映されました。

また、平成27年RKB制作の「出光佐三と宗像大社」は好評で、氏の功績をたどり、アナウンサーが赤間小学校や宗像大社などを取材した映像が放映され、椅子に座ってゆっくり視聴する方が多く見られました。

2．故出光佐三氏略歴

氏は明治18年（1885）8月22日、宗像郡赤間村（現在の宗像市赤間）で藍問屋を営む商家の二 男として生まれました。幼少期は身体も弱く母親を心配させました。

赤間小学校、東郷高等小学校、福岡商業高校へ進み、神戸高等商学校を卒業。酒井商会へ丁稚とし て入店し商業の基礎を身をもって学びました。他人に悪口を言われながらもこの時の経験が後の起業 に役立つことになります。

2年後、赤間に帰省した佐三氏は実家の衰退を目にして独立を決意、資産家・日田重太郎氏の援助 を受けて明治44年（1911）25歳の時、北九州市門司で出光商会を開店しました。現在の出光興産の 誕生です。その後2914年6月20日、出光興産は創業100年を迎えました。

出光佐三略歴

明治18年（1885）
　福岡県宗像郡赤間村で誕生
明治42年（1909）　23歳
　神戸高商を卒業。神戸で小麦と石油を扱う酒井商店に入店、経営哲学の基礎を学ぶ。
明治44年（1911）　25歳
　日田重太郎の援助を受け、門司市本町（現在の北九州市門司区）で 出光商会を創業 日本石油の特約店として機械油を扱う
昭和　7年（1932）　47歳
　門司商工会議所会頭に
昭和12年（1937）　52歳
　貴族院議員に登院（貴族院が廃止されるまで議席を持つ）
昭和15年（1940）　55歳
　出光興産株式会社設立
昭和17年（1942）　57歳
　宗像神社復興期成会を結成、会長就任
昭和28年（1953）　68歳
　日章丸アバダン入港、イラン石油を初めて輸入
昭和32年（1957）　72歳
　徳山製油所竣工
昭和47年（1972）　87歳
　社長を退き店主に就任
昭和51年（1976）　91歳
　フランス文化勲章　コマンドール賞を受賞
昭和53年（1978）　93歳
　宗像町の名誉町民となる
昭和56年（1981）　95歳
　逝去

訃報に接し、昭和天皇が詠まれた歌

「出光佐三逝く　三月七日の歌」
国のため　ひとよつらぬき尽くしたる
みまた去りぬ　さびしと思う

上：唐津街道赤間宿の中ほどにある佐三の生家
右：石造の案内板が片隅に置かれている

3．佐三氏と宗像

元宗像市長であった瀧口凡夫氏は、西日本新聞東京支社勤務時代に、同郷の幼馴染を通じて佐三氏 に直接会って話をしたことを、著書『出光佐三 魂の言葉』（2012.5.11）の中で次のように書いてい ます。昭和30 年代のはじめのことです。

序章　あるべき人間の姿を求めて―出光佐三に日本人の心を学ぶ
ここに日本の風土の原形がある

私が市長のころ宗像市内を中心に調査したら、この川はもともといり江で、西岸にはいまも残る肥 沃な農地が広がっていた。台地には多くの古墳がある。宗像海人たちはここを根拠地にして沿岸漁業 や大陸との交易、そしてたまには海賊働きなどをしていたものと思われる。

河口から1キロほど入った川べりと、その裏手の高台にかけて宗像大社の辺津宮 へつぐう があり、北へ向か う流れの正面に中津宮（大島）、その沖の孤島に沖津宮（沖ノ島）がある。それぞれ天照大神の御子 神（三女神）を祭り、合わせて宗像大社という。

宗像大社は、氏子である宗像の住民にとって、最も親しみやすく、かけがえのない尊崇の対象であり、古老たちは島全体がご神体である「沖ノ島」を口にするときには、いまでも必ず「さま」と敬称 をつける。・・・・・・・。

佐三さんの生家は商家で、いまも旧唐津街道赤間宿の町並みの中にある。先祖はもともと宇佐の出 身で、宇佐神宮の神職だったという。宇佐神宮には宗像三女神が祭ってあり、宗像大社とは縁が深い。「お宮の関係で先祖は宗像に移り住んだ」と私は佐三さんから聞いたことがある。

出光家は赤間宿の老舗で、四国の徳島から藍玉を仕入れ、福岡、久留米などまで販売を広げていた。 しかし生活は質素で、宗像の風土、そこに住む農、漁民たちと相通じるところが多く、大社への尊崇 の念と日常の生活のありようなど、まったく違和感はなかった。

4．佐三氏の地域貢献

・宗像大社の復興運動

佐三氏が51歳、貴族院議員に選ばれた昭和12年（1937）、参拝のために宗像大社を訪れた際、驚 きの光景を目のあたりにします。拝殿をみると、屋根は破れところどころにトタンが差してあります。 また雨が漏り腐れかかった場所もあります。佐三氏が「どうしてあれを修理しませんか」と聞くと、 宮司は「いや、この建物は国宝だから勝手に修理するわけにはいきません。予算もまだ通過していま せんから」と答え、神社の由緒について説明しました。

幼いころ聞いたことのある話でしたが、宮司の話を改めて聞き、宗像三女神が国民の祖神であると 気づいた佐三氏は「これは大変だ。早く元のお姿に戻さなければ」と考えるようになりました。

その後、昭和17年（1942）宗像神社再建のため、佐三氏が中心となり宗像神社復興期成会を結成、 政府へ修理

のための予算獲得、勅祭社への昇格の建議などに取り掛かりました。

宗像神社は昭和44年(1969)に、宗像氏貞が再建して以来およそ400年ぶりとなる、昭和の大造営が行われ、昭和46年1月遷宮大祭が行われています。

その後、昭和52年(1977)宗教法人・宗像大社となり、平成26年(2014)、平成の遷宮が行われ、木々の緑に映える朱色が美しい、真新しい社殿になりました。

出光興産の本社はもちろん各施設には、宗像大社が建立され、工事の竣工の際には宗像大社から神職を招き神事を行っています。

・『宗像神社史』の刊行
昭和36年(1961)上巻、昭和41年1966)下巻、昭和46年(1971)附巻を刊行
・沖ノ島の学術調査
宗像神社史』をまとめるにあたって、沖ノ島の調査が必要となり、昭和29年から三次にわたり専門家による調査を実施
・『沖ノ島』の刊行 昭和33年(1958)
・『続沖ノ島』昭和36年(1961)
・『宗像沖ノ島』昭和62年(1977)

5. 館内の展示品

・タンカーの名称にある宗像の地名
造船されたタンカーには「沖ノ嶋丸」「大島丸」「赤間丸」「玄海丸」など宗像の地名を船名にしています

右 ：ケースの中の「沖ノ嶋丸」150分の1の模型
左上：ジに常時置かれたという船鐘
左下：直筆の書が展示された「日本人」「人間尊重」「敬神愛人」

宗像町名誉町民章
（昭和53年に当時の宗像町が佐三に送ったもの、未だ佐三1人）

6. シアタールーム

出光興産が創業100年を記念して作成した「店主物語」。ナレーションは佐三氏の母・千代役として竹下景子さんが担当しています。

出光興産が作成し保管するニュース映像から宗像に関連するものを集めた「出光ニュース」

「出光興産社員教育用映像」(抜粋)、当時の大社宮司・葦津嘉之氏が佐三について語った映像も。

以上の貴重な3種類の映像が上映され、椅子も足りなくなるほどの盛況でした。以上の貴重な3種類の映像が上映され、椅子も足りなくなるほどの盛況でした。

7. 入場者の感想

A氏：
唐津から来たという高齢の方今、小さな店で出光の石油を売っている。父は門司の出光商会からの社員。戦時中はジャワへ行き終戦後に帰ってきた。私達は先に上海から船に乗り引き揚げてきたが、その後出た船は沈没したと聞く。家には佐三氏直筆の書がある。

B氏：
『海賊と呼ばれた男』を読んで、本物に触れてみたかった。

C氏：
店主は雲の上の人でした。(沖ノ嶋丸の模型を見ながら)佐世保重工まで見学に行った。昔は4，50人の乗組員が動かし、今はコンピューターだから7，8人で操船する。階段まで実物そっくりにできている。

D氏：
修学旅行で東京へ行った時、出光さんからとお菓子が配られた。

E氏：
徳山工業高校の機械科の学生時代に。教室の窓から徳山湾に巨大な出光のタンカーが入ってくるのが見えた。

F氏：
出光佐三さんと宗像市の世界遺産登録推進活動が結び付くとは。今初めて知りました。

8. 結びのことば（パネル展示より）

佐三は「日本に生まれて最高に恵まれて育った」というのが口癖だったと言います。彼の思想の原点は、ここ宗像にあるといっても過言ではありません。

宗像の歴史や風土、人々の気質、自然豊かな景色など、私達が日常目にし、耳にしていることは、まるで空気のように日ごろ意識することなく、当たり前となっています。

佐三の思想や行動力をふりかえることで、あらためて宗像の素晴らしさに気づくことができたのではないでしょうか。

出光佐三の意思を引き継ぎ、先人が残してくれた資産を大切にしながら、宗像人として、日本人として世界に貢献する。この企画展がそのきっかけとなれば幸いです。

宗像市では平成27年度より、教育子ども部子ども育成課にグローバル人材

育成係が新設され、次 世代を担う子ども達が、佐三氏のように世界を視野に活躍していくことを願っています。

開催期間中の入館者数は、およそ27000人。シアターの視聴者数はのべ4400人でした。

尚、本文は展示されたパネルの説明文および、むなかたタウンプレス（4月15日）より、参考、引用しています。

（記事：むなかた電子博物館運営委員　平松）

2015年10月14日

いせきんぐ宗像 オープニングイベント

7月19日 日曜日、真夏の厳しい暑さの中で、いせきんぐ宗像オープニングイベントが開催されました。いせきんぐ宗像とは、公募により選ばれた田熊石畑遺跡歴史公園の愛称で、遺跡の中の王様という意味が込められています。 主催は宗像市、共催は東郷地区コミュニティ運営協議会、田熊山笠実行委員会、主管は、田熊石畑村づくりの会です。地元にある東郷小学校は、全校生徒が参加してこのイベントを体験しました。

イベント会場・いせきんぐ宗像
（田熊石畑遺跡歴史公園）

7月1日の歴史公園のオープンに伴って、今年は公園内で東郷地区恒例の夏祭り東郷、田熊山笠の行事が計画され、いせきんぐ宗像オープンイベントの前夜祭として、「夏祭り東郷2015」が行われました。出店は25店舗、集まった人々はおよそ6500人で、夜遅くまで会場はお祭りの熱気に包まれていました。

午前10時からオープニングイベント、式典の始まりです。それに先立ち、アジア 太平洋子ども会議に参加、宗像市でホームステイをしていたブータン国の子どもたちによる演舞が行われました。幸福度世界一という国からやってきた子どもたちには、宗像はどのように写ったのでしょうか。

民俗衣装で踊るブータン国の子どもたち

オープニングセレモニーがはじまりました。主催者の挨拶に続いて楽しい楽器の演奏が行われました。

・来賓紹介 福岡県県会議員、宗像市市会議員、福岡県文化財保護課、福岡教育大学など
・来賓挨拶 代表して、福岡県教育庁総務部文化財保護課長兼副理事が挨拶

上：宗像市長挨拶
下：実行委員長挨拶（田熊石畑遺跡村づくりの会村長）

式典終了

宗像ジュニアブラスによる
ファンファーレと演奏
・線路は続くよどこまでも
・聖者の行進など

宗像ウインドアンサンブル
・勇気100％
・君の瞳に恋してる
・風になりたい など

九州管楽合奏団 五重奏
・森のくまさん
・ずいずいずっころばし
・アメリカンパトロールなど
・楽器のお話

市民参加方ミュージカル
むなかた三女神記

まりこふんショウ 歌とトーク

古代人をイメージした衣装で歌うまりこふんさん。観客もメロディーに合わせ手拍子でノリノリ。

9月23日に行われる公演にむけて練習中のメンバーによる演舞

ユニークな名前のまりこふんさんは、「古墳にコーフン協会」をつくり会長に就任、古墳をテーマに歌う日本でただ一人の古墳シンガーです。

厳しい暑さのなかで歌い終え、最後の曲になると舞台から降りて観客席を一周しながら歌い舞台に戻って行きました。後でご本人聞いてみると、観客のみなさんの熱い声援に思わず舞台から降りてしまったそうです。この暑さもステージにあがると感じなかったという事でした。

歌が終わりステージではトークショーが始まりました。出演はまりこふんさん、古墳にコーフン協会理事長・伊藤 壮さん、西日本新聞宗像支局長・今井知可子さんの3人です。トークは盛り上がり、話題が次から次へと進展、司会者の制止の合図が無ければ延々と続き、楽しい時間はいつまでも終わらない

左　：西日本新聞宗像支局長・今井さん、
中央：古墳にコーフン協会・伊藤理事長
右：　まりこふん会長

ほどでした。

後ほど今井さんに感想を聞くと、

「古墳から引き離されて博物館に展示されている埴輪をみるとかわいそうに思う」

「まず、現地へ行って古墳に会って自分の感性でうけとめる」

と言う。

こんな、まりこふんさんの感性に心打たれました。また会いたいひとですね！

いせきんぐミステリー抽選会

「弥生人をさがし、クイズに答えて抽選券をゲットしよう」

園内で弥生人(貫頭衣を着て勾玉の首飾りをつけた)を見つけてクイズに答え、全問正解者は、1～3等があたる抽選券を受け取る。まちがった方は4等以下があたる抽選券を受け取る。他にまりこふん賞が3本あり古墳グッズがあたる。

後程、ステージにて抽選会を開催し、村づくりの会山田村長とまりこふんさんが抽選を行った。

答えたのは親子づれが多く、はずれなしの子どもにやさしい抽選会でした。

このほか園内では特設テントが設置され、多くの催しがありました。

歴史体験学習

福岡教育大学学生もボランティア実習としてで参加しました。

・原始機（げんしはた）

手織りの機を使用。毛糸で縦糸と横糸を編んでコースターをつくる。

・土器パズル

弥生土器の破片をつないで完成する作業が意外に難しい

・弓矢体験

広い芝生の上で、仮想ハンターになる。幼児には持ち方から指導。大人気の弓矢体験には、子どもたちがひっきりなしにおとずれ、的の イノシシやシカをめがけて矢を放つ。あたると大歓声が上がる。

・勾玉づくり

古代人の装身具・勾玉はやわらかくて削りやすい滑石をつかって作る。幼児にも人気がある。

世界遺産ブース

・ナギヒコシール

海人は刺青をしていたという魏志倭人伝から引用した紋様。水でシールを濡らして腕に張り付ける。

ナギヒコは『海の民宗像』（宗像市刊行）、に登場する宗像海人の子ども。

「どれにしょうかな」

・タイムカプセル受付

受付のテント横では、10年後の自分宛にメッセジを書いてもらい、カプセルに入れて埋納します。10年後にふたたび本人が読むことができます。

乳児と母親の二人も、記入して「10年後が楽しみです」と話していました。

来場者全員にマスコットキャラクター「東郷やよいちゃん」が描かれたカンバッジが手渡されました。

・日赤九州国際看護大学学生による ボランティア活動

上：聴診器による音を聞くコーナー
下：看護大学を紹介するコーナー

このほかにも次のコーナーが設けられました。

・キャンドルづくり
・空気銃づくり
・プラバンづくり
・紙飛行機づくり
・バルンアート
・割れにくいしゃぼん玉づくり
・べっこうあめ

久利：べっこうあめづくり　中央：キャンドルづくり　右：バルーンアート

ボランティア学の実習として参加した大学生の感想は、

「イベントの開催は大変だと感じた。準備はもちろんのこと開催中のハプニングなど、予定通りに行かないことが多くあり難しいと思ったが、子ども達の笑顔をたくさん見ることができ、大変ながらも楽しさを感じた。機会があれば、是非参加したい。」

イベントには、福岡教育大学と日赤九州国際看護大学の学生６８名が参加しました。

寄合い処

海の道むなかた館出張博物館

実物大に復元された弥生の銅剣を持ってみよう。細身の剣は見た目より重いという実感でした。

上：弥生時代の食事を再現したレプリカ
右：復元された銅剣のレプリカ

・史跡整備報告会

「市民と楽しむ歴史公園づくり」

宗像市文化財担当者

「整備報告会では、田熊石畑遺跡が日本の国の成り立ちを解明するために重要な遺跡であることや弥生ムラを市民参加で楽しみながらつくり上げようという整備方針について、一般向けにわかりやすく説明していました。聴衆も熱心に耳を傾けていて、質疑応答もありました。」

田熊山笠追い山

午後３時、イベントの最後は、勇壮な飾り山がいせきんぐ通りを走り抜ける田熊山笠の追い山です。

おわりに

宗像市、東郷コミュニティ、大学、田熊石畑村づくりの会の連携によるイベントは終わりました。極暑にも負けずこの日の来園者はおよそ３２００人、出店は１６店舗。人も空気も暑かった１日が終わりました。来園者のみなさん、出店者の皆さんもお疲れ様でした。

四塚や許斐山が見え、緑の芝生に覆われた広大な公園は宗像の自然が体感できる場所です。

散歩や遊び、歴史にもふれることができるいせきんぐへ、どうぞお出かけください。年中無休です。

開園時間については、下記へお問い合わせください。

田熊石畑村づくりの会

電話・FAX　０９４０-３７-０１８２

（記事：むなかた電子博物館運営委員　平松）

２０１５年１２月２１日

秋・吉武八福神佛めぐり

今春・４月１８日に行われた「吉武八福神めぐり」が好評で、今回で２回目となる「秋・吉武八神佛めぐり」が、１０月３１日に行われました。

初秋の候、心地よい天候にめぐまれて、吉武、吉留、冨地原地区の７.５キロメートルをおよそ３時間かけて１０か所の神社や仏閣を巡りました。

吉武地区の地域おこし団体・八之会が主催し、吉武地区コミュニティの後援で行われました。事前に参加申し込みを済ませた参加者が１２５人、お世話する地元のスタッフは５０人ほどで、宗像市長をはじめ、県議、市議も参加しました。受付を済ませた後、参加者全員の道中の安全を願い、神様の依代を設けて八所宮宮司により安全祈願が行われ、三々五々出発していきました。

八所宮で安全祈願祭

宮司によるお祓いが行われた

「いざ行かん　ゆきて　まだ見ぬご利益に」

八所宮大駐車場に集まった参加者

これに先立って、１０月２４日には八所宮本殿で安全祈願祭がおこなわれ、地域おこし事業の安全と参加者に記念品として渡す、竹製の杖、御朱印帖、お福などのお祓いが行われています。

右　：番から９番までのお札
上左：子供たちにはスタンプラリー帳
上右　：御朱印帖
下　：楽しいイラスト入り地図を手に歩く

1番　八所宮（宮ノ尾地区）

創立は白鳳時代674年。神代七代八柱の神をまつる、旧7ヵ村の総鎮守府でした。

鶺鴒山にあり、社叢は福岡県指定の天然記念物です。毎年10月第3土日に行われる

八所宮参道の石段

秋季大祭は「八所宮のおくんち」として、一時とぎれたもののおよそ300年続いています。深夜に行われる大名行列は荘厳で、一見の価値があります。

2番　長宝寺観音堂（宮ノ尾地区）

八所宮境内にあるこの建物は宗像市指定の文化財です。1991年に保存修理が行われ、創建は宝暦3年（1753）で、江戸時代後期の趣を今に伝えています。堂内に安置されている仏像は数体あり、本尊は十一面観音立像で、鞍手町の長谷寺の観音像との共通点が見られ、平安時代前期に作られたものと言われています。線香の煙と香りがあたりに漂い、手を合わせて参拝する姿がありました。

長宝寺観音堂

3番　平家塚

平清盛の妻二位の尼の墓といわれています。壇ノ浦の戦いで敗れ、8歳の安徳天皇を抱いて海に沈んでいきました。参加者を笑顔で迎えた麻生ウメ子さんは昭和の始めの生まれで、平家塚近くのお家に嫁いで以来、草取りや建物の清掃を続けてこられた方です。

平家塚。建物の中に二位

4番　福知神社（武本地区）

祭神はイザナギ、イザナミの命の子で、保食神　五穀、農耕の神様です。

素朴な福知神社と末社

5番　福知神社（久戸地区）

祭神は保食神。豊作や、豊かな食文化を司る神様。

久戸・福知神社前の御朱印帖記帳所

武本・福知神社前で御朱印帖に記帳

6番　武守神社（久戸地区）

祭神は素戔嗚命・櫛稲田姫神

創立　延喜18年（918）

由緒　崇神天皇御宇、出雲国の飯入彦が勧進、武の一字をとり、武丸村と号す。神社には「白ナマズの恩返し」という、雨乞いにまつわる民話があります。

7番　大日堂（久戸地区）

再建された大日堂には、大日如来坐像が安置され参拝者を迎えていました。檜の一木造で、彩色も残る、貴重な仏像です。宗像市指定文化財。

大日如来を古代インドでは「太陽の子」といい、太陽の輝きを超越した最高の仏とされています。

中央が大日如来像

ガードレールに干された稲のそばを通って愛宕神社へ向かいます。

上：スズメ除けのテープが風になびいていた
下：道中に掲げてある応援メッセージ。今回は吉武小学校児童とのコラボ

8番　愛宕神社（冨地原地区）

祭神　宗像三女神　カグツチの命　カシコネの命

由緒　天慶3年（940）宗像大宮司氏男創立。筑前国続風土記拾遺で

威厳のある愛宕神社

は太郎坊神社とある

上：目を引く鳥の彫刻
下：拝殿には、彩色も鮮やかな絵画

9番　正助廟（しょうすけびょう）（土師上（はじかみ）地区）

武丸の正助さんは、江戸時代に孝子として知られた人。親孝行、弱者へのいたわり、助け合いなど、庄助さんの行いは、現代社会においてもお手本となるものです。

本堂

正助廟

疲れた体も応援メッセージに励まされて、コースの最後となる早川勇記念碑まで歩きます。

10番　早川勇記念碑

幕末から明治時代にかけて活躍した早川勇は、薩長和解を提唱し、五卿西遷に奔走しました。晩年は東京に住み郷土の若者の育成に尽力しました。

吉武コミセンの近くにある早川勇顕彰碑

吉武コミセンの近くにある早川勇顕彰碑

出発点の八所宮大駐車場へ帰着後、それぞれに解散しました。

参加者に伺いました。

宗像市長

「宗像市には歴史ある神社仏閣が多くあり、八所宮もそのひとつです。市としても、このような遺産を大切にし、広く情報の発信をしていきたいと思っています。」

吉武小学校校長

「八福神佛めぐりが行われる2週間前の10月15、16日に吉武小学校では「セカンドスクール」が行われました。妙見の滝→八所宮→長宝寺→大日堂→新立山登山→平山天満宮と歩き、グローバルアリーナで一泊しました。実は八福神佛めぐりに学校も何か協力できないかと考えていた時に、地域の方から、コース途中の看板のメッセージを子どもたちに書いてもらえないか？という依頼が寄せられました。そこで、セカンドスクールで校区を巡った後に、自分だったらどんな励ましの言葉をもらいたいか考えさせ、当日の応援メッセージができました。これからも、地域の行事や活動に子どもたちがどう関わることができるかを、学校でも考えていきたいと思います。」

山間にある吉武地区は、宗像市の水源である釣川源流があるところです。また、それぞれの地域に は人々が守り伝えてきた神社やお寺が、素朴な姿のまま残されています。地域おこしの一環として開催されたこのウオーキングは、心身に心地よいものでした。また、福をよんで、明日からの活動が楽しいものとなればいいですね。

お問い合わせ
吉武地区コミュニティ 電話 32-5904
（記事：むなかた電子博物館運営委員　平松）

編 集 後 記

むなかた電子博物館 紀要委員会
編集長 宮川 幹平

むなかた電子博物館紀要第 7 号は、創刊以来最大のページ数となった。正直なところ、ディジタル紀要ならではの閲覧性を実現するには、編集委員の技術や編集工程の効率に問題も多く、まだまだ精進するべき点が多い。しかし、専門性や特異性のあるテーマについて、より多くの人の目に触れる機会を作るという点については、ある程度の貢献ができたのではないだろうか。今後も、「ムナカタ」を切り口として、様々な活動を縁付け、そして表現する場としての紀要でありたいと考える。

紀要第 7 号は、多くの方の協力なくしては成り立たなかった。紀要編集の立場からも、ここに改めて御礼を申し上げたい。まず、いせきんぐ宗像シンポジウムでの講演者の皆様には、講演記録や貴重な資料の掲載について快諾を頂くとともに、内容確認のご協力を頂いた。また、特集記事編集にあたっては、海の道むなかた館による全面的な協力があった。同館の西谷館長による全体監修をはじめ、同館の白木氏には、講演者の皆様との連絡・調整や、内容確認、資料提供等、多大なるご尽力を頂いた。

続いて、本紀要に貴重な論文をご投稿頂いた花田氏・矢田氏に深く感謝申し上げる。編集にあたっては、編集委員による度々の質問にも関わらず、真摯にお答え頂いた。両氏にとって納得できる紙面編集となっていれば幸いである。

最後に、MIS 九州株式会社 西氏には、本紀要の編集・発行に関わる活動全般において、編集委員による数多くの要求・難題を受け止め、献身的にご尽力頂いた。ここに氏の貢献を明記するとともに、心からの謝意を示したい。

むなかた電子博物館紀要
Bulletin of the Munakata Digital Museum

執筆者一覧（掲載順）

西谷 正（海の道むなかた館 館長）
石川 日出志（明治大学文学部 教授）
吉田 広（愛媛大学ミュージアム 准教授）
高島 忠平（旭学園 理事長）
板橋 旺爾（西南学院大学 非常勤講師）
花田 勝広（滋賀県 野洲市教育委員会 文化財保護課）
矢田 浩（静岡理工科大学 名誉教授）

むなかた電子博物館紀要委員会 委員（順不同）

平井 正則（福岡教育大学 名誉教授・紀要委員会委員長）
石黒 正紀（福岡教育大学 名誉教授）
河田 昭（日本通信工業株式会社 監査役）
岡部 海都（日本野鳥の会 福岡支部会員）
平松 秋子（むなかた歴史を学ぼう会）
伊津 信之介（東海大学福岡短期大学 名誉教授）
西田 迪雄（博多昆虫同好会）
大方 優子（九州産業大学）
宮川 幹平（東海大学福岡短期大学・紀要委員会編集長）
鎌田 隆徳（海の道むなかた館）
Jose D. Cruz（北九州市立大学）
堀内 伸太郎（市民公募）
白木 英敏（宗像市 市民協働環境部 郷土文化課）

オブザーバー

廣渡 恵三（海の道むなかた館）
坂本 雄介（海の道むなかた館）
西 高志（MIS 九州株式会社）

※敬称略・肩書きは 2016 年 3 月 31 日現在のものである

むなかた電子博物館紀要：投稿募集

むなかた電子博物館では、「むなかた」の自然・文化・歴史に関する論文・研究報告・資料等のご投稿を常時広く募っております。ご投稿頂いた原稿は、むなかた電子博物館紀要委員会による形式審査・編集の後、むなかた電子博物館紀要（電子版・冊子版）に掲載されます。

電子博物館の紀要として、先行して Web 公開される電子版に力を入れておりますため、原稿の形式は電子媒体（ワープロファイル、スライド資料等）に限らせて頂きますが、ハイパーリンクやマルチメディア素材の組み込み等、多様なディジタル表現に出来る限り対応致します。

ご不明の点などがありましたら、むなかた電子博物館紀要委員会（kiyo@mdmn.info）までお問い合わせ下さい。

むなかた電子博物館紀要　第７号

ISSN 2185-8659

発行日：2016 年 3 月 31 日

発行者：むなかた電子博物館 紀要委員会

発行所：むなかた電子博物館

むなかた電子博物館 URL http://d-munahaku.com

〒811-3504　福岡県宗像市深田 588 海の道むなかた館内

Tel：0940-62-2600　Fax：0940-62-2601

E-Mail：question@mdmn.info

（むなかた電子博物館全般に関するお問い合わせ）

kiyo@mdmn.info

（むなかた電子博物館紀要に関するお問い合わせ・投稿先）